

山鹿市文化財調査報告書第6集

かと う だ ひがしぶる い せき
方保田東原遺跡(9)

出土文化財管理センター建設に伴う発掘調査報告書

2008

熊本県山鹿市教育委員会

序 文

山鹿の地名は平城京出土の木簡にも「肥後国山鹿郡」として書かれ、すでに奈良時代には確立していたことが明らかになっております。このような土地柄のため山鹿市には数多くの文化財が残されています。弥生時代の拠点集落の史跡方保田東原遺跡や、その後の古墳時代に発展した史跡チブサン古墳をはじめとする装飾古墳群、奈良時代には大和朝廷により鞠智城が築かれるなど、各時代の遺跡が各地に残されております。

本市では文化財の多い場所であるため、公共事業や民間開発に伴って発掘調査も数多く行ってきました。しかしながら開発を急ぐあまり、発掘調査後の整理作業に従事する人材はもとより、時間と予算の確保が出来ないまま今日に至っておりました。

平成17年1月15日、新「山鹿市」が誕生しました。新市になり、これまで整理作業が出来なかったものについて逐次報告書の作成を行うこととしました。本書は平成7年度出土文化財管理センター建設に先立って、市単独事業として発掘調査を行った成果を収録いたしております。特に幅8mを超える大溝の検出は、地形をうまく利用した集落防衛策を理解する上で貴重な発見であり、方保田東原遺跡の規模と密度の高さを窺うことが出来るもので、その後の遺跡の範囲確認のための調査と平成18年7月28日付けて史跡として追加指定になった事の発端になったものであります。

なお付論として、出土文化財管理センターに所蔵しております青銅製品と、市立博物館に展示しております弥生時代の青銅製品について、別府大学文学部文化財学科の平尾良光教授および下村智教授に鉛同位体比の分析を行っていただき、玉稿を賜りました。この調査成果も併せて報告いたしました。

本書が、この遺跡の中で暮らした人々の、息吹と英知を少しでも皆様に伝える事が出来れば幸いに存じます。

平成20年3月31日

山鹿市教育長 田 中 宏

凡　　例

- 1 本書は山鹿市教育委員会が出土文化財管理センター建設工事に際し、平成7年度に実施した発掘調査報告書である。
- 2 本調査は山鹿市文化課の委託により山鹿市立博物館で実施した。
- 3 整理作業は山鹿市出土文化財管理センターに於いて行った。
- 4 遺物および図面などの記録類は、全て山鹿市出土文化財管理センターに保管している。
- 5 本書に掲載した写真は中村幸史郎が撮影した。なお、遺物写真右下の数字は遺物実測図番号である。
- 6 本書に掲載した遺物実測図は城葉子、小原朱実、大森ようこ、野満彩子が作成した。
- 7 本書の執筆および編集は中村が行った。
- 8 付論として方保田東原遺跡および周辺遺跡から出土している青銅製品の鉛同位体比分析を別府大学文学部文化財学科平尾研究室と下村研究室に依頼し、その成果を掲載した。

本文目次

I 調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 調査の経過	2
II 遺跡の環境	5
1 歴史的環境	5
2 地理的環境	5
III 調査の成果	11
1 調査区の設定と遺構名	11
2 遺構と遺物	11
(1) 1号住居跡	11
(2) 2号住居跡	11
(3) 3号住居跡	11
(4) 方形周濠墓	13
(5) 不整形土坑	14
(6) 7号溝	14
(7) 大溝(10号溝)	16
① 表層の遺物	16
② 上層の遺物	18
③ 上層両端の遺物	30
④ 中層の遺物	31
⑤ 下層の遺物	31
⑥ 第1層の遺物	40
⑦ 第2層の遺物	40
⑧ 第3層の遺物	40
⑨ 第4層の遺物	42
⑩ 第5層の遺物	48
⑪ 第8層の遺物	48
⑫ 一括遺物	48
(8) 遺構に伴わない遺物	48
(9) まとめ	48
IV 付論1 出土文化財管理センター所蔵の青銅 製品に関する鉛同位体比の調査	63
V 付論2 市立博物館所蔵の青銅製品に関する 鉛同位体比の調査	83

挿図目次

第1図 遺跡分布図	4
第2図 遺跡周辺地形図(昭和44年)	7
第3図 遺跡地形図(平成13年段階)	8
第4図 調査区測量図	9
第5図 遺構配置図	10
第6図 1号住居跡実測図	11
第7図 2号住居跡実測図	12

第8図 2号住居跡出土遺物実測図	12
第9図 3号住居跡実測図	13
第10図 3号住居跡出土遺物実測図	13
第11図 方形周濠墓実測図	14
第12図 方形周濠墓出土遺物実測図	15
第13図 不整形土坑実測図	16
第14図 7号溝実測図	17
第15図 7号溝出土遺物実測図	18
第16図 10号溝(大溝)表層実測図	19
第17図 10号溝上層実測図	20
第18図 10号溝中層実測図	21
第19図 10号溝下層実測図	22
第20図 10号溝表層出土遺物実測図	23
第21図 10号溝上層出土遺物実測図①	24
第22図 10号溝上層出土遺物実測図②	25
第23図 10号溝上層出土遺物実測図③	26
第24図 10号溝上層出土遺物実測図④	27
第25図 10号溝上層出土遺物実測図⑤	28
第26図 10号溝上層出土遺物実測図⑥	29
第27図 10号溝上層両端出土遺物実測図	30
第28図 10号溝中層出土遺物実測図①	32
第29図 10号溝中層出土遺物実測図②	33
第30図 10号溝中層出土遺物実測図③	34
第31図 10号溝中層出土遺物実測図④	35
第32図 10号溝中層出土遺物実測図⑤	36
第33図 10号溝中層出土遺物実測図⑥	37
第34図 10号溝下層出土遺物実測図①	38
第35図 10号溝下層出土遺物実測図②	39
第36図 10号溝土層断面実測図	41
第37図 10号溝第1層出土遺物実測図	42
第38図 10号溝第2層出土遺物実測図	43
第39図 10号溝第3層出土遺物実測図①	44
第40図 10号溝第3層出土遺物実測図②	45
第41図 10号溝第3層出土遺物実測図③	46
第42図 10号溝第3層出土遺物実測図④	47
第43図 10号溝第3層出土遺物実測図⑤	48
第44図 10号溝第3層出土遺物実測図⑥	49
第45図 10号溝出土遺物実測図	50
第46図 遺構に伴わない遺物実測図	51

表目次

第1表 方形周濠墓土層一覧	14
第2表 7号溝土層一覧	17
第3表 10号溝土層一覧	41
第4表 遺物台帳その1	53
第5表 遺物台帳その2	54

第6表 遺物台帳その3	55	3 2号住居跡出土遺物 (4)
第7表 遺物台帳その4	56	4 3号住居跡出土遺物 (5)
第8表 遺物台帳その5	57	5 3号住居跡出土遺物 (6)
第9表 遺物台帳その6	58	6 方形周濠墓出土遺物 (7)
第10表 遺物台帳その7	59	7 方形周濠墓出土遺物 (9)
第11表 遺物台帳その8	60	8 方形周濠墓出土遺物 (10)
第12表 遺物台帳その9	61	P L 9 1 10号溝表層出土遺物 (14)
		2 10号溝表層出土遺物 (19)
		3 10号溝表層出土遺物 (20)
		4 10号溝表層出土遺物 (21)
		5 10号溝表層出土遺物 (24)
		6 10号溝表層出土遺物 (24)
		7 10号溝表層出土遺物 (25)
P L 1 1 調査区周辺（上空より）		P L 10 1 10号溝上層出土遺物 (26)
2 調査区周辺（東側より）		2 10号溝上層出土遺物 (27)
P L 2 1 調査区全景（南側より）		3 10号溝上層出土遺物 (28)
2 調査区全景（上空より）		4 10号溝上層出土遺物 (30)
P L 3 1 調査区全景（上空より）		5 10号溝上層出土遺物 (34)
P L 4 1 調査区表土除去状況（東側より）		6 10号溝上層出土遺物 (37)
2 調査区内攪乱層検出		P L 11 1 10号溝上層出土遺物 (39)
3 1号住居跡検出状況		2 10号溝上層出土遺物 (41)
4 1号住居跡完掘状況		3 10号溝上層出土遺物 (44)
5 2号住居跡検出状況		4 10号溝上層出土遺物 (47)
6 2号住居跡完掘状況		5 10号溝上層出土遺物 (48)
7 土製勾玉出土状況		6 10号溝上層出土遺物 (50)
8 磨製石斧出土状況		7 10号溝上層出土遺物 (55)
P L 5 1 3号住居跡検出状況		P L 12 1 10号溝上層出土遺物 (56)
2 3号住居跡完掘状況		2 10号溝上層出土遺物 (57)
3 3号住居跡内遺物出土状況		3 10号溝上層出土遺物 (59)
4 方形周濠墓完掘状況		4 10号溝上層出土遺物 (61)
5 方形周濠墓溝内遺物出土状況		5 10号溝上層出土遺物 (66)
6 方形周濠墓溝内遺物出土状況		6 10号溝上層出土遺物 (81)
7 不整形土坑内堆積状況		7 10号溝上層出土遺物 (84)
8 不整形土坑内堆積状況		8 10号溝上層出土遺物 (86)
P L 6 1 7号溝調査風景		P L 13 1 10号溝上層出土遺物 (93)
2 7号溝土層断面		2 10号溝上層出土遺物 (94)
3 7号溝遺物出土状況		3 10号溝上層出土遺物 (97)
4 7号溝完掘状況（北側）		4 10号溝上層出土遺物 (99)
5 7号溝南端土層断面		5 10号溝上層出土遺物 (98)
6 7号溝完掘状況（南側）		6 10号溝上層出土遺物 (98)
P L 7 1 10号溝全景（東側より）		7 10号溝上層出土遺物 (100)
2 10号溝遺物出土状況（南側より）		P L 14 1 10号溝上層両端部出土遺物 (103)
3 10号溝内堆積状況		2 10号溝上層両端部出土遺物 (104)
4 10号溝完掘状況（東側より）		3 10号溝上層両端部出土遺物 (105)
5 10号溝北端部土層断面		4 10号溝上層両端部出土遺物 (106)
6 10号溝最下部遺物出土状況		5 10号溝上層両端部出土遺物 (108)
7 10号溝完掘状況（南側より）		6 10号溝上層両端部出土遺物 (111)
8 10号溝埋め戻し状況		P L 15 1 10号溝中層出土遺物 (114)
P L 8 1 2号住居跡出土遺物（1）		
2 2号住居跡出土遺物（3）		

図 版 目 次

2	10号溝中層出土遺物 (115)	P L 22	1	10号溝3層出土遺物 (243)
3	10号溝中層出土遺物 (116)		2	10号溝3層出土遺物 (250)
4	10号溝中層出土遺物 (121)		3	10号溝3層出土遺物 (256)
5	10号溝中層出土遺物 (126)		4	10号溝3層出土遺物 (262)
P L 16	1	10号溝中層出土遺物 (127)	5	10号溝3層出土遺物 (263)
2	10号溝中層出土遺物 (128)		6	10号溝3層出土遺物 (265)
3	10号溝中層出土遺物 (129)		7	10号溝3層出土遺物 (271)
4	10号溝中層出土遺物 (130)		8	10号溝3層出土遺物 (274)
5	10号溝中層出土遺物 (131)	P L 23	1	10号溝3層出土遺物 (275)
P L 17	1	10号溝中層出土遺物 (137)	2	10号溝3層出土遺物 (276)
2	10号溝中層出土遺物 (138)		3	10号溝3層出土遺物 (291)
3	10号溝中層出土遺物 (138)		4	10号溝3層出土遺物 (301)
4	10号溝中層出土遺物 (142)		5	10号溝3層出土遺物 (314)
5	10号溝中層出土遺物 (142)		6	10号溝3層出土遺物 (315)
6	10号溝中層出土遺物 (143)		7	10号溝3層出土遺物 (316)
7	10号溝中層出土遺物 (148)		8	10号溝3層出土遺物 (326)
8	10号溝中層出土遺物 (151)	P L 24	1	10号溝4層出土遺物 (339)
P L 18	1	10号溝中層出土遺物 (152)	2	10号溝5層出土遺物 (340)
2	10号溝中層出土遺物 (153)		3	10号溝8層出土遺物 (342)
3	10号溝中層出土遺物 (154)		4	10号溝出土一括遺物 (346)
4	10号溝中層出土遺物 (161)		5	10号溝出土一括遺物 (347)
5	10号溝中層出土遺物 (165)		6	遺構に伴わない遺物 (353)
6	10号溝中層出土遺物 (166)		7	遺構に伴わない遺物 (356)
7	10号溝中層出土遺物 (168)		8	遺構に伴わない遺物 (357)
8	10号溝中層出土遺物 (176)			
P L 19	1	10号溝下層出土遺物 (182)		
2	10号溝下層出土遺物 (185)			
3	10号溝下層出土遺物 (191)			
4	10号溝下層出土遺物 (192)			
5	10号溝下層出土遺物 (193)			
6	10号溝下層出土遺物 (199)			
7	10号溝下層出土遺物 (203)			
P L 20	1	10号溝1層出土遺物 (208)		
2	10号溝1層出土遺物 (209)			
3	10号溝1層出土遺物 (211)			
4	10号溝1層出土遺物 (213)			
5	10号溝1層出土遺物 (214)			
6	10号溝1層出土遺物 (215)			
7	10号溝1層出土遺物 (216)			
8	10号溝1層出土遺物 (217)			
P L 21	1	10号溝2層出土遺物 (218)		
2	10号溝2層出土遺物 (222)			
3	10号溝2層出土遺物 (225)			
4	10号溝2層出土遺物 (227)			
5	10号溝2層出土遺物 (233)			
6	10号溝2層出土遺物 (234～236)			
7	10号溝3層出土遺物 (238)			
8	10号溝3層出土遺物 (240)			

図13	今回の銅鏡と弥生時代および古墳時代の銅鏡の 鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	81
図14	図13の拡大図	81

表 目 次

表 1	山鹿市から出土した青銅製品の記載	65
表 2	山鹿市出土文化財管理センター収蔵の青銅製品 の鉛同位体比値	67

図 版 目 次

写真 1	資料番号No 1 (銅鏡15—a) の 試料採取位置	69
写真 2	資料番号No 2 (銅鏡15—b) の 試料採取位置	69
写真 3	資料番号No 3 (銅鏡15—c) の 試料採取位置	70
写真 4	資料番号No 4 (偽製鏡19) の 試料採取位置	70
写真 5	資料番号No 5 (偽製鏡14) の 試料採取位置	71
写真 6	資料番号No 6 (偽製鏡11) の 試料採取位置	71
写真 7	資料番号No 7 (銅鏡12) の 試料採取位置	72
写真 8	資料番号No 8 (銅鏡13) の 試料採取位置	72
写真 9	資料番号No 9 (銅鏡16) の 試料採取位置	73
写真10	資料番号No10 (銅鏡17) の 試料採取位置	73
写真11	資料番号No11 (偽製鏡18) の 試料採取位置	74

付論 2

挿 図 目 次

図 1	山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	100
図 2	図 1 の拡大図	100
図 3	山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	101
図 4	図 3 の拡大図	101
図 5	山鹿市立博物館所蔵の巴形銅器と弥生時代の	

図 6	図 5 の拡大図	102
図 7	山鹿市立博物館所蔵の巴形銅器と弥生時代の 巴形銅器の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	103
図 8	図 7 の拡大図	103
図 9	山鹿市立博物館所蔵の方格規矩鏡と弥生・ 古墳時代の方格規矩鏡の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	104
図10	図 9 の拡大図	104
図11	山鹿市立博物館所蔵の方格規矩鏡と弥生・ 古墳時代の方格規矩鏡の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	105
図12	図11の拡大図	105
図13	山鹿市立博物館所蔵の偽製鏡と弥生・古墳時代 の偽製鏡の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	106
図14	図13の拡大図	106
図15	山鹿市立博物館所蔵の偽製鏡と弥生・古墳時代 の偽製鏡の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	107
図16	図15の拡大図	107
図17	山鹿市立博物館所蔵の舶載鏡と弥生・古墳時代 の舶載鏡の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	108
図18	図17の拡大図	108
図19	山鹿市立博物館所蔵の舶載鏡と弥生・古墳時代 の舶載鏡の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	109
図20	図19の拡大図	109
図21	山鹿市立博物館所蔵の銅鏡と弥生・古墳時代の 銅鏡の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	110
図22	図21の拡大図	110
図23	山鹿市立博物館所蔵の銅鏡と弥生・古墳時代の 銅鏡の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	111
図24	図23の拡大図	111
図25	山鹿市立博物館所蔵の中広形銅矛・広形銅矛と 弥生時代の中広形銅矛・広形銅矛の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	112
図26	図25の拡大図	112
図27	山鹿市立博物館所蔵の中広形銅矛・広形銅矛と 弥生時代の中広形銅矛・広形銅矛の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	113
図28	図27の拡大図	113
図29	山鹿市立博物館所蔵の細形銅戈・細形銅劍と 弥生時代の細形銅戈・細形銅劍の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)	114
図30	山鹿市立博物館所蔵の細形銅戈・細形銅劍と 弥生時代の細形銅戈・細形銅劍の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)	114

表 目 次

表1 青銅材料と時代の変化.....	89
表2 山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の 鉛同位体比値.....	90

図 版 目 次

写真1 資料番号1(巴形銅器)の試料採取の 位置.....	91
写真2 資料番号2(方格規矩鏡)の試料採取の 位置.....	91
写真3 資料番号3(仿製鏡)の試料採取の位置.....	92
写真4 資料番号4(仿製鏡)の試料採取の位置.....	92
写真5 資料番号5(仿製鏡)の試料採取の位置.....	93
写真6 資料番号6(仿製鏡)の試料採取の位置.....	93
写真7 資料番号7(舶載鏡)の試料採取の位置.....	94
写真8 資料番号8(舶載鏡)の試料採取の位置.....	94
写真9 資料番号9(仿製鏡)の試料採取の位置.....	95
写真10 資料番号10(銅鎌)の試料採取の位置.....	95
写真11 資料番号11(銅鎌)の試料採取の位置.....	96
写真12 資料番号12(銅鎌)の試料採取の位置.....	96
写真13 資料番号13(仿製鏡)の試料採取の位置.....	97
写真14 資料番号14(中広形銅矛)の試料採取の 位置.....	97
写真15 資料番号15(広形銅矛)の試料採取の 位置.....	98
写真16 資料番号16(細形銅戈)の試料採取の 位置.....	98
写真17 資料番号17(細形銅劍)の試料採取の 位置.....	99
写真18 資料番号18(細形銅劍)の試料採取の 位置.....	99

I 調査の経過

1 調査に至る経過

山鹿市では昭和53年4月博物館が開館して文化財行政についても行ってきた。平成4年度に文化課ができるが、学芸員は兼務で資料の整理や保管は博物館で続けていたのである。そのため館内や別棟の収蔵庫には資料が溢れ出し、整理する場所の確保が困難な状況に陥ってしまった。

そのため新たな施設の建設を考える必要に迫られ、文化庁補助事業の出土文化財管理センター建設をお願いすることとなったのである。

平成6年12月全史協（全国史跡整備市町村協議会）臨時大会の際、文化庁記念物課主任調査官に補助金の話をすると、明日文化庁で詳細に話しましょうということになり、基本的に補助金交付の約束を取り付けたのである。教育長も同席され市に持ち帰って決定することとなった。

建設場所については博物館周辺も考慮したが、未買収地を残していた史跡方保田東原遺跡の大半を平成4年に山鹿市が自治省の起債事業で購入を済ませていたこともあり、方保田東原遺跡の将来的な活用と周辺地域の乱開発を阻止できればとの配慮から、結果的には方保田東原遺跡周辺に建てるにした。

このため史跡に指定されている場所の近くに土地の確保が必要となり、平成6年度末に調査予定地を土地開発基金で購入したのである。

土地についても当初予定した場所が交渉に難航したため急遽隣接地に変更したもので、所有者の協力なしではできなかったことである。なお発掘調査は市の単独事業として実施することとした。

現地は山鹿市方保田字東原128番1である。

なお、平成7年度から中村は文化課文化財係長兼務を解かれ博物館副館長のみとなっていたが、人材の確保ができないことから、文化財調査を博物館に委託するという変則的な体制で、再度発掘調査を実施することとなり、建設までの経緯もあり調査担当となった。

2 調査の組織

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原哲哉（山鹿市教育長兼 山鹿市立博物館長）
総括事務	永田哲也（文化課長） 木村理郎（文化課課長補佐兼文化財係長） 次木万里子（文化課主任主事） 井上欣也（主事）
調査事務	八木田由美（博物館主任主事） 西島靖男（博物館主事） 松岡優季（博物館主事補）
調査指導	坂井秀弥（文化庁調査官） 賀川光夫（別府大学教授） 小田富士雄（福岡大学教授） 甲元真之（熊本大学教授） 松本健郎（県文化課主幹）
調査担当	中村幸史郎（博物館副館長）
調査補助員	吉田政博（現荒尾市教委）
発掘作業員	井上秀実、伊豆永敏光、稻土豪、江藤カヨ子、奥村康子、坂田精一、高木尚史、高橋信子、高橋道昭、高本ミチ子、父母勝代、富田スミ子、中村春子、中村房子、平尾トシ子、福山須美子、福山陽子、前川誠一、宮崎静子、村橋由貴、吉井新助、博物館実習生・熊本大学（石田清美、大田華代、川上あかね、式彩子、田川めぐみ、土谷穂、平田昌和、松下修也）・九州東海大学（古田知佳子）
整理作業員	生島統夫、小原朱実、大森よう子、城葉子、野満彩子、渕上厚子、森みつよ、山口美智子、渡辺晃
調査協力	飯田晃敏、文化財保存環境整備 古家修（石材鑑定）、西村亮一（地形図提供）

3 調査の経過

- 平成7年（1995）
- 7月17日（月）くもりのち晴れ
本日より発掘の下準備にかかる。現場小屋およびテント設営のための除草作業実施
- 7月18日（火）晴れ
現場小屋設営、調査区設定東西30m、南北15mとし、出土文化財管理センターの規模と同じとした。
- 7月19日（水）くもり
調査区の周囲に土叢を並べ、外側には排水路をめぐらし雨対策を講じた。表土は東側から剥ぎ始め約20cmの深さで耕作土があり、その下には黄色粘土層が顔をのぞかせている。
- 7月24日（月）雨
小雨の中作業を行った。表土剥ぎを行う。小さな青銅製品の破片が出土したが時期も品名も不明。
- 7月25日（火）本日より8月1日まで熊本大学の博物館実習開始、調査と並行して行うこととなり中村は現場を離れることが多くなった。
- 7月26日（水）晴れ
博物館実習生（熊本大学8名）も発掘体験を行う。表土剥ぎに専念。
- 7月31日（月）晴れ
表土直下から数条の細い溝確認。地質調査終了。中村は文教厚生委員会出席
- 8月2日（水）晴れ
あまりの暑さで作業効率が低下してきたので調査区全体に直射日光を遮断するように寒冷紗を張った。東側の溝を掘り始める。
- 8月9日（水）晴れ
7号溝の南側を掘り下げたら黄色土と土器が混在して出土した。
- 8月21日（月）くもり
7号溝は4層の堆積土を確認できる。
- 8月30日（水）くもり
7号溝の掘り下げを行う。3層と4層から遺物が出土し、下層は白粘土層である。
- 9月1日（金）曇りのち晴れ
昨日の大雨で寒冷紗が足場ごと崩壊した。調査区の乾燥防止用のシートを剥がし全面の遺構検出を行う。住居跡を2軒検出。
- 9月5日（火）晴れ
一昨夜の雨で調査区内は冠水状態で、昨日から引き続キポンプアップしていた。その間全員でシート洗いを行う。
- 9月6日（水）くもり
散在していた遺物が冠水や排水で移動していたため括して取り上げた。
- 9月7日（木）くもり
7号溝西側に褐色土とその両側に黒色土が広がっていて遺物が散在している。このことから何らかの遺構が考えられる。大きな溝が南北に走っている可能性が高い。なお褐色土層内より礫石器、石鏸、須恵器の高台付碗が出土したので写真撮影後取り上げた。
- 9月11日（月）くもり一時雨
7号溝の白粘土層と黄色粘土層の状況から埋土か地山の判断に苦しんでいる。
- 9月18日（月）晴れ
9月定例議会文教厚生委員会出席のため中村は現場での指導はできなかった。5号溝に直交するように溝を検出。仮8号溝としたが方形周濠墓になる可能性も残している。
- 10月2日（月）晴れ
大溝掘り下げと実測した遺物の取り上げを行う。大溝の遺物はかなりの量になりそうである。
- 10月5日（木）雨
雨であったがテントを張って大溝の掘り下げを行った。今日遺物が2期に分かれることが確認できた。
- 10月16～17日
博物館特別企画展「谷敏男作品展」準備および開催
- 10月18日（木）晴れ
西日本新聞社野田記者取材。5号溝は仮8号溝と同一であることが判明し方形周濠墓となった。
- 10月23～24日
文化財保護委員会鹿児島研修案内（中村）
- 10月25～27日
全国遺跡整備担当者会議（東広島市・中村参加）
- 10月30日（火）くもり
今日から遺跡整備計画の応援を得て大溝の実測を集中

して行う。

11月2日（木）晴れ

熊本大学甲元教授調査現場指導

11月15日（水）晴れ

熊本県文化課より現場視察。遺構の保存について協議の必要ありとの指導を受ける。

11月20日（月）くもり

朝から県文化課へ協議に出かける。遺跡整備策定委員の先生方に文化財管理センターの建設計画と遺構保存について説明するよう要請あり。

11月21日（火）晴れ

文化課長と共に別府大学へ赴き、賀川光夫教授に経過報告とこれからの計画について説明した。

11月22日（水）晴れ

福岡大学に赴き小田富士雄教授に経過報告と計画について説明をした。

11月27日（月）晴れ

熊本大学甲元教授へ経過報告と計画について説明をした。その後県文化課へ赴き協議したが、文化庁と最終的に協議して決定することとなった。

11月28日（火）くもり

教育長と共に上京。文化庁に赴き協議したが基本的に遺構保存を行う事とし、30日に予定していた建設工事入札の中止を教育長から永田文化課長に連絡。課長から松尾建設部長と長瀬助役に連絡する。

文化庁からは周辺の調査を行うよう指導。場合によっては追加指定と用地買収の補助をあげたいとの事であった。

11月29日（水）晴れ

朝から入札予定業者に入札延期の謝罪と今後の説明を行う。午後県文化課に赴き文化庁との協議内容と入札延期の報告を行う。

12月2日（土）晴れ

現場の航空写真撮影実施

12月4日（月）晴れ

県文化課へ協議のため出向く。県の内部で意見が分かれている感じである。

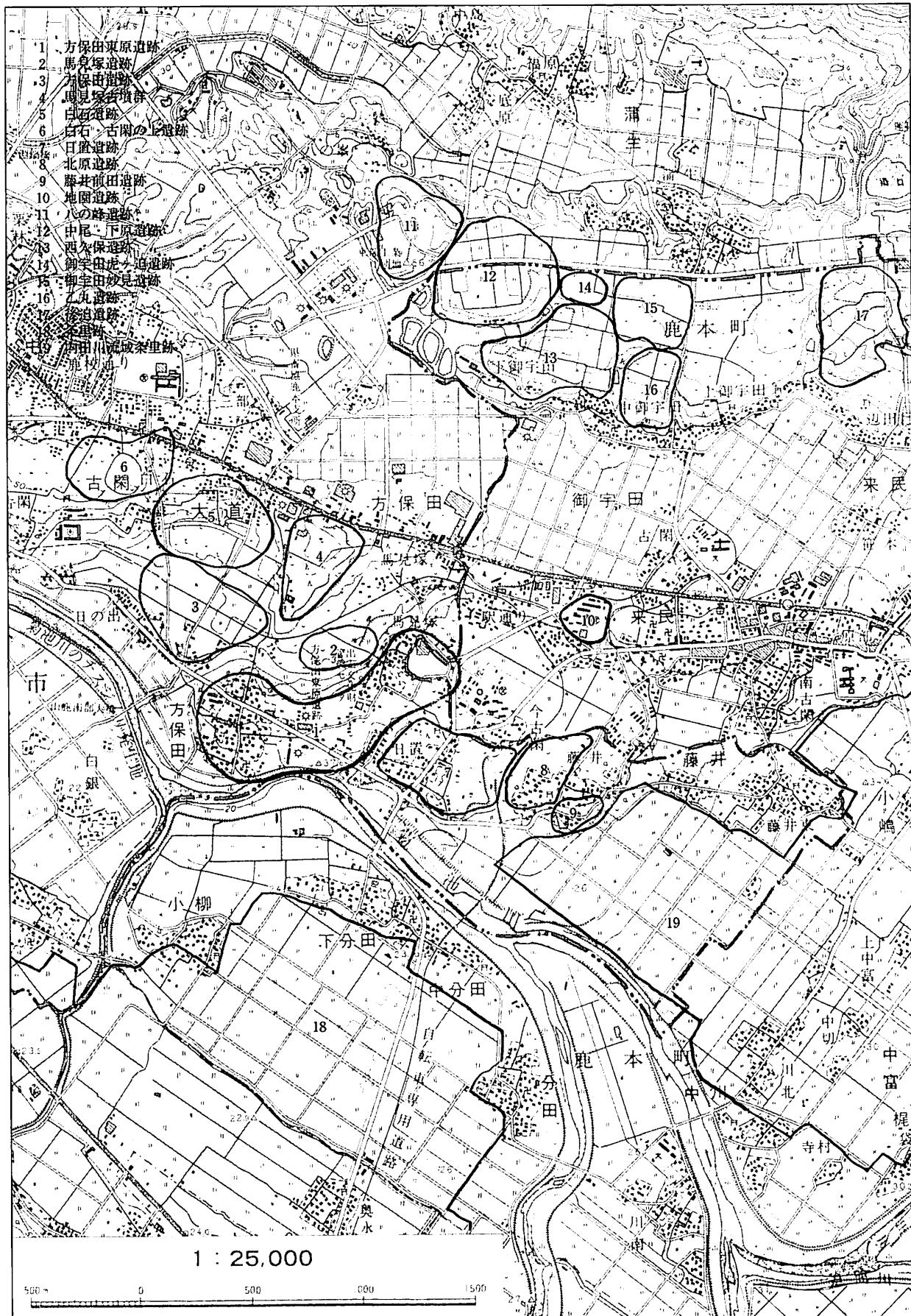
12月11日（月）晴れ

文化庁記念物課坂井調査官来市、現場視察後財政課も交えて協議する。3案提示したが遺構の保存を第一に考

え、大幅な設計の変更を行うこととした。文化庁の指導では、これまでの国指定の範囲設定に問題があり、今後遺跡の範囲確認調査を行う必要性を訴えられた。補助金も出します。場合によっては追加指定も視野に入れておくこと。との指導あり。

12月12日（火）くもり

埋め戻し開始。なお大溝には土嚢袋に土を入れて埋め戻しを行った。



第1図 遺跡分布図

II 遺跡の環境

1 歴史的環境

熊本県内には弥生時代後期から古墳時代前期において拠点集落と呼ばれる遺跡が数多く存在しており、これまでにも発掘調査によって数多くの成果を挙げている。

特に玉名市柳町遺跡の調査では低湿地における初めての本格調査を行ったもので、現在の水田面の下に遺跡が残されていることを証明したことと、木製品を始めとした有機質の遺物の発見に貢献したことは、これまでの熊本県内の考古学的常識を覆した結果となった。

また、弥生時代の遺跡の在り方においてもこれまでには台地上のみを中心見てきたが、これからは平野の中でも微高地を中心として発見に努めなければならないし、堆積層の下に遺跡が埋もれている可能性も高く、根本的に低湿地における遺跡の存在について念頭に置いた取り組みが不可欠である事を改めて認識した。

さて、菊池川流域における遺跡の在り方について概観してみることにする。

上流の阿蘇外輪山西側山麓ではこれまで詳細な調査がされていない事にも起因するが、大規模な遺跡は確認されていない。菊池市街地から山鹿市街地までの中流域では氾濫原およびその周辺において多くの遺跡を見ることができる。

上流側から見ると菊池市の外園遺跡は熊本県で最初に貨泉を出土した遺跡で、中国大陆との交流を考える上で重要な遺跡と言えよう。

菊池市七城町の台（うてな）遺跡でも貨泉を出土しているが、南に迫間川と菊池川を、西に内田川を見下ろす標高80mの台地上に位置している。熊本県の調査であるが、排水路及び道路内の調査であったため環濠のみの確認に終わっている。同じく菊池市七城町の小野崎遺跡は北に菊池川、西に合志川を見下ろす標高60mの台地上に位置している。旧七城町教育委員会の手で調査が行われ住居跡、環濠等とともに青銅鏡を始め数多くの遺物を出土している。

山鹿市鹿本町の津袋大塚遺跡は内田川の西側に位置し溝状遺構と多量の土器を出土しているが、詳細な遺跡の把握には至っていない。この遺跡のすぐ近くの蒲生上の原遺跡は標高95mの台地東端部に熊本県の調査で4重の

環濠が廻っていることが確認された。

下流域は和水町の諒訪原遺跡が見られ、未だに全容は明らかになっていない。

さて、目を転じて方保田東原遺跡の周辺における弥生時代の遺跡分布状況を見てみよう。なお遺跡名称は熊本県遺跡地図（熊本県教育委員会）に由つた。

方保田東原遺跡（1）の東側には日置遺跡（7）、北原遺跡（8）が広がり、共に土器の散布が確認されている。北東側には銅矛を出土した県立鹿本商工高校内の地園遺跡（10）、北側の御宇田台地上には乙丸遺跡（16）、西久保遺跡（13）、御宇田妙見遺跡（15）、御宇田虎ヶ迫遺跡（14）、中尾・下原遺跡（12）、八の峰遺跡（11）等が存在している。

西側では方保田遺跡（3）、白石遺跡（5）、白石・古閑の上遺跡（6）が広がっている。南側の氾濫原では弥生時代の遺跡の確認は出来ていないが、時折工事に際し地下2mで土器が出土ということで報告が有る所から考えて遺跡が埋没している可能性が高い。古代の条里跡は（18）と（19）の地域で残されていたが、圃場整備事業で破壊されている。

2 地理的環境

九州の中央に位置する熊本県には世界一のカルデラを誇る活火山の阿蘇山がそびえている。カルデラの北西部には標高1,118mの鞍岳が在り、西に向かって大きく裾部を広げている。裾の先端は長く伸びて台地を形成しておりその中の一つが通称花房台地である。

また鞍岳山麓には多くの谷が刻まれ、数多くの湧水地を配しておりその中の一つに菊池渓谷が含まれる。

菊池渓谷からの流れは大小65の支流を集め菊池市、山鹿市、玉名市等を通り有明海に注ぐ全長61.2kmの菊池川となっている。

鞍岳山麓からの流れは花房台地を挟んで南北に分かれおり、北の流れは菊池市街地に注いでいる。

この地から山鹿市志々岐までの間は蛇行しながら流れている。また山鹿市が位置する中流域では海拔20m程度で支流の多くが集まっており、熊本県北部で降った雨の殆どがこの地域に流れ込んでいる。

加えて下流域の玉名地方との間には和水町の山間部を通り抜けているため梅雨時の大雨には水の流れが滞り洪

水が絶えなかった。そのため菊池市から山鹿市の間には東西15km、南北2kmにわたり氾濫原が形成され、現在この地を菊鹿（きくろく）平野と呼んでいるが、一部はかつて「茂賀の浦三千町」として古くから県内有数の重要な穀倉地帯を形成している。

方保田東原遺跡はこの氾濫原を見下ろすように菊池川中流域の右岸に発達した標高35m～40mの河岸段丘に立地しており、南に菊池川、北にはその支流の方保田川に挟まれ段丘西側で合流している。そのため東側を基部として西に伸びる舌状台地になっている。

特に南側の菊池川の流れは現在の流れが当時のままであるかは断定できないが、菊池市指定文化財の「菊池川全図」によれば安政2年（1855）には現在の流れであることが描かれている。

現在の川の流れを概観してみると、菊池方面から流れてきた本流に鹿本町中富で迫間川と内田川が相次いで合流している。水量を増した菊池川は方保田の東で合志川と合流しているが、合志川が植木町平島方面から勢い良く北に向って流れ込んでいるため、菊池川を北に押し出すようにして流れ込んでいる。そのため菊池川の流れが西から北西に変わって流れ、そのまま方保田の台地を洗い流すかのようにぶつかり年々浸食をしている。

安政年間の絵図に描かれているからと言ってどれくらい時間的に遡れるか解らないが、目を転じて、氾濫原の状況を見ると、条里制造構の存在によって考えることができよう。

昭和52年刊行の「熊本県の条里」によれば菊池川と迫間川に挟まれた菊池市と七城町の間、木野川及び内田川流域西側の鹿本町稻田、高橋、中富と山鹿市藤井の地区、菊池川と合志川に挟まれた七城町橋田地区、及び鹿本町分田、小柳、山鹿市長坂、南島といった地区的集落を結んだ線から南側に条里制がのこっている。しかし、毎年梅雨時に氾濫し水害が出ていた地域では条里の跡が見られないようである。

この事から少なくとも古代から今日まで川の流れが変化していないことを物語っており、弥生時代においても基本的には現状に近い川の流れであったものと推察される。

さて、方保田東原遺跡の存在する舌状台地は近年開発が進み、谷が埋め立てられ住宅地になったりしているが、

第2図に示した地図は昭和44年当時の地形を示すものである。

遺跡の北東部には大道中学校が見られ、校舎の配置も明確に見ることができる。

日置から方保田に向かう部分に小さな谷が北から南に向かって入り込んでおり、北側に小さなため池が見られる。今日この池や、谷は埋め立てられ、住宅と集荷場として利用されているため、旧地形を見るることはできない状況である。

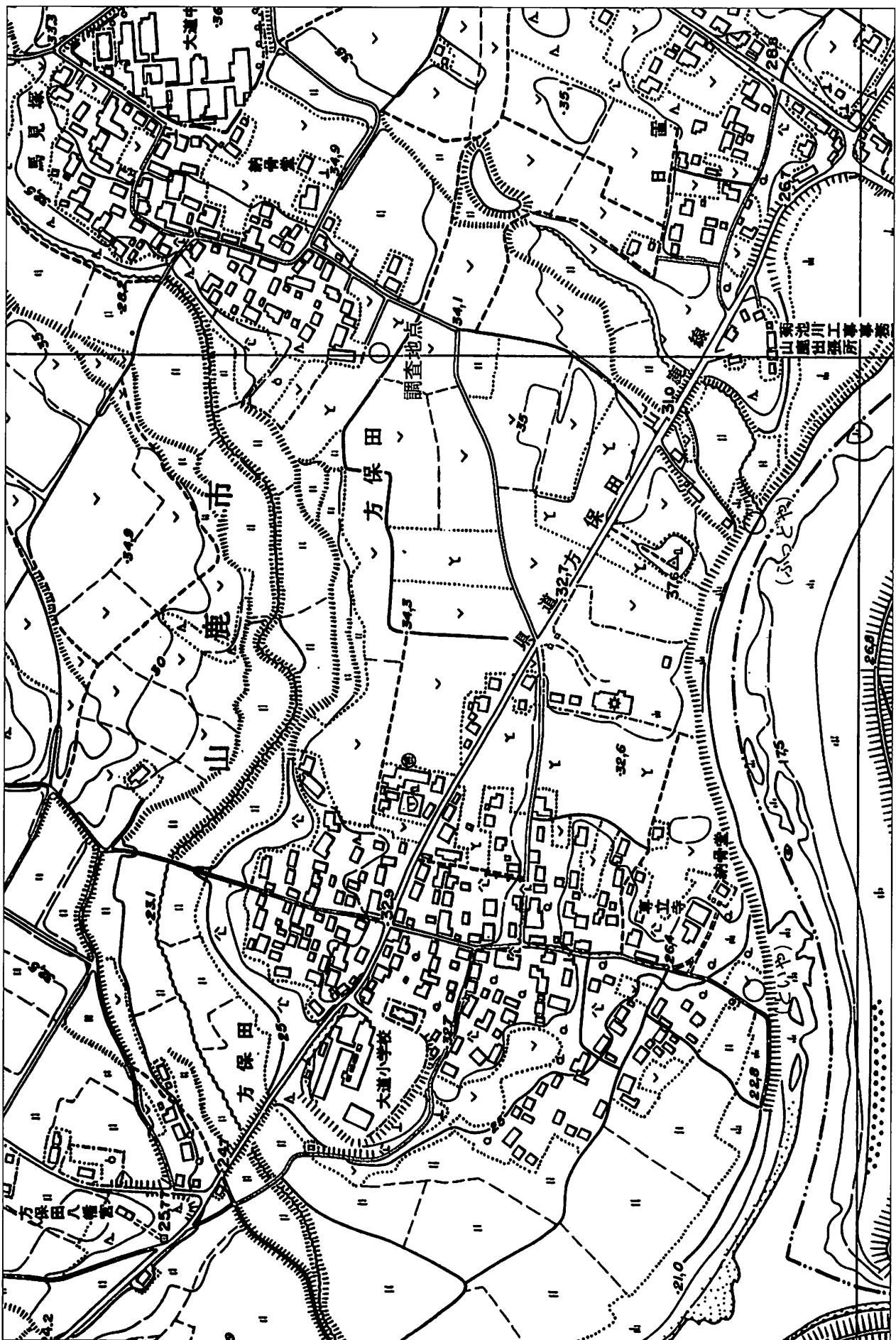
この谷は方保田東原遺跡を防御する上で重要な意味を持つようである。

舌状台地を断ち切ることを行う上では大きな濠の役目も果たすし、菊池川との接点では舟着場としての役割も果たしたものと考える。

地元では「ふっどや」と呼ばれ、下流の専立寺近くは「といや」と呼ばれ船着場が存在していたとのことである。このことから、「といや」に対してさらに古い船着場としての「ふっどや」があったものと考える事が出来よう。

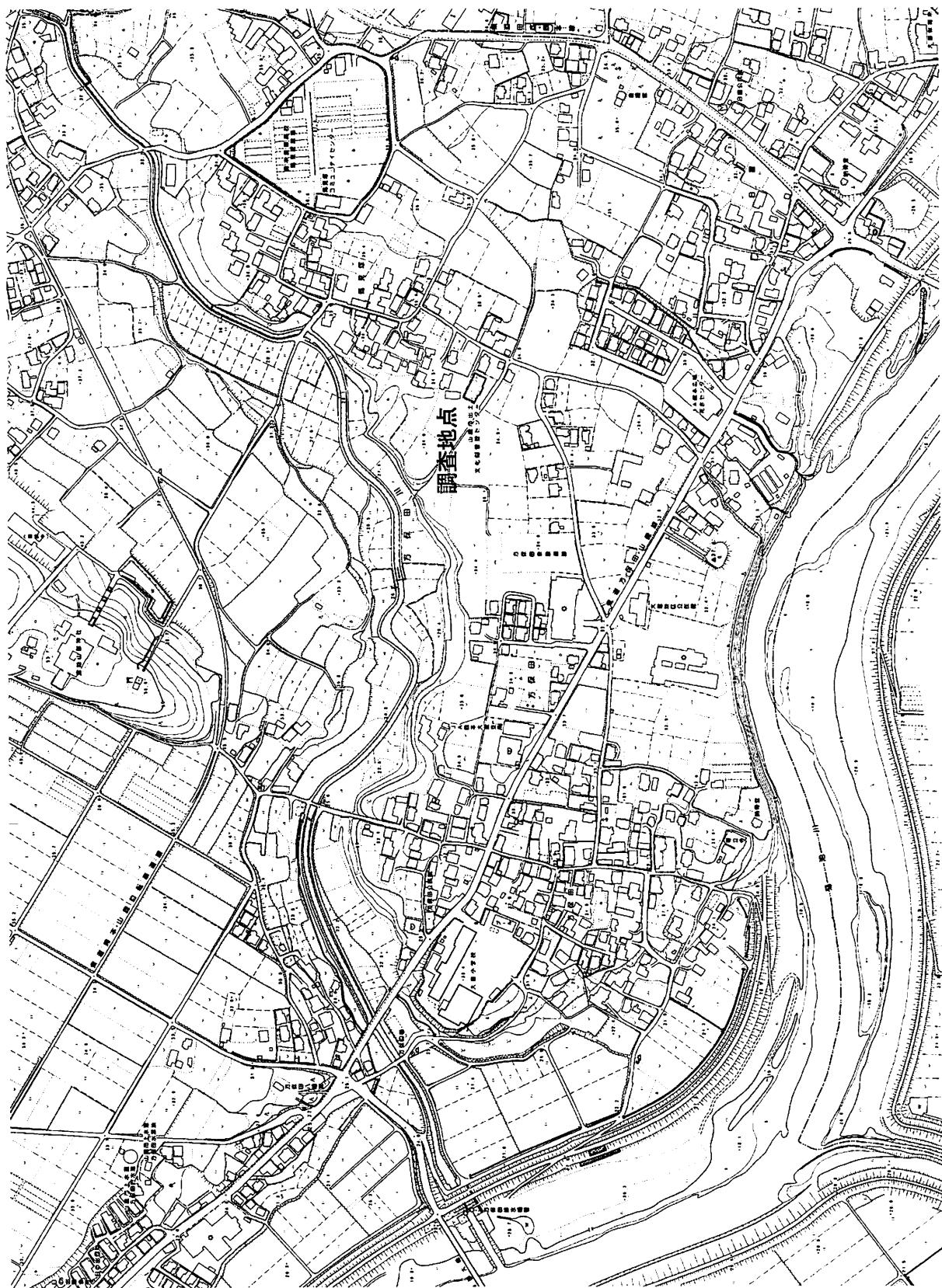
いずれにしても方保田東原遺跡と菊池川を結ぶ重要な部分であることには違いなさそうである。残念ながら現在この谷は見ることはできない。（第3図参照）

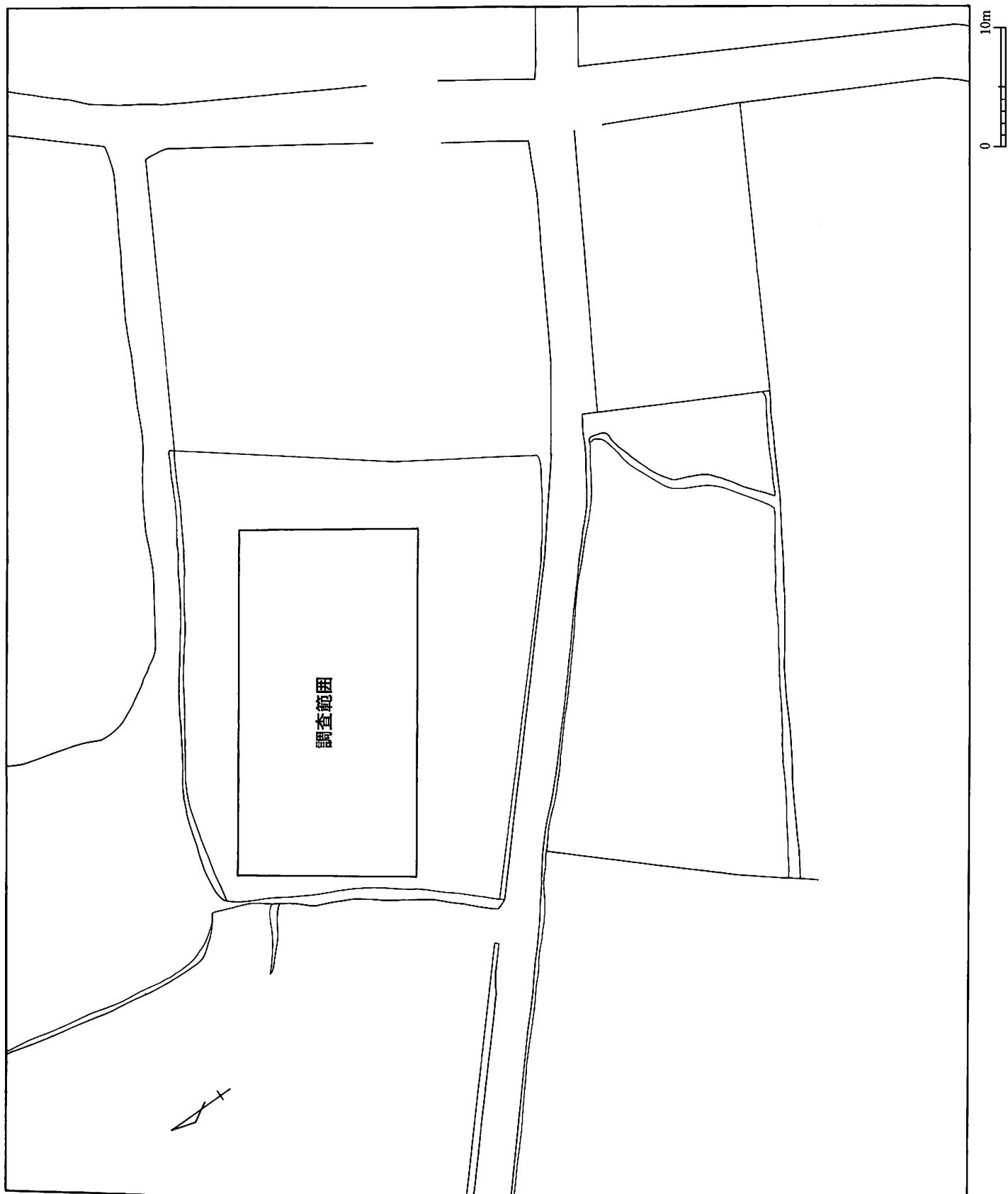
方保田東原遺跡が菊池川に接していたことから、生活に不可欠な水資源や、魚貝類の水産資源の確保、さらには物資運搬等の水運、戦闘状況における防衛施設としての役割を担っていたものと思われ、方保田東原遺跡が優位性を保てた大きな要因であったことは明白である。



第2図 追跡周辺地形図（昭和44年）

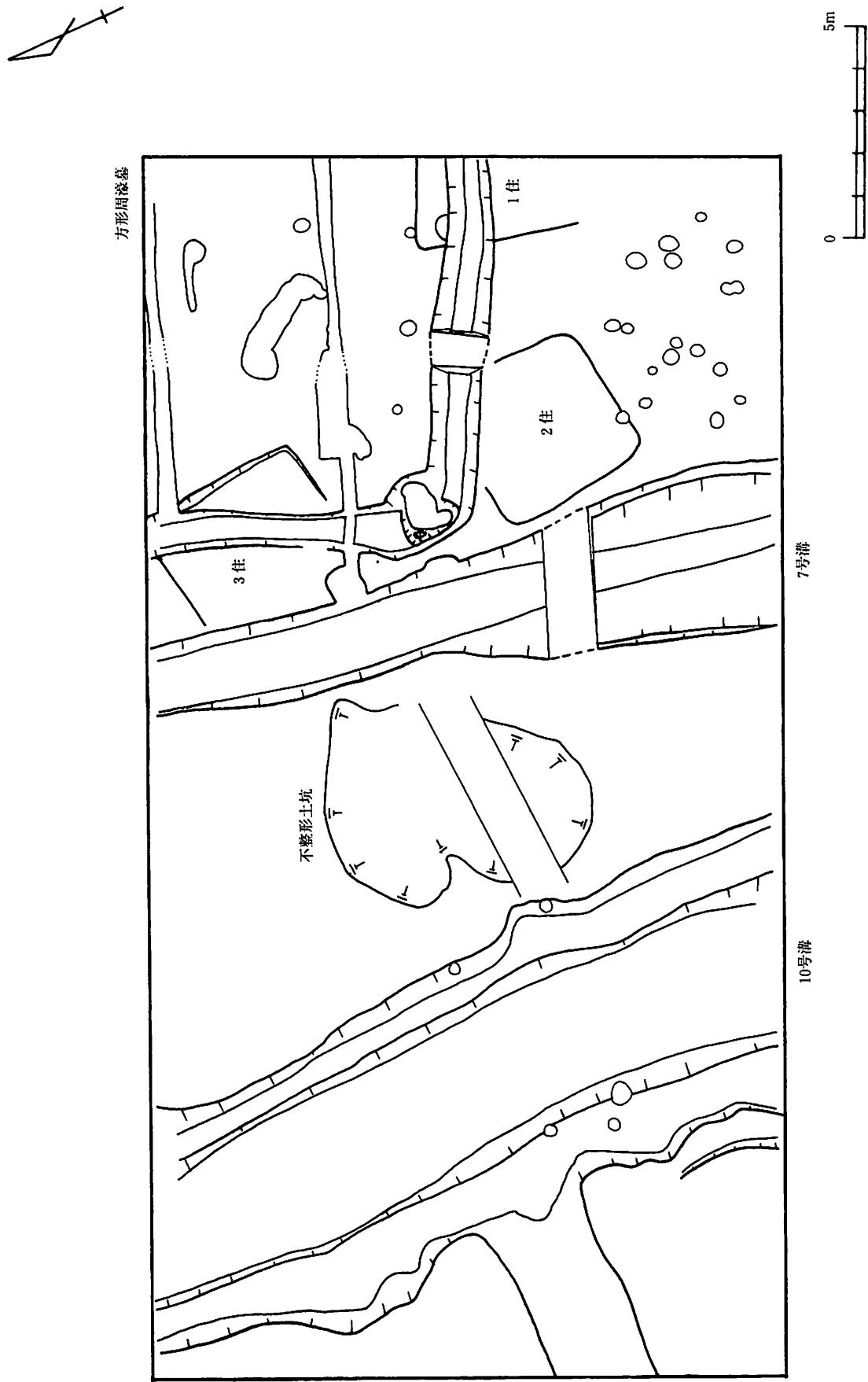
第3図 進跡地形図（平成13年段階）





第4図 調査区測量図

第5図 造構配図



III 調査の成果

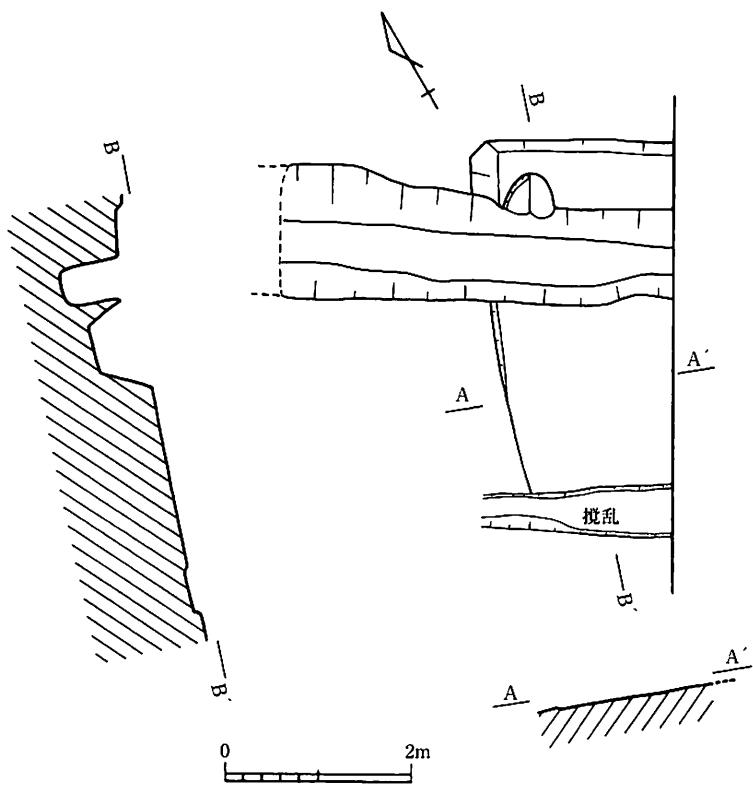
1 調査区の設定と遺構名（第5図）

調査区域は土地の面積が $1,023\text{m}^2$ で、建物の設計面積よりわずかに広い面積を調査の対象とし、東西30m、南北15mの範囲とした。隣接する建物と間隔を取るため西北に寄せる形に設定し、発掘して出る土を南側に積み上げるようにした。

調査区内では耕作による小さな溝が交錯しつつ残っていた。調査開始段階では1号溝等と名称をつけていたためあたかも弥生時代の溝のごとき印象を与える結果となった。そのため1号溝～4号溝と6号溝は耕作の際に掘られており遺構としては取り扱わなかった。

また、5号溝と8号溝については結合して最終的に方形周濠墓となったため、その名称をつけた。9号溝は調査区西端で大溝に流れ込む凹みであったので溝の名称を削除した。

10号溝は大溝として遺物の取り上げをしているが、調査中遺構検索の段階で出土した遺物にはそれぞれの溝の名称を付けている。



第6図 1号住居跡実測図

2 遺構と遺物

(1) 1号住居跡（第6図）

調査区東端中央部に位置し方形周濠墓に切られている。そのため北側の壁面2mと西側の壁面3.6mを確認しただけであった。

現状では表土から浅い位置であるため搅乱がひどく床面や炉跡などは確認できなかった。遺物の出土は見られなかつた。

(2) 2号住居跡（第7図）

1号住居跡の西側に位置し北東隅を方形周濠墓によつて切られている。ほぼ正方形に近い平面プランで、壁面はやや脹らみを持っているが東西と南北に向いている。南北3.6m、東西3.6mの規模である。床面は硬化面が一部で確認できた。ほぼ中央部に遺物が散在していた。

遺物（第8図）

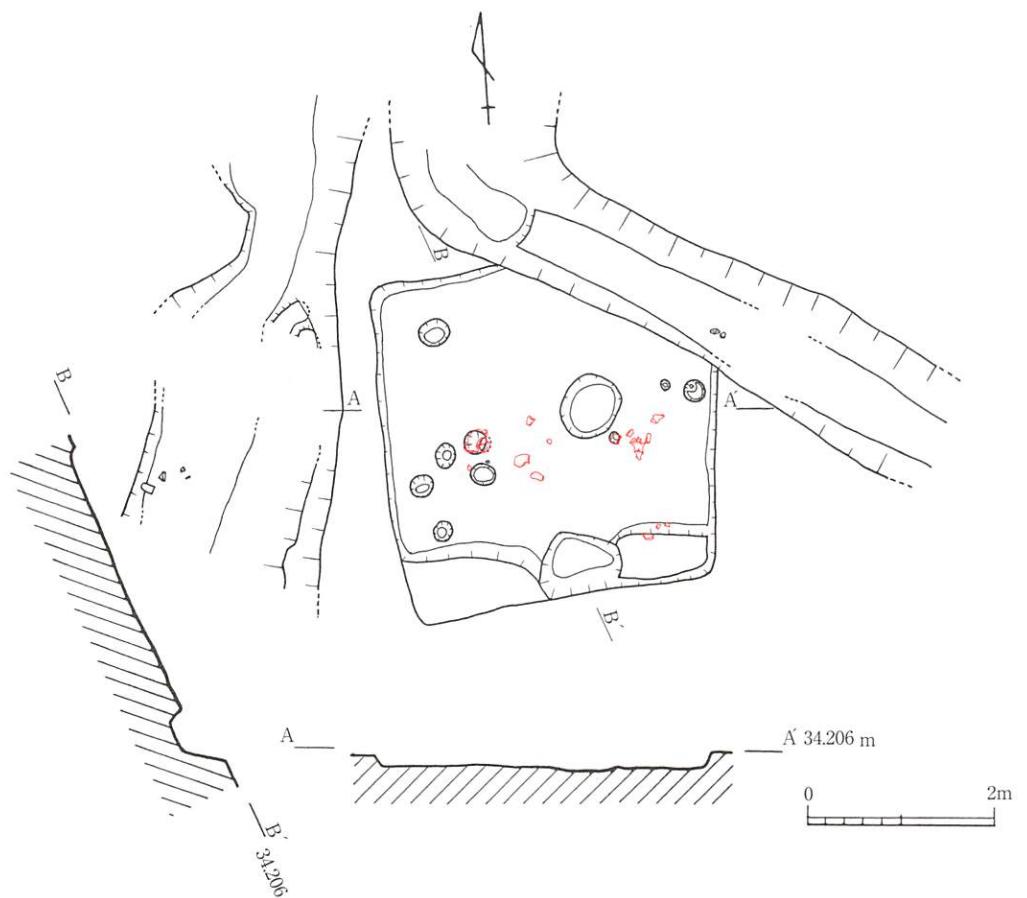
1は壺である、胴部以下を欠いているが、口縁部は短く反り気味に開き、口唇部には刻み目文を配している。頸部には一条の凸帯を巡らし、刻み目文を配している。器壁は薄く焼きも良好である。2は器台で脚部を欠いているが、叩き目を僅かに残している。内面には煤の付着も見られる。3は土製勾玉で長さ2.5cmの小型品である。4は玄武岩質安山岩製の磨製石斧で、刃部周辺は研磨しているが他の部分では敲打痕を残した状況である。刃部は使用のため潰れている。上部にはくびれ部を形成しており、柄を装着する際に固定しやすくするためにえぐりを入れていた。重さは224.7gである。

(3) 3号住居跡（第9図）

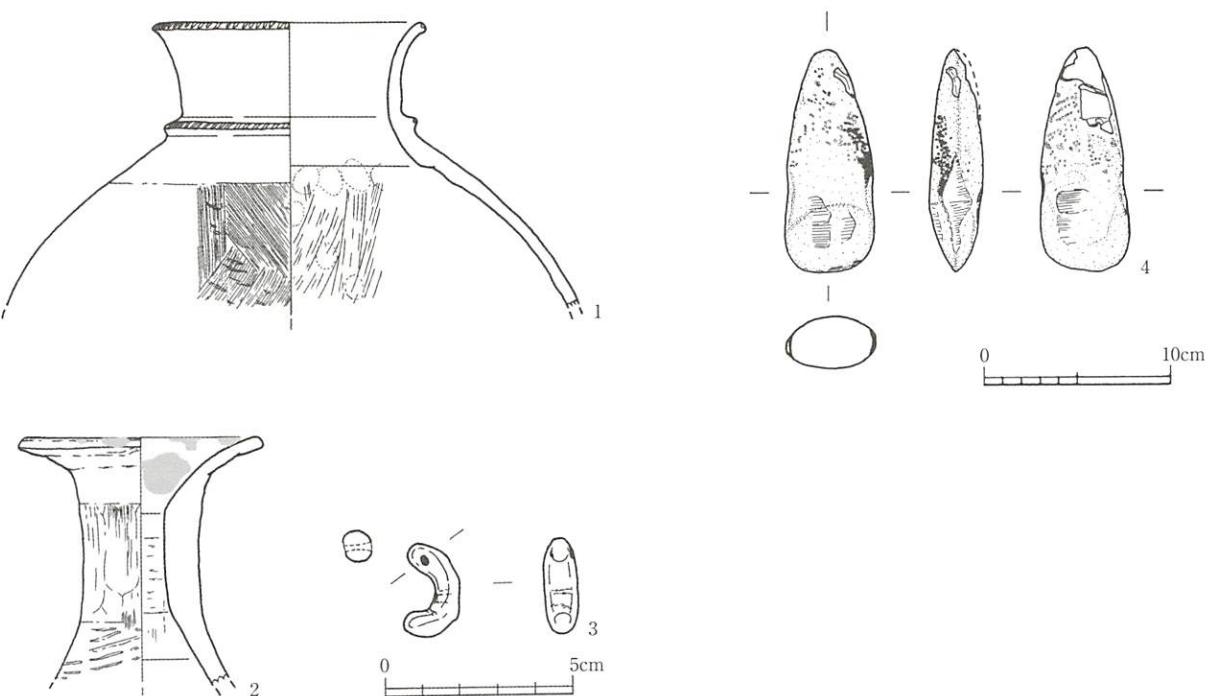
2号住居跡の北側に位置し主軸も同じ方向に建てられていたように配置している。方形周濠墓と7号溝によって大半を切られており、西側にコーナーの一部を残しているにすぎない。東西5.5m、南北3.8mの規模になる。遺物は床面より僅かに2点が出土している。

遺物（第10図）

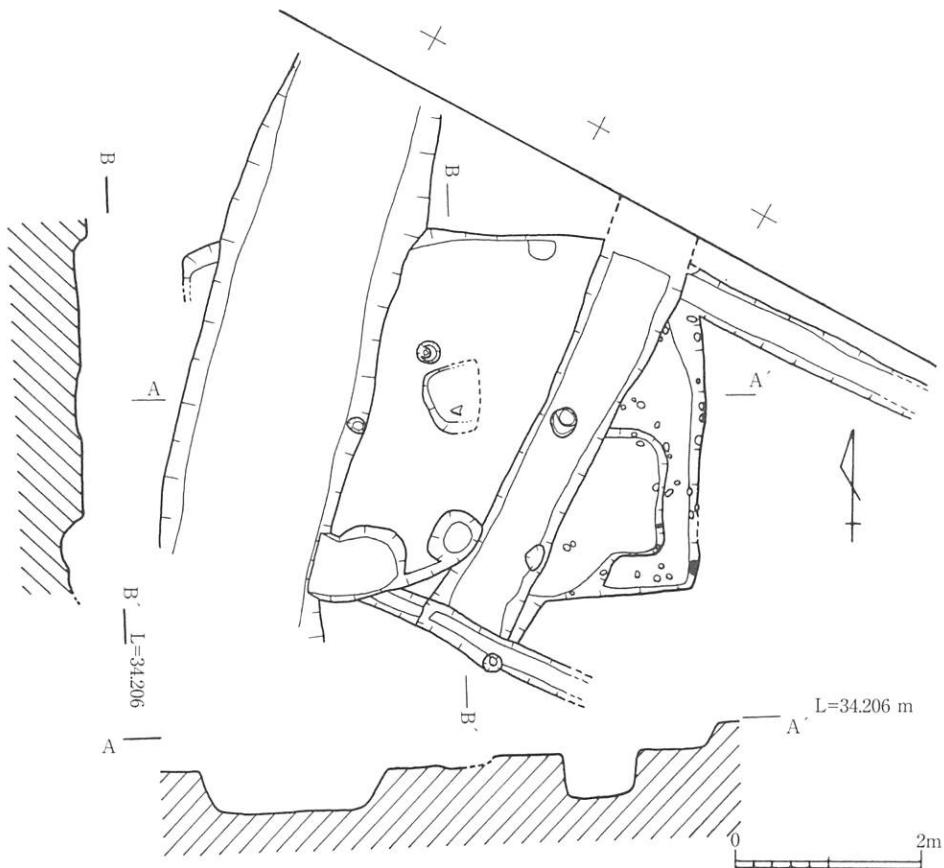
5は手捏土器で小型の壺である。



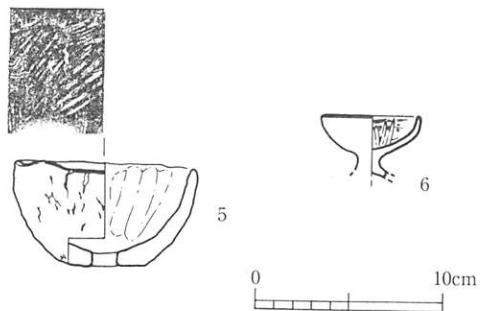
第7図 2号住居跡実測図



第8図 2号住居跡出土遺物実測図



第9図 3号住居跡実測図



第10図 3号住居跡出土遺物実測図

器面には粗い叩き目を施している。6はミニチュアの脚付き鉢である。脚裾部を欠損しているが口径5cmの精製土器である。

(4) 方形周濠墓（第11図）

当初東西方向に5号溝として認識していたが、直角方向に8号溝としたものとがコーナーを形成し結合したので、内部主体は不明ながら方形周濠墓であろうと判断した。

溝は幅1.2~0.8m、深さ0.6mで、南側で長さ9m、

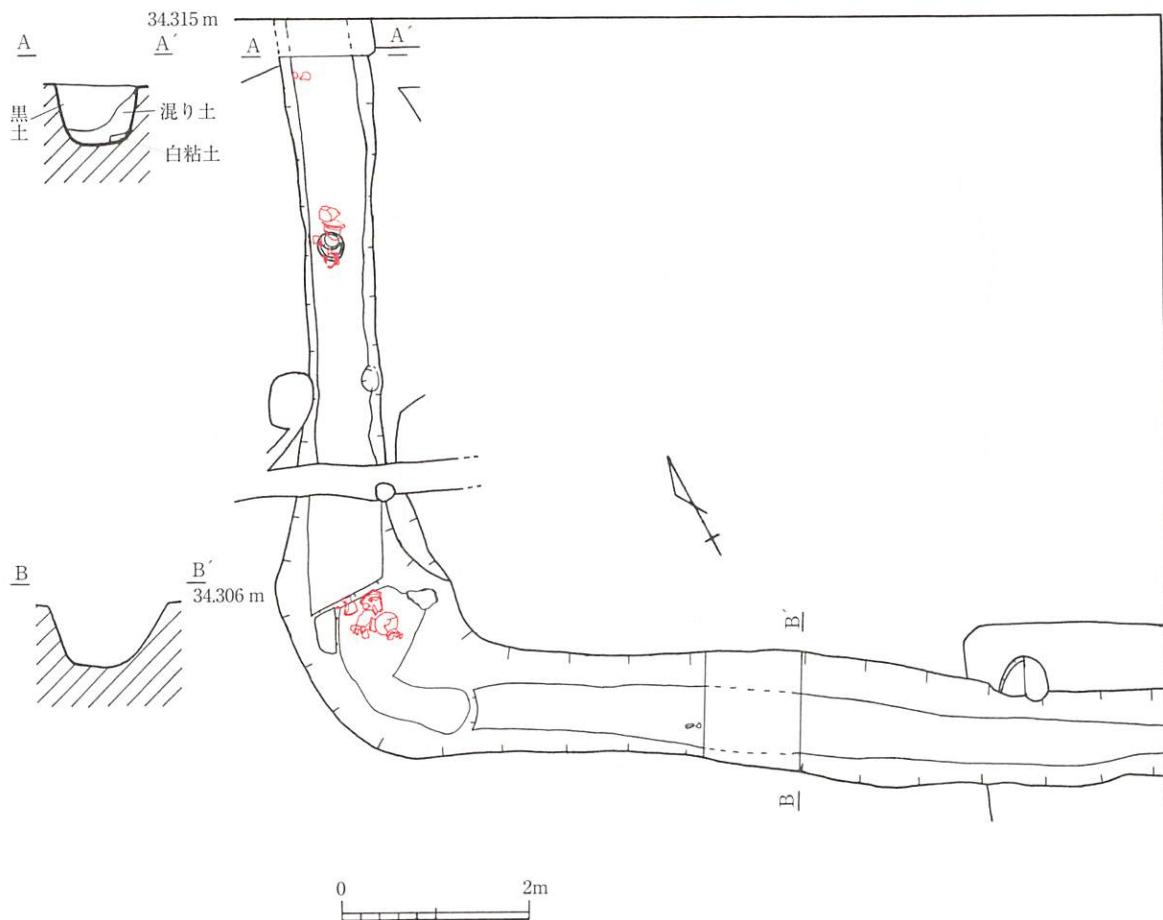
西側では同じく7mを確認できたが、大半は調査区の外に広がっているため本来の規模は不明である。

遺物（第12図）

遺物はすべて溝の中から出土している。

7は布留系の甕である。縦半分の状態であるが、内面には赤色顔料の付着が著しい。破片の状態で出土しているが土器の断面にも顔料の付着が認められるところから、赤色顔料を入れる容器として利用し、方形周濠墓に供える際に破損したものと理解した。8も外来系の甕であるが、口縁部の一部である。7と同様に内面に赤色顔料の付着が認められる資料であり、7とは接合しない。これらは共に濁った赤色でベンガラの可能性が高い。

9は壺である。口縁部先端と底部を欠いているが、全体に薄い作りで焼成は甘い。10も壺である。こちらは焼成がよく薄手にもかかわらずしっかりした仕上がりである。11は特殊な土器である。小さな摘みだししが曲線を描くように突出しているが、先端を欠いている。そのため底部とせずに把手と判断した。なお、器種は不明である



第11図 方形周濠墓実測図

表1 方形周濠墓土層一覧

方形周濠墓土層断面	
1層	黒色土層
2層	褐色土層
3層	白粘土層

が、かつて第1次調査の際22号住居から出土した異形土器（オカリナ型）に類似しているようである。¹

(5) 不整形土坑（第13図）

7号溝と大溝（10号溝）に挟まれる位置に長径6.4m、短径5mの不整形の土壙があった。輪郭もさることながら掘り込まれた面が不揃いで何度も掘り下げていった結果出来たかのような壁面をしていた。このため掘って空間を作ることが目的でなく、土自体を必要として掘ったものと判断した。この場所は白粘土層が地山層として広がっており、白粘土採取もしくは土器の製作用粘土として採取したものと考える。

このような土坑は昭和57年に実施した大道公民館建設

に伴う発掘調査でも検出しているのである。

1号溝として報告しているがその時も白粘土層が広がっているところから同様の判断をした。²

(6) 7号溝（第14図）

方形周濠墓と不整形土坑の間を南北方向に伸びる溝である。北側から南側に向かって幅が広がっており、北端では幅1.6m、南端では幅3.8mで深さ1mであった。

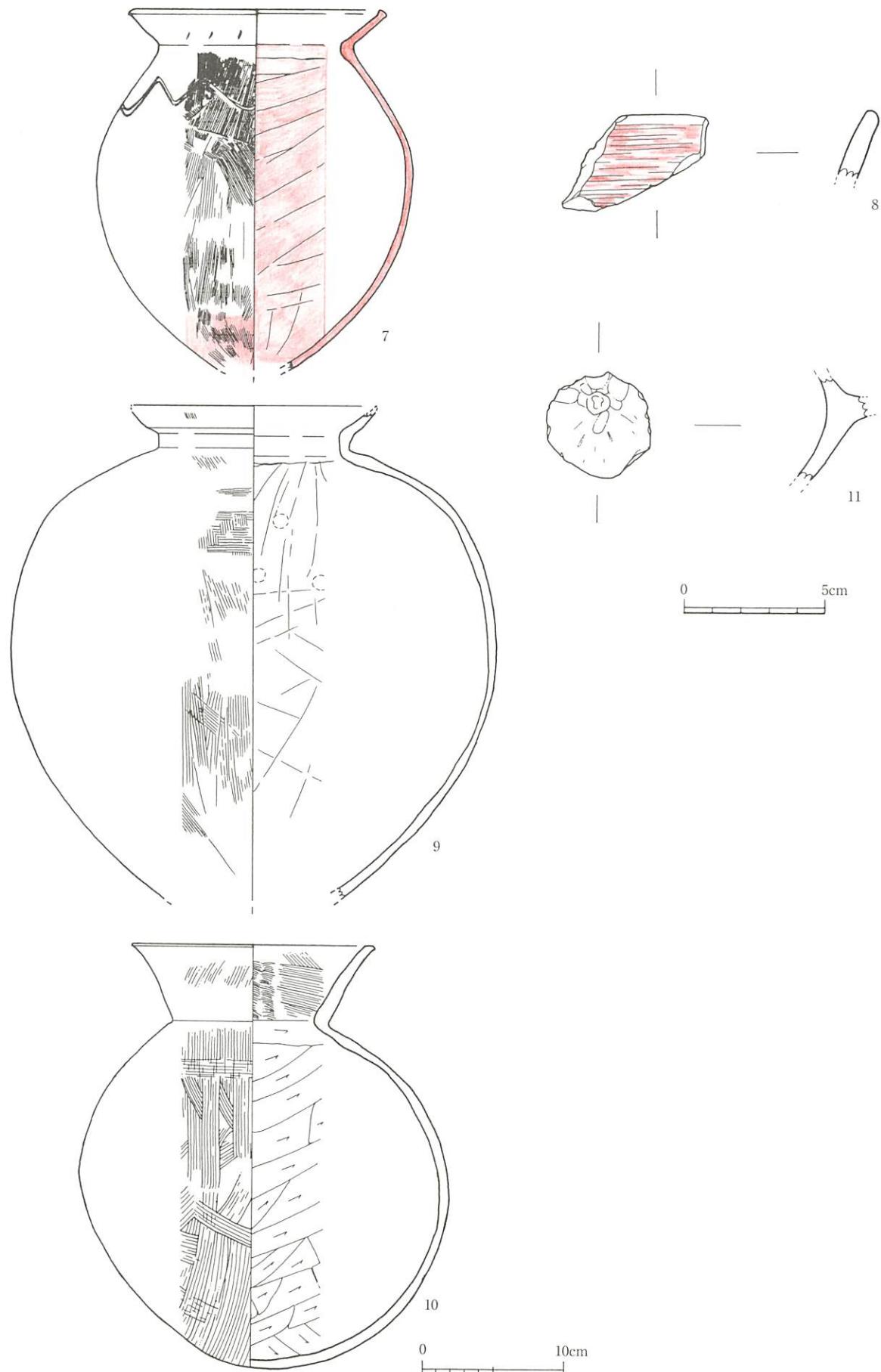
溝自体は北から南に僅かに傾斜しており、遺物は比較的少なく底の部分に散在するように破片ばかりが出土した。

溝の地山層が白粘土層で、黒色土が混入したりしていいたので発掘中もためらいながら掘り下げたものである。床面も平坦でなく凸凹が残る状況であった。

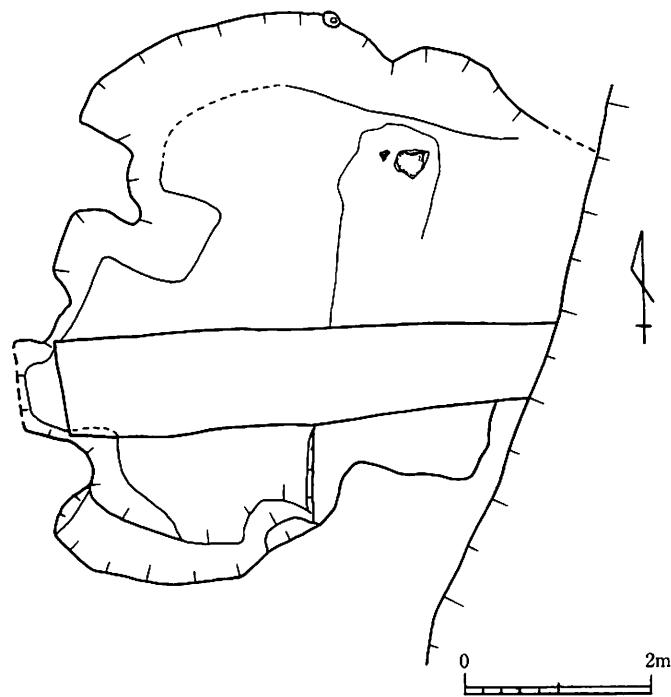
埋土の堆積状況は粘土粒を含む層と黒色土層が互層に

1 「方保田東原遺跡」山鹿市立博物館調査報告書第2集1982

2 「方保田東原遺跡2」山鹿市立博物館調査報告書第3・4集
1984



第12図 方形周濠墓出土遺物実測図



第13図 不整形土坑実測図

なって西側から流れ込むように堆積している。

遺物（第15図）

12と13は在地系甕の脚部である。胴部の器面調整は不明である。14は小型の壺である。口縁部は僅かに湾曲しつつ立ち上がっている。肩部には稜線を残している。15～17はジョッキ型土器の破片である。18は高杯で脚部は欠いている。口縁部は内側に湾曲している。

(7) 大溝（10号溝）（第16～19図）

調査区の西側で南北方向に伸びる溝である。調査当初は調査区の半分にまたがるように黒褐色土層が広がっていたため、単なる地層の傾斜によって見えるものと理解していた。しかし、調査が進むにつれて両側に黒色土層、中心に褐色土層が並ぶようになってきたところで、初めて大きな溝になるとを考えた。

この段階で、溝の南側では幅8mを超える規模であることが判明し、方保田東原遺跡を区画する機能性を持っていたのではと推察したのである。その結果、遺構の保存協議へと発展し、設計変更や入札延期などの事態に発展したのである。

あまりの大きさのため、発掘していけばいくほど溝の肩部がなだらかなため徐々に狭くなる感じであった。溝の規模は調査区の壁に残った断面図では北側で幅7.3m、

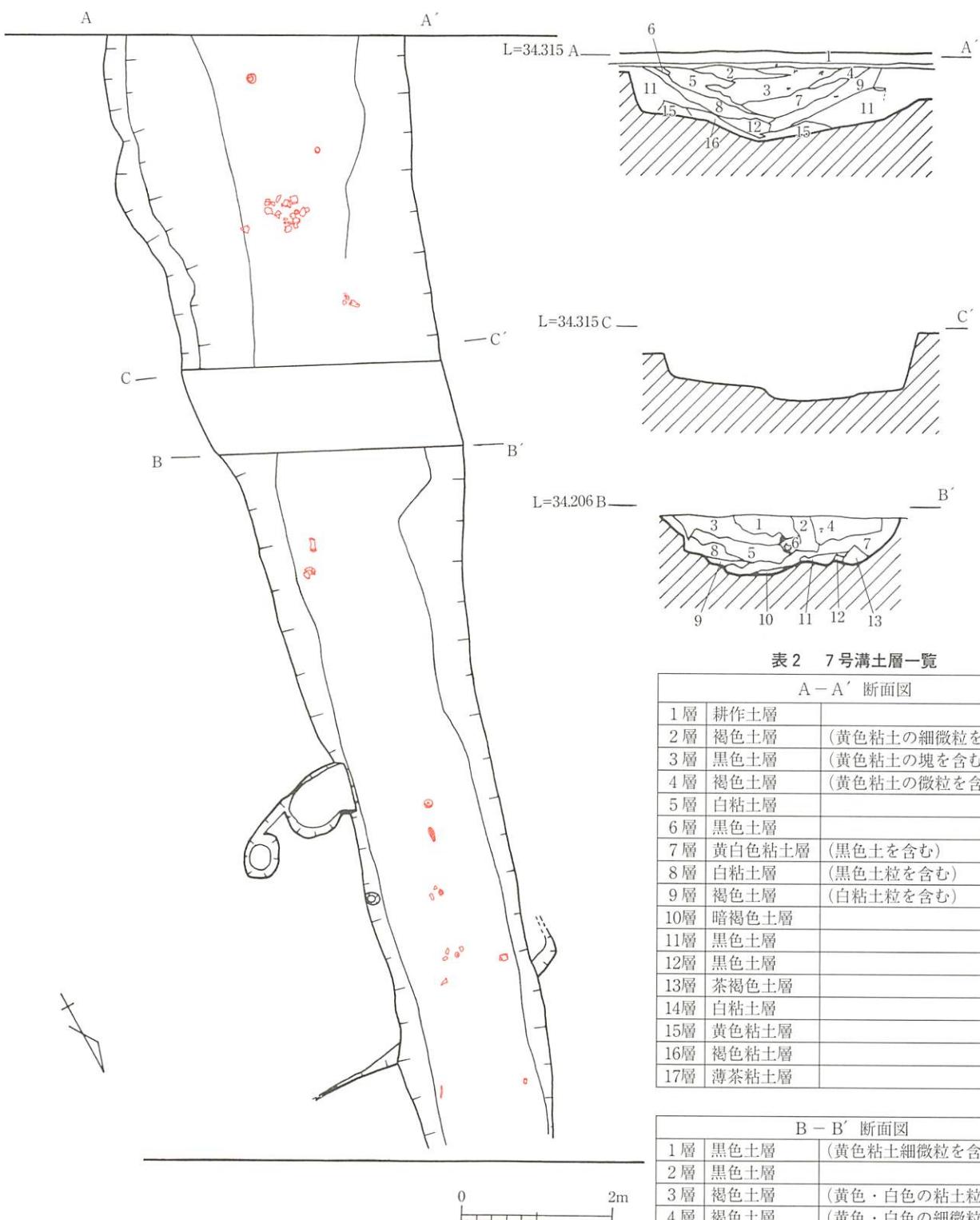
深さ1.4m、南側では幅7.8m、深さ1.6mとなり、南に行くに従って大きくなっている。床面が下がっているのも7号溝と同じ傾向である。

遺物は上層の段階から、まとまって出土しており長時間にわたり廃棄された事が窺える。特に、同じ高さでも中央部と両サイドでは堆積層が異なっており、中央部の遺物が新しく両サイドの遺物が古い時期と確認できた。このため遺物も各層に準じて紹介したい。

なお、土層断面を観察しつつ層位的に押さえながら採取した遺物については後段で層位別に紹介することとした。

① 表層の遺物（第16・20図）

遺構検出の段階で出土した遺物でこの段階では大溝の中に位置していることすら認識していなかったもので、位置のみを確認して取り上げたものである。19と20は壺である。共に口縁部は大きく開き、頸部に刺突文と櫛描き波状文を施している。底部は丸底であるが20がやや尖り気味である。21と22は鉢である。21は口縁部の一部を欠いている。22は最大径を胴部中位に有し、外面には煤の付着も見られる。23は高杯である。脚裾部は接点が確認できなかったが焼成や胎土から同一個体と判断した。

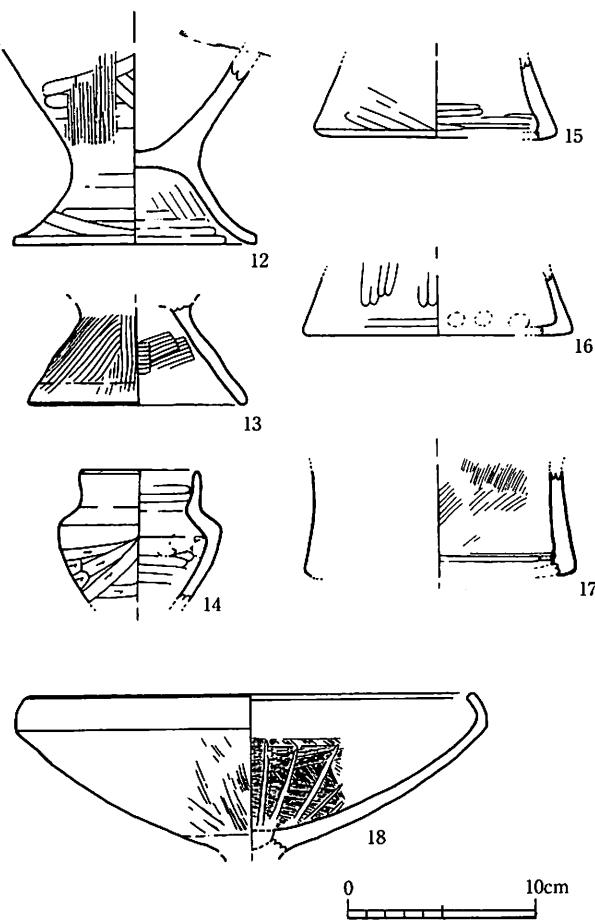


第14図 7号溝実測図

表2 7号溝土層一覧

A - A' 断面図	
1層	耕作土層
2層	褐色土層 (黄色粘土の細微粒を含む)
3層	黒色土層 (黄色粘土の塊を含む)
4層	褐色土層 (黄色粘土の微粒を含む)
5層	白粘土層
6層	黒色土層
7層	黄白色粘土層 (黒色土を含む)
8層	白粘土層 (黑色土粒を含む)
9層	褐色土層 (白粘土粒を含む)
10層	暗褐色土層
11層	黒色土層
12層	黒色土層
13層	茶褐色土層
14層	白粘土層
15層	黄色粘土層
16層	褐色粘土層
17層	薄茶粘土層

B - B' 断面図	
1層	黒色土層 (黄色粘土細微粒を含む)
2層	黒色土層
3層	褐色土層 (黄色・白色の粘土粒を含む)
4層	褐色土層 (黄色・白色の細微粒を含む)
5層	褐色土層 (黄色・白色の塊を含む)
6層	褐色土層 (濃い茶色に黄色細微粒を含む)
7層	黒色土層
8層	黒色土層
9層	褐色土層 (主に黄色粘土)
10層	褐色土層 (白茶色)
11層	焦げ茶色土層
12層	黒色土層
13層	茶黄色土層
14層	白粘土層



第15図 7号溝出土遺物実測図

24は須恵器の高台付き碗である。完形の資料である。口縁部から底部には4~5本の痕跡を残している。あたかも焼成の段階で糞など植物繊維で他の須恵器に密着を防止したものであるかのような形状であった。25は磨製石斧である。玄武岩系の石材で刃部と基部はそれぞれに剥離している。

② 上層の遺物（第17・21~26図）

26~40までは甕である。26~33は在地系甕で26には脚台を有しているが、32のような丸底になるものも多い。34~40は外来系甕で庄内系甕と布留系甕が認められる。39の底部近くには赤色顔料の付着が認められる。

41~64までは壺である。41~43は口縁部が反り気味に開き、41古式土師の様相を呈しており薄手である。44は二重口縁の壺で、古墳時代の近畿地方に見られる特色を有している。内面には粘土接合の痕跡が残り製作の方法を垣間見ることが出来る。45~47は二重口縁壺でも口縁

部の立ち上がりが短いタイプである。46には7本単位の櫛描きによる沈線が巡っている。47は肩部に幅2.8cmに10本単位の櫛描きによる稚拙な波状文を施している。

48は口縁部が直立する二重口縁壺の破片である。外面には5本単位の櫛描きによる廉状文と幅1.8cmに9本単位の波状文と波の間に竹管文を施している。口唇部には刻目文を施している。49は在地系の壺の破片である。白川流域に遺跡で多く見られ方保田東原遺跡でも時折見かけることが出来る。口縁部は三角形に立ち上がり、胴部は長胴で粗い叩き目を施している。50は壺の破片であるが、肩部に2本の線刻が見られる。51は口縁部が大きく開き、頸部に刺突文を施している。52は折り返しながら三角形を作っている壺の口縁部である。53は口縁部が短く、反り気味に開いて口唇部に刻目を施し、頸部の凸帯にも施している。54~57は小型の壺である。54は口縁部が短く、55は底部近くに煤の付着を見る事ができる。57は口縁部が直立するものである。57は口縁部のみを欠いている。58は口縁部が直立し長胴には粗い叩き目を施している。59~61は口縁部が短く鉢に近い形である。60は外面に煤の付着が見られる。62~65は小型丸底壺である。64は口縁部が直立している。

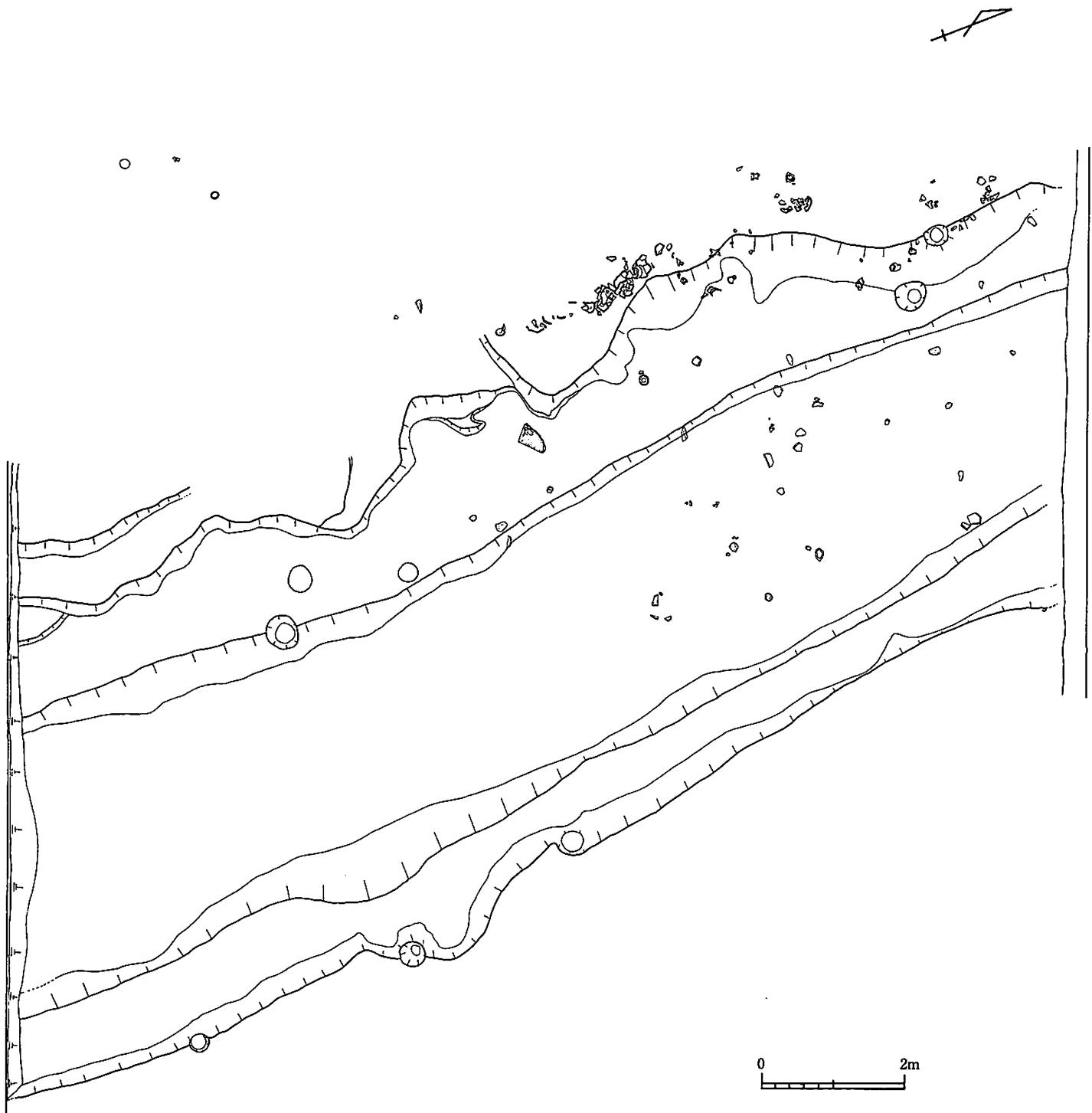
65~76は鉢である。65と66は口縁部を有しており、65は外面に粗い叩き目を施している。67~73は口縁部が大きく開く鉢である。

74~79は脚付き鉢である。74は小型の脚付き鉢である。75は鉢の脚部である。裾部に透かし穴を配しているが、貫通していない。76も小型鉢の脚部である。

77~84は高杯である。77は小型の高杯である。78は脚部のみである。79は北九州の特色を残している。81は杯部には使用の際に生じたと思われる器面の剥離が著しい。82~83は古式土師器の様相である。

84~87は器台である。84と85には粗い叩き目が施されている。

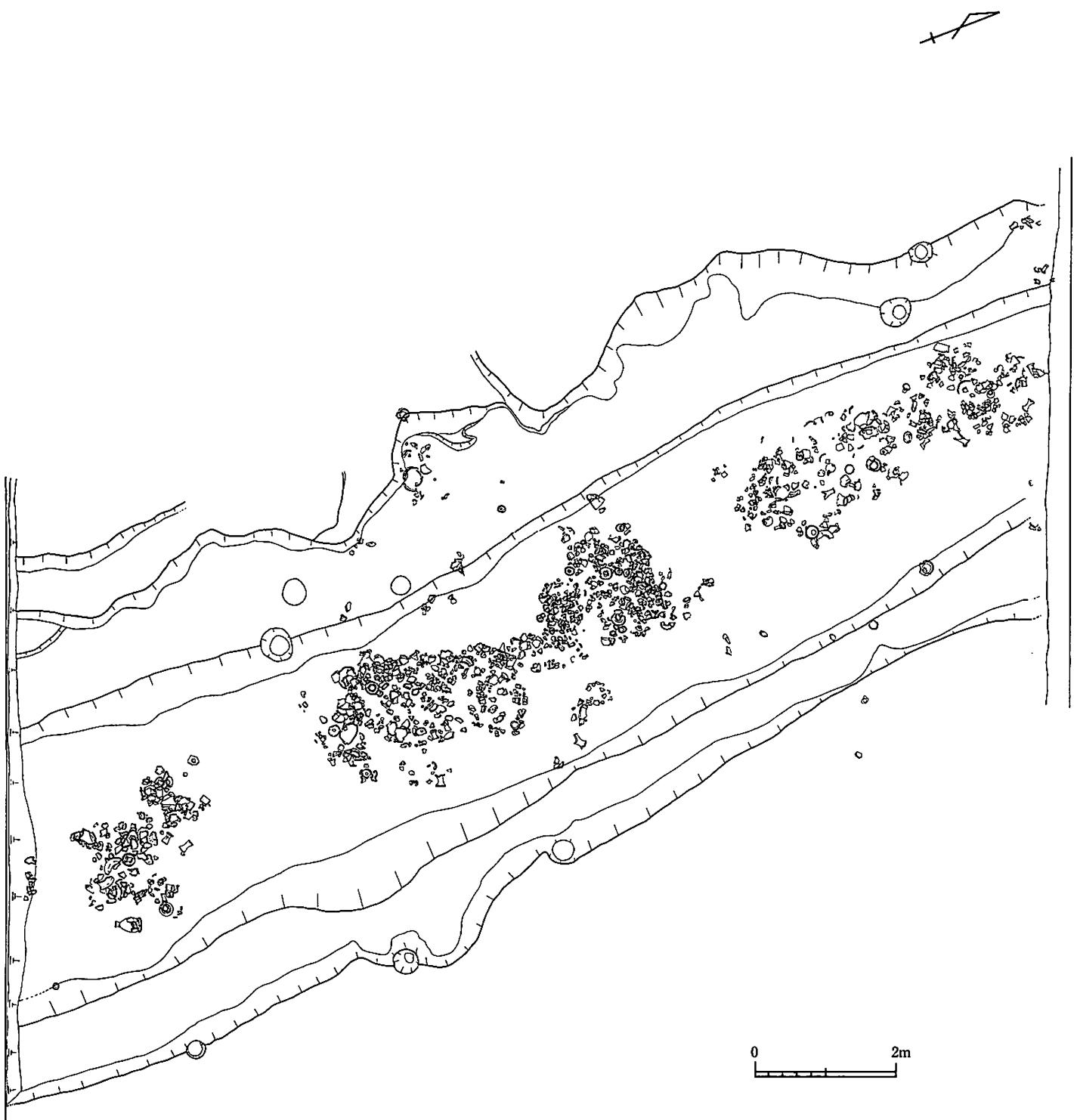
88~94は特殊な遺物である。88は壺の胴部で、線刻が施されている。89は底部近くに凸帯を巡らす鉢である。これまで、方保田東原遺跡では数点破片が出土しているが完形品は出土していない。90と91は土製スプーンの柄である。92は器種不明であるが、突起した部分を残している。93は土錐で重さ95.5gである。94は土製の紡錘車で40gである。95は両面に赤色顔料が付着した鉢である。



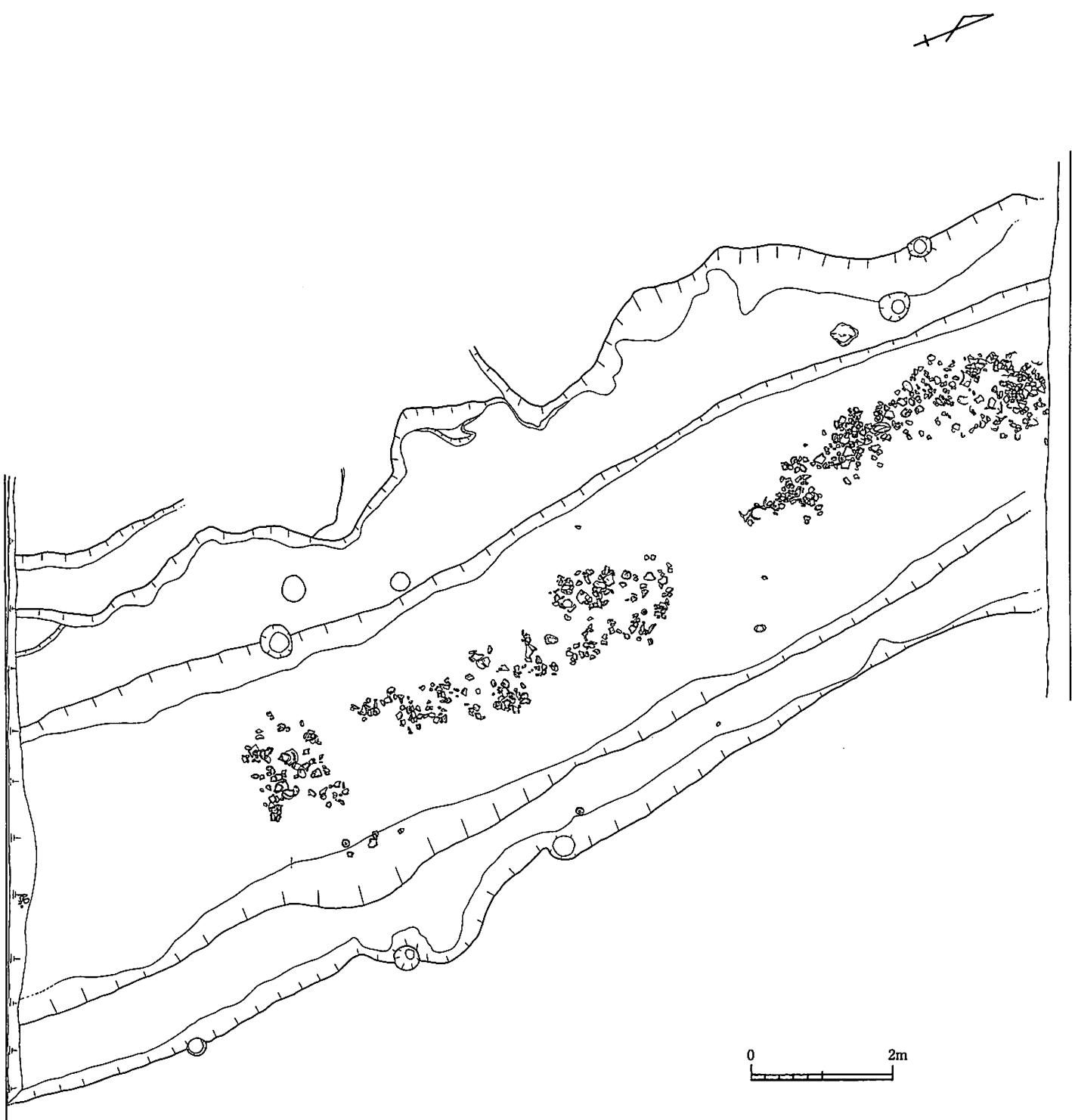
第16図 10号溝（大溝）表層実測図



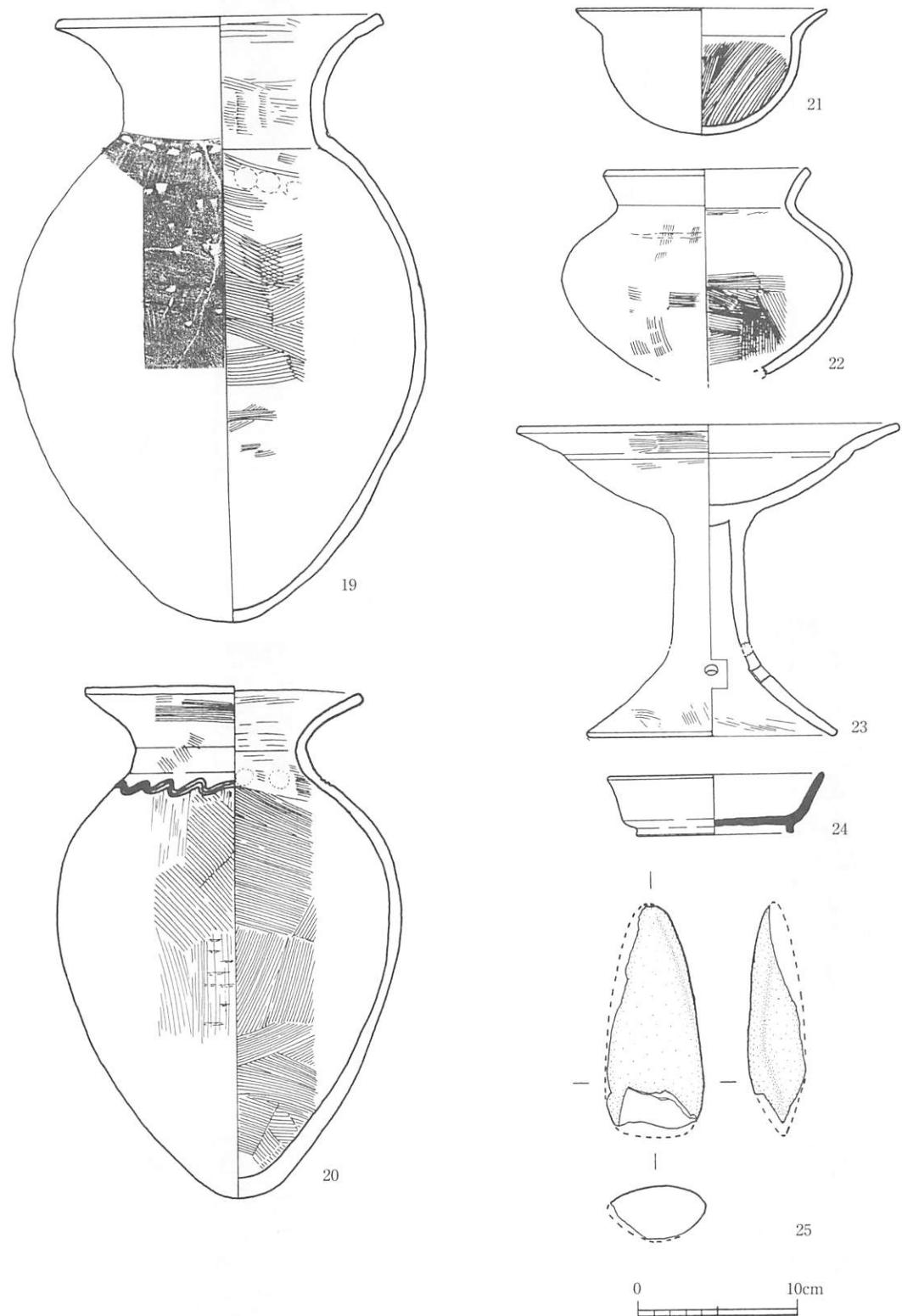
第17図 10号溝上層実測図



第18図 10号溝中層実測図



第19図 10号溝下層実測図

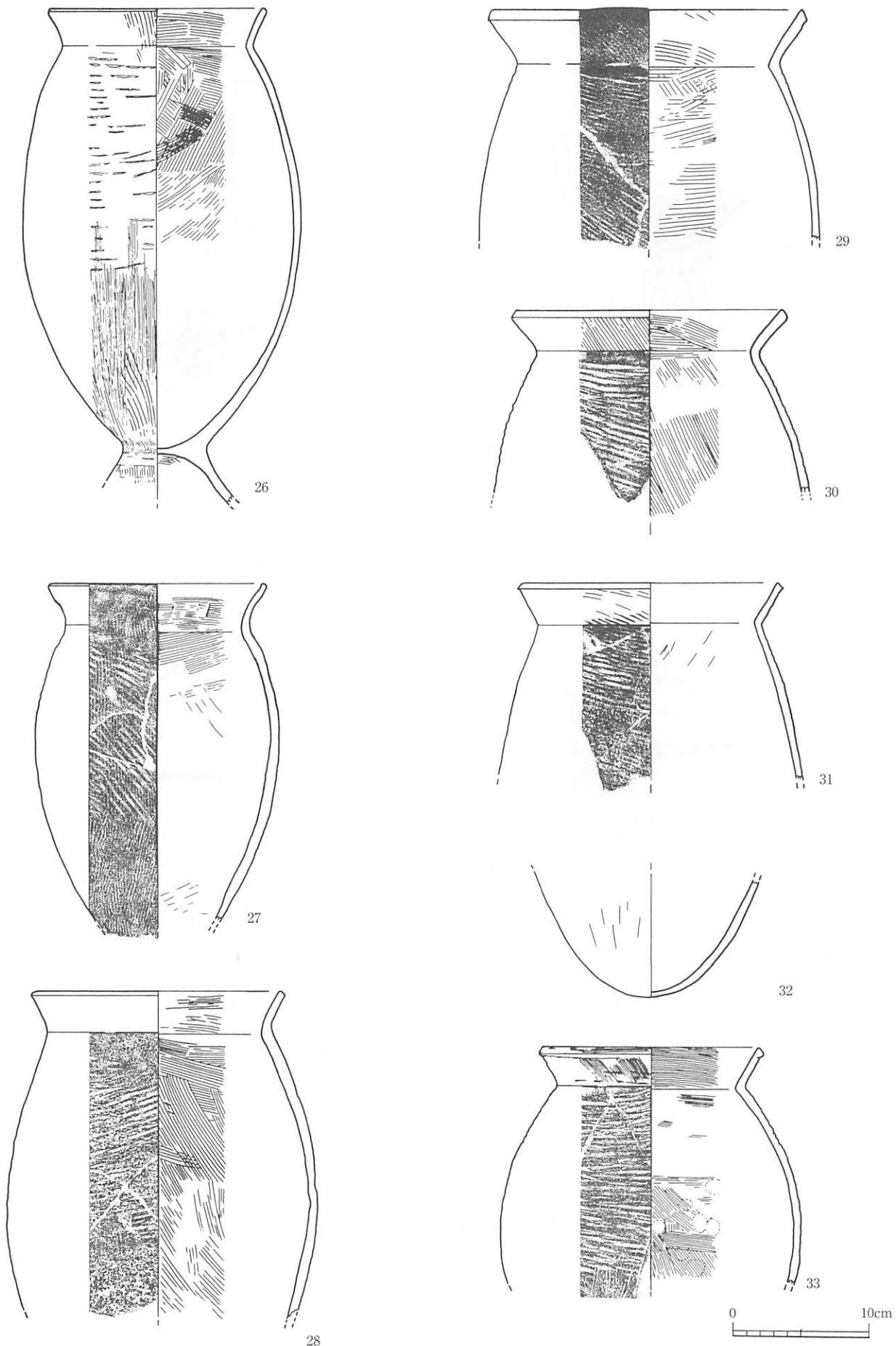


第20図 10号溝表層出土遺物実測図

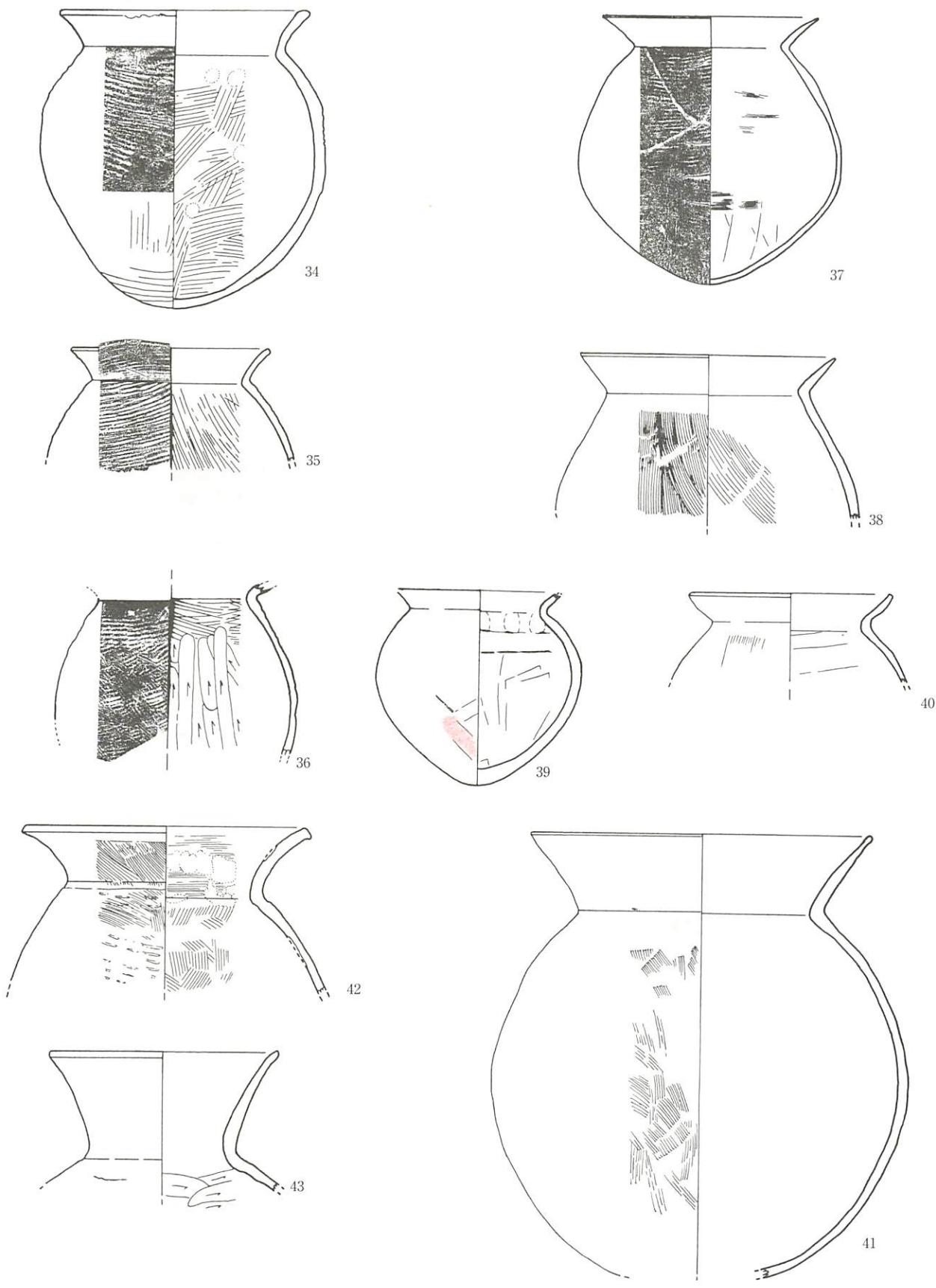
96と97は鉄器で、鎌の茎（なかご）と手鎌である。

98～102は石器で、98はL字状石杵である。輝石安山岩の自然礫でL字の形をしたものを選んで赤色顔料を精

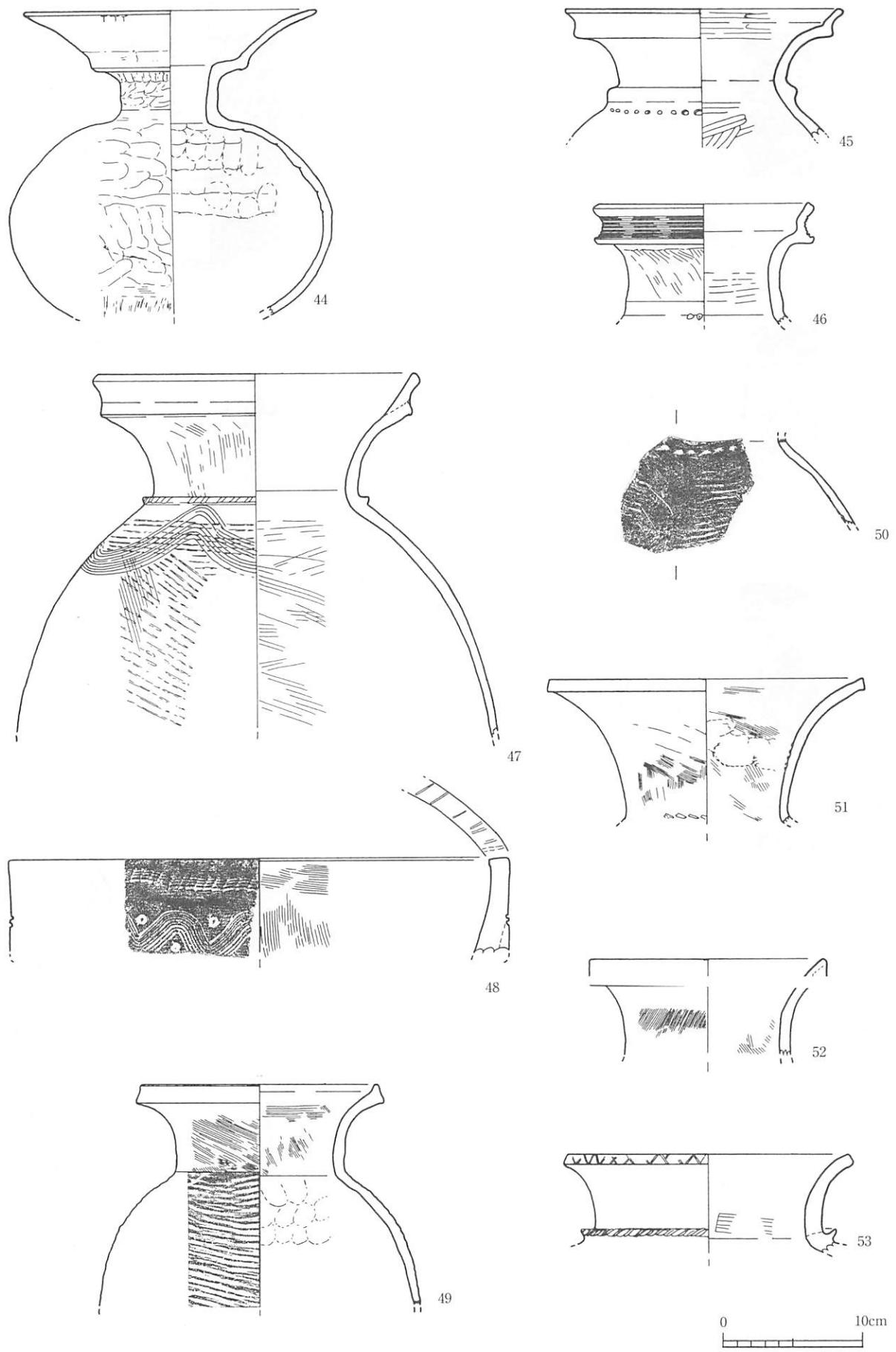
製する際の使用したものである。研磨面は2面あり、ほんの僅か鮮明な赤の顔料が見られ、鮮やかな赤であるところから朱であろう。高さ18cm、重さは2.58kgである。



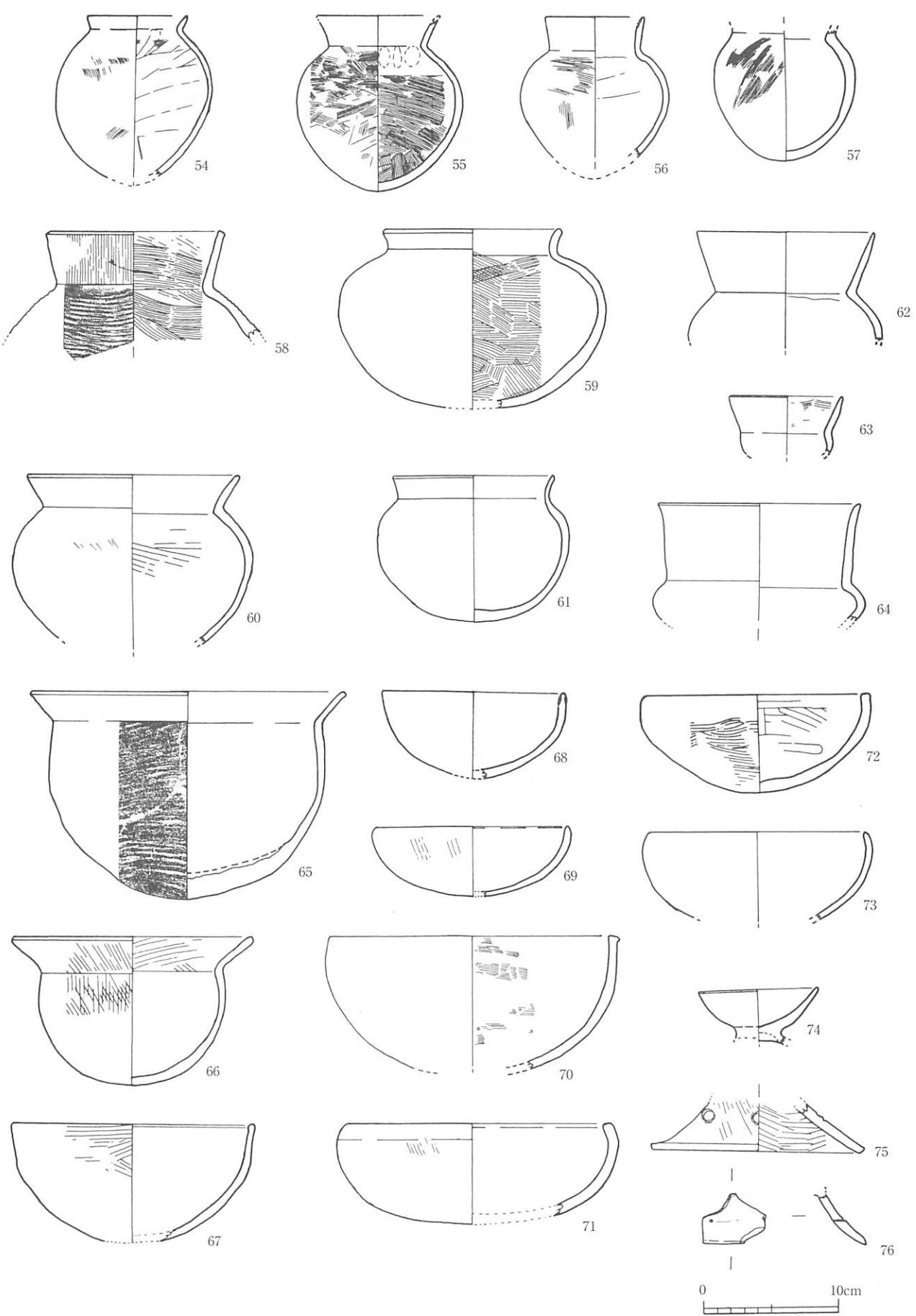
第21図 10号溝上層出土遺物実測図①



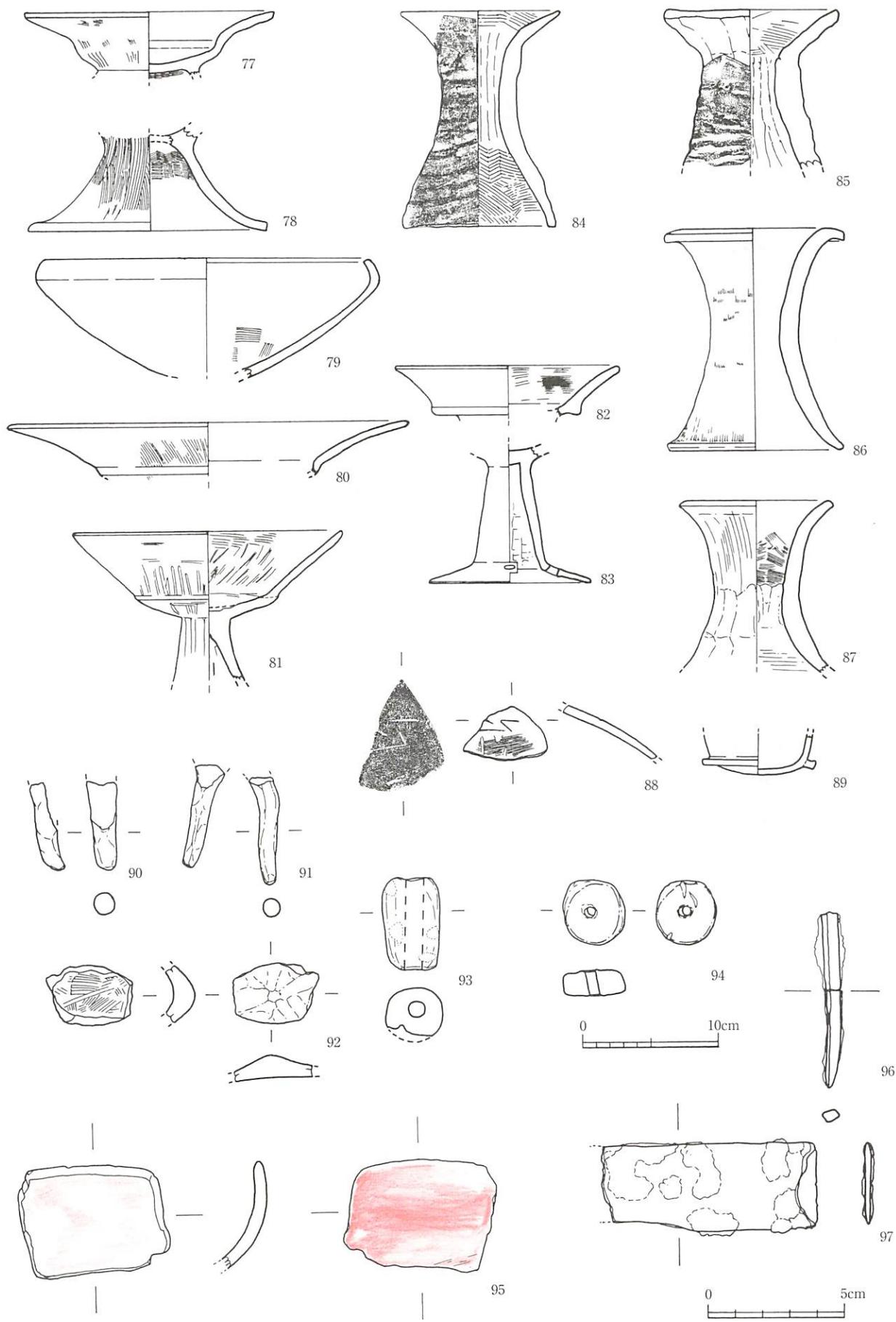
第22図 10号溝上層出土遺物実測図②



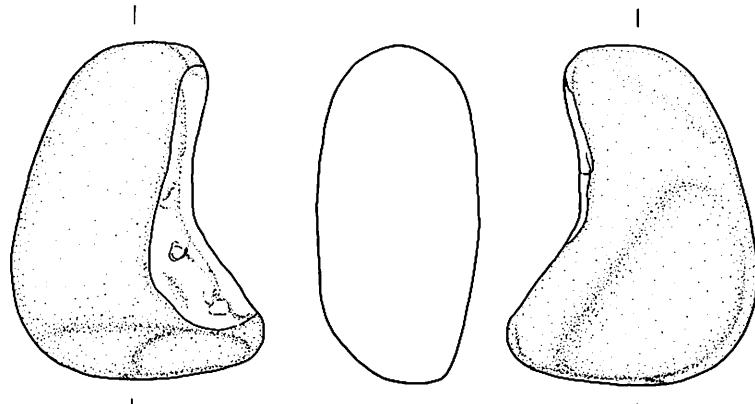
第23図 10号溝上層出土遺物実測図③



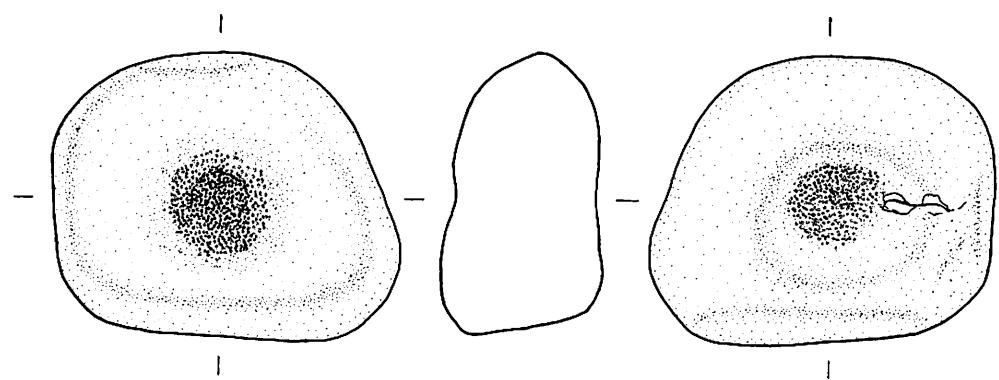
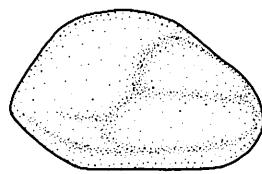
第24図 10号溝上層出土遺物実測図④



第25図 10号溝上層出土遺物実測図⑤



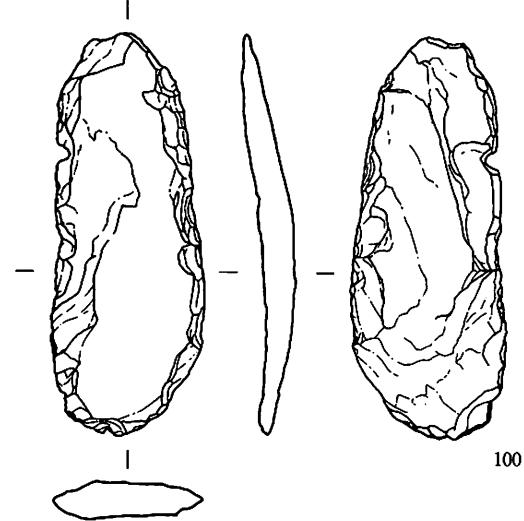
98



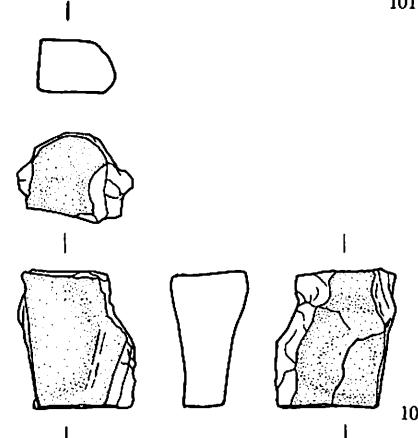
99



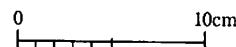
101



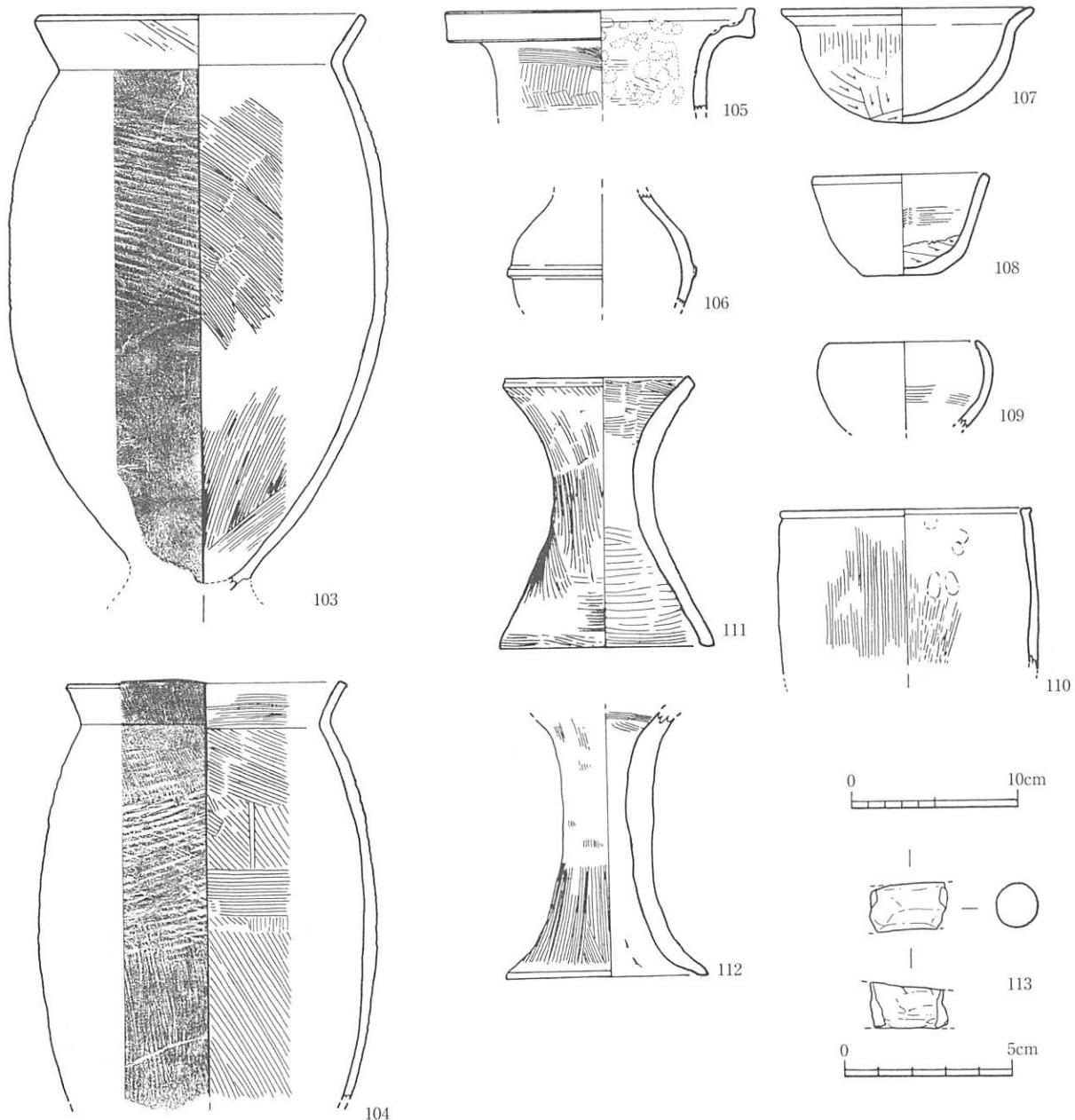
100



102



第26図 10号溝上層出土遺物実測図⑥



第27図 10号溝上層両端出土遺物実測図

99は輝石安山岩製の自然礫を利用した凹石である。表裏の中央に2カ所敲打痕を残している。重さは3.54kgである。

100は変成岩製の打製石斧である。僅かに反っており外面の摩滅が顕著である。412gであった。101と102は砥石である。101は砂岩製で周辺を欠いている。研磨面は水平でなめらかな仕上げ砥である。

102も砂岩製で両端を欠いている。研磨面は曲面を作っており、使用頻度の高さを示している。

③ 上層両端の遺物（第27図）

上層でも堆積の状況から両端部は列をなすように遺物が出土し、明らかに下の層の遺物と同時期であることから区別して掲載した。

103と104は在地系甕である。脚台を有し器面には叩き目を施している。105と106は壺である。105は口縁部の内面には器面剥離が多く、使用痕として生じたものであろう。106は小型の壺の破片で、胴部に凸帯を巡らしている。107～110は鉢である。110はくびれのない胴部が

特徴である。111と112は器台で、113は土製品であるが両端を欠いているためスプーンか勾玉か断定できない。

④ 中層の遺物（第18・28～33図）

114～127は在地系の甕である。114～123は在地系でも脚台を有し、器面をハケ目で仕上げており、124～127は器面を叩き目で仕上げている。これらは底部を欠いているため、丸底か脚台を有するか断定できない。時間的にはハケ目仕上げの甕が古く、叩き目仕上げの甕が新しいことは過去の調査で明らかになっている。³

128～142は壺である。128は比較的大型の長胴壺で器壁は薄い。129は二重口縁であるが形状はあまい作りである。133は大型壺の口縁部片で、口唇部には刻み目を施している。134も口縁部のみであるが、内面に3カ所黒く変色した部分が見られる。135は白川流域の遺跡から多く出土する壺である。136は胴部以下を欠いている壺である。口唇部に刻み目を配し、頸部に凸帯を巡らしている。

137は小型の壺の口縁部である。内面に2個ずつ6カ所に円形貼文を配している。138～140は口縁部内面の器面剥離が著しく、使用によって生じたものであろう。142の頸部には櫛の先端による刺突文が施されている。

143から156は鉢である。143は大型の鉢で底部を欠いている。頸部には凸帯を巡らし、刻み目を施している。144と145は口縁部が立ち上がる鉢で、146と147は甕に近い形の鉢である。148と149は脚付き鉢である。

150～155は最大径を口縁部に有する鉢で、156は片口の破片である。とくに153は手捏土器である。

157～159はジョッキ形土器の破片である。160～165は高杯である。164は脚部の上に凸帯を巡らしており古い様相を示している。

166～176は器台である。とくに176は沓形器台である。

177はミニチュア土器である。178は把手で、鉢の横に付くもので、先端がソケット状に差し込むように作られている。なお同様の把手は過去の調査でも出土している。⁴

179はジョッキ形土器の把手である。180は砂岩製の砥石で両端を欠いているが、4面に研磨面を残している。

⑤ 下層の遺物（第19・34～35図）

181～188は在地系の甕である。181と182は別個体であるが、器面をハケ目で仕上げ、脚台を有する甕であり、在地系甕では古い形式のものである。183と185はあたかも叩き目の様な粗いハケ目であった。184には僅かに叩き目を残しているが、ここでは基本的にはハケ目調整の脚台付甕の時期に主体があるようである。

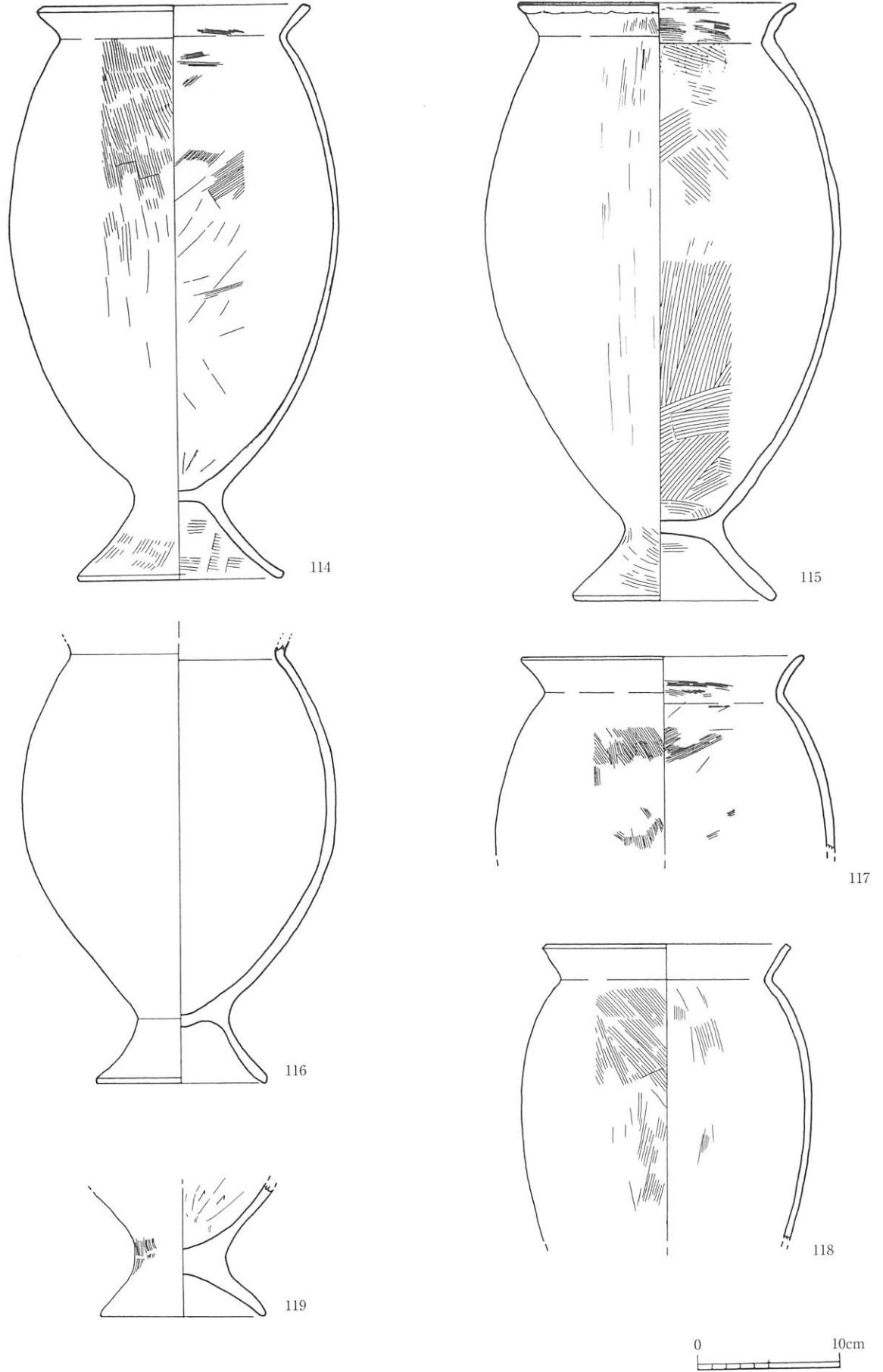
189～193は壺である。190は口縁部が立ち上がるもので、口唇部は使用による剥離が見られ、胎土内面の色彩が灰色に口縁部を巡っている。191と192は口縁部が大きく開く壺で、191は口唇部に刻み目と頸部に凸帯を配している。192は頸部に刺突文を配している。

193は口縁部を欠く壺で肩部には2個の円形貼文を配しているが何カ所になるか現状では不明で、少なくとも3個は確認できる。

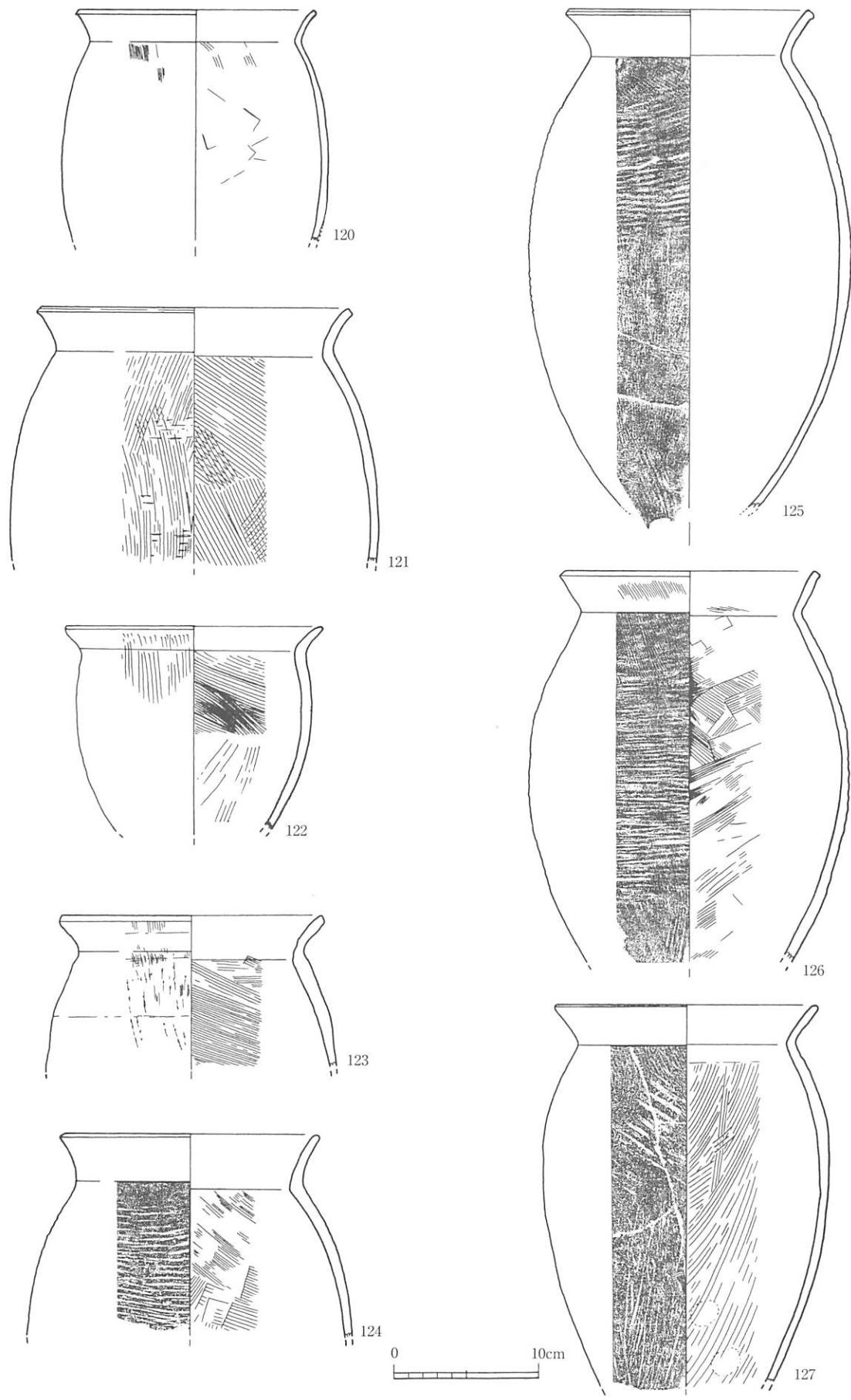
195と196は鉢の破片で、195は片口である。197～199は高杯である。口縁部が短いのが特徴である。200～203は器台で、202と203は粗い作りで叩き目も大きい。204は粗い叩き目の破片である。205～207は鉄器である。205と206は手鎌、207は鎌である。

3 「方保田東原遺跡3」山鹿市立博物館調査報告書第7集1987

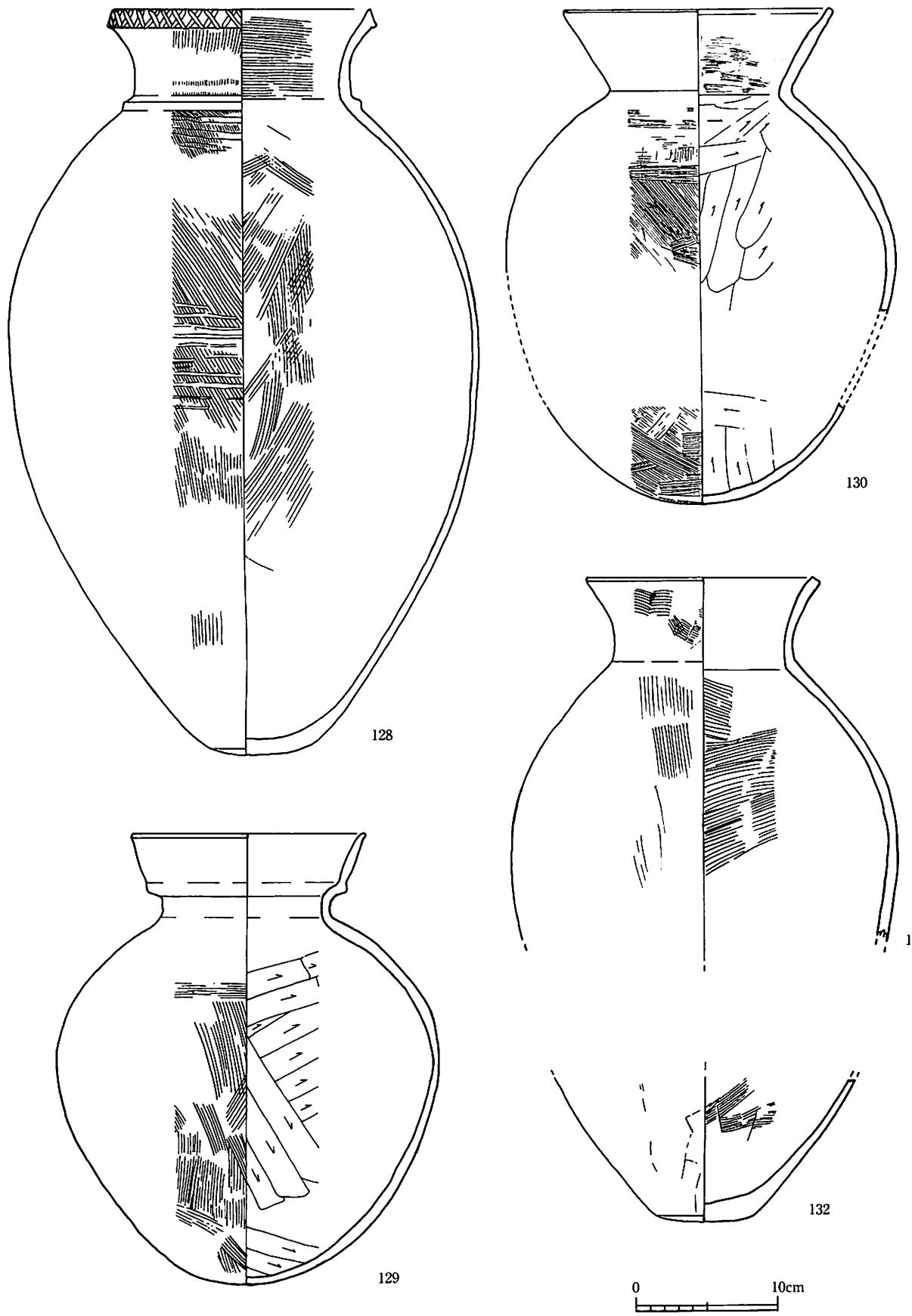
4 「方保田東原遺跡」山鹿市立博物館調査報告書第2集1982



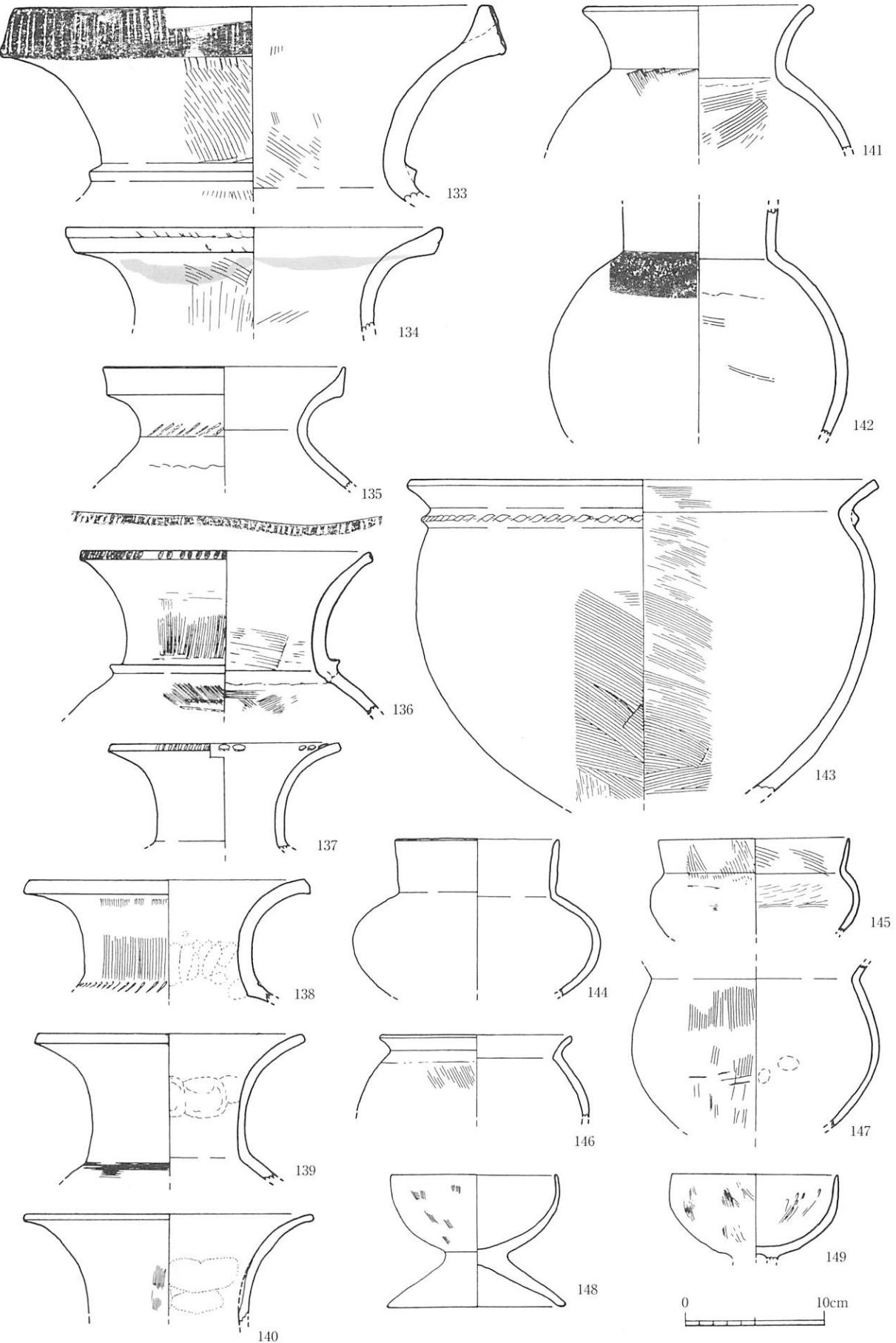
第28図 10号溝中層出土遺物実測図①



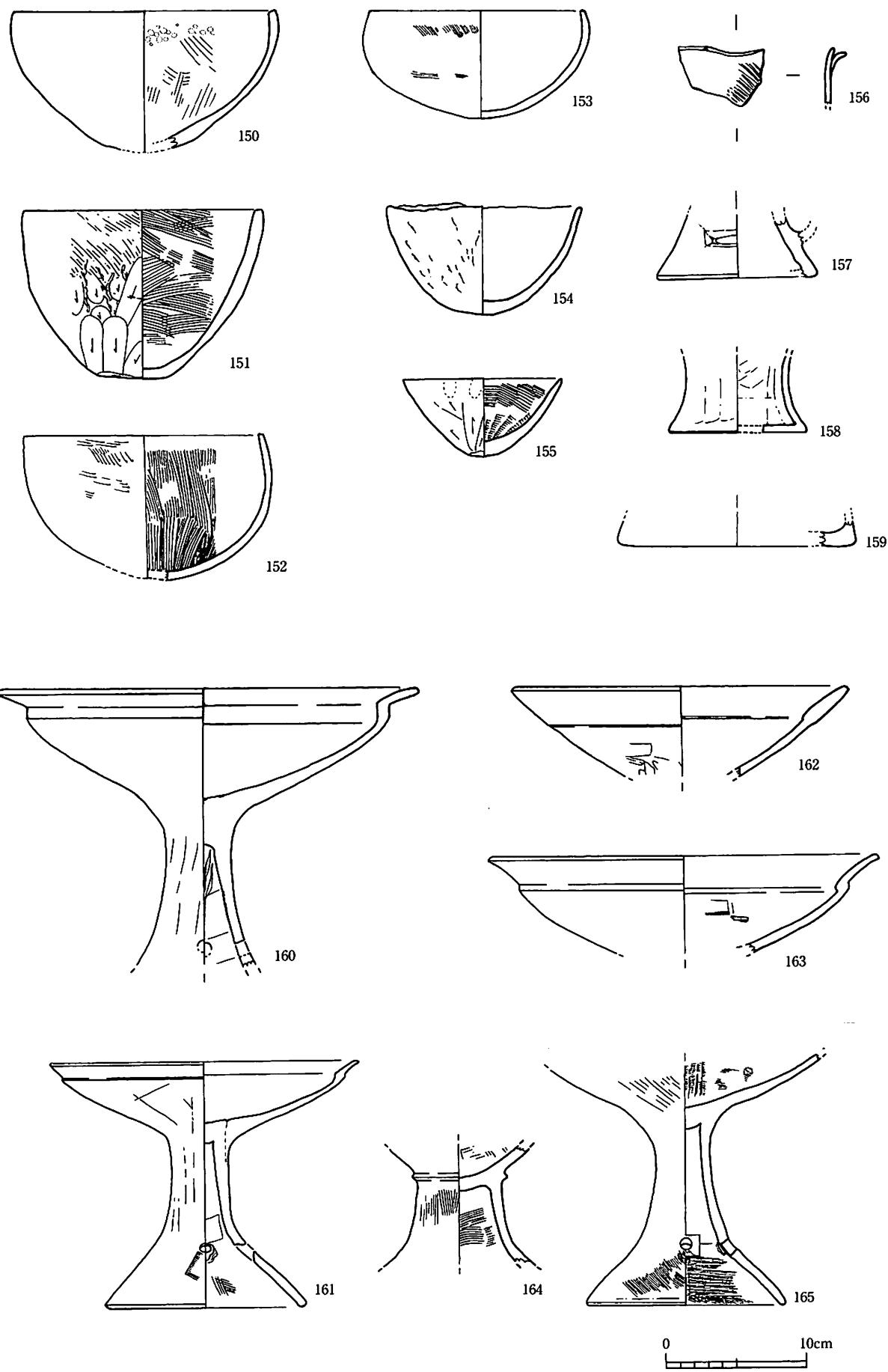
第29図 10号溝中層出土遺物実測図(②)



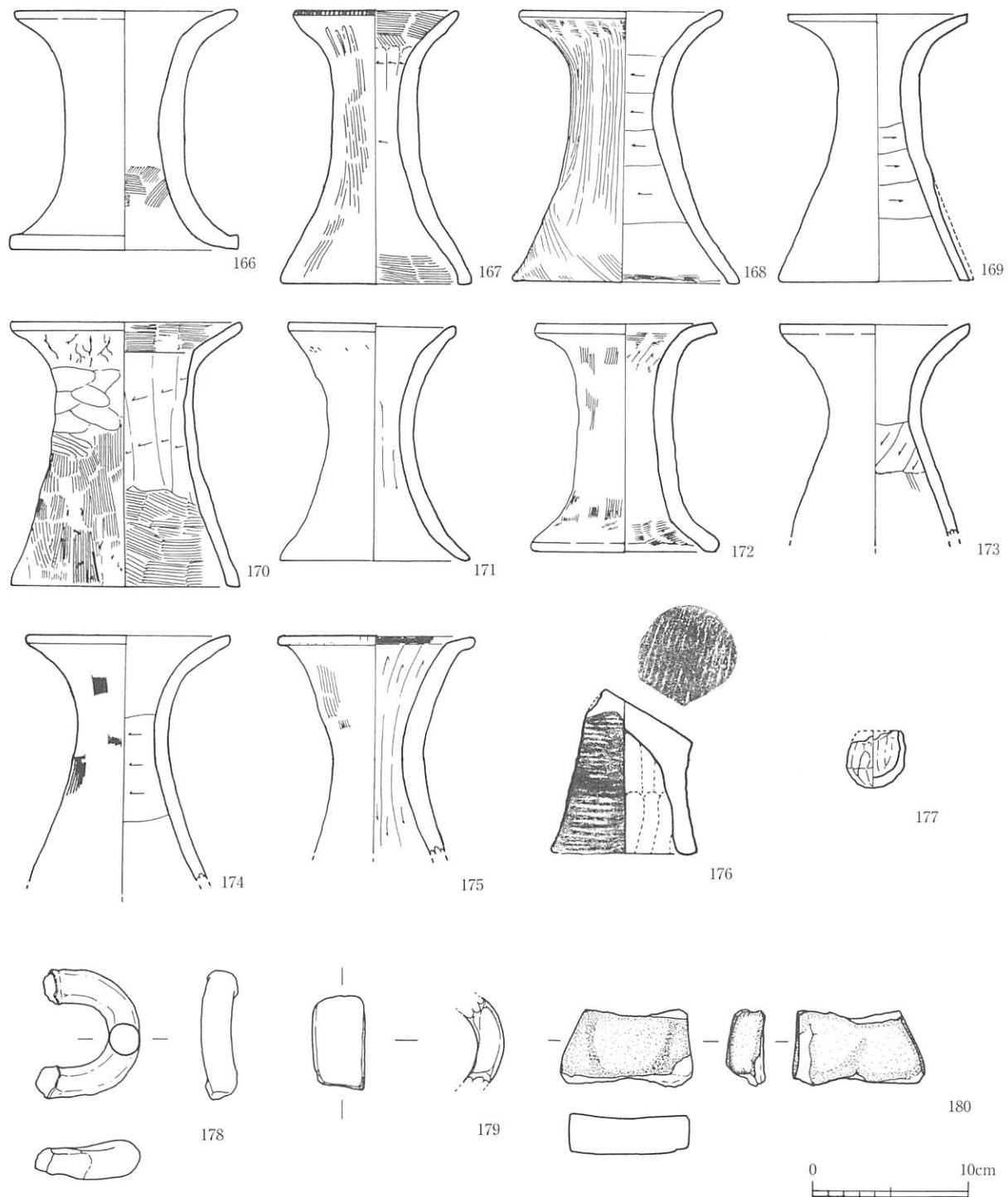
第30図 10号溝中層出土遺物実測図③



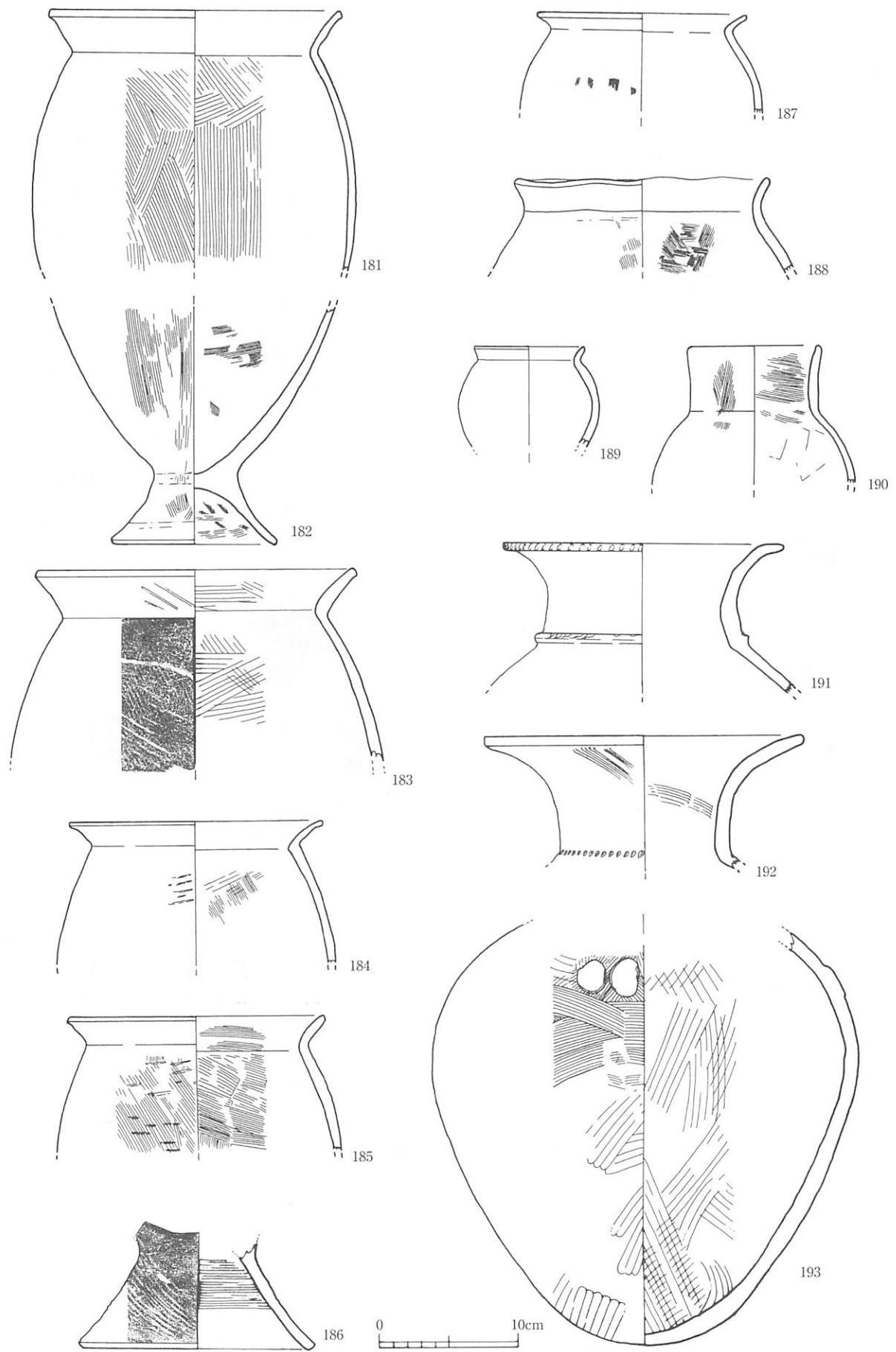
第31図 10号溝中層出土遺物実測図④



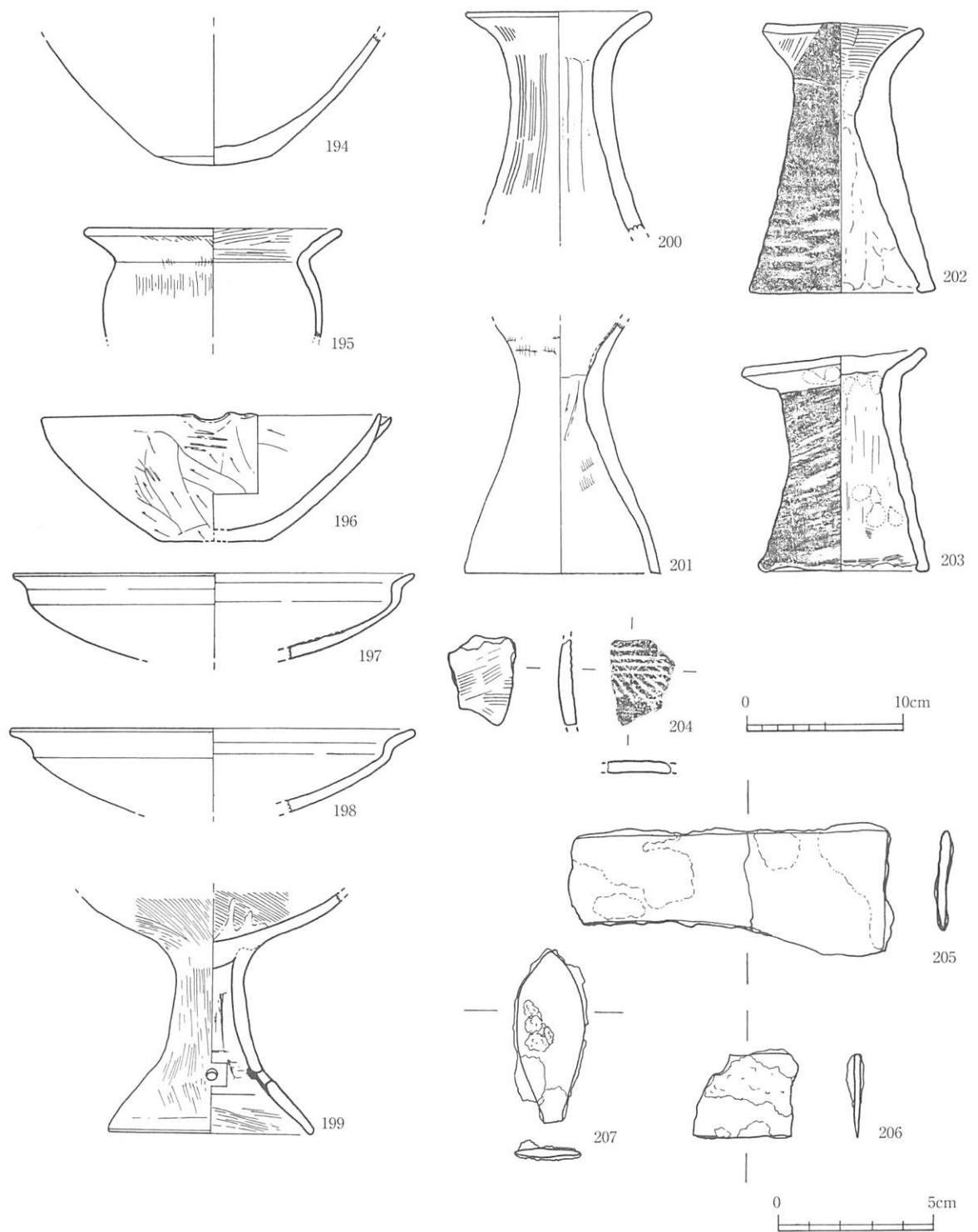
第32図 10号溝中層出土遺物実測図⑤



第33図 10号溝中層出土遺物実測図(6)



第34図 10号溝下層出土遺物実測図①



第35図 10号溝下層出土遺物実測図②

⑥ 第1層の遺物（第37図）

断面図（第36図）のA-A断面4層から出土した遺物である。208と209は在地系甕の脚部である。共に火を受けたため紅色に変色している。

210と211は壺である。210は白川流域に見られる壺で49と類似している。211は口縁部の破片であるが、内面に竹管文で施文しており現状では6個を確認できる。212はジョッキ形土器の破片である。器壁が厚く出来は良くない。

213～217と221、222は特殊な遺物である。213は壺の破片である。器面に鉤状に貼り付け文を施しており、227と類似している。214は柱状の粘土で支脚である。215と222はミニチュア土器の鉢である。216は焼成粘土塊である。217は土製勾玉の破片である。221は壺の口縁部であるが、外面に赤色顔料の付着が認められる。218は鋭利な刃物で刻み目を入れている蝶である。新しい剥離も見られるが古い傷が多く見られる。219と220は須恵器である。

⑦ 第2層の遺物（第38図）

断面図（第34図）のA-A断面の5層から出土した遺物である。

223と224は在地系甕の破片で、器面は共に叩き目である。底部を欠いているため丸底か脚台かは不明。225～227は壺である。225は三角の口縁部で頸部には凸帯と下に刺突文を配している。226は口縁部内面に使用の際の器面剥離が見られる。227は肩部の破片で、213に類似した鉤状の貼り付け文が施されている。おそらく全体では4～5個を配していたものと思われる。228と229は高杯の破片で、229は特殊な形状である。

230はジョッキ形土器の破片である。図化出来ていないが把手が剥離している。231と232は器台として取り扱った。

233は砥石である。砂岩製で3面の研磨が著しい。熱のため表面が赤化している。234～236は赤色顔料が付着した土器片である。235はくすんだ赤でベンガラの可能性が高いが、他の2点は鮮やかな赤で朱の可能性が高い。

⑧ 第3層の遺物（第39～44図）

断面図（第36図）のA-A断面の第6層から出土した

遺物である。この層がもっとも遺物が集中して出土している。

237～242は甕である。237には口縁部の下に凸帯を巡らしている。238は在地系の甕で表面に叩き目を残している。239は甕の肩部の破片であるが、3本の引っ搔き傷が施されている。あたかも猫の爪のようである。

243～263は壺である。243は小型の壺で口縁部は欠いており、残りも縫に半截の状態である。244は大型の壺で口縁部は短い、245は口縁部の破片で口唇部に格子状の刻み目を施し、頸部には凸帯を巡らしている。246は頸部から胴部にかけての破片で、頸部には凸帯を巡らし、刻み目を配している。247も同様の破片で、頸部には5条の沈線を巡らしている。248は口縁部が立ち上がり、頸部に刻み目を施している。249は口唇部に刻み目を施している。251は破片であるが、周囲を被熱によって黒く変色している。254は口縁部内面の器面剥離が著しい。255は大型壺の口縁部片で、櫛描き文が施されている。257も大型壺の破片で、胴部に大きな円形貼り付け文2個を有している。258と259は櫛描き文、260は239と類似した3条の線刻である。262と263は底部に残された十文字の線刻である。これは以前の調査でも同様のものが出土している。⁵

264～275は鉢である。264～267には口縁部が広がっており、268～271は胴部から口縁部にかけて大きく口を開けるようになっていた。272～275は脚を有している。265は古式土師器で、270は片口の破片である。

276は手捏の鉢である。277～281はジョッキ形土器の破片である。282～293は高杯である。中でも285は古い形式を示している。

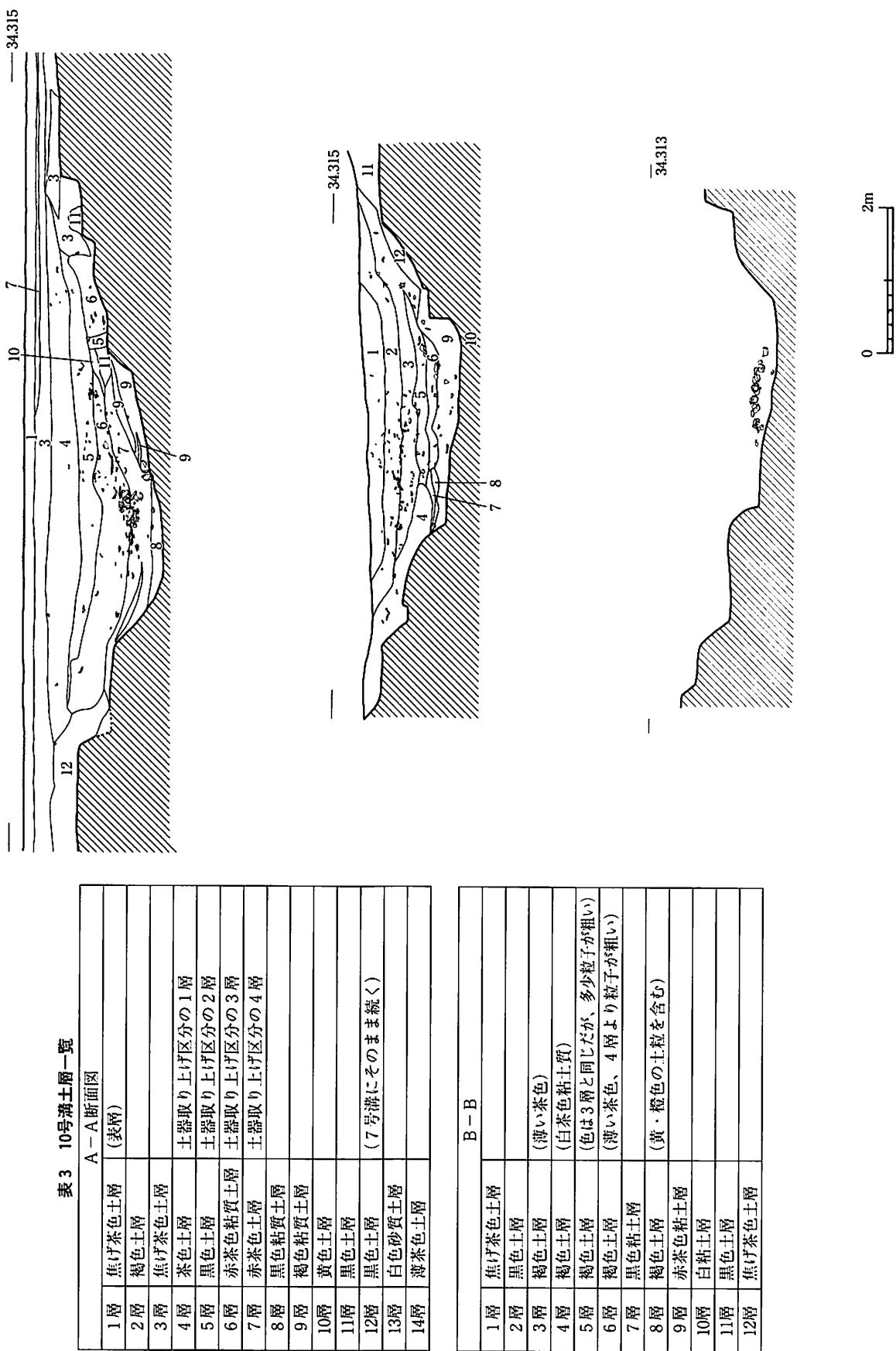
294～301は器台である。全て在地系のものである。

302～316は特殊な遺物である。315は把手であるが、中央に穴を開けており、環状の様に細工している。316は土製スプーンの破片である。317は土製支脚である。中央に穴を穿っているので土錘のようであるが大きすぎるので支脚と判断した。

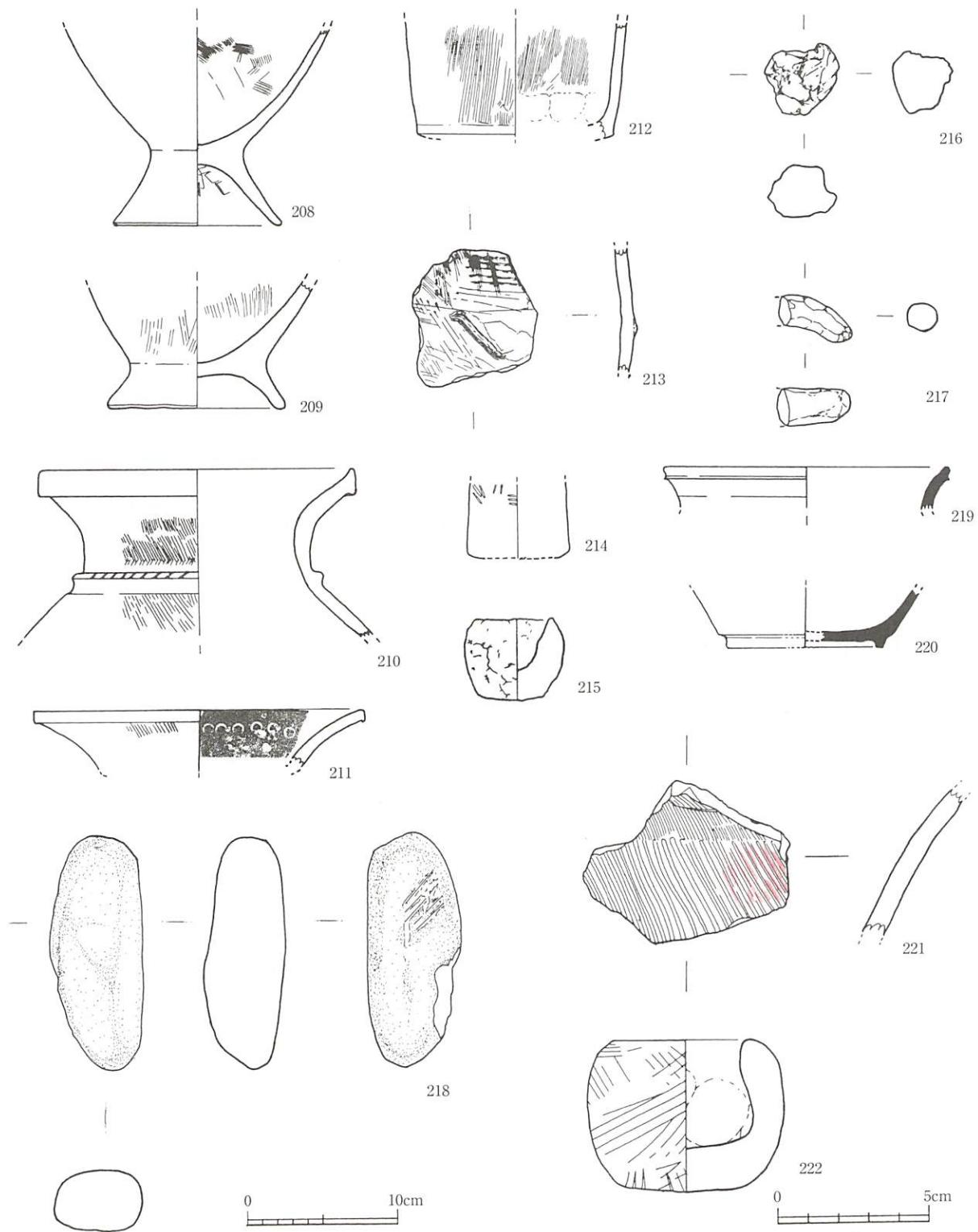
319～321は石器で、319の磨り石には赤色顔料の付着が僅かに確認できた。320と321は砥石である。

322～325は小型の脚付き鉢である。

5 中村幸史郎「へら記号を持った弥生式土器の存在」『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書第2集1982



第36図 10号溝土層断面実測図

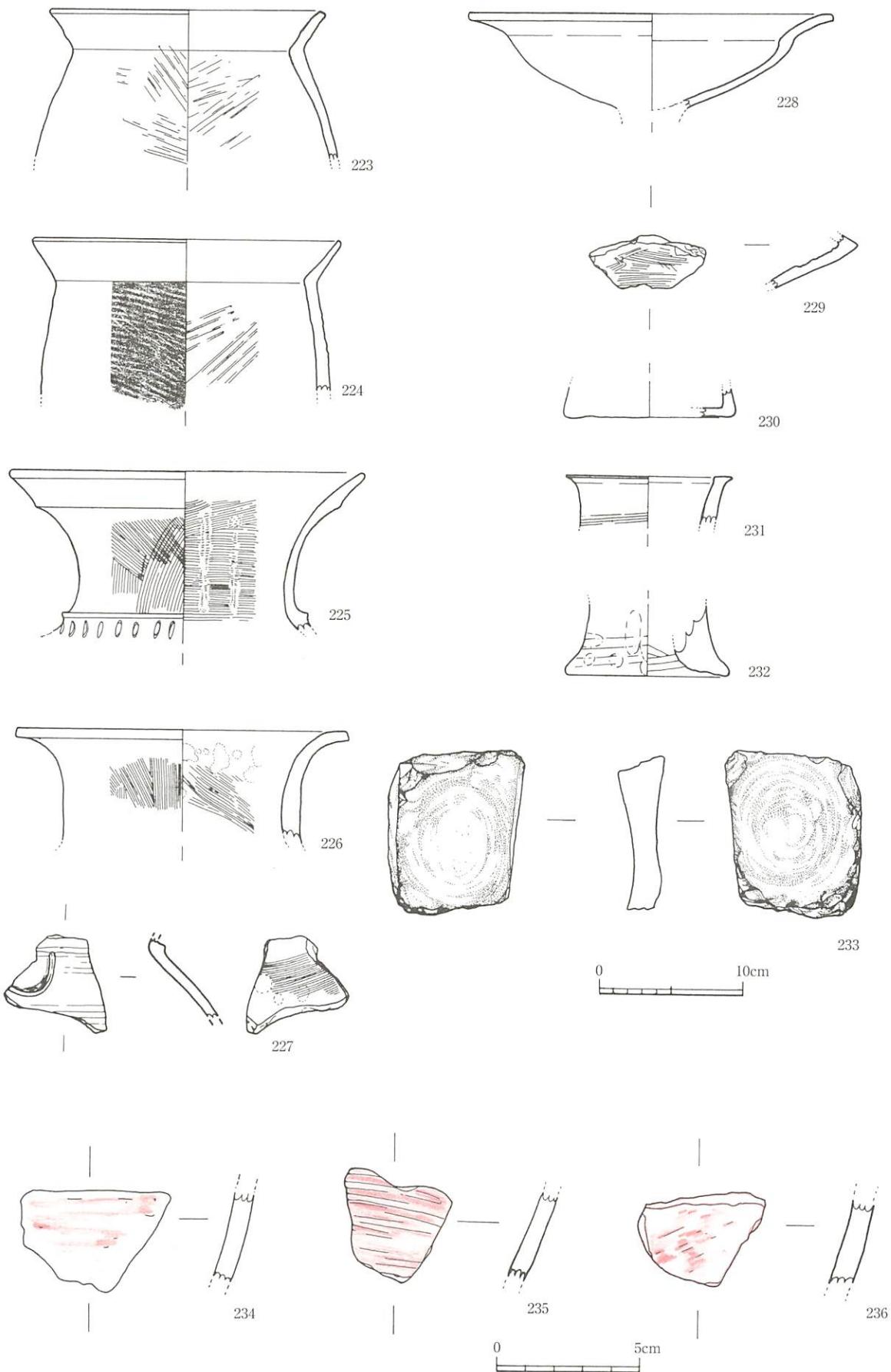


第37図 10号溝第1層出土遺物実測図

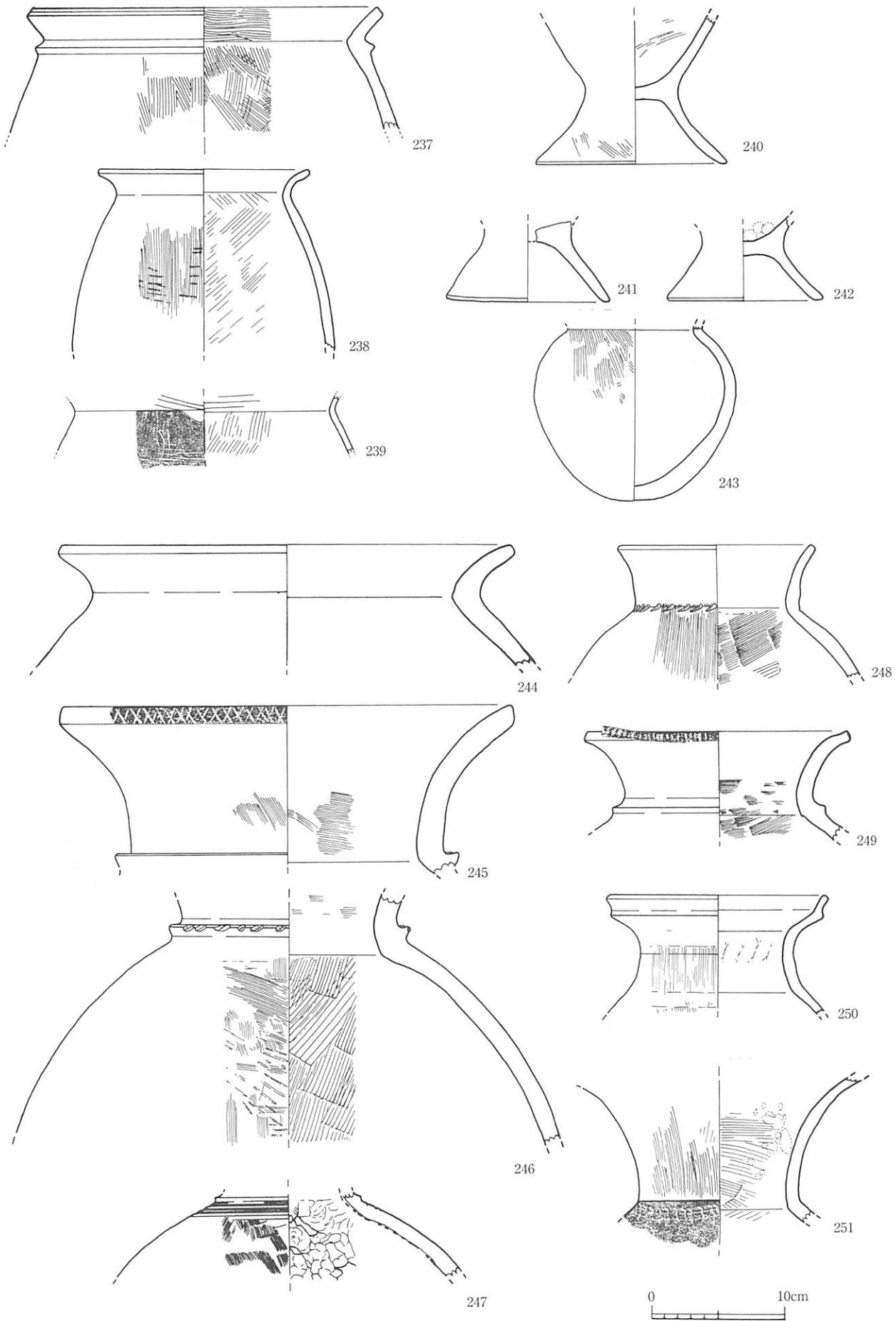
327～336は赤色顔料が付着した土器と石材である。このうち肉眼で判断して鮮やかな朱色をしているものは328、330、331、333、335の5点である。

⑨ 第4層の遺物（第45図）

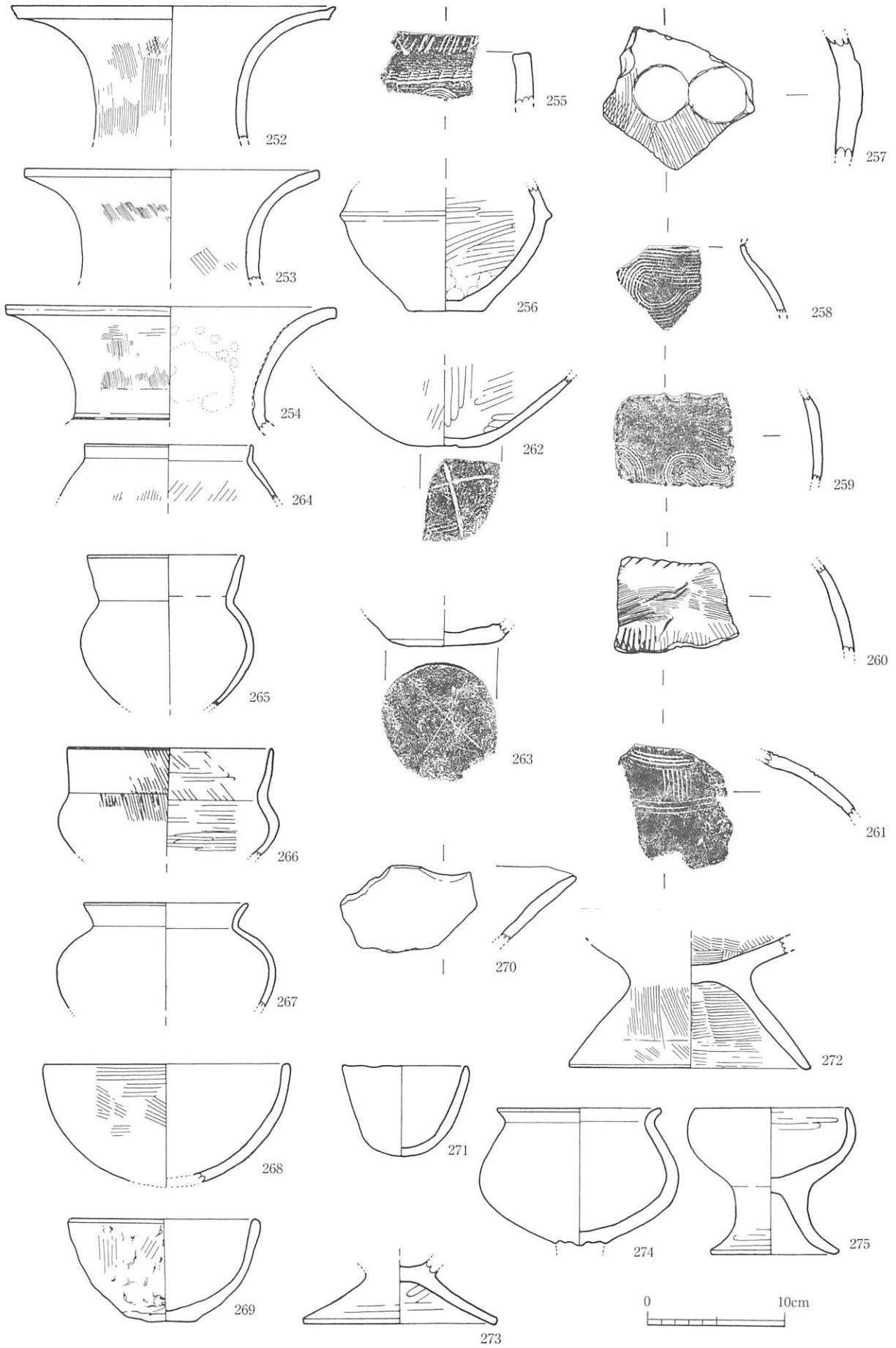
断面図（第36図）のA-A断面の第7層から出土した遺物である。337は壺の口縁部で頸部には櫛描きによる沈線と波状文を施している。338と339は鉢である。



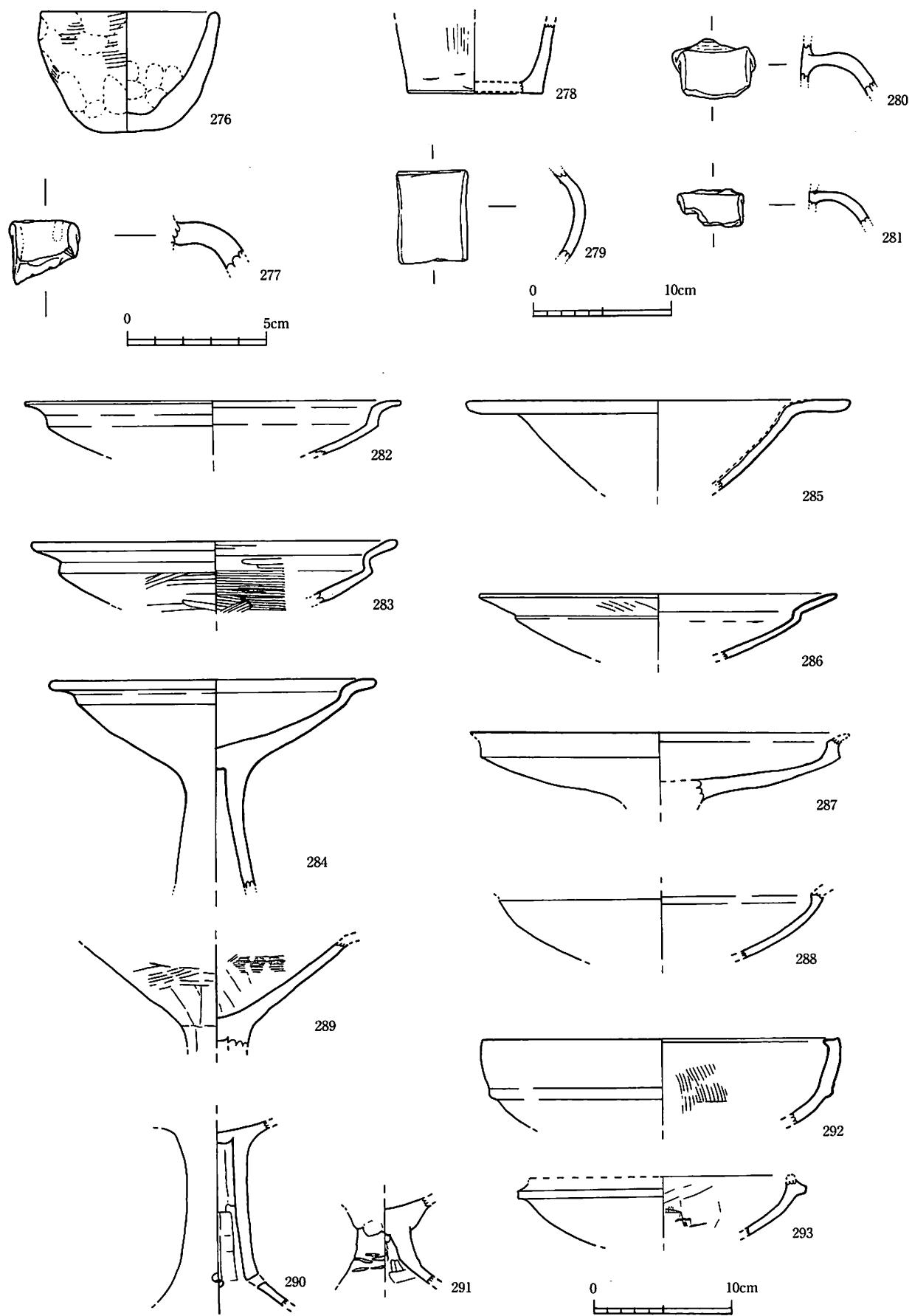
第38図 10号溝第2層出土遺物実測図



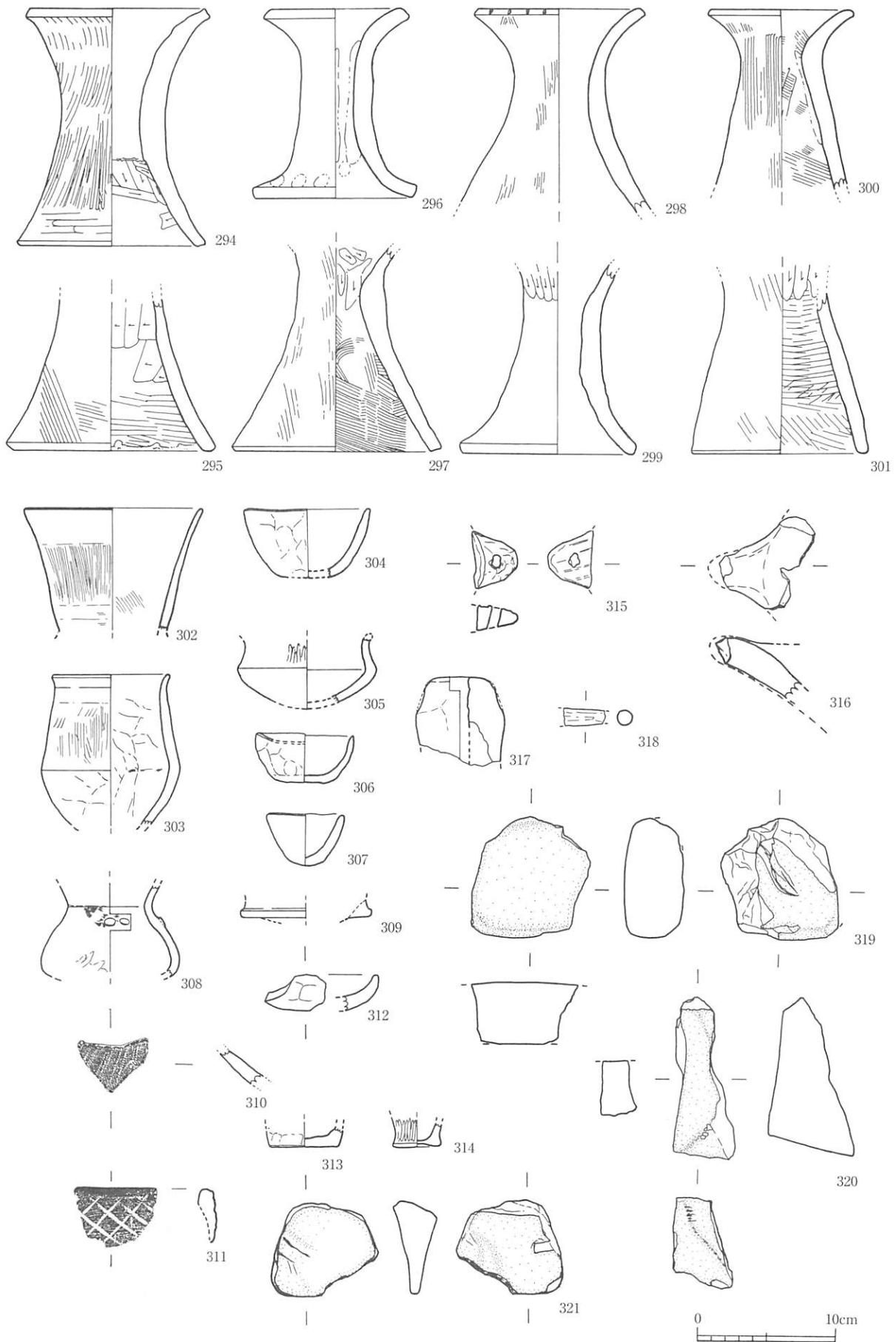
第39図 10号溝第3層出土遺物実測図①



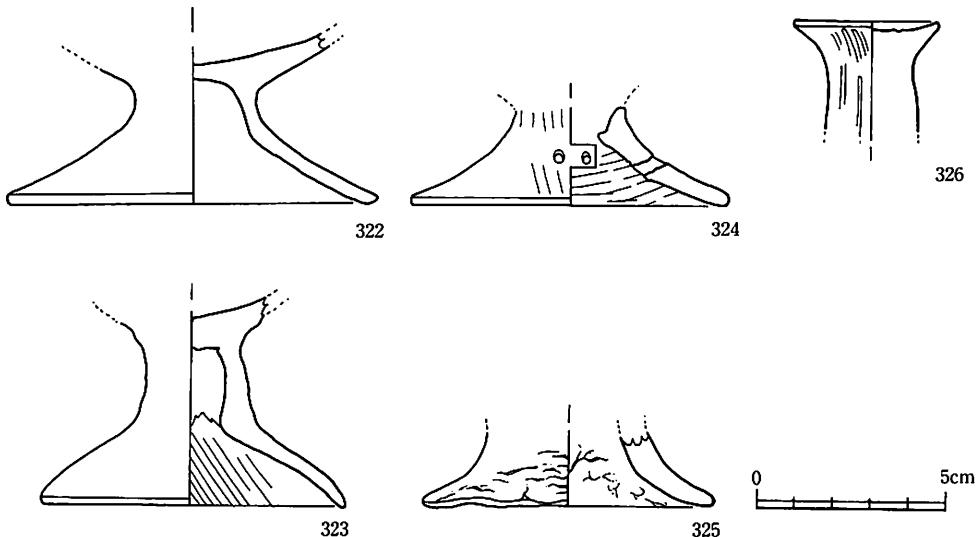
第40図 10号溝第3層出土遺物実測図②



第41図 10号溝第3層出土遺物実測図③



第42図 10号溝第3層出土遺物実測図④



第43図 10号溝第3層出土遺物実測図⑤

⑩ 第5層の遺物（第45図）

断面図（第36図）のA-A断面の第8層から出土した遺物である。340は石包丁の破片である。片面には穿孔の跡が2カ所で見られる。破断面においても研磨が見られることから、半截された後に再使用を考えて穿孔を行おうとした可能性を残している。

⑪ 第8層の遺物（第45図）

断面図（第36図）のA-A断面の最下層から出土したもので341は器台である。胴部に細線による施文が見られる。342は磨製石斧の破片である。

⑫ 一括遺物（第45図）

大溝内の出土であるが出土地点が不明なもののうち特徴ある資料を記載した。

343は甕の破片で肩部に239、260に見られた引っ搔き傷が残っている。粘土の皴のようにも見えるが特異な線である。344は上部を欠いており、高杯になるのか器台になるか判断が出来ない資料である。345は甕の破片で、内面に赤色顔料を付着するもので、色合いはくすんだ赤である。346は土製品で一方に穴を穿っており、鐸形土製品の舌である。347～349は縄文式土器で、347は後期の北久根山式土器で脚台のみの破片である。4個の透かし穴と裾部には3本の沈線で5個の弧を描いている。348と349は早期の押型文土器で山形文の土器で砲弾形の

鉢になる。

⑬ 遺構に伴わない遺物（第46図）

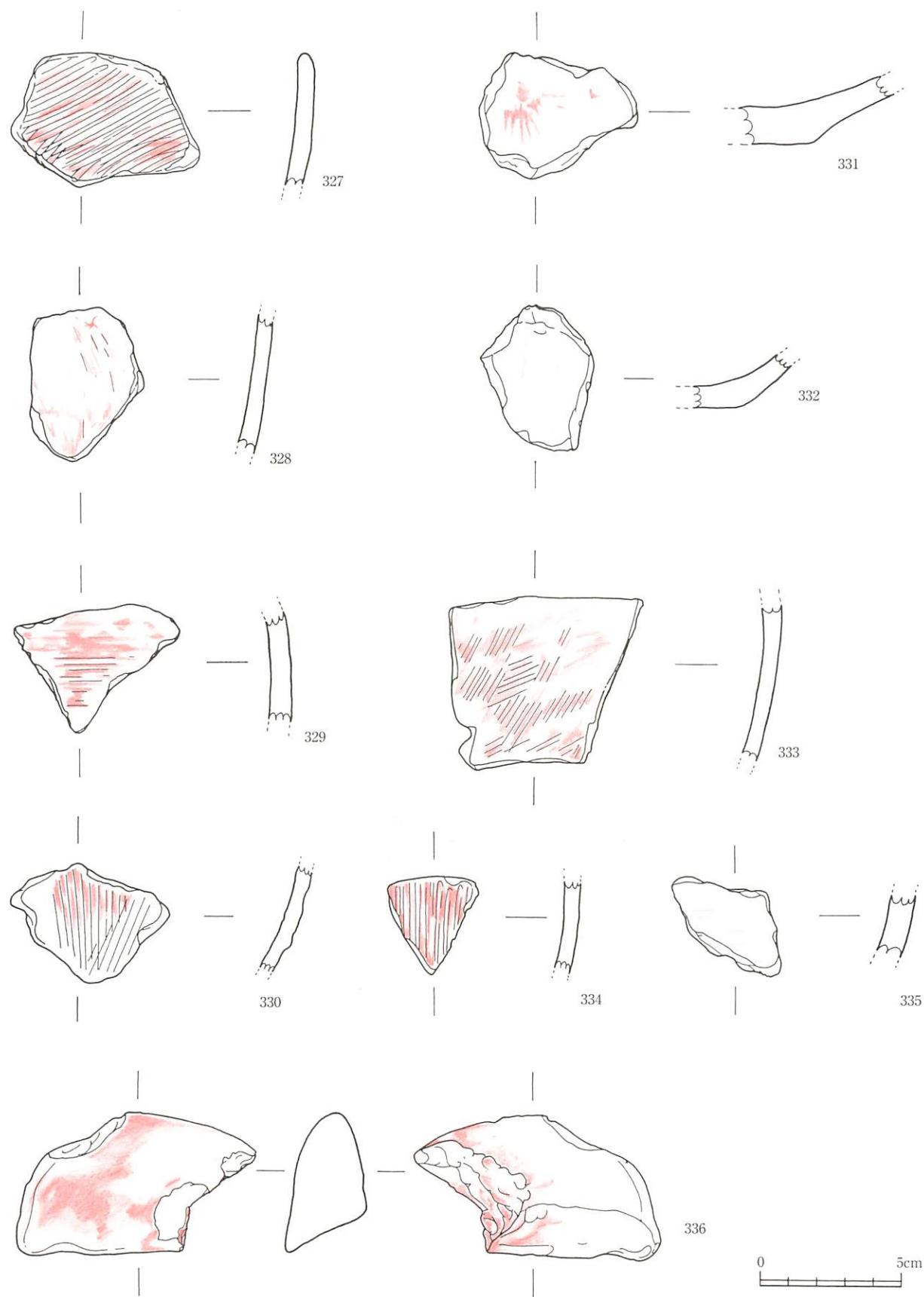
350～352は9号溝として取り扱った溝の中から出土したものであるが、調査の過程で耕作により掘られた溝であると判断した。そのためここで取り扱ったものである。350は脚付き鉢の破片である。351と352は赤色顔料が付着したもので、この2点は実測後接合出来た。くすんだ赤色をしている。

353～357は石器である。353は安山岩製の礫石器で交互剥離により刃部を形成している。全体に被熱現象で赤く変色している。縄文草創期に出現するものであろう。354と355は砥石である。356は1号溝出土であったが、これも耕作用溝であることが判明したのでここで取り扱った。石包丁の破片である。穿孔部分から折れている。357は石錐である。

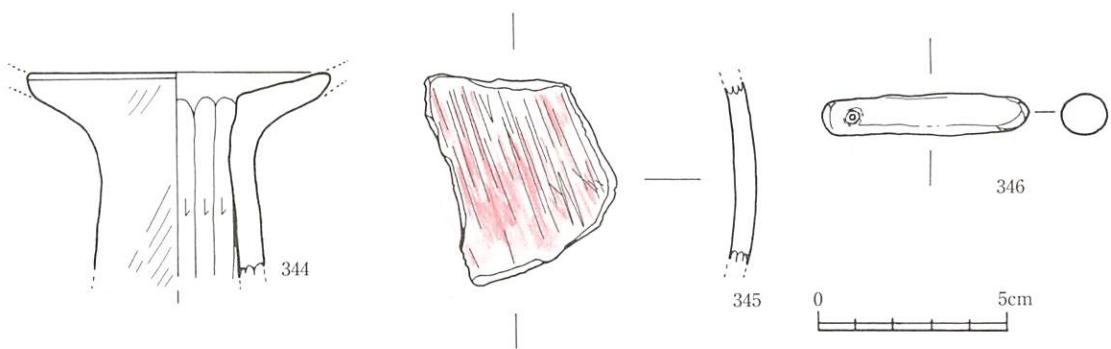
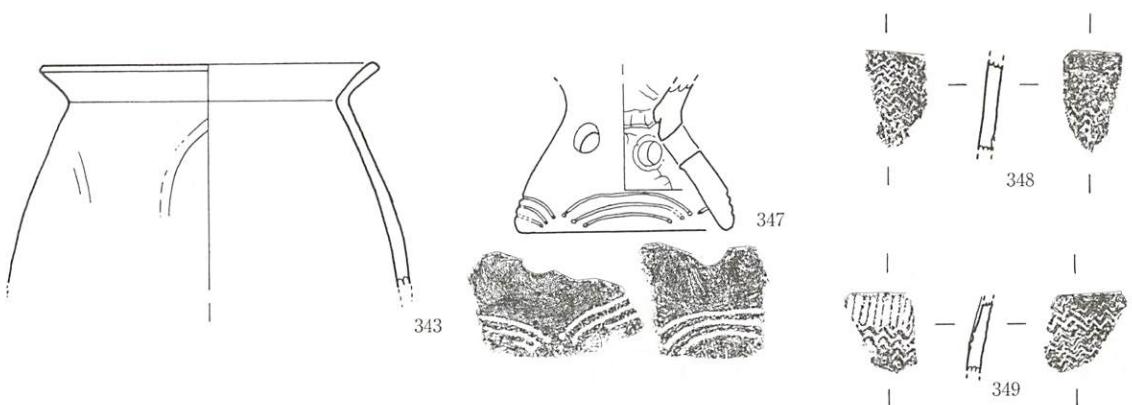
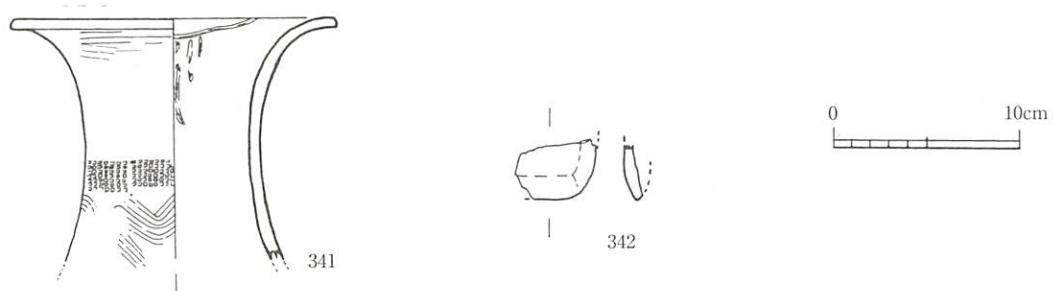
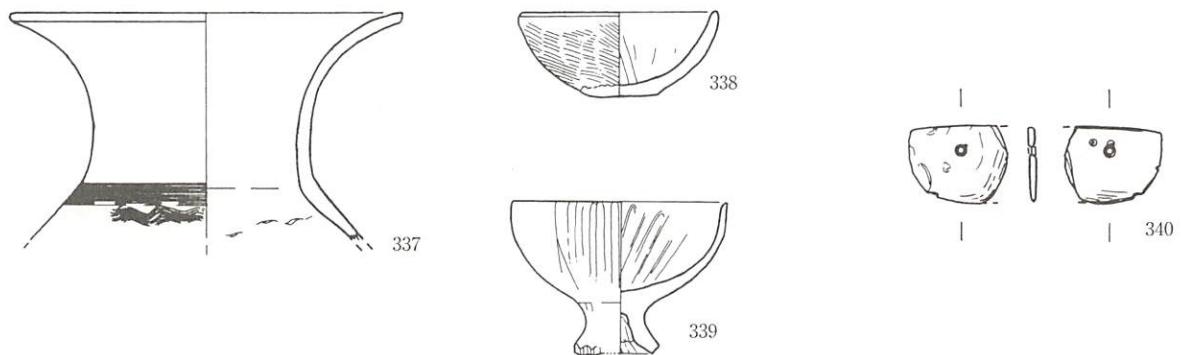
⑭ まとめ

今回の調査で最大の成果は大溝の検出である。遺跡そのものの広がりを考える契機にもなり、文化庁や県文化課の指導もあってその後の遺跡範囲確認調査の実施に至ったものである。

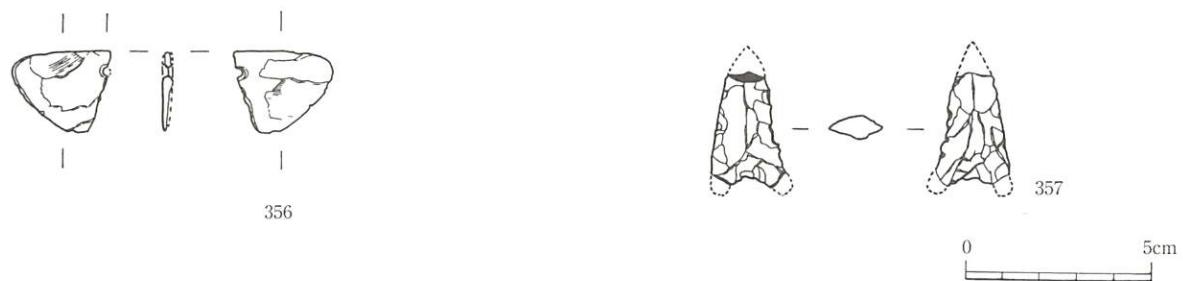
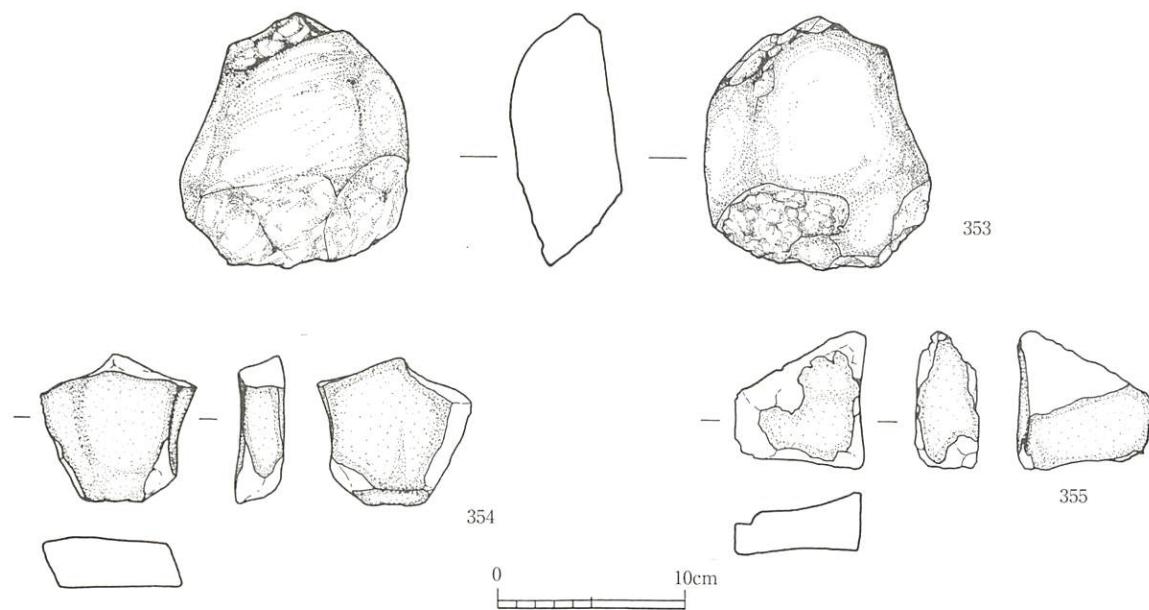
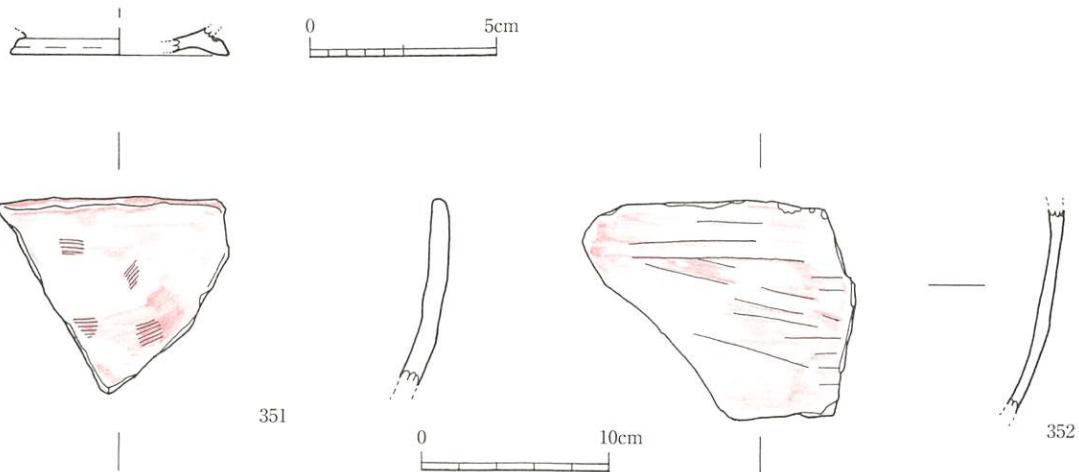
方保田東原遺跡の範囲については調査開始段階では昭和60年2月に国指定史跡となっている範囲を中心に設定しており、台地全体から見ても、西端から東に向かって



第44図 10号溝第3層出土遺物実測図⑥



第45図 10号溝出土遺物実測図



第46図 遺構に伴わない遺物実測図

大道小学校校庭遺跡、方保田東原遺跡、塚の本遺跡、大道中学校校庭遺跡と並んで広がっていると理解していたのである。この間、数次の発掘調査を行っていく中で隙間なく遺構が広がっている様子が窺える様になつた。

従って平成8年度から15年度まで実施した遺跡範囲確認調査終了時にはこれらの遺跡を一体化して、方保田東原遺跡と総称して扱う結果となつた。

そういう動きの中で、今回発見された大溝は、南に菊池川、北には支流の方保田川に挟まれ西側で合流する舌状台地の上で、東の基部に位置する事から、舌状台地を区画し独立した空間を形成する役目を果たしたものであると考えられる。

溝自体の規模は遺構上面幅5.5～7m、下面幅3m、深さ1.9mであるが、調査中の確認作業の段階では、溝の上面での幅の長さは、県内はもとよりこれだけ大きな溝は全国的にも希有な規模である。

併せて7号溝も出土遺物から判断して在地系墳を主体とした時期であることから、同時期に平行して掘られており、二重の堀を巡らしていたと理解される。

溝の構築時期は在地系墳の時期で、終焉は外来墳および古式土師器を含んでいる。

これらの溝がどのような形になるかが、大きな課題であるが、平成9年度で管理センター南側の131番地と132番地を調査し南側に延長していることが確認できている。

平成13年度には管理センター北側の6番地において調査し、溝の延長が北側から西側に向きを変えている事が明らかとなった。このため台地の北側の縁を取り囲む可能性も残している。

このほかには方形周濠墓の存在である。内部主体は削平されていたが、周濠内より古式土師器の壺が出土している。方保田東原遺跡の中で墓域の特定が困難で、単発的に石棺や甕棺が出土していたが、方形周濠墓の存在は初めての発見である。

出土物貯蔵庫調査分出主文化財管理センター (128番地) その1

通題	題名	著者	出版年	P番号	古墳	石室	陪塚	色調	地紋	上・淀人物	焼成	内面調査		出展	焼	備考			
												外由調査	内由調査						
1	1	2	1	2号墳	P-29	古	1号室・前室	14.0	-	IOYR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	無	無	・オレンジの色赤み・25年の風化にむらあり		
2	2	1	2	2号墳	P-31	古	1号室・前室	(12.5)	-	IOYR7/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	無	無	・118年内面に焼付		
3	2	3	2号墳	P-3	古	1号室玉	完形	0.930.8	R-52.5	7.5YR6/6	-	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・6.5224.7K、焼付3?		
4	4	2	2	2号墳	S-3	古	斜削石斧	(14.2)	12.1×4.9	10Y5.1 K赤	-	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
5	5	3	1	3号墳	P-28	古	1号室	完形	9.4	5.0-5.6	IOYR7/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
6	6	4	1	3号墳	P-294	古	1号室・前室	5.1	-	7.5YR7/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
7	7	11	1	3号墳	P-36	古	1号室・前室	(17.6)	-	IOYR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・内面と焼付には赤い跡が付着しているので赤記		
8	8	13	1	8号墳	P-40	古	1号室・前室	(14.2)	-	10YR6/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
9	9	51	1	10号墳	P-29	古	1号室・前室	(-)	-	10YR8/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
10	10	5	1	11号墳	P-38	古	1号室・前室	(14.2)	29.8	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
11	11	12	1	8号墳	ミニチュア	絵片	1号室	-	-	IOYR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
12	12	7	1	7号墳	4	古	1号室	(-)	-	10YR6/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
13	13	8	1	7号墳	P-45	古	1号室・前室	(-)	-	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
14	14	9	1	7号墳	P-45	古	1号室・前室	(6.0)	-	10YR6/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
15	15	10	2	7号墳	3	古	1号室・前室	(-)	-	IOYR7/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
16	16	10	1	7号墳	4	古	1号室・前室	(-)	-	10YR6/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
17	17	10	3	7号墳	3	古	1号室・前室	(-)	-	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
18	18	8	2	7号墳	P-43	古	1号室	(24.0)	-	IOYR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
19	19	56	1	10号墳	P-21	古	1号室・前室	(14.2)	20.0	10YR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
20	20	58	1	10号墳	P-23	古	1号室・前室	(14.2)	17.4	31.5-32.1	10YR6/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
21	21	75	1	10号墳	P-22	古	1号室・前室	(15.6)	7.8	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
22	22	74	1	10号墳	P-22	古	1号室・前室	(14.3)	-	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
23	23	89	1	10号墳	P-22	古	1号室・前室	(23.6)	-	10YR7/6 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
24	24	100	1	10号墳	P-1	古	环須石器	完形	13.3	3.8	5P R2/2 黒リビン	-	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
25	25	108	1	10号墳	S-18	古	斜削石斧	残片	-	-	5YR6/2 黒リビン	-	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
26	26	10	1	10号墳	P-22	古	1号室	1号室・前室	15.6	-	10YR5.3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
27	27	31	1	10号墳	P-71	古	1号室	(15.6)	-	7.5YR4/1 褐粘土	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
28	28	29	1	10号墳	P-144	古	1号室	9.65	17.9	-	10YR8/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
29	29	17	1	10号墳	P-71	古	1号室	9.65	(22.8)	-	10YR7/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
30	30	35	1	10号墳	P-70	古	1号室	9.65	(19.2)	-	10YR7/6 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
31	31	18	2	10号墳	P-255	古	1号室	(18.6)	-	10YR7/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
32	32	33	3	10号墳	P-68	古	1号室	9.65	-	-	-	7.5YR5/2 黑粘土	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・
33	33	26	2	10号墳	P-210	古	1号室	(15.8)	-	10YR7/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
34	34	39	1	10号墳	P-167	古	1号室	(16.5)	21.3	7.5YR6/3 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
35	35	28	2	10号墳	P-271	古	1号室	(14.0)	-	7.5YR6/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
36	36	72	2	10号墳	P-232	古	1号室	9.65	-	-	-	10YR7/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・
37	37	23	1	10号墳	P-189	古	1号室	(15.8)	19.0	7.5YR8/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
38	38	41	1	10号墳	P-212	古	1号室	9.65	(19.5)	-	10YR8/2 黑粘土	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・	
39	39	47	1	10号墳	P-165	古	1号室	(14.0)	-	10YR8/2 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		
40	40	20	1	10号墳	P-232	古	1号室	9.65	-	7.5YR7/4 に赤い斑駁色	斜削石 防止 石室	RAT	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	ヨコナードーへテラ基底一指厚さミナメハケ	有	無	・		

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳 (128番地) その2

番号	種類	材質	寸法	形態	色調	特徴・記入	部位	外由来	内由来	出典	備考	
41	57	1	10.5cm	P-151	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	5YR5/8 7.5YR8/3 2.5YR8/2	小褐色 灰褐色 灰白色	角端石 角端石 角端石	R R R	ナガサキで販売している小石用鉄 ヨコナード・ナナメハケ・タキ模ナメハツ ナダ・ヨコハケ・ヘタケズリ	有 有 有
42	64	1	10.5cm	P-233	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	20.0	7.5YR8/3 灰褐色	角端石	R	ヨコナード・ナナメハケ・タキ模ナメハツ	無
43	53	2	10.5cm	P-103	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(16.2)	-	角端石	R	ナダ	有
44	65	1	10.5cm	P-81	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(20.9)	-	角端石	R	ヨコナード・ヘタケ・ガキ	有
45	68	2	10.5cm	P-218	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(19.5)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメナデココナデ	有
46	62	1	10.5cm	P-259	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(15.0)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメナデココナデ	有
47	67	1	10.5cm	P-237	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(22.6)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハケを施している小石用鉄 ナナメハケ・タキ模ナメハツ	有
48	43	1	10.5cm	P-234	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(25.0)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハケ・後被文 ヨコナード・指揮さし後竹青文 (3ヶ所)	有
49	62	2	10.5cm	P-71	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(-)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後竹青文 (3ヶ所)	有
50	43	3	10.5cm	P-227	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	-	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後竹青文	有
51	46	1	10.5cm	P-216	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(22.6)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハケ後ナナメハケ	有
52	45	2	10.5cm	P-206	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(6.4)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ヨコナデ	有
53	45	3	10.5cm	P-219	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(30.2)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ヨコナデ	有
54	23	2	10.5cm	P-198	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	7.5	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
55	44	1	10.5cm	P-122	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	-	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
56	50	2	10.5cm	P-231	小片状	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(7.0)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
57	44	2	10.5cm	P-226	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	-	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
58	39	2	10.5cm	P-262	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	12.4	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
59	38	2	10.5cm	P-218	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(12.5)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
60	75	3	10.5cm	P-115	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(15.6)	-	角端石	R	ヨコナード・指揮さし後ナナメハツ	有
61	75	2	10.5cm	P-115	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(12.0)	10.8	2.5YR5/3 浅黄色	R	ナダ	無
62	54	2	10.5cm	P-54	小片状	1.1mm 1.1mm 2.2mm	13.2	-	角端石	R	ナダ	無
63	100	3	10.5cm	P-127	小片状	1.1mm 1.1mm 2.2mm	8.3	-	角端石	R	ナダ	無
64	81	3	10.5cm	P-230	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(11.3)	-	角端石	R	ナダ	無
65	73	1	10.5cm	P-117	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(21.2)	15.4	10YR8/4 浅黄色	R	ナダ	無
66	81	1	10.5cm	P-204	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(17.2)	11.1	10YR8/3 浅黄色	R	ナダ	無
67	83	2	10.5cm	P-68	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(16.9)	-	角端石	R	ナダ	無
68	79	1	10.5cm	P-232	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	13.6	-	角端石	R	ナダ	無
69	82	1	10.5cm	P-229	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(13.6)	5.2	10YR7/4 浅黄色	R	ナダ	無
70	76	2	10.5cm	P-235	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(21.6)	-	角端石	R	ナダ	無
71	72	3	10.5cm	P-256	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(18.3)	7.5	10YR8/4 浅黄色	R	ナダ	無
72	83	3	10.5cm	P-233	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	15.6	7.3	10YR7/2 浅黄色	R	ナダ	無
74	77	3	10.5cm	P-210	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	9.0	-	角端石	R	ナダ	無
75	42	2	10.5cm	P-109	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	-	-	角端石	R	ナダ	無
76	74	3	10.5cm	P-254	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	-	-	角端石	R	ナダ	無
77	76	4	10.5cm	P-267	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(18.4)	-	角端石	R	ナダ	無
78	76	3	10.5cm	P-108	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(-)	-	角端石	R	ナダ	無
78	78	3	10.5cm	P-121	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	16.0	-	角端石	R	ナダ	無
79	91	2	10.5cm	P-170	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(23.0)	-	角端石	R	ナダ	無
80	45	1	10.5cm	P-209	骨	1.1mm 1.1mm 2.2mm	(23.0)	-	角端石	R	ヨコナード	無

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳 (128番地) その3

出土文化財管理センター調査分出土遺物合帳 (128番地) その4

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳（128番地）その5

出土文化財管理センター調査分出土追物台帳（128番地）その6

番号	品名	部位名	P番号	石種	表面	裏面	色調	断土・泥人	地盤	外山廻塗	内山廻塗	地盤	様
201	93 2 10分薄	P-156	石	BIGS 岩場	(..)	-	7.5YR6/3 淡黄色	赤褐色 砂岩	R	ハナモロコシの赤い部分	ベジタブル・ハケ 薄葉状の赤い部分	R	無 無
202	99 2 10分薄	P-190	石	1145-2	9.8	16.4-17.2	10YR7/2 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ?・ランダムにナナメハケ・ナナメハケー紙 イタキ	ヨコナダ・指揮棒	R	無 無
203	99 1 10分薄	P-417	石	1145-2	11.4	13.1-14.3	10YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ・指揮棒	ヨコナダ・指揮棒	R	無 無
204	101 2 10分薄	P-623	不明	板片	-	-	7.5YR7/1 黄褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	小ぶりにつき後半
205	169 2 10分薄	Fe-10	良石	板片	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ42.6g
206	169 1 10分薄	Fe-10	良石	板片	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ8.5g
207	169 3 10分薄	Fe-10	良石	板片	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ9.7g
208	110 1 10分薄	美	9435 粉末	石	-	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	10YR7/3 に赤い斑色	ナナメハケ後ナナメハケ前ナナメハケナナメハケ	R	有 有
209	111 1 10分薄	粉付墨	無	板片	-	-	2.5YR7/4 深赤褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ・指揮棒	ナナメハケ・指揮棒	R	有 有
210	112 1 10分薄	赤	1148-1	青色	(20.4)	-	10YR8/4 深赤褐色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ・ナナメハケ・ヨコナダ...斜口ヌーナナメハケ	ヨコナダ・ナナメハケ	R	無 無
211	113 1 10分薄	白	1148	白	(22.0)	-	7.5YR7/4 に赤い斑色	長石 石英	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 無
212	151 4 10分薄	ショット型	陶器 斧器	(-)	-	-	7.5YR6/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 無
213	113 2 10分薄	赤?	刷毛	-	-	-	10YR8/4 深赤褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	有 有
214	114 3 10分薄	赤付? 赤?	板片	(-)	-	-	7.5YR7/6 赤色	長石	R	ヨコナダ・ナナメハケ・ヨコナダ...斜口ヌーナナメハケ	ヨコナダ・ナナメハケ	R	無 無
215	114 2 10分薄	手錠	1148-1	青色	(5.1)	5.4	10YR8/3 深赤褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 無
216	114 4 10分薄	焼成點付 漆形	陶器	-	-	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 無
217	113 3 10分薄	真手 or 手錠	板片	-	-	-	10YR8/2 黄褐色	角閃石 石英	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 無
218	116 1 10分薄	赤付?	1148-1	青色	(15.0) (15.5)	6.0	2.5YR8/3 赤色	長石	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 無
219	110 2 10分薄	須留器	1148	白	(18.4)	-	10YR5/3 に赤い斑色	角閃石 石英	R	ヨコナダ	ヨコナダ	R	無 無
220	114 1 10分薄	高石けん	陶器	(-)	-	-	N7.5 黄褐色	角閃石 石英	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 無
221	115 1 10分薄	赤色鉛付料	無	-	-	-	10YR6/2 黄褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 無
222	117 1 10分薄	手錠付	1148-1	青色	(4.0)	-	5YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ後前斜付	ヨコナダ後前斜付	R	無 無
223	118 1 10分薄	鑿	1148-1	青色	(18.2)	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ...タガタガ後滅している赤い部分	ヨコナダ...タガタガ後滅している赤い部分	R	無 有
224	116 2 10分薄	鑿	1148-1	青色	(21.1)	-	2.5YR6/2 黄褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
225	119 2 10分薄	土	1148-1	青色	23.9	-	5YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 有
226	119 1 10分薄	土	1148-1	青色	(20.5)	-	10YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ・ナナメハケ	ヨコナダ・ナナメハケ	R	無 有
227	120 2 10分薄	土	1148-1	青色	(18.2)	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
228	121 1 10分薄	高石けん	1148	白	23.6	-	10YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
229	121 2 10分薄	高石けん	1148	白	23.9	-	10YR7/4 黄褐色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 有
230	150 1 10分薄	ショット型	成形	(-)	-	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ・ナナメハケ	ヨコナダ・ナナメハケ	R	無 有
231	122 1 10分薄	土	1148	白	(-)	-	10YR7/2 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ...斜口ヌーナナメハケ	ヨコナダ...斜口ヌーナナメハケ	R	無 有
232	122 2 10分薄	土	1148	白	(10.7) (10.5)	1.6-2.9	10YR5/1 細粒	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ後ナナメハケ	ナナメハケ後ナナメハケ	R	無 有
233	117 2 10分薄	土	1148-1	青色	(26.0)	-	10YR5/3 に赤い斑色	長石 石英	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
234	123 1 10分薄	土	1148-1	青色	(15.6)	-	2.5YR5 /明るめ	角閃石 石英	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
235	123 2 10分薄	土	1148	白	(-)	-	10YR7/4 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ後ナナメハケ	ヨコナダ後ナナメハケ	R	無 有
236	123 3 10分薄	土	1148-1	青色	(10.7)	1.6-2.9	10YR5/1 細粒	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
237	128 1 10分薄	土	1148-1	青色	(15.6)	-	5YR2/1 黑褐色	赤褐色 砂岩	R	ヨコナダ・ナナメハケ	ヨコナダ・ナナメハケ	R	無 有
238	125 1 10分薄	土	1148-1	青色	(-)	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ヘリミナ・ナナメハケ	ヘリミナ・ナナメハケ	R	無 有
239	130 3 10分薄	土	1148-1	青色	(-)	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有
240	126 2 10分薄	土	1148-1	青色	(-)	-	10YR7/3 に赤い斑色	赤褐色 砂岩	R	ナナメハケ	ナナメハケ	R	無 有

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳 (128番地) その7

番号	品名	通名	P番号	文様	時代	断片	11.6.	西暦	始: 説人物	経年	外見調査	付記調査	測定	備考		
211	109	漆		円筒形	漆地	-	-	5YR74 11.6.1974	丸内円形 石灰	良	ヨコナデ 傷があるみぶ付箋	ヨコナデ	無	無		
242	126	3	109	漆	円筒形	底付漆	-	-	10YR82 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	燃焼しているみぶ付箋	燃焼しているみぶ付箋	有	無	
243	131	2	109	漆		漆	(-)	-	5YR6.6 没	漆	良	ナナメカーナデ	ナデ	有	無	
244	135	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	漆	良	ヨコナデ 傷があるみぶ付箋	ヨコナデ ナナデはねのみぶ付箋	有	無	
245	135	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(33.6)	-	10YR82 11.6.1974	お湯色地 漆	良	ナナメカーナデ	ナナメカーナデはねのみぶ付箋	有	無
246	131	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	漆	良	ヨコナデ 傷があるみぶ付箋	ヨコナデ ハタケ・穴筋にS字-コロナ-タテハタ-タキモ	無	無	
247	136	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ 傷があるみぶ付箋	ナナメカーナデはねのみぶ付箋	有	無	
248	131	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(14.4)	-	10YR74 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	有	無
249	133	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(19.6)	-	7.5YR73 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ 11.6.1974	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
250	132	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(16.2)	-	10YR82 11.6.1974	お湯色地 漆	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
251	133	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	7.5YR73 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無	
252	132	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(23.8)	-	10YR82 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
253	132	4	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(21.0)	-	10YR82 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
254	132	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	23.8	-	10YR74 11.6.1974	お湯色地 漆	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
255	136	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	お湯色地 角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無	
256	129	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ 11.6.1974	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
257	127	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
258	136	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
259	130	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	N2/ 256	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無	
260	157	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ 11.6.1974	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
261	157	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
262	137	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
263	137	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無	
264	138	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
265	68	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	5YR6.6 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ 11.6.1974	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
266	140	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ナナメカーナデはねのみぶ付箋	ヨコナデ 11.6.1974	有	無	
267	140	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無	
268	138	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(11.0)	10.7	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
269	138	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(11.1)	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
270	140	4	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(14.6)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
271	137	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(11.6)	-	7.5YR6.6 没	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無
272	139	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(17.0)	-	7.5YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
273	145	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	11.9	-	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
274	140	2	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	(11.4)	-	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
275	138	4	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	8.8	6.6	10YR82 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無
276	151	1	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	6.0	4.4	10YR74 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
277	156	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	-	7.5YR5.6 11.6.1974	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
278	151	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	-	10YR5.1 没	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ 11.6.1974	有	無
279	150	4	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	-	10YR8.8 没	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無
280	150	3	109	漆		漆	11.6.1974 (-)	-	-	10YR8.8 没	角内円形 石灰	良	ヨコナデ ハタケ後コナダ-テハタハテ	ヨコナデ ? -銀ナナメカーナデ	有	無

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳（128番地）その8

登記番号	位置	通称名	品名	石種	性質	寸法	表面	色調	粘土・泥人物	焼成	外出現象	内出現象	出土地	保有者
281	150	2	10号棟	ジコクキヤ	取手	-	-	10YR6/3 深紅色	赤褐色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	無
282	141	2	10号棟	11号	11号	11号-1号5	(26.0)	-	10YR6/3 深紅色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	無
283	145	1	10号棟	高杯	高杯	高杯	25.3	-	7.5YR6/4 深い褐色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	「茶なれりをしてる
284	145	2	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(21.0)	-	5YR6/6 棕色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	無
285	144	1	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(-)	-	10YR7/3 深い褐色	赤褐色	R/F	赤褐色が燃えているので不明瞭	有	無
286	143	1	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(26.0)	-	10YR6/3 深紅色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	無
287	141	1	10号棟	高杯	高杯	高杯	(-)	-	10YR7/3 深い褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ	有	無
288	144	3	10号棟	高杯	高杯	高杯	(-)	-	10YR7/4 深い褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ	有	無
289	144	2	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(-)	-	10YR6/4 深紅色	赤褐色	R/F	タキ後ベタカズリ-ヨコナダ	有	無
290	142	2	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(-)	-	10YR6/3 深紅色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	「日本に歴史的の孔がついた」としている
291	142	1	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(-)	-	5YR1/1 黄色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	無
292	143	2	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5	11号-1号5	(26.0)	-	10YR6/3 深紅色	赤褐色	R/F	ヨコナダ	有	無
293	143	3	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5	11号-1号5	(-)	-	10YR6/2 白白色	赤褐色	R/F	タキ後ベタカズリ-ヨコナダ	有	無
294	147	1	10号棟	高杯	高杯	11号-1号5	(12.5)	17.0	7.5YR6/4 深い褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ-白山鶴巣ナダ	有	「いびつな形をしている
295	146	1	10号棟	25台	底盤	底盤	-	-	10YR6/2 白白色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ	有	無
296	148	2	10号棟	25台	底盤	底盤	(9.0)	13.6	10YR6/2 深褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ	有	無
297	146	3	10号棟	25台	底盤	底盤	(9.0)	-	7.5YR7/4 深い褐色	赤褐色	R/F	ハケ跡鑿磨ナダ	有	無
298	146	1	10号棟	25台	底盤	底盤	(11.4)	-	10YR7/4 深褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ-ヘラケナダ	有	無
299	147	2	10号棟	25台	底盤	底盤	-	-	10YR6/2 深褐色	赤褐色	R/F	ハケスリ-ヨコナダ	有	無
300	146	3	10号棟	25台	底盤	底盤	(9.2)	-	10YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ハケスリ-ヘンダムなハケナダ	有	無
301	146	2	10号棟	25台	底盤	底盤	-	-	7.5YR7/4 深褐色	赤褐色	R/F	燃焼しているみで不明瞭	有	無
302	151	2	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5?	11号-1号5?	(12.5)	-	10YR7/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ジヨウヤイイナシしては」が「うみがたり、そりがたりの虫」が「じやうじやう」と「ぬめがりかみ」らしいの
303	152	2	10号棟	小切替	小切替	小切替	(6.2)	-	10YR7/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ヨシナダ-ナナハケ後括ナダ-ナダ
304	152	4	10号棟	小切替	小切替	小切替	(6.8)	-	7.5YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ハケスリ-ヘタケメナハメ
305	152	3	10号棟	小切替	小切替	小切替	(-)	-	10YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
306	153	2	10号棟	小切替	小切替	11号-1号5?	(7.0)	3.4	10YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ-ナナハケ-コヨコナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
307	153	1	10号棟	小切替	小切替	11号-1号5?	(5.2)	3.7	10YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ココナダ-ナナハケ後括ナダ-ナダ	有	「ココナダ-ナナハケ後括ナダ-ナダ
308	152	1	10号棟	小切替	小切替	小切替	(6.8)	-	7.5YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
309	153	3	10号棟	小切替	小切替	小切替	(-)	-	10YR6/3 深褐色	赤褐色	R/F	ヨコナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
310	157	3	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5?	11号-1号5?	(-)	-	10YR6/2 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
311	134	3	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5?	11号-1号5?	(-)	-	N3 灰褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
312	155	3	10号棟	11号-1号5?	11号-1号5?	11号-1号5?	(-)	-	7.5YR7/2 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
313	153	4	10号棟	手柄	手柄	手柄	(-)	-	7.5YR6/4 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
314	153	5	10号棟	手柄	手柄	手柄	(-)	-	7.5YR6/2 手柄	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
315	155	2	10号棟	手柄	手柄	手柄	(-)	-	3.5x3.0 (W.5)	10YR7/3 深褐色	R/F	ヨコナダ-ナナハケ後括ナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
316	155	1	10号棟	不明器	不明器	不明器	(-)	-	10YR6/2 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
317	149	1	10号棟	香料容器?	香料容器?	香料容器?	(-)	-	10YR7/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
318	153	6	10号棟	手柄	手柄	手柄	-	-	10YR7/3 深褐色	赤褐色	R/F	ナナメハイカナダ-ナダ	有	「ナナメハイカナダ-ナダ
319	161	1	10号棟	棒石	棒石	棒石	8.7x8.6 (W.5)	4.4	-	-	-	-	-	「ナナメハイカナダ-ナダ
320	160	1	10号棟	鉛石	鉛石	鉛石	11.6x4.5	-	-	-	-	-	-	「ナナメハイカナダ-ナダ

出土文化財管理センター調査分出土遺物台帳（128番地）その9

登録番号	品名	性質	出土地名	P番号	古文種	断片	寸法	形状	出土状況	出土場所	内出場	出場	備考	
321	160	2	10号窯		天草駁石	破片	6.7×7.8	—	10YR8.2 黄白色	赤褐色	長円形	RM	ナデ? 傷滅しているか不明瞭	
322	151	3	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR8.3 淡青色	赤褐色	長円形	RM	ナデ? 傷滅しているか不明瞭	
323	154	4	10号窯		天草駁石	破片	(—)	—	10YR8.3 淡青色	赤褐色	長円形	RM	ナデ ナーナミヨハケ	
324	154	5	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR7.3 に、ぶい青色	赤褐色	長円形	RM	タナハケ	
325	154	2	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.1 淡灰色	赤褐色	長円形	RM	ナデ・指揮棒	
326	154	6	10号窯		天草駁石	破片	(3.6)	—	2.5YR6.1 淡灰色	赤褐色	長円形	RM	指揮棒	
327	159	1	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 本褐色	赤褐色	長円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
328	158	1	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 甲赤褐色	赤褐色	角円形	RM	ヘラミガキ	
329	159	2	10号窯		天草駁石	破片	—	—	3YR5.6 甲赤褐色	赤褐色	角円形	RM	ヨコハケ	
330	159	5	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.1 淡灰色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
331	159	3	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR7.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
332	158	6	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 甲赤褐色	赤褐色	角円形	RM	ナデ	
333	158	3	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.6 本褐色	赤褐色	角円形	RM	ハケメ	
334	158	5	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 本褐色	赤褐色	角円形	RM	ハケメ	
335	158	2	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 本褐色	赤褐色	角円形	RM	ヘラミガキ	
336	159	4	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
337	163	1	10号窯		安	11号-1號	(20.6)	—	10YR7.4 に、ぶい青色	赤褐色	長円形	RM	ヨコナデーナーナメハヤ後ナデー平行式-波状文	
338	162	2	10号窯		林	11号-1號	(10.0)	4.5	10YR7.4 に、ぶい青色	赤褐色	長円形	RM	ヨコナデーハケメ	
339	162	1	10号窯		林	11号-1號	11.2	8.2	10YR7.4 に、ぶい青色	赤褐色	長円形	RM	ヨコナデ後ハザキ	
340	168	3	10号窯		石臼	11号-1號	—	—	5YR6.2 朱赤-アーブ色	赤褐色	角円形	RM	いくつも穴を開けようとした痕がある	
341	164	1	10号窯		石臼	11号-1號	(15.7)	—	10YR7.4 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ヘラミガキ	
342	168	2	10号窯		石臼	11号-1號	—	—	5GYR7.1 オリーブ色	赤褐色	角円形	RM	ハケメ	
343	130	1	10号窯		石臼	11号-1號	(17.6)	—	7.5YR6.2 朱赤-アーブ色	赤褐色	角円形	RM	ヨコナデアーブ色	
344	156	1	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR7.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ後ナデアーブ色	
345	163/2	5	10号窯		天草駁石	破片	—	—	2.5YR6.6 本褐色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
346	156	2	10号窯		天草駁石	破片	45.5	5.5	1.1~1.2 (45.5)	10YR7.4 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 指揮棒
347	121	1	10号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.4 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ	
348	124	2	10号窯		天草駁石	破片	—	—	7.5YR6.6 甲赤褐色	赤褐色	角円形	RM	ナデ後ナデアーブ色	
349	124	3	10号窯		天草駁石	破片	—	—	7.5YR6.3 棕色	赤褐色	角円形	RM	山形押棒文	
350	14	1	9号窯		天草駁石	破片	(—)	—	10YR7.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ ヨコハケ	
351	15	2	9号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
352	15	1	9号窯		天草駁石	破片	—	—	10YR6.4 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ後ナデアーブ色	
353	166	1	遺構外		縄繩文	破片	—	—	7.5YR6.1 朱赤	赤褐色	角円形	RM	山形押棒文	
354	168	2	遺構外		縄繩文	破片	—	—	7.5YR6.3 に、ぶい青色	赤褐色	角円形	RM	ナデ ヨコハケ	
355	168	1	遺構外		縄繩文	破片	—	—	10YR6.2 本褐色	赤褐色	角円形	RM	ナデ 傷滅しているか不明瞭	
356	6	1	1号窯		4匁	4匁	—	—	NG 灰色	—	—	—	ナデアーブ、ナデアーブ	
357	167	1	遺構外		縄繩文	破片	3.2 (45.5)	1.6 (45.5)	—	—	—	—	ナデカット?	

附論 1

熊本県山鹿市出土文化財管理センター所蔵の 弥生時代～古墳時代の青銅製品 に関する鉛同位体比

別府大学大学院 文学研究科

ノ ジヒヨン
魯 裕弦

下村 智
平尾良光

1. はじめに

九州のほぼ中央に位置する熊本県は豊富な自然環境にめぐまれており、それを反映するように熊本県内の各地には旧石器時代から近世までの遺跡が分布している。これらの遺跡の多くは河川流域を中心に集中している。古代の肥後国の領域を占める熊本県では早くから鉄器文化が展開されたことでよく知られているが、それと共に高い技術の青銅器文化も発達していたことがこれまでの研究成果から明らかになった。中国製青銅器、朝鮮半島製青銅器をはじめ、日本製青銅器や鋳造関連遺物、遺跡なども熊本地域から確認されている。青銅器に関する鋳造関連遺跡が確認されたことは当然青銅製品の製作のための材料獲得の問題に関わることになる。

青銅製品を作るための青銅材料をどこから手に入れたかを明らかにすることは難しいが、少なくとも鉛同位体比測定法を用いれば青銅材料の産地を推定することができる。全国的にみても鉄器文化が早くから発達した熊本地域において、どのような青銅器文化が展開されたかを調べることにも鉛同位体比法は良い研究方法の一つである。そこで、熊本県山鹿市出土文化財管理センターに収蔵されている青銅製品に関して鉛同位体比法を用いた産地推定の研究を行い、以下のように考察した。

2. 資 料

今回の資料は、熊本県山鹿市出土文化財管理センターに収蔵されている青銅製品の中で、山鹿市の中尾遺跡、方保田東原遺跡や方保田白石遺跡、大津町所在西弥護免遺跡などから出土した青銅製品9点である。これらの青銅製品は銅釧1点、銅鎌4点、仿製鏡4点で、弥生時代後期～古墳時代のものであるとされているものである。

これらの資料から鋳を微少量採取し、鉛同位体比測定用の試料とした。資料とした青銅製品は9点であるが、銅釧は三つの破片になっていたため、各破片から一箇所ずつ試料採取を行ったので、実際に測定した試料数は11点である。試料の採取位置は図1～図11に示し、資料の記載は表1で示した。

3. 鉛同位体比の原理¹⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、それは地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに変化する。よって、U(ウラ

表1 熊本県山鹿市から出土した青銅製品の記載

番号	資料名	遺跡名	考古学的な時代判別	測定番号
1	銅釧15-a	小原字中尾遺跡	弥生時代後期	BP1190
2	銅釧15-b	〃	〃	BP1191
3	銅釧15-c	〃	〃	BP1192
4	仿製鏡19	西弥護免遺跡	〃	BP1193
5	仿製鏡14	方保田白石遺跡(鹿高資料表採)	〃	BP1194
6	仿製鏡11	方保田東原遺跡(110-2番地出土)	〃	BP1195
7	銅鎌12	〃(209番地出土)	〃	BP1196
8	銅鎌13	〃(137-1番地出土)	〃	BP1197
9	銅鎌16	〃(120-1番地出土)	古墳時代	BP1198
10	銅鎌17	〃(269-2番地出土)	古墳時代	BP1199
11	仿製鏡18	(〃)	弥生時代後期	BP1200

ン) と Th (トリウム) が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中の U、Th、Pb の量比および岩石中で Pb と U、Th が共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない²⁰⁴Pb 量と、変化した²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb 量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ピーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約 5 ml に希釈し、直流 2 V で電気分解した。約 1 日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から 0.2 μg の鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計 MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を 1200°C で測定した。また、同一条件で標準鉛試料 NBS-SRM981 を測定し、規格化した。

5. 測定値の表わし方²⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するため、材料の同位体比を次のように示した。鉛には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb の独立した 4 つの同位体があり、同位体比は²⁰⁶Pb/²⁰⁴Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁴Pb、²⁰⁸Pb/²⁰⁴Pb、²⁰⁴Pb/²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pb、²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pb、²⁰⁴Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁶Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁴Pb/²⁰⁸Pb、²⁰⁶Pb/²⁰⁸Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁸Pb という 12 の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4 種類の同位体を含む²⁰⁶Pb/²⁰⁴Pb – ²⁰⁷Pb/²⁰⁴Pb と ²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pb – ²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pb という 2 つの図（図 1 と図 2）を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表わし、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表わした。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦 6 世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8 世紀以降に作られた錢貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域を設定する場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

6. 結 果

測定の結果として得られた鉛同位体比を表 2 に示し、図 1 ~ 図 4 に図化した。測定結果から判断すると、今回の資料は中国華北産の材料の中で特定領域 ‘a’ あるいは華北領域付近に位置した。

中尾 5 号石棺から出土した銅釧は三つの破片が重なって分布することから、同一の材料で作られた可能性が高く、一つの銅釧であることを示唆する。西弥護免遺跡出土の仿製鏡は中国の華北産材料で作られた可能性を示唆し、方保田白石遺跡出土の仿製鏡も華北産の材料を利用した可能性が示された。方保田東原遺跡から出土した仿製鏡と銅鏡は中国華北の特定領域 ‘a’ に分布した。これら資料に関する鉛同位体比の測定結果はこれまでの研究で得られた材料の歴史的な変遷に矛盾しない。

これらの結果を理解しやすくするため、今まで測定された弥生時代および古墳時代の銅釧、仿製鏡、銅鏡などと比較し、図 5 ~ 図 14 に示した³⁾。図 5 ~ 図 6 は今回の銅釧の測定結果と今まで測定された弥生時代および古墳時代の銅釧の測定結果を比較した図である。今回の銅釧は弥生時代後期のものといわれているが、鉛同位体比の測定を行った結果、弥生時代の銅釧は中国の華北あるいは特定領域 ‘a’ 産材料が主に利用されたことがわかった。古墳時代の銅釧の場合、

測定された例が極めて少ないため、まだ推測の段階であるが、中国華北および華南産材料を利用している例があった。

今までに測定された仿製鏡と今回の資料を比較し、図7～図10に示した。弥生時代の仿製鏡は中国の華北産材料の領域あるいは特定領域‘a’にはほとんどが位置しており、古墳時代の仿製鏡は中国の華北産材料の領域あるいは華南産の材料の領域に位置した。今回の仿製鏡は弥生時代後期のものといわれており、弥生時代の仿製鏡が分布する領域に位置したので、今までの測定と矛盾はない。

図11～図14はこれまで測定された銅鏡と今回の資料を比較した図である。弥生時代の銅鏡の場合、そのほとんどが中国華北の特定領域‘a’に位置しており、古墳時代の銅鏡は中国の華南産材料の領域に位置することがわかっている。このことは時代によって鉛同位体比の分布が異なることを示唆している。今回の資料の中で資料名12と13は弥生時代後期のもので、資料番号16と17は古墳時代の土器と共に出土していることなどから古墳時代の製品と推定されている。鉛同位体比の測定結果ではこれら4点の銅鏡は中国華北の特定領域‘a’に位置しており、弥生時代の銅鏡と同一の傾向がみられる。

表2 熊本県山鹿市文化財管理センター収蔵の青銅製品の鉛同位体比値

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	銅釧15-a	17.964	15.630	38.636	0.8700	2.1507	BP1190
2	銅釧15-b	17.969	15.636	38.654	0.8701	2.1511	BP1191
3	銅釧15-c	17.965	15.630	38.635	0.8701	2.1506	BP1192
4	仿製鏡19	17.747	15.531	38.385	0.8752	2.1629	BP1193
5	仿製鏡14	17.901	15.561	38.516	0.8693	2.1516	BP1194
6	仿製鏡11	17.735	15.538	38.372	0.8761	2.1636	BP1195
7	銅鏡12	17.721	15.538	38.396	0.8768	2.1666	BP1196
8	銅鏡13	17.748	15.553	38.451	0.8764	2.1666	BP1197
9	銅鏡16	17.727	15.538	38.399	0.8763	2.1653	BP1198
10	銅鏡17	17.735	15.541	38.405	0.8763	2.1655	BP1199
11	仿製鏡18	17.740	15.538	38.400	0.8759	2.1646	BP1200
誤 差		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

7. 考 察

古代の肥後国である熊本地域では発達した鉄器文化と共に青銅器文化も早くから展開されたことは考古学研究の成果から確認することができる。高い技術を示す青銅製品や鋳造関連遺跡などが熊本各地から確認されていることはこの地域において展開された青銅文化の様相を示す良い証拠にもなると思われる。

熊本県の山鹿市でも様々な青銅製品が出土しており、山鹿市出土文化財管理センターには数多くの文化財が収蔵されている。今回の資料は熊本県山鹿市出土文化財管理センター収蔵の青銅製品9点で、弥生時代後期～古墳時代の製品といわれている。資料は銅釧、仿製鏡、銅鏡であり、これらの青銅製品に関して鉛同位体比の測定を行い、材料の産地を推定してみた。測定結果は次のようにになった。

(1) 銅釧

今回の資料である銅釧は三つの破片となっていたが、これらはもともと一つの製品であるといわれている。これらに関して鉛同位体比の測定を行った結果、三つの破片が中国の華北産材料の領域付近に重なって位置した。これは三つの破片が同一の製品であることを示唆しており、華北産の材料で作られた可能性が高いことを意味する。

(2) 仿製鏡

今回測定した仿製鏡は4点である。弥生時代後期のものといわれているこれらの資料に関して鉛同位体比を測定した結果、3点の仿製鏡は中国華北の特定領域‘a’に位置し、1点は華北産材料の領域の内にほぼ位置し、これらの資料が中国の華北産材料で作られた可能性があることがわかった。特に、これまでに測定された弥生時代と古墳時代の仿製鏡と比較した結果、今回の資料は弥生時代の仿製鏡と類似した傾向を示していることがわかった。すなわち、考古学的に判断した仿製鏡の編年と科学的にみた結果が一致することになり、時代の経過による材料の変化と形式学的な編年と一致していることを意味する。

(3) 銅鏡

今回の資料の中で銅鏡は4点あり、その中の2点は弥生時代後期のもので、残りの2点が古墳時代のものであるといわれている。これらに関して鉛同位体比を測定した結果、4点の銅鏡は中国華北の特定領域‘a’に位置し、華北産材料の中で特定材料が利用された可能性が示された。これまでに測定された弥生時代と古墳時代の銅鏡の測定結果をみると、弥生時代の銅鏡の場合、そのほとんどが華北の特定領域‘a’の材料であった。また、古墳時代の銅鏡はほとんどが中国の華南産材料であった。今までの銅鏡を測定した結果から判断すると、今回の銅鏡4点は弥生時代の製品である可能性が考えられるが、資料17は形態的にみると古墳時代前期のものである。極めて少ない例であるが、古墳時代の銅鏡の中にも華北の特定領域‘a’産材料を利用したと考えられるものもある。今回の銅鏡に関しての測定結果を理解するためには土器との共伴関係、銅鏡の形態学的検討などを経た後にまた再考察する必要があろう。

※引用文献

- 1) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p31～p33
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p35～p39
- 3) 平尾良光、2003「青銅器の鉛同位体比」考古資料大観6、小学館、p350～p363

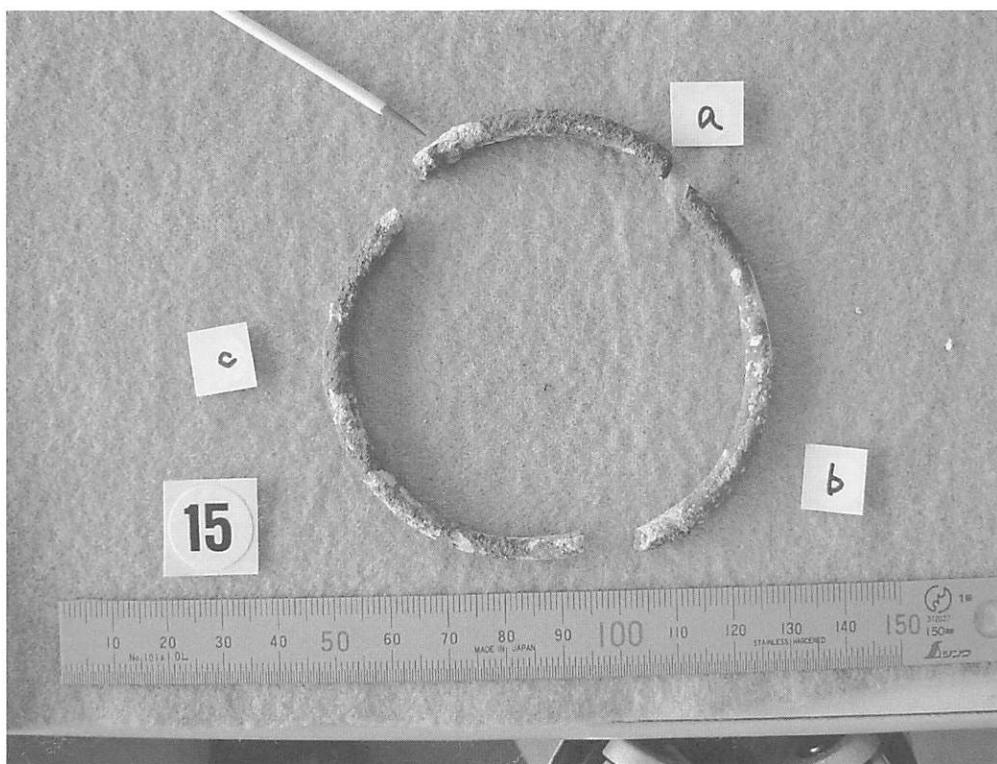


写真1 資料番号 No 1 (銅剣15—a) の試料採取位置

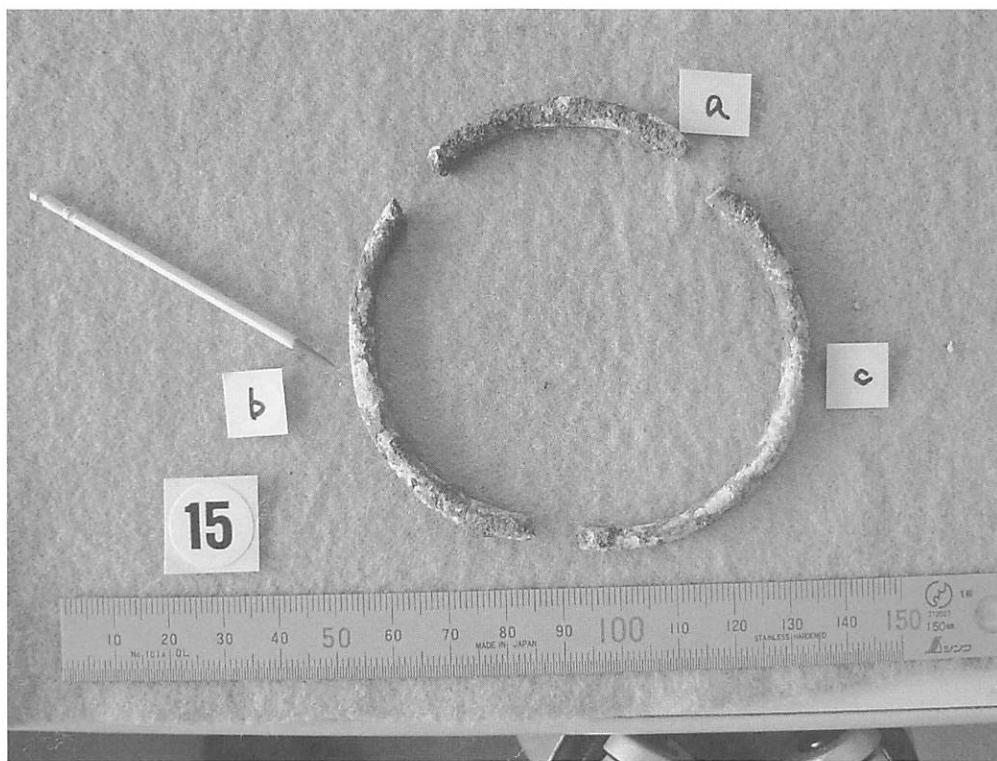


写真2 資料番号 No 2 (銅剣15—b) の試料採取位置

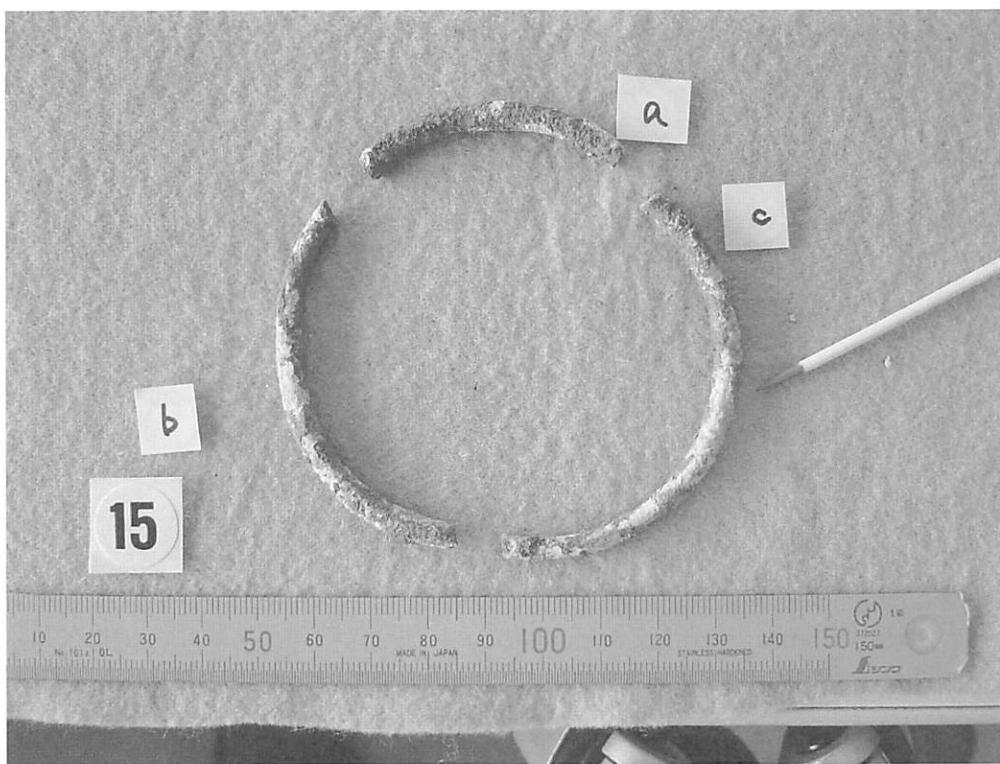


写真3 資料番号No.3(銅鏡15-c)の試料採取位置

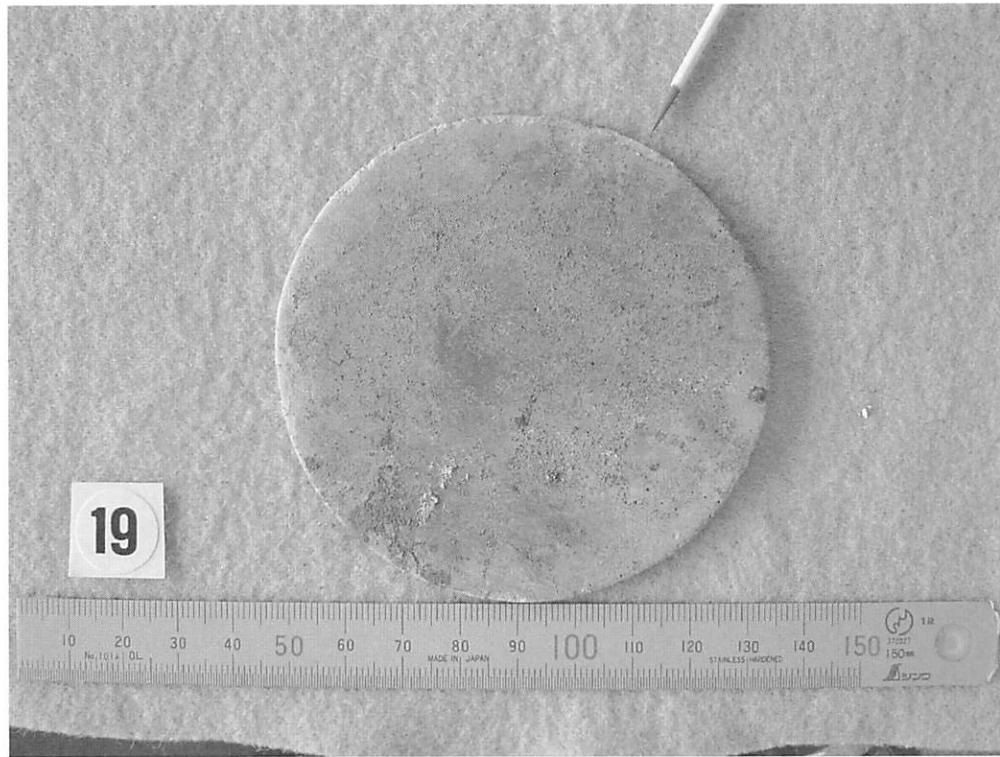


写真4 資料番号No.4(仿製鏡19)の試料採取位置

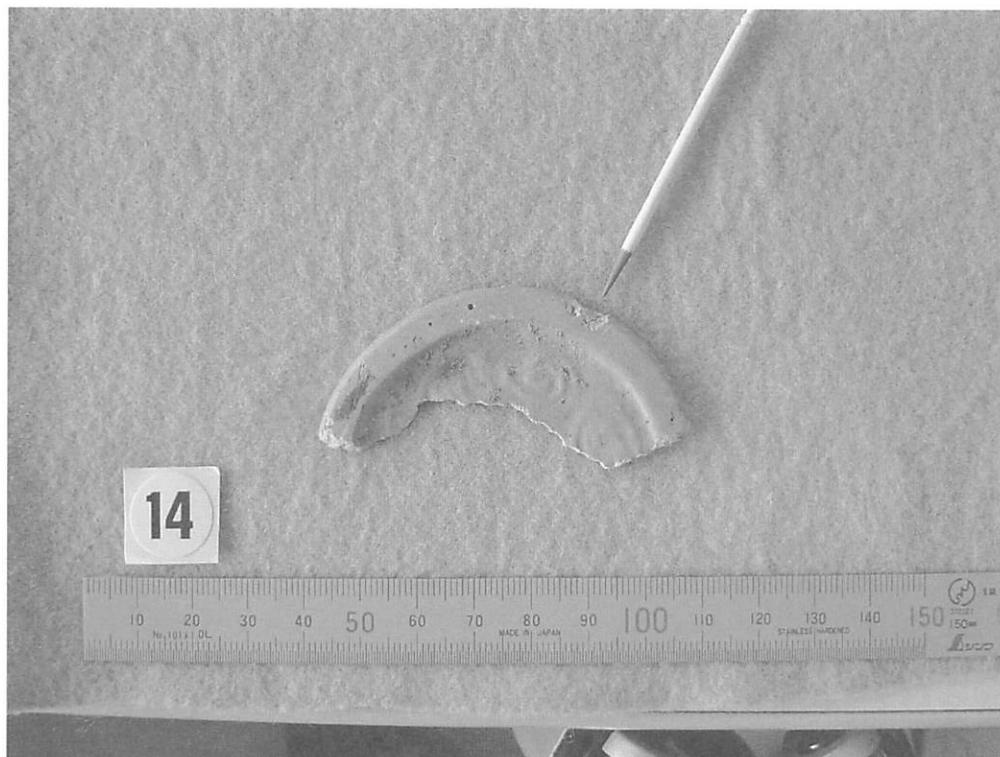


写真5 資料番号No 5（仿製鏡14）の試料採取位置

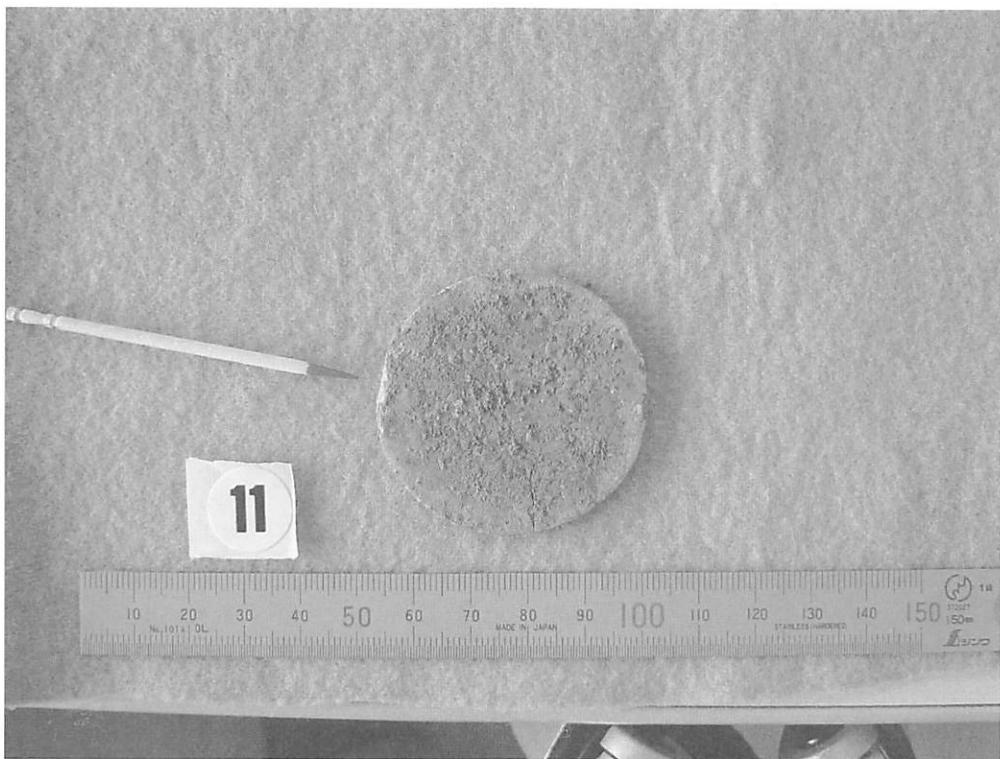


写真6 資料番号No 6（仿製鏡11）の試料採取位置

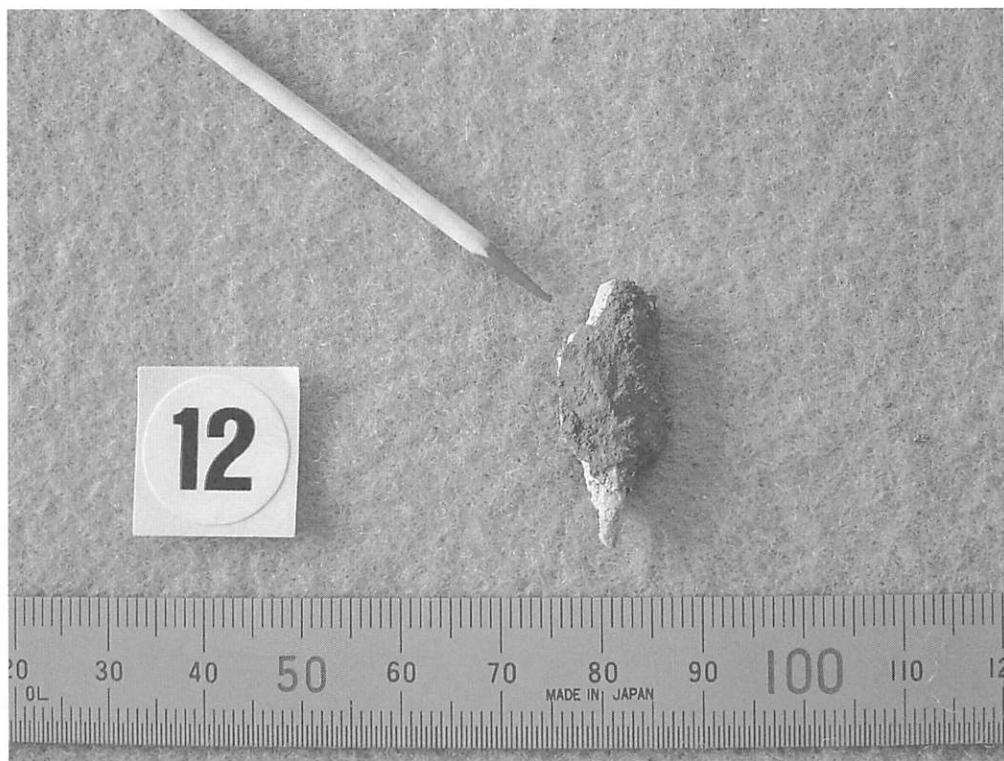


写真7 資料番号 No 7 (銅鎌12) の試料採取位置

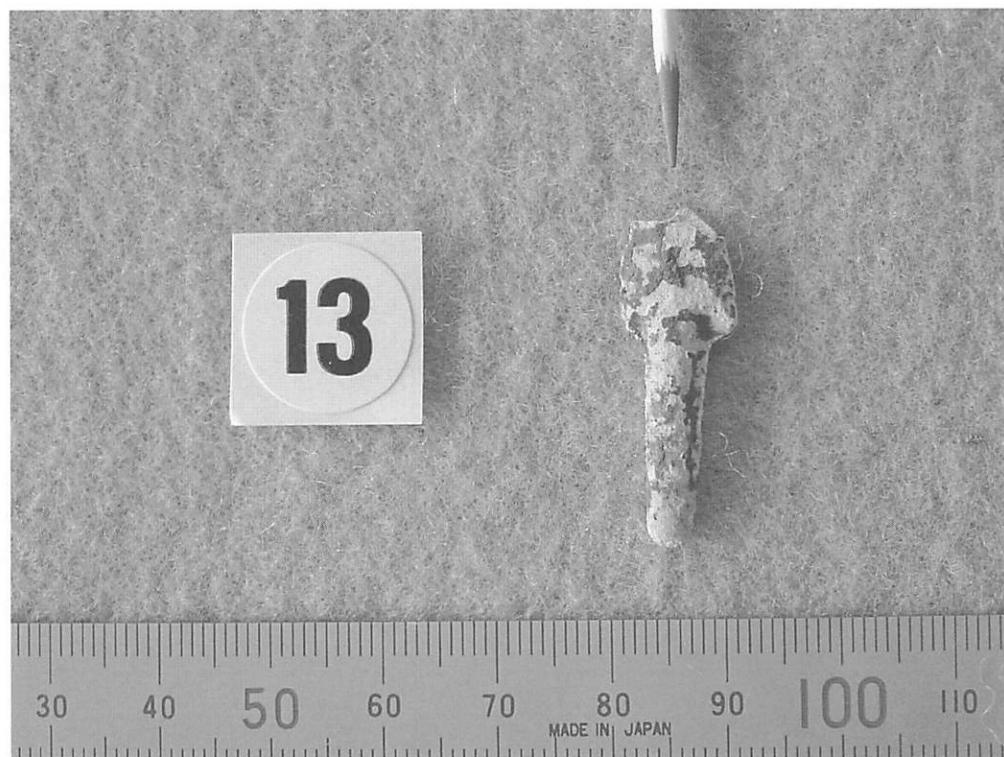


写真8 資料番号 No 8 (銅鎌13) の試料採取位置

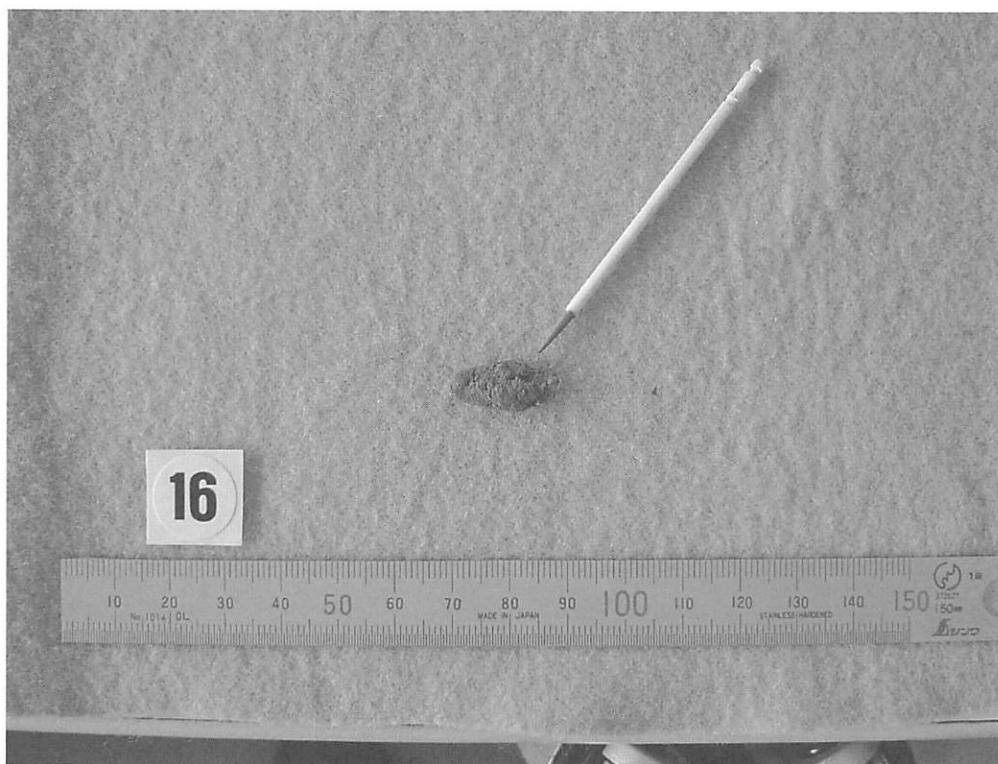


写真9 資料番号No 9（銅錫16）の試料採取位置

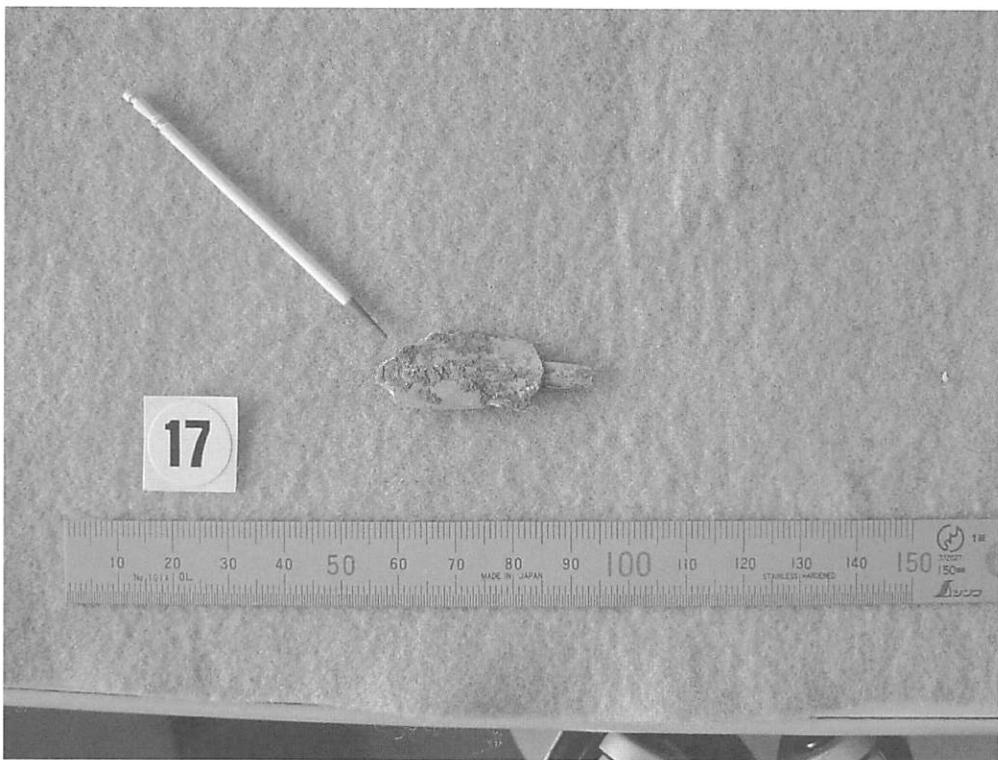


写真10 資料番号No10（銅錫17）の試料採取位置

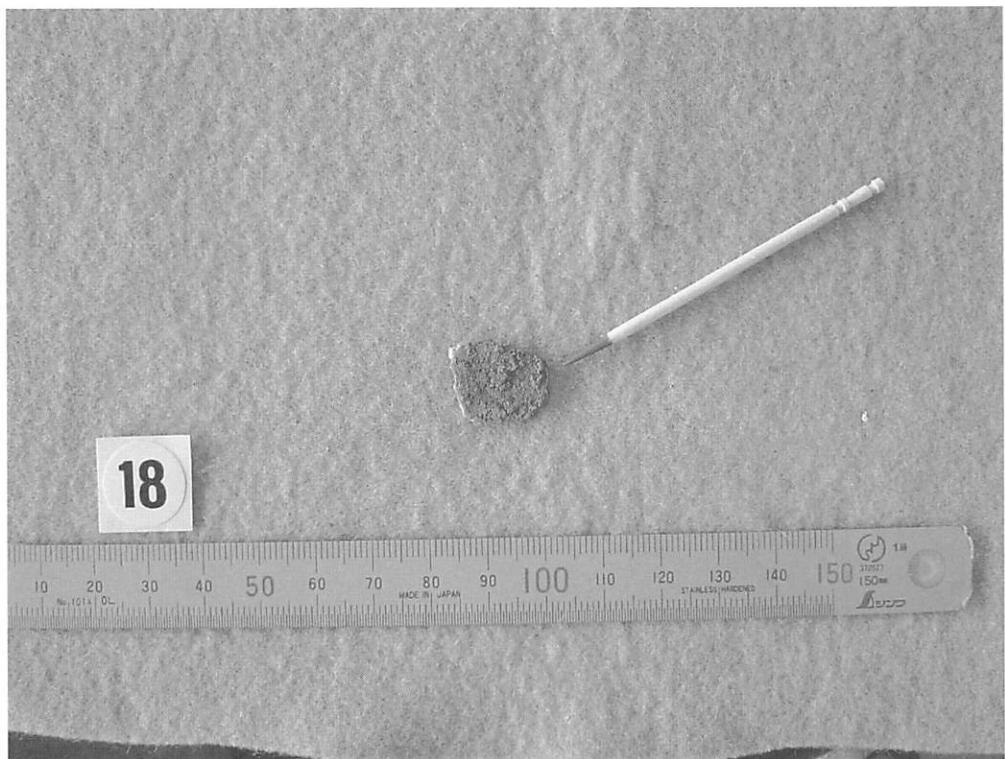


写真11 資料番号 No11（仿製鏡18）の試料採取位置

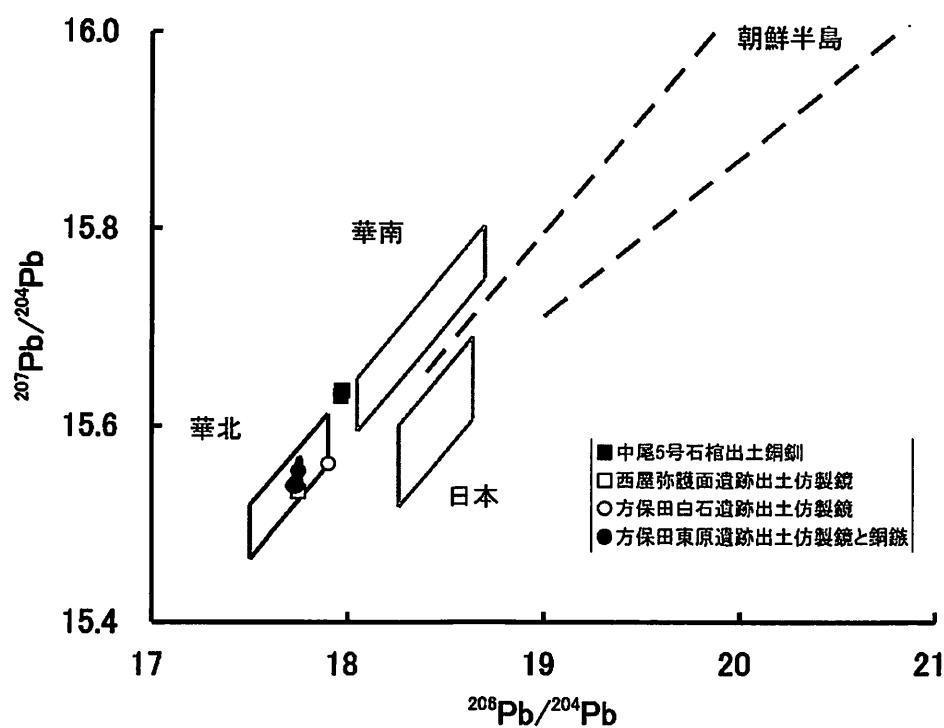


図1 熊本県山鹿市出土文化財管理センター収蔵の青銅製品の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

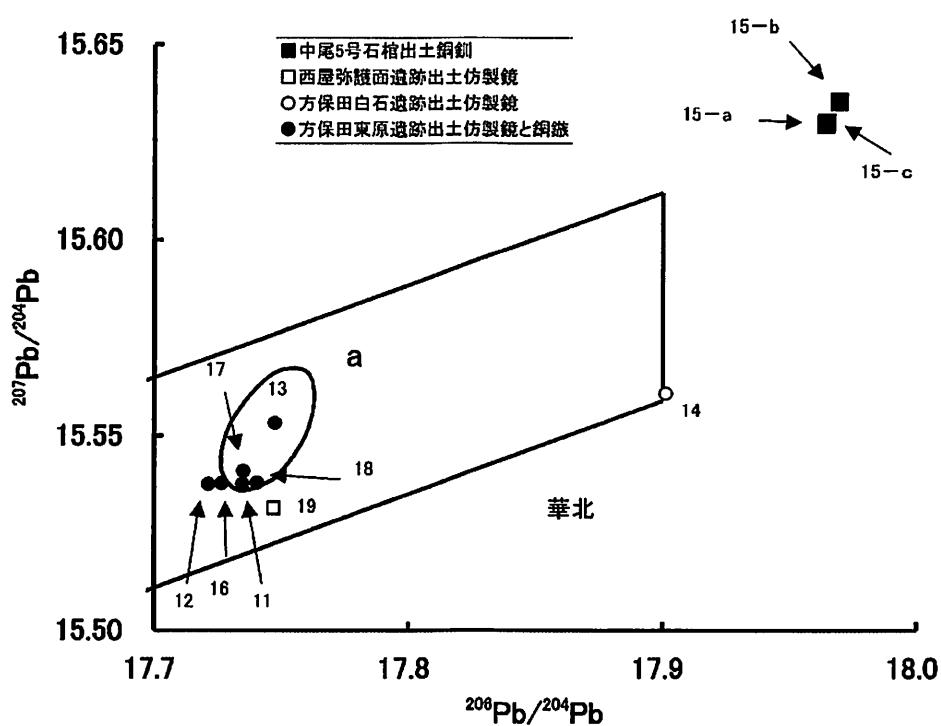


図2 図1の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

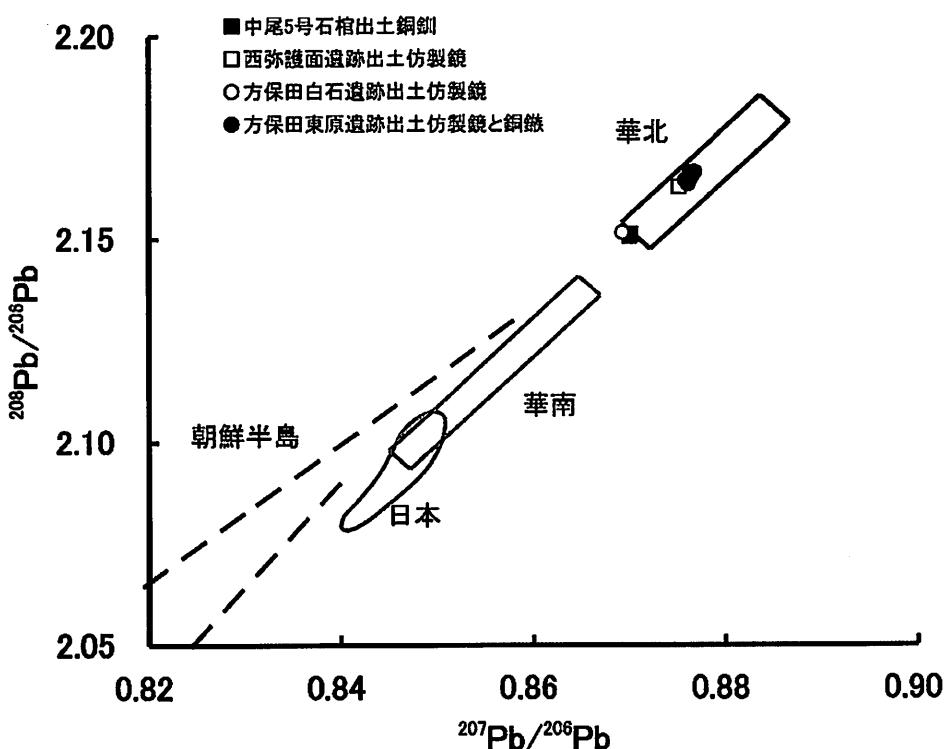


図3 熊本県山鹿市出土文化財管理センター収蔵の青銅製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

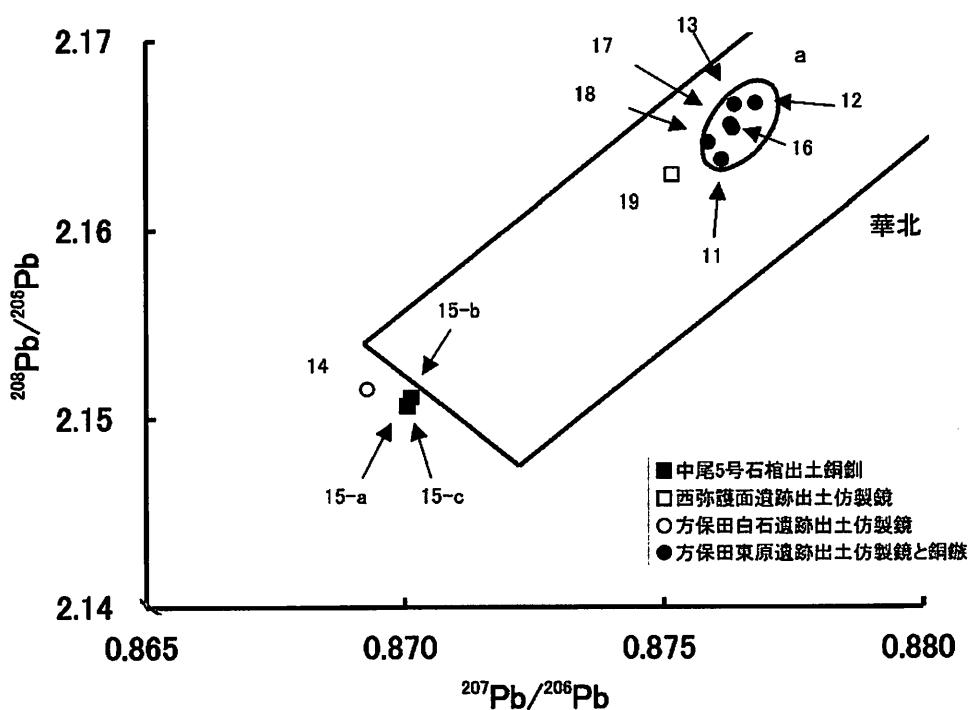


図4 図3の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

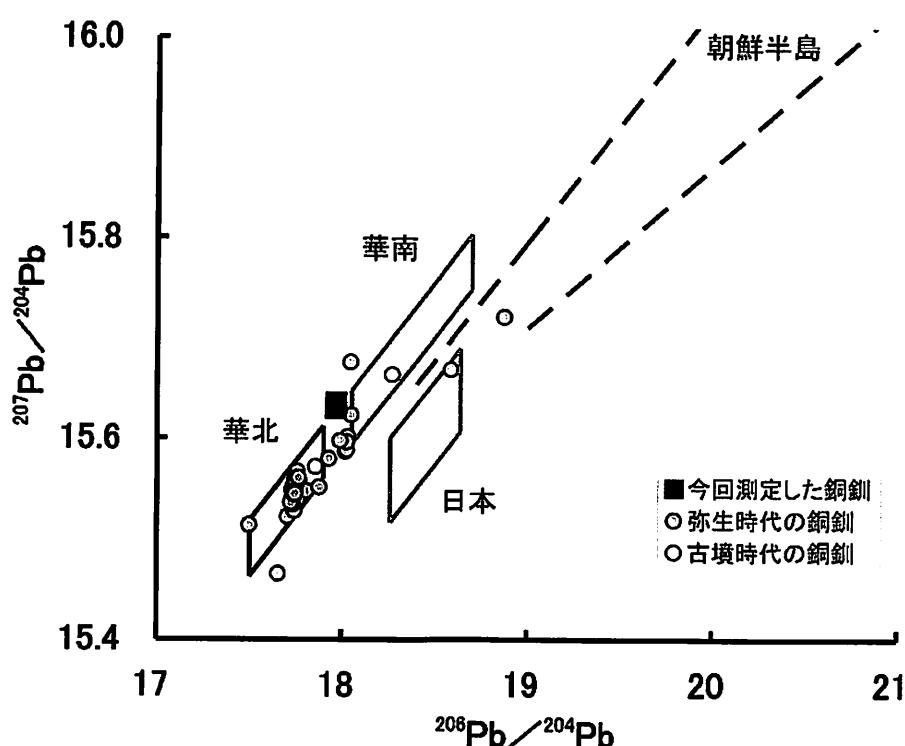


図5 今回の銅剣と弥生時代および古墳時代の銅剣の鉛同位体比
($^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - {^{207}\text{Pb}}/{^{204}\text{Pb}}$)

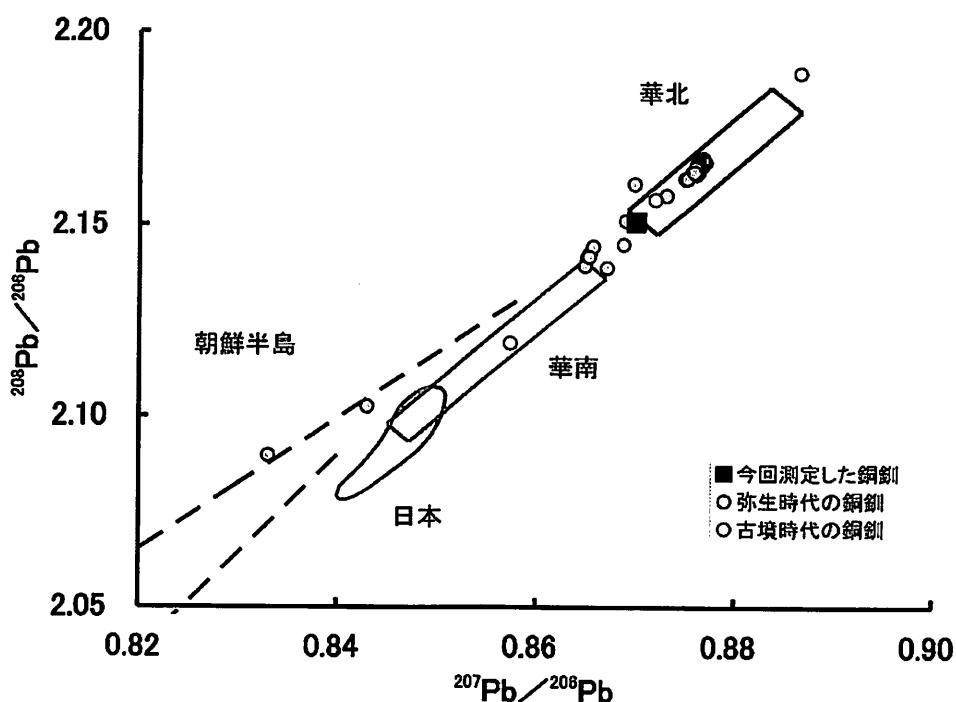


図6 今回の銅剣と弥生時代および古墳時代の銅剣の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - {^{208}\text{Pb}}/{^{206}\text{Pb}}$)

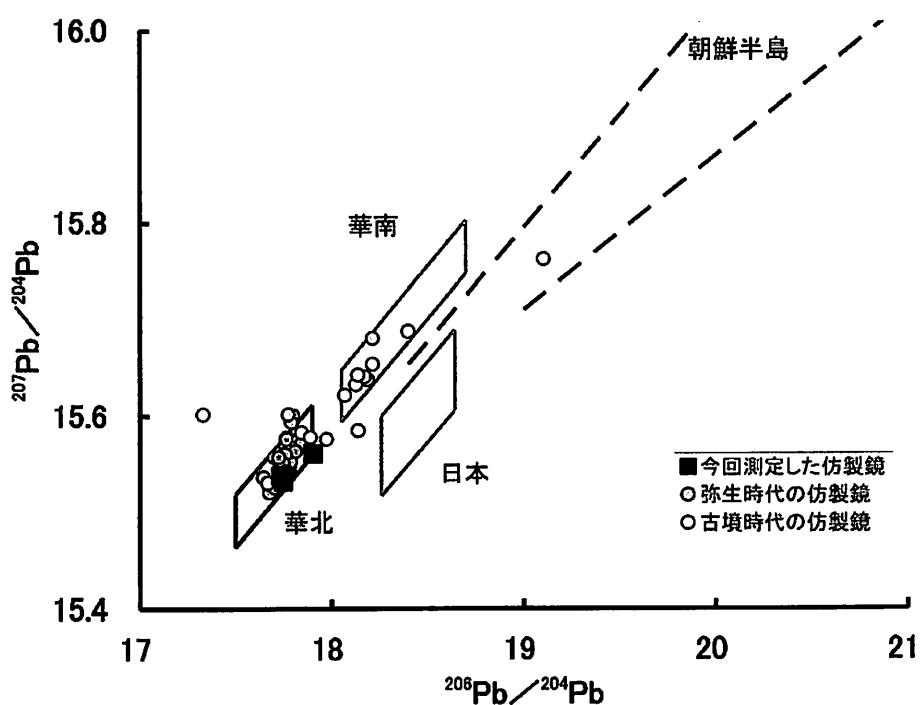


図7 今回の仿製鏡と弥生時代および古墳時代の仿製鏡の鉛同位体比
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

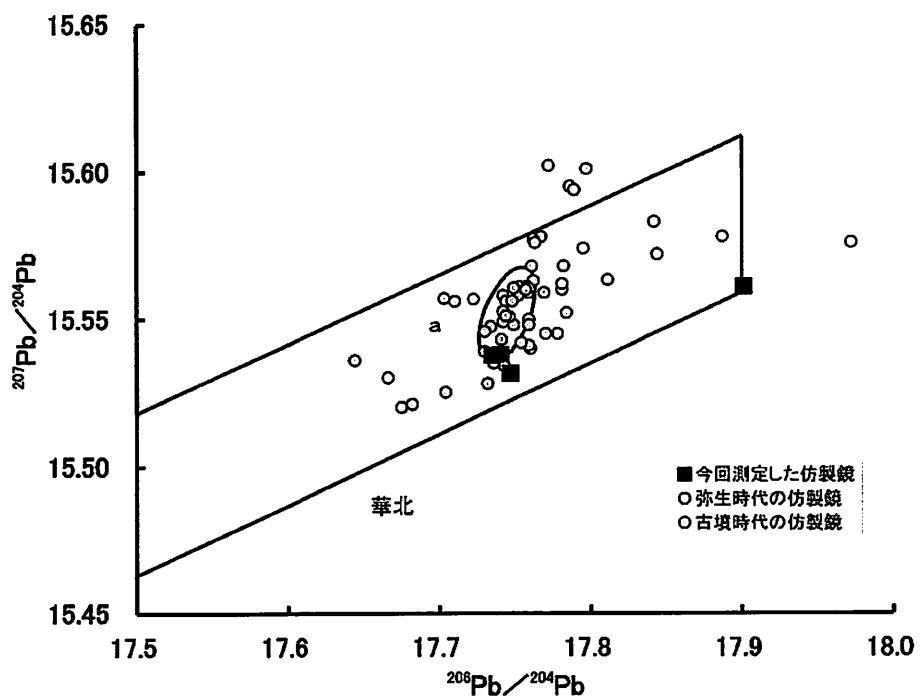


図8 図7の拡大図
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

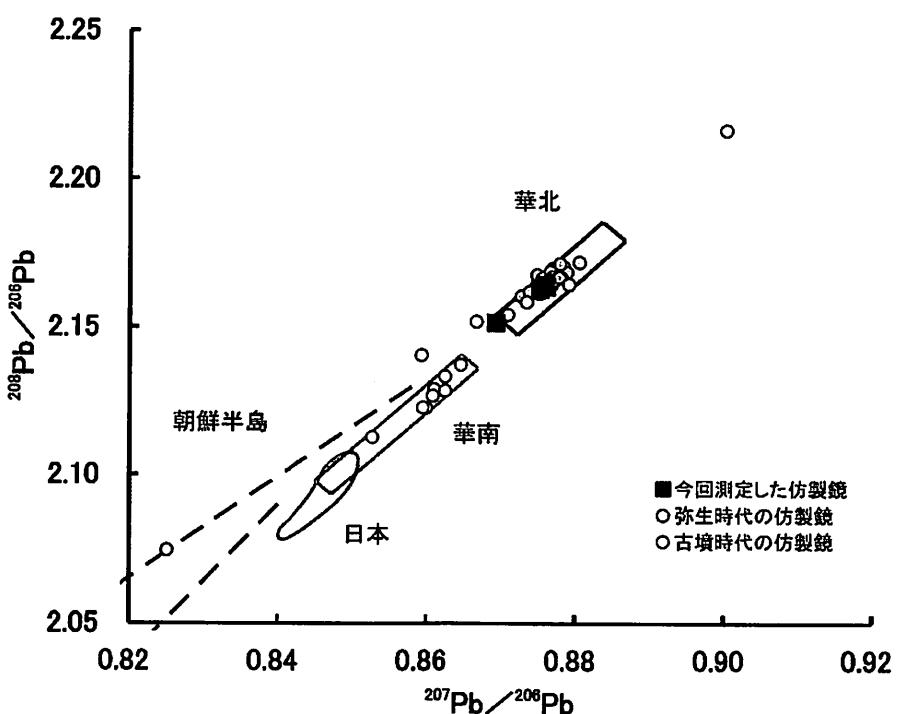


図9 今回の仿製鏡と弥生時代および古墳時代の仿製鏡の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - {^{208}\text{Pb}}/{^{209}\text{Pb}}$)

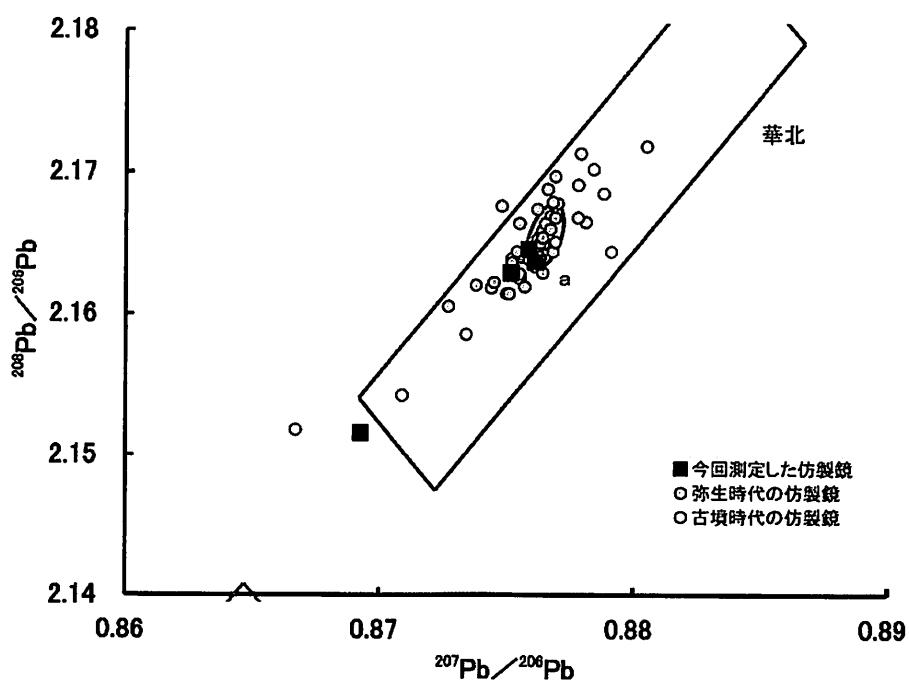


図10 図9の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - {^{208}\text{Pb}}/{^{209}\text{Pb}}$)

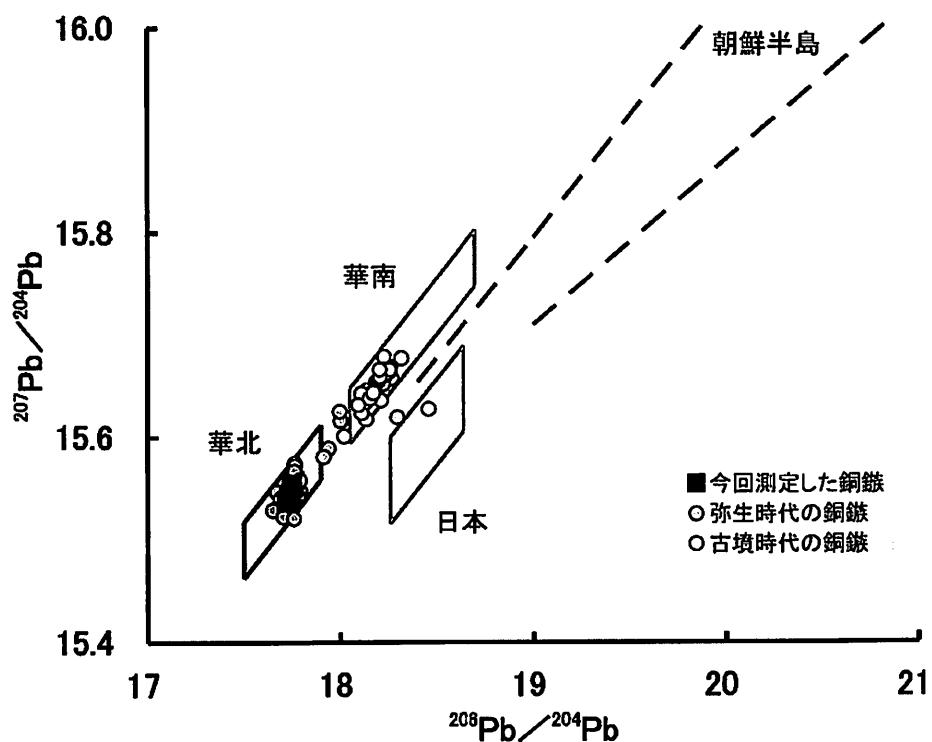


図11 今回の銅鏡と弥生時代および古墳時代の銅鏡の鉛同位体比
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

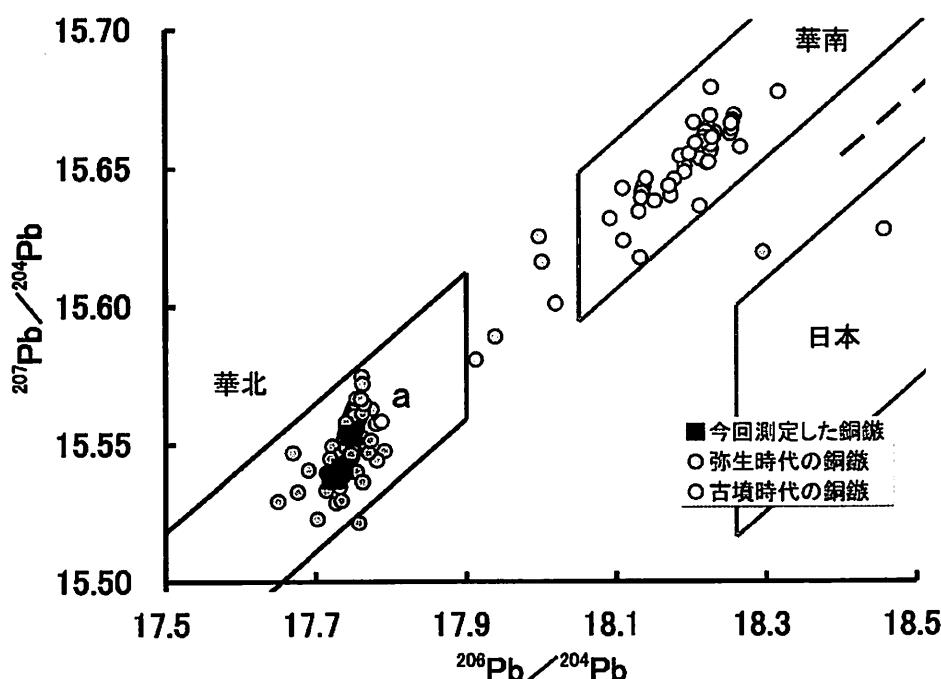


図12 図11の拡大図
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

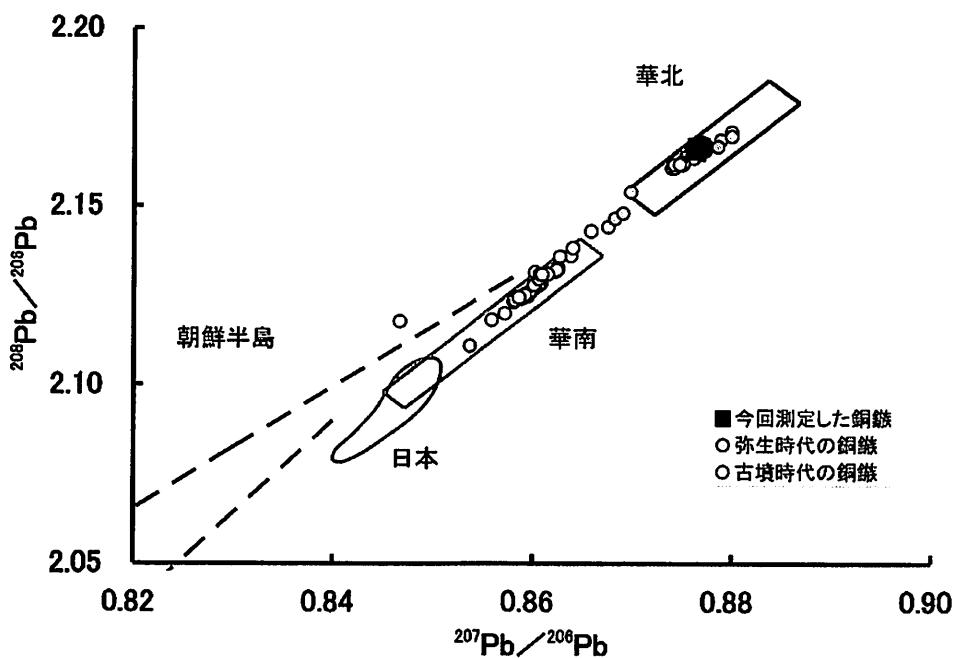


図13 今回の銅鏡と弥生時代および古墳時代の銅鏡の鉛同位体比
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

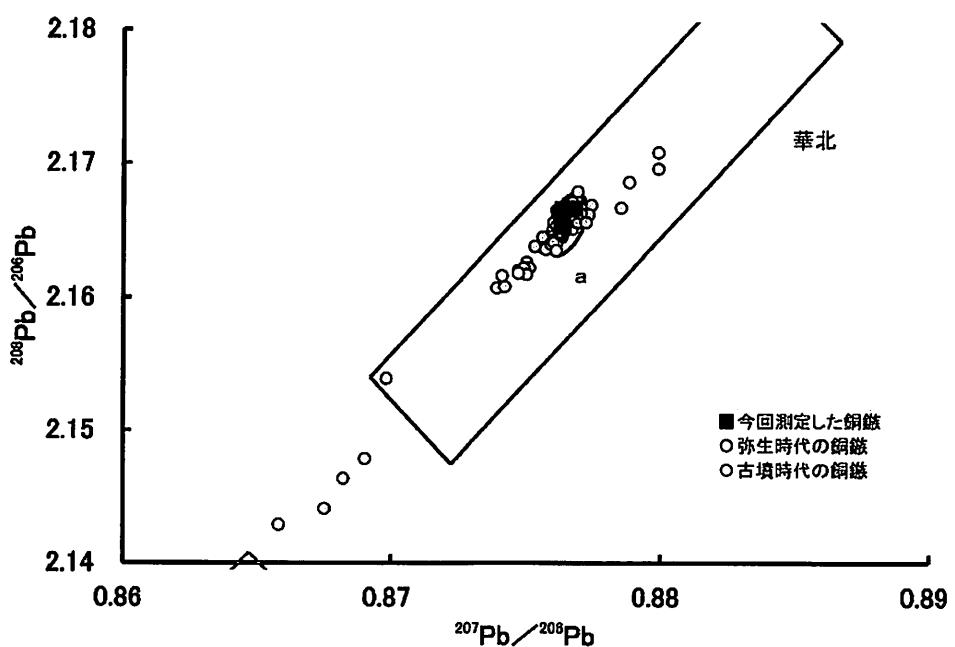


図14 図13の拡大図
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

熊本県山鹿市立博物館所蔵の
弥生時代～古墳時代の青銅製品
に関する鉛同位体比

別府大学大学院 文学研究科

ノ ジヒヨン
魯 禔弦

下村 智
平尾良光

1. はじめに

九州のほぼ中央に位置する熊本県は豊富な自然環境にめぐまれており、それを反映するかのように熊本県内の各地には旧石器時代から近世までの遺跡が分布している。これらの遺跡の多くは河川流域を中心に分布している。古代の肥後の領域を占める熊本県では早くから鉄器文化が展開されたことでもよく知られているが、それと共に高い技術の青銅器文化も発達していたことがこれまでの研究成果から明らかになった。中国製青銅器、朝鮮半島製青銅器をはじめ、日本で製作された青銅器や鋳造関連遺物、遺跡なども熊本地域から確認されている。青銅器に関する鋳造関連遺跡が確認されたことは当然青銅製品の製作のための材料獲得の問題に関わることになる。

青銅製品を作るための青銅材料をどこから手に入れたかを明らかにすることは難しいが、少なくとも鉛同位体比測定法を用いれば青銅材料の産地を推定することができる。全国的にみても鉄器文化が早くから発達した熊本地域において、どのような青銅器文化が展開されたかを調べることにも鉛同位体比法は良い研究方法の一つである。そこで、熊本県山鹿市博物館に収蔵されている青銅製品に関して鉛同位体比法を用いた測定を行い、以下のように考察した。

2. 資 料

今回の資料は熊本県山鹿市立博物館に収蔵されている青銅製品の中で、方保田東原遺跡や庄遺跡、中尾・下原遺跡、天神免遺跡、南関町下城下遺跡などから出土した青銅製品18点である。これらの青銅製品は巴形銅器1点、方格規矩鏡1点、仿製鏡6点、舶載鏡2点、中広形銅矛1点、広形銅矛1点、細形銅劍2点、細形銅戈1点、銅鍔3点である。これらの資料から鍔を微少量採取し、鉛同位体比測定用の試料とした。

資料とした青銅製品は18点であるが、仿製鏡1点は2ヶ所から試料採取をしたため、実際に測定した試料数は19点である。試料の採取位置は写真1～18に示した。

3. 鉛同位体比の原理¹⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、その値は地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない²⁰⁴Pb量と、変化した²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、少量の硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.2μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計(本学に設置されているサーモフィッシュ・サイエンティフィック社の表面電離型質量分析計 MAT262)の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200°Cで測定した。また、同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

5. 測定値の表わし方²⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するため、資料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{201}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{204}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{204}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{204}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ (B式図)と $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ (A式図)という2つの図(図1と図2)を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。

中国の前漢時代・後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表わし、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表わした。弥生時代後期の突線鈕銅鐸や広形銅矛などの青銅器の中でもより後期とされる資料は華北産材料の領域の中で一定な範囲に集まって分布するので、この領域を特定領域‘a’と表わした。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた鏡貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域には、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布領域を朝鮮半島産材料の範囲とした。

このことは表1で示されるように青銅材料の产地が時代的に変化していることを示しており、この一般的な材料変化の中で測定された資料について個々に考えたい。

6. 結 果

19点の試料の鉛同位体比測定値を表2に示し、図1～図4に図化した。測定の結果、今回の資料はほとんどが中国の華北領域あるいは特定領域‘a’に分布した。また、中国の華南領域および朝鮮半島産材料の領域に位置する資料もあった。

6. 1 巴形銅器

測定した巴形銅器1点はその大きさが国内最大級で、方保田東原遺跡から出土した。弥生時代の巴形銅器は9脚あるいは7脚、6脚を有し、古墳時代の巴形銅器は4脚あるいは5脚を有していることが普通である³⁾。今回の資料は7脚で、弥生時代の製品といわれている。

この資料の測定結果⁴⁾とこれまで測定された巴形銅器の結果を比較して図5～図8に示した。図をみると、弥生時代の巴形銅器のほとんどは中国華北領域および特定領域‘a’に位置することがわかる。方保田東原遺跡から出土した今回の資料も特定領域‘a’に分布した。

これまで測定された巴形銅器は弥生時代の資料であり、古墳時代の資料はまだ測定された例がない。そのため、この比較では弥生時代と古墳時代の巴形銅器に利用された材料の差異を確認することはできない。

しかしながら、弥生時代の資料が何らかの理由で古墳時代に残っていても良いし、伝世も考えられる。図5～図8で示されるように巴形銅器のほとんどは特定領域‘a’に分布することから、弥生時代としてもより後期の材料であることがわかる。本資料に関してはその中でも典型的な弥生後期の材料を用いていることが示された。

6. 2 方格規矩鏡

本資料の方格規矩鏡は製品の一部しか残っていないが、残りの部分からこの資料は径18.5cmをこえる大きな鏡であることが推測できる。この資料とこれまで測定された弥生時代および古墳時代の方格規矩鏡の測定結果を比較し、図9～図12に示した。

図で判断すると弥生時代の方格規矩鏡は、ほとんどが中国の華北の領域あるいは、その近くに分布した。特に比較資料の約1／3は華北領域から外れて位置した。古墳時代の方格規矩鏡は、ほとんどが中国華南産領域に分布した。今回の資料はA式図では特定領域‘a’の中に、B式図でも特定領域‘a’付近に位置した。それ故、方保田東原遺跡出土の方格規矩鏡は特定領域‘a’の材料で作られた可能性があり、これは弥生時代の方格規矩鏡が示す傾向と一致している。

6. 3 仿製鏡

本資料の仿製鏡は6面であるが、資料番号13は落ちた破片と採取した試料を各々測定したため、実際に測定した数は7つである。これらの試料と弥生時代および古墳時代の仿製鏡の測定結果を比較して図13～図16に示した。

図から弥生時代の仿製鏡はほとんどが中国華北あるいは特定領域‘a’に分布し、古墳時代の仿製鏡は主に中国華南産材料の領域に分布することがわかった。今回の資料の場合、2面（資料番号5、6）が華北産材料の領域に、3面（資料番号3、4、13）が特定領域‘a’に、1面（資料番号9）が華南産材料の領域に位置した。その中で資料番号5は特定領域‘a’付近に分布したため、‘a’産材料である可能性も十分ある。また、資料番号13は落ちた破片と採取した試料を各々測定したが、測定の結果、同じ位置に重なって分布した。これは今回の測定の正確さを示す良い証拠にもなるであろう。

資料番号3、4、5、6、13は弥生時代の仿製鏡と同じく、華北産材料の領域あるいは特定領域‘a’に分布したため、弥生時代後期の仿製鏡である可能性が高い。しかし、資料番号9は古墳時代の仿製鏡が示す傾向と類似して華南産材料の領域に位置したため、この仿製鏡は古墳時代の製品である可能性が高いと考えられる。

6. 4 船載鏡

船載鏡は中国あるいは朝鮮半島から日本へ輸入された鏡のこと、本資料である船載鏡2点は中国から船載されたという。これまで測定された船載鏡の中で、方格規矩鏡や内行花文鏡を除く他の鏡の分布と共に本資料を図に載せた（図17～図20）。

弥生時代の船載鏡はほとんどが華北産材料の領域あるいは特定領域‘a’に分布し、古墳時代の船載鏡は華南産材料の領域に位置する傾向が現れた。

本資料である船載鏡が出土した方保田東原遺跡は弥生時代後期の遺跡といわれおり、今までの研究成果からみても、今回の船載鏡は弥生時代後期の製品である可能性が考えられる。

6. 5 銅 鏃

これまで測定された弥生時代の銅鏃は約80点、古墳時代の銅鏃が約60点である。これらの銅鏃と本資料の銅鏃3点の測定結果を比較し、図21～図24に示した。図をみると、弥生時代の銅鏃の場合、ほとんどが中国華北産材料の領域、特に特定領域‘a’を中心に分布し、古墳時代の銅鏃は華南産材料の領域に分布することがわかる。

今回の資料である銅鏃3点の内、2点（資料番号11、12）は特定領域‘a’に位置したが、1点（資料番号10）の銅鏃は華南産材料の領域に分布した。このことは2点の銅鏃が弥生時代の製品であり、1点の銅鏃が古墳時代の製品である可能性を示唆する。

6. 6 中広形銅矛・広形銅矛

庄遺跡からは中広形銅矛1点が、下城下遺跡からは広形銅矛1点が出土している。今回の銅矛とこれまで測定された弥生時代の銅矛を比較し、図25～図28に示した。弥生時代の中広形銅矛は華北あるいは華北周辺、朝鮮半島産材料の領域に分布した。弥生時代の広形銅矛はそのほとんどが華北の特定領域‘a’に分布した。今回の中広形銅矛と広形銅矛は華北の特定領域‘a’に位置した。弥生時代の青銅製品に使われた材料の変遷から考えると、今回の中広形銅矛は弥

生時代後期の製品である可能性が示され、また広形銅矛も弥生時代後期の製品と類似した値を示した。

6. 7 細形銅劍・細形銅戈

中尾・下原遺跡からは細形銅戈が1点、天神免遺跡から細形銅劍2点が出土した。これらの資料とこれまで測定された弥生時代の資料を比較し、図29～図30に示した。その結果、弥生時代の細形銅戈と細形銅劍は朝鮮半島産材料から中国の材料まで幅広く分布する傾向が現れた。

今回の資料の場合、細形銅戈は朝鮮半島産材料の領域に、細形銅劍は各々朝鮮半島産材料（資料番号16）の領域と華北産材料（資料番号17）の領域に分布した。

7. 考 察

以上のように熊本県山鹿市立博物館が所蔵している青銅製品の材料产地に関して研究を行った。熊本県では各種類の青銅製品が出土しているが、鉛同位体比法による材料の产地推定研究はあまり進んでいない。青銅製品においてその材料の产地がわかることは当時の文化的な状況や対外交流などを理解するための良い情報にもなることで意味があるであろう。

材料の产地推定の研究を行った山鹿市立博物館所蔵の青銅製品は総数18点であり、資料の半分以上が中国華北産あるいは特定領域‘a’に分布することがわかった。これらの青銅製品は弥生時代後期の遺跡から出土しており、分析の結果は弥生時代後期の製品が示す一般的な分布とほぼ一致した。ただし、仿製鏡1面（資料番号9）と銅鏡1点（資料番号10）は華南産材料の領域に分布し、古墳時代の製品とより強い関連性があると考えられる。

今回の資料の半分以上は方保田東原遺跡から出土したが、同一の遺跡から各種類の青銅製品が出土したことは注目される。また、仿製鏡が多く出土しており、厚さが薄い仿製鏡、曲がった仿製鏡など、他地域あるいは他遺跡ではあまりみられない形態を成している製品もある。製作地に関しては形式学な分析も加味して検討しなければならないが、青銅器を多数保有する文化が展開されていたことは間違いない。今後、熊本県出土の青銅製品において材料の产地推定の研究が継続的に行われれば、熊本県内の青銅文化の特徴を理解する良い情報を得ることができるのでなかろうか。

※参考文献

1. 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p31～p33
2. 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）、p35～p39
3. 水野清一・小林行雄、1959年「考古学辞典」東京創元社
4. 平尾良光、2003「青銅器の鉛同位体比」考古資料大観6、小学館、p350～p363

表1 青銅材料と時代の変化

表2 熊本県山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の鉛同位体比値

番号	資料名	出土遺跡	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{203}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{203}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	測定番号
1	巴形銅器	方保田東原遺跡（1次調査出土）	17.735	15.545	38.423	0.8765	2.1665	BP1201	
2	方格規矩鏡	“ (大道小保管)	17.725	15.536	38.390	0.8765	2.1659	BP1202	
3	仿製鏡	“ (138番地出土)	17.751	15.548	38.426	0.8759	2.1648	BP1203	
4	仿製鏡	“ (119番地出土)	17.736	15.542	38.406	0.8763	2.1654	BP1204	
5	仿製鏡	“ (87-2番地出土)	17.764	15.548	38.435	0.8753	2.1636	BP1205	
6	仿製鏡	“ (119番地出土)	17.687	15.540	38.366	0.8786	2.1691	BP1206	
7	船載鏡	“ (大道小プール出土)	17.846	15.569	38.484	0.8724	2.1564	BP1207	
8	船載鏡	“ (141番地出土)	17.828	15.558	38.567	0.8727	2.1633	BP1208	
9	仿製鏡	“ (209番地出土)	18.146	15.617	38.757	0.8696	2.1359	BP1209	
10	銅鏡	“ (32-2番地出土)	18.078	15.621	38.650	0.8641	2.1379	BP1210	
11	銅鏡	“ (32-1番地出土)	17.727	15.534	38.383	0.8763	2.1653	BP1211	
12	銅鏡	“ (1次調査出土)	17.740	15.540	38.403	0.8760	2.1648	BP1212	
13-1	仿製鏡	方保田遺跡 (方保田・日の出)	17.736	15.534	38.383	0.8758	2.1641	BP1213	
13-2	仿製鏡	“	17.736	15.533	38.380	0.8758	2.1640	BP1214	
14	中広形鏡矛	庄遺跡	17.730	15.550	38.403	0.8770	2.1660	BP1215	
15	広形銅矛	南関町下坂下遺跡	17.733	15.544	38.417	0.8766	2.1664	BP1216	
16	細形銅戈	中尾・下原遺跡	19.914	15.874	40.385	0.7971	2.0280	BP1217	
17	細形銅劍	天神免遺跡	17.852	15.578	38.356	0.8726	2.1485	BP1218	
18	細形銅劍	“	18.770	15.695	39.274	0.8362	2.0924	BP1219	
		誤差	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006		

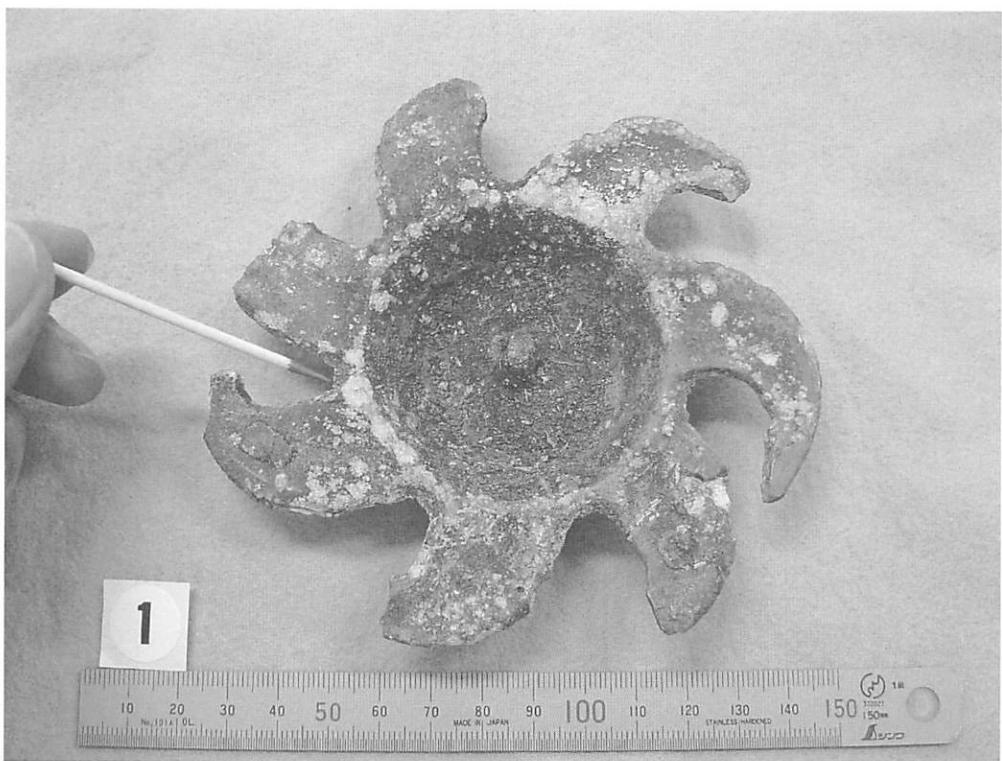


写真1 資料番号1（巴形銅器）の試料採取の位置

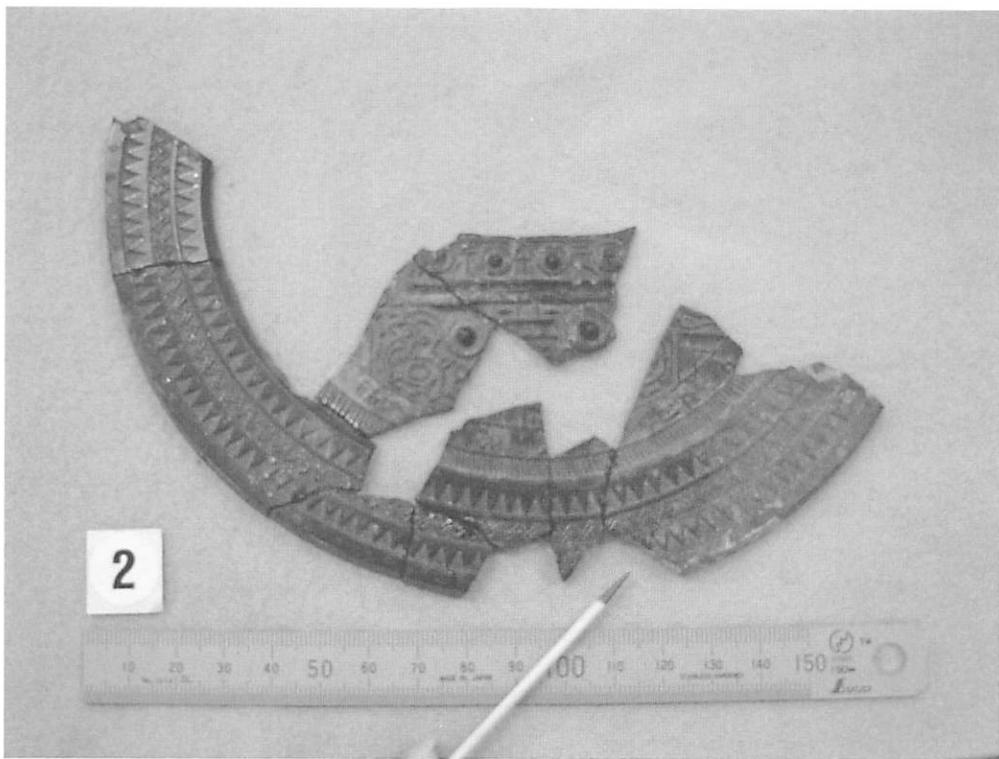


写真2 資料番号2（方格規矩鏡）の試料採取の位置

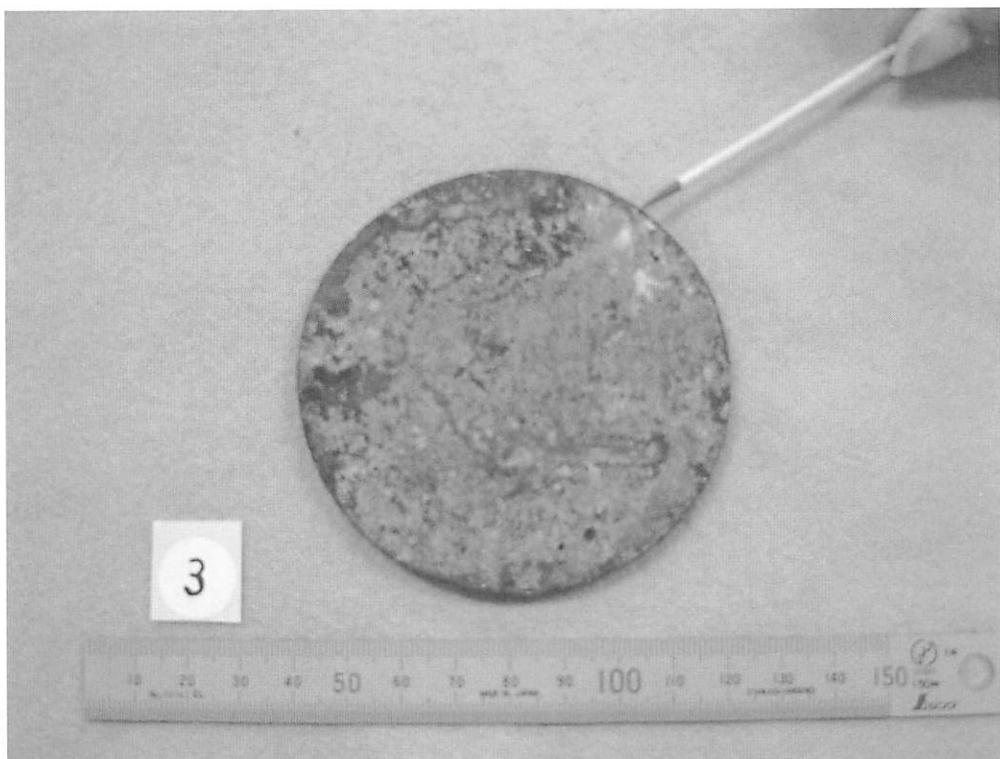


写真3 資料番号3（仿製鏡）の試料採取の位置

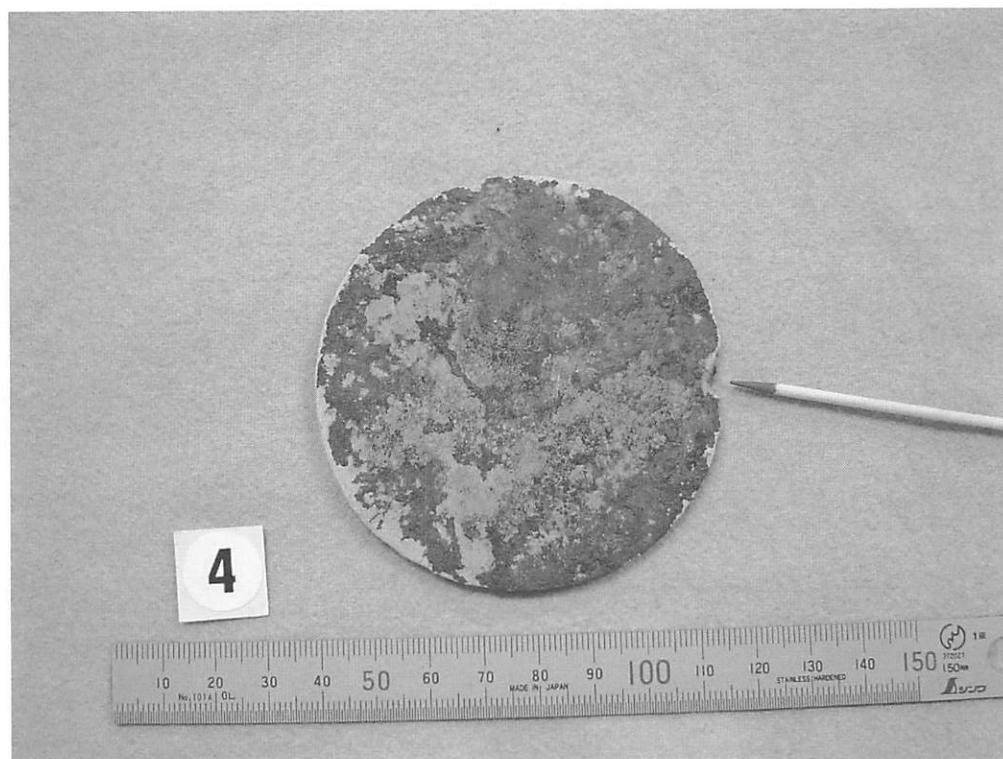


写真4 資料番号4（仿製鏡）の試料採取の位置

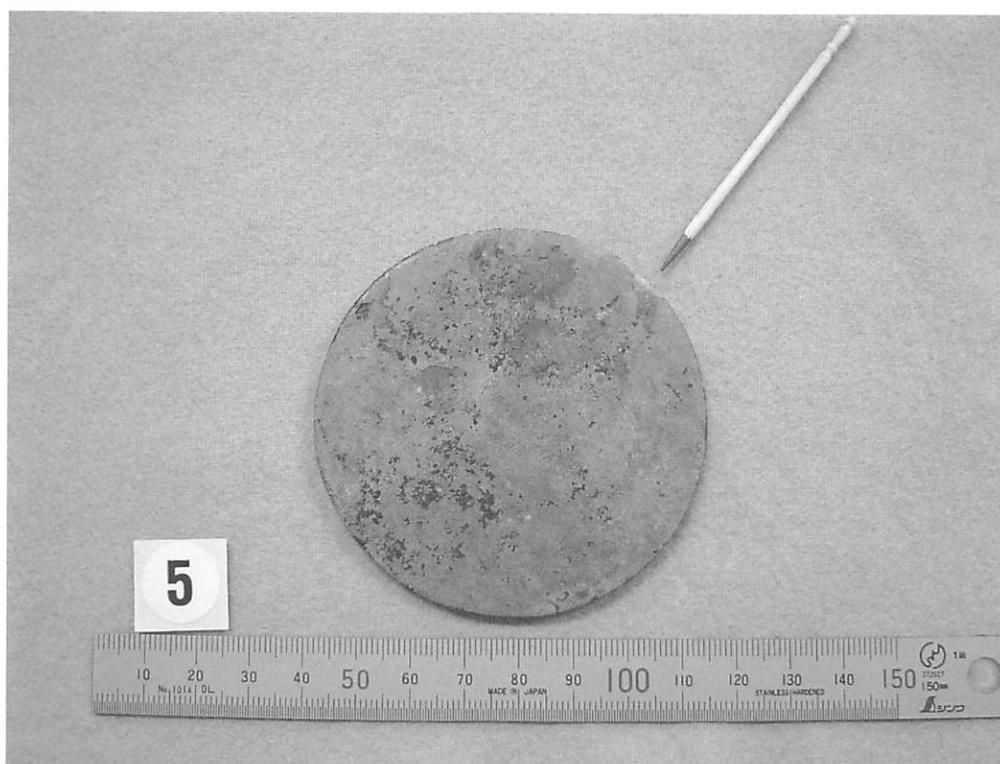


写真5 資料番号5（仿製鏡）の試料採取の位置

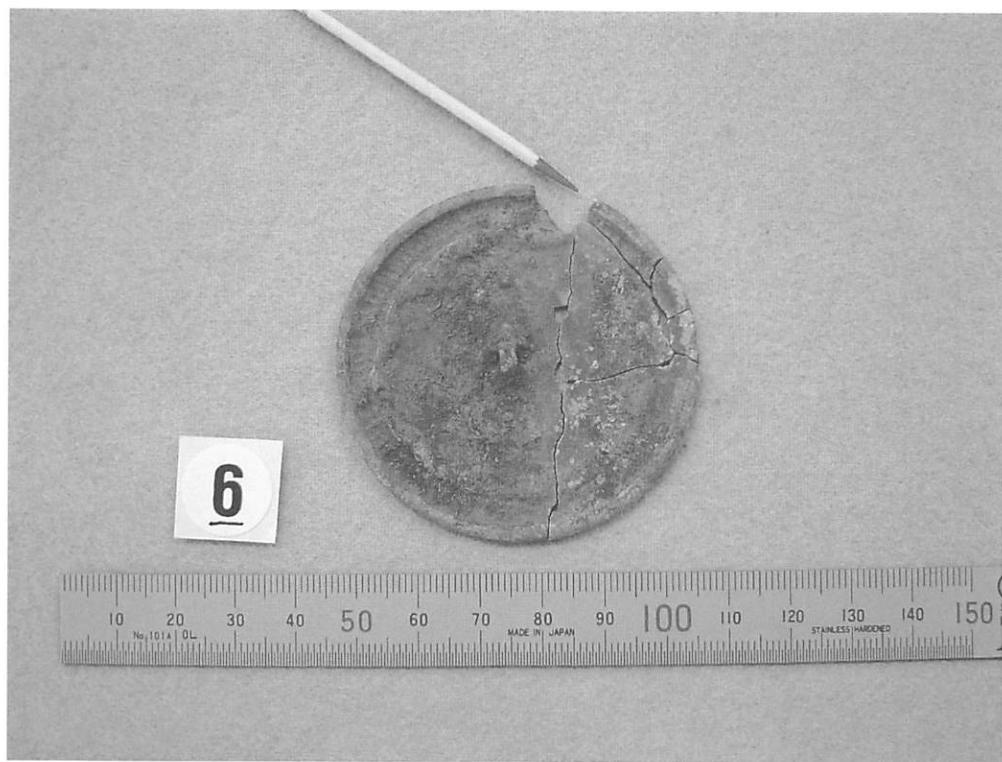


写真6 資料番号6（仿製鏡）の試料採取の位置

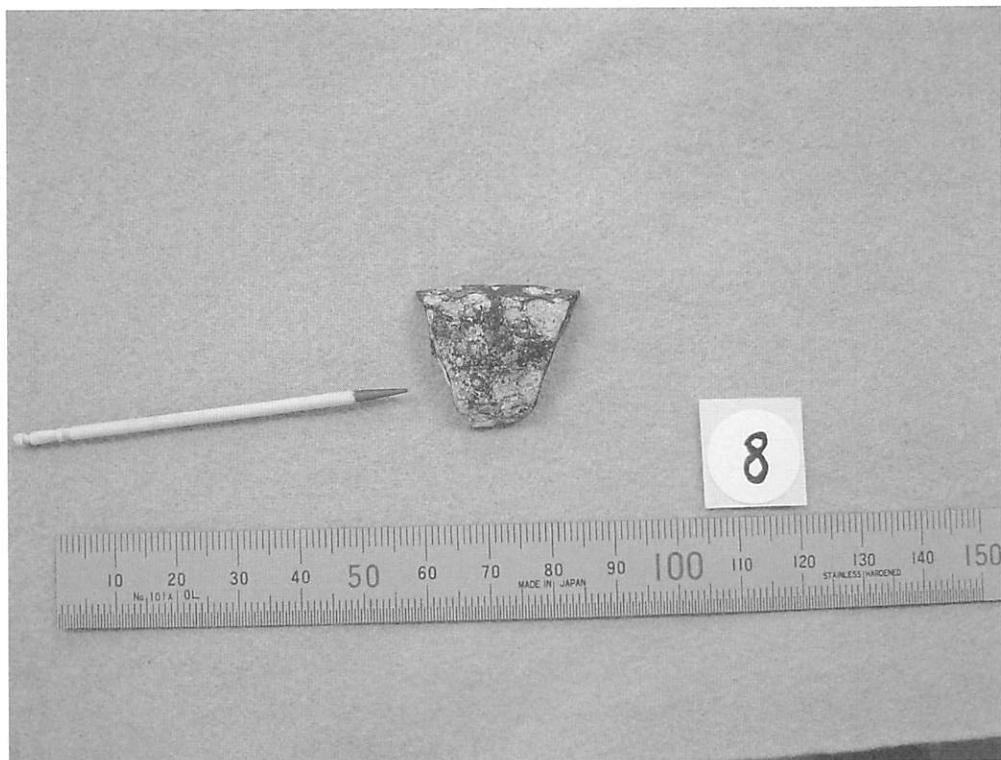


写真7 資料番号7（船載鏡）の試料採取の位置

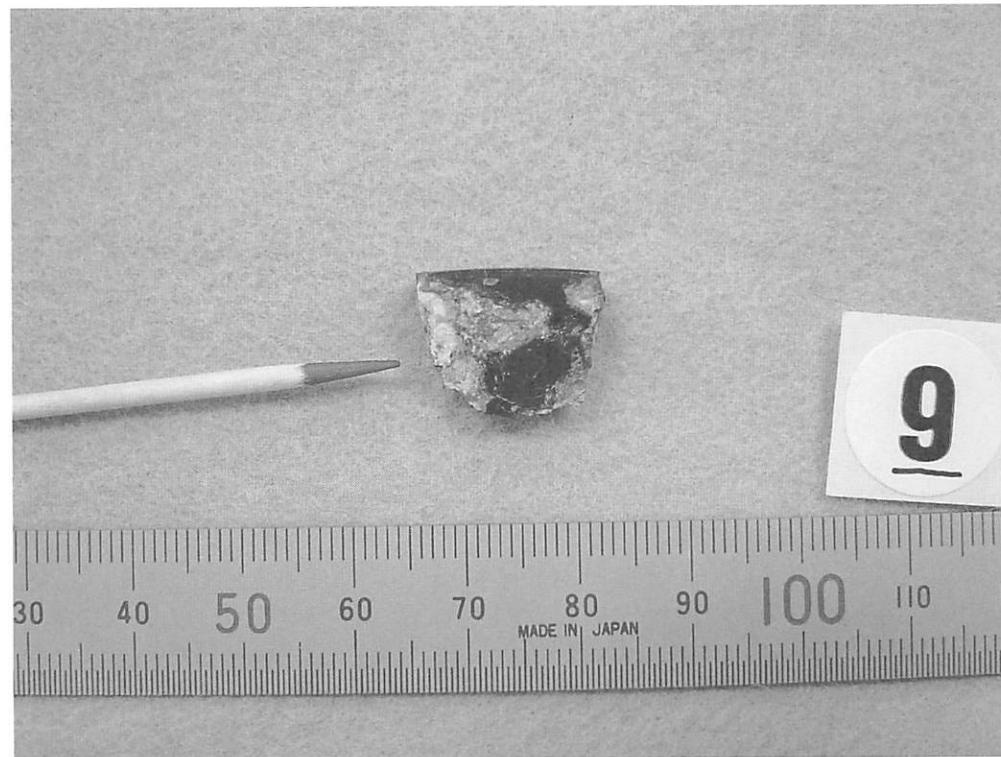


写真8 資料番号8（船載鏡）の試料採取の位置

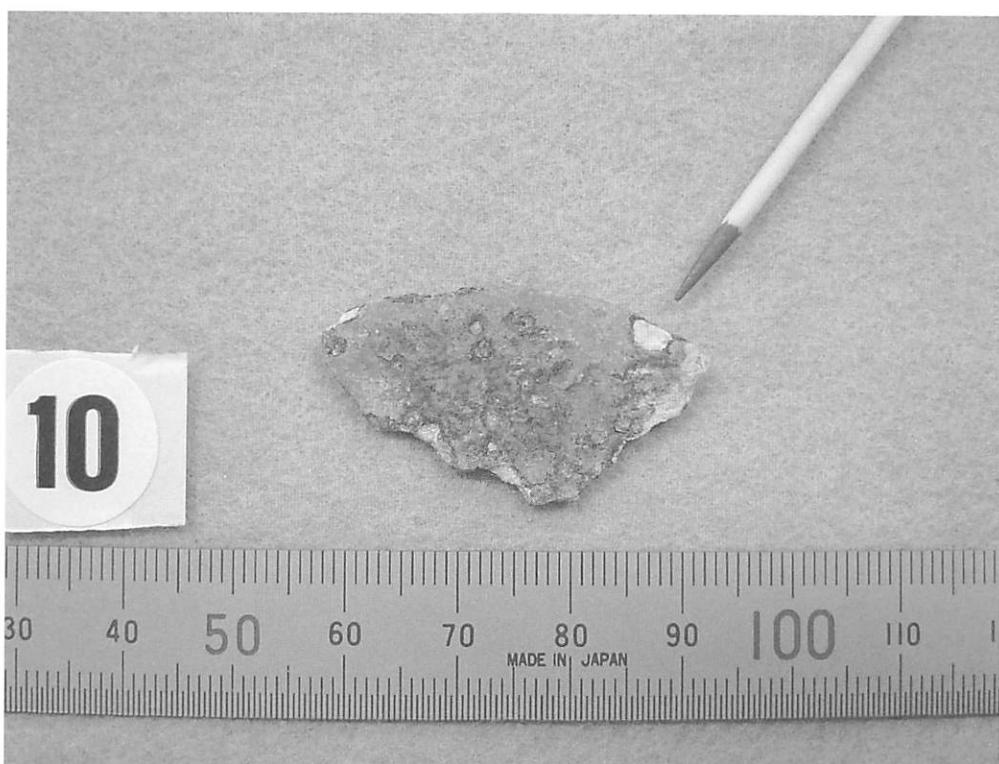


写真9 資料番号9（仿製鏡）の試料採取の位置

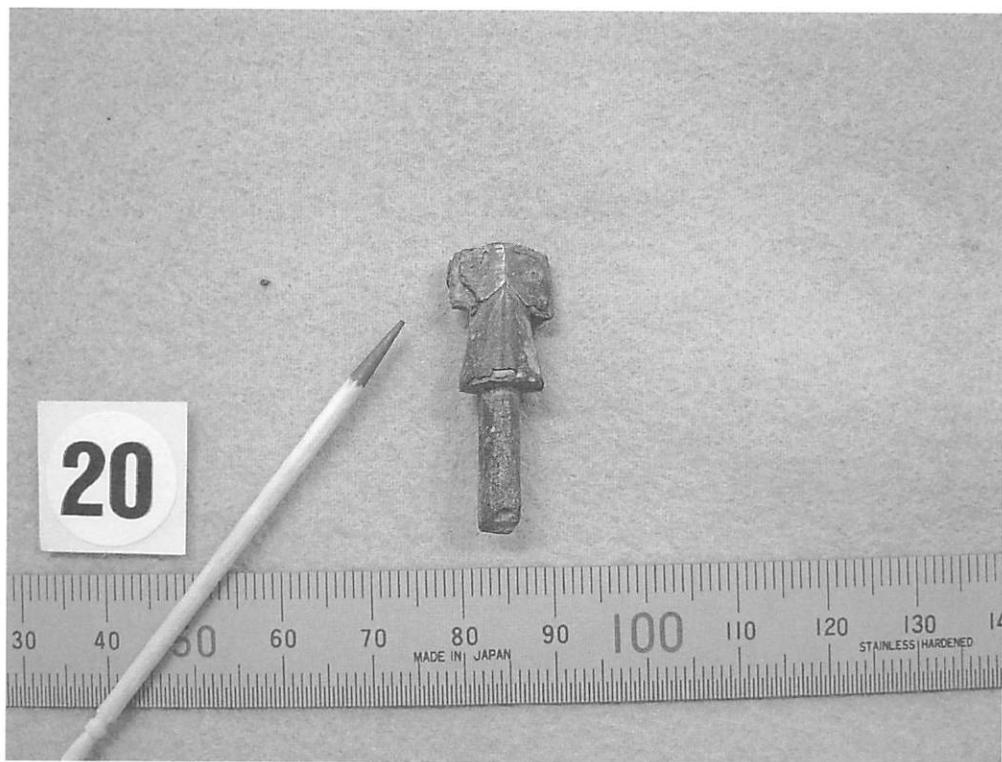


写真10 資料番号10（銅鏡）の試料採取の位置



写真11 資料番号11（銅鎌）の試料採取の位置

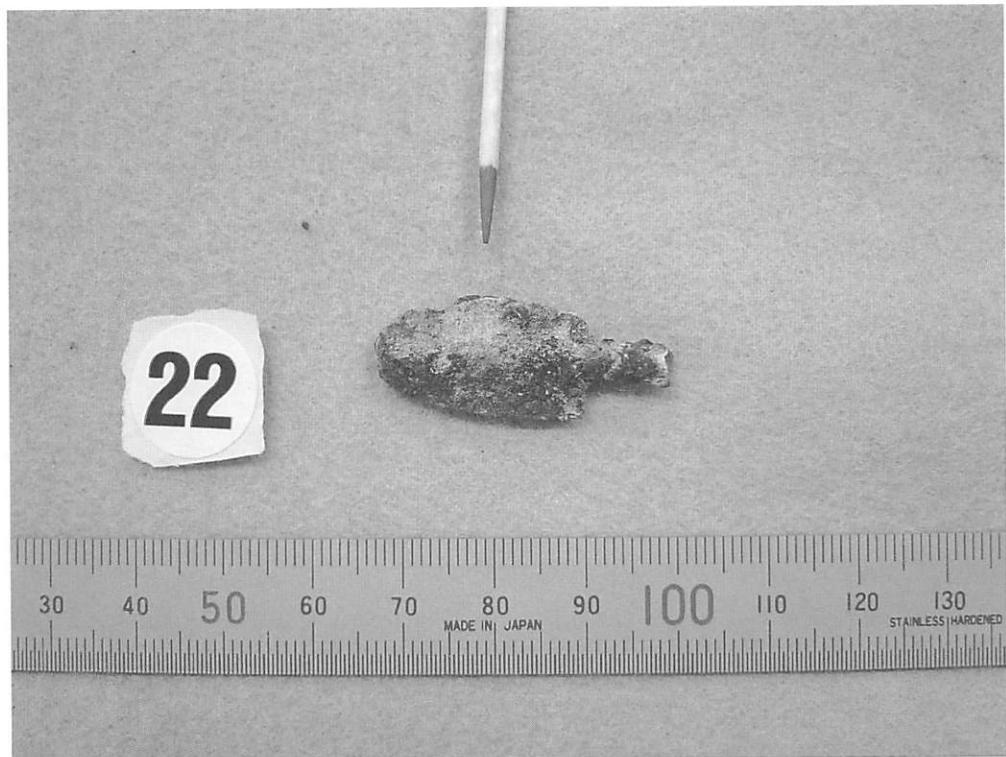


写真12 資料番号12（銅鎌）の試料採取の位置

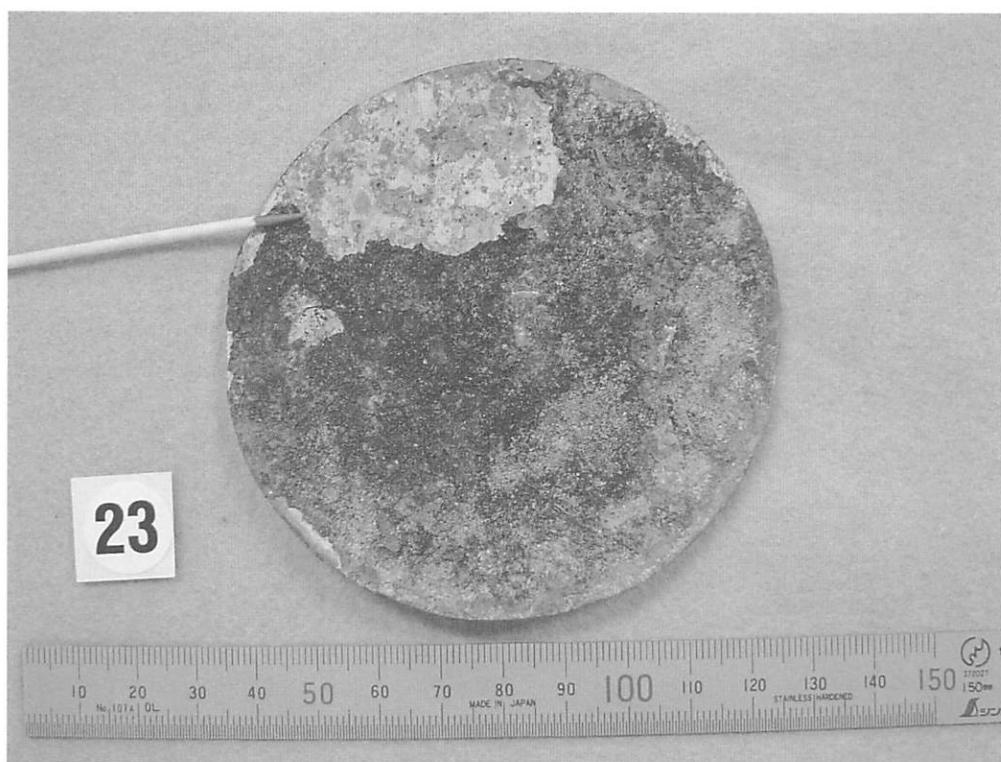


写真13 資料番号13（彷彿鏡）の試料採取の位置

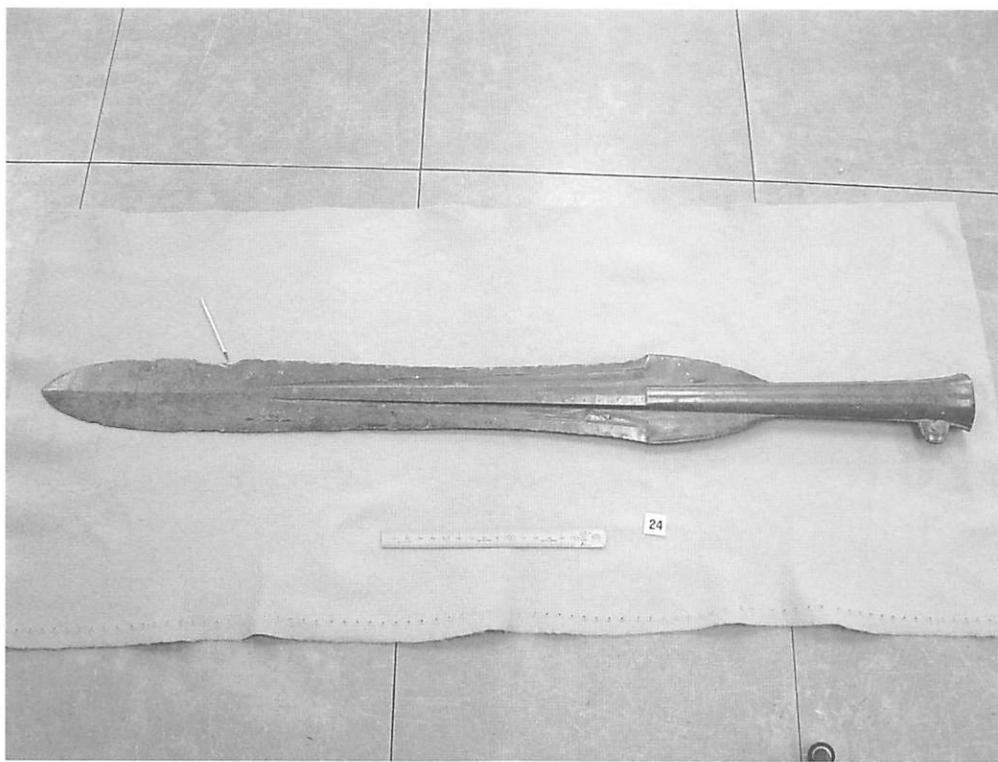


写真14 資料番号14（中広形銅矛）の試料採取の位置

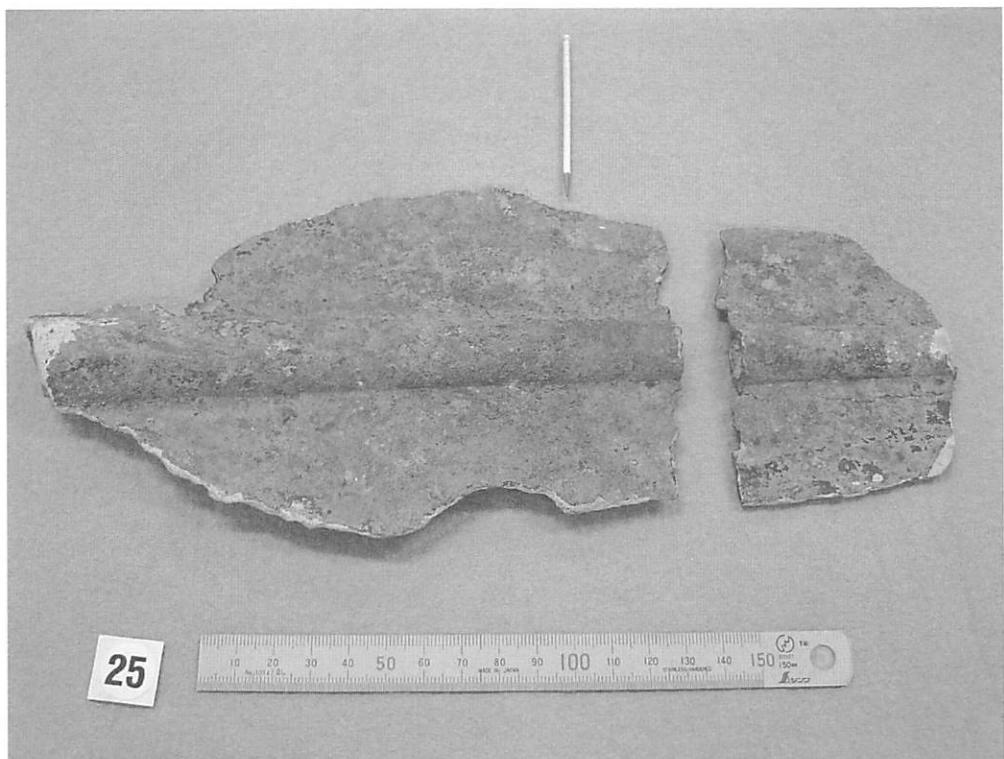


写真15 資料番号15（広形銅矛）の試料採取の位置

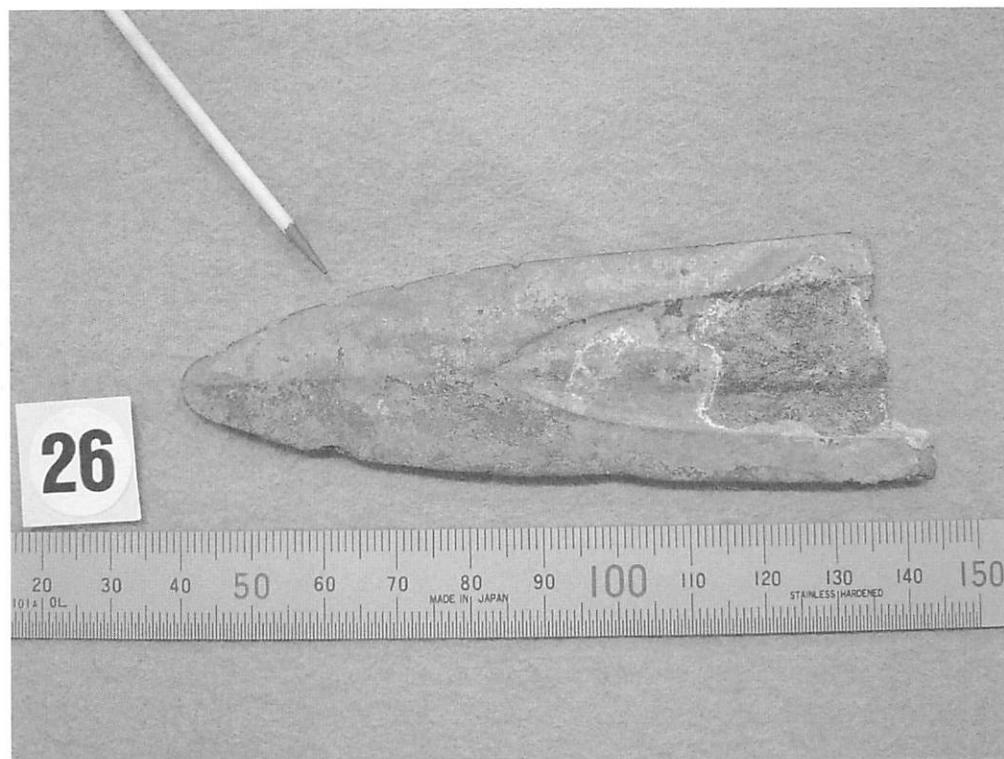


写真16 資料番号16（細形銅戈）の試料採取の位置



写真17 資料番号17（細形銅剣）の試料採取の位置

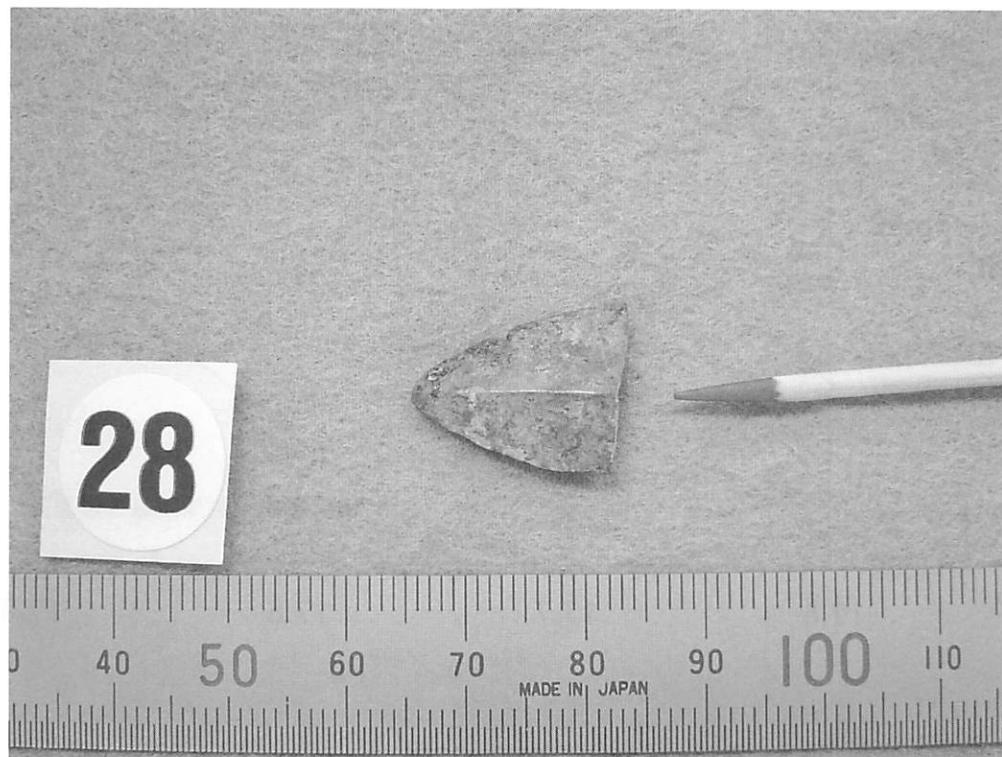


写真18 資料番号18（細形銅剣）の試料採取の位置

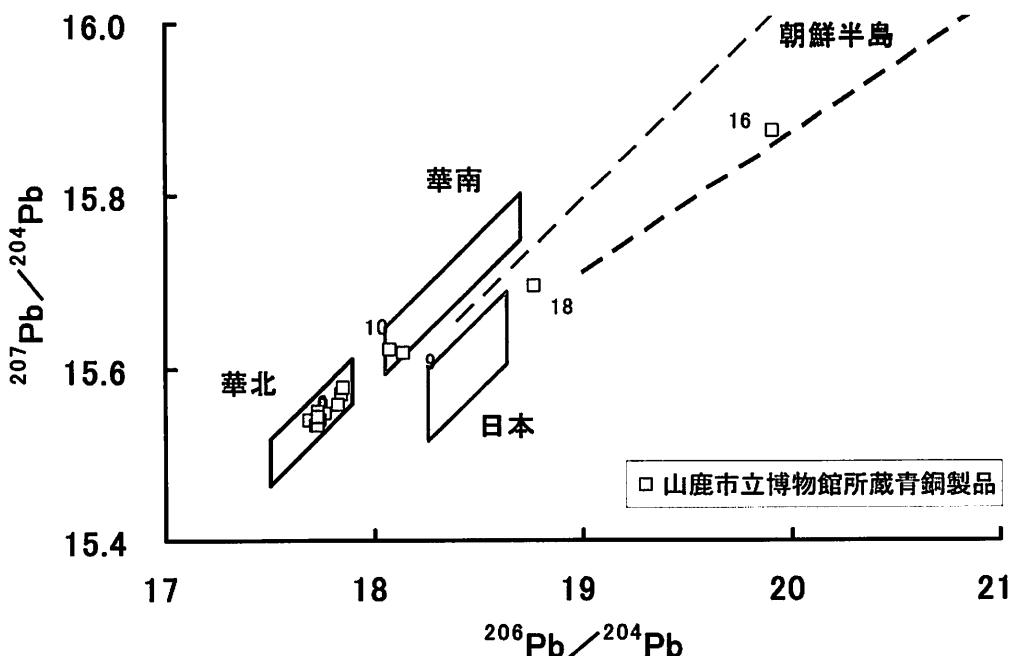


図1 熊本県山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

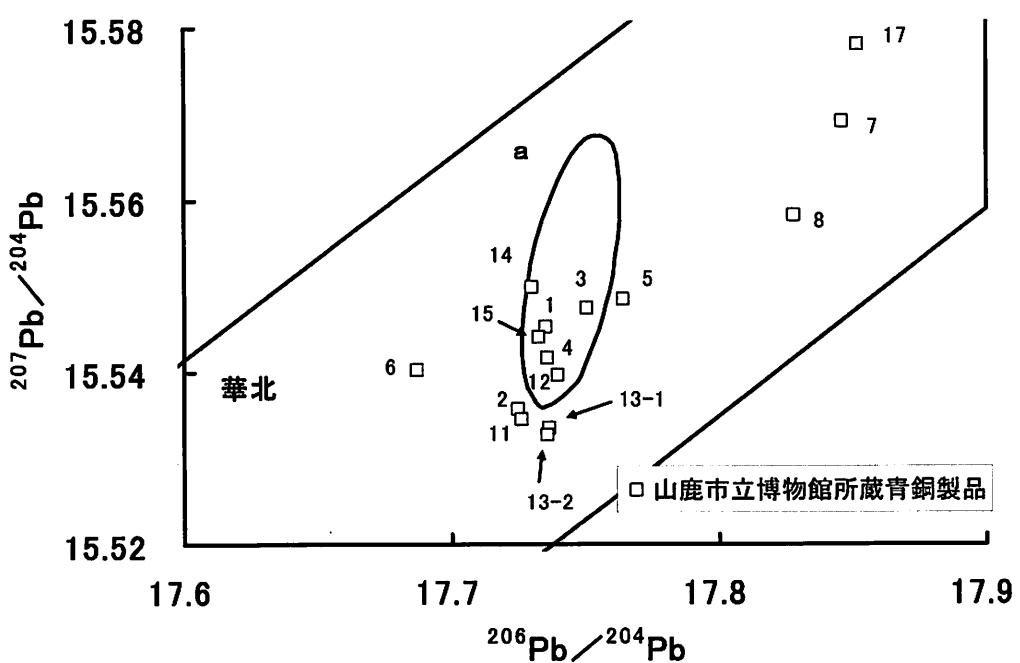


図2 図1の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

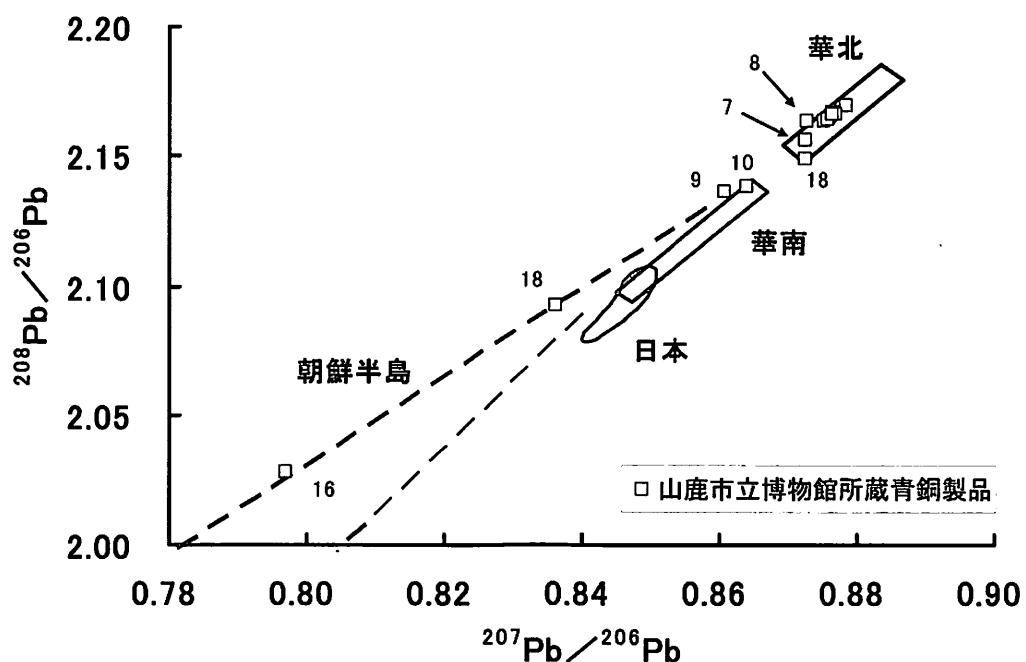


図3 熊本県山鹿市立博物館所蔵の青銅製品の鉛同位体比
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

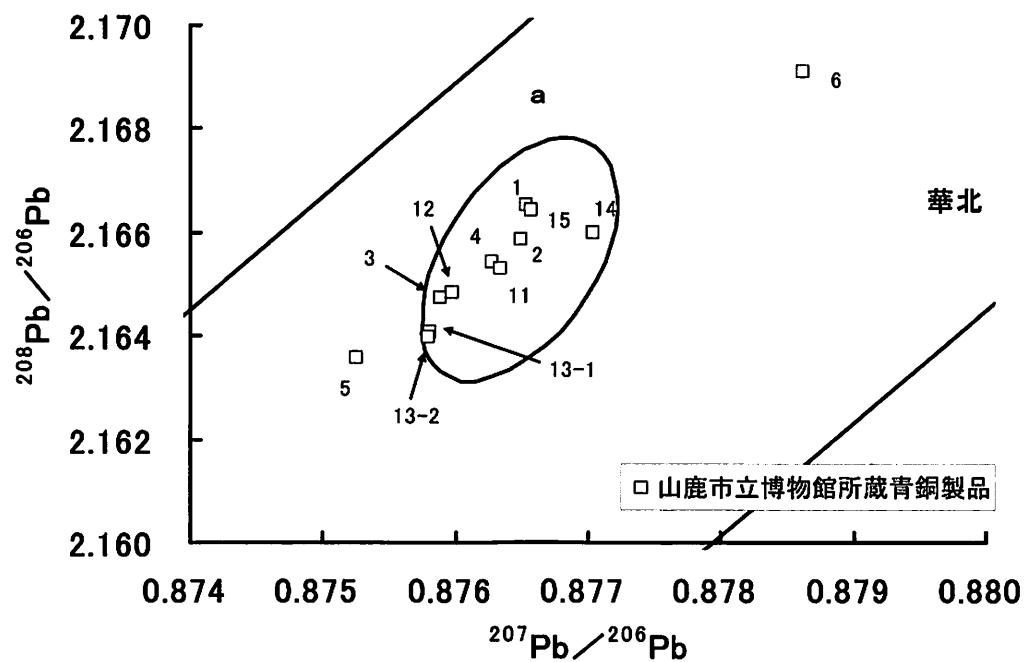


図4 図3の拡大図
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

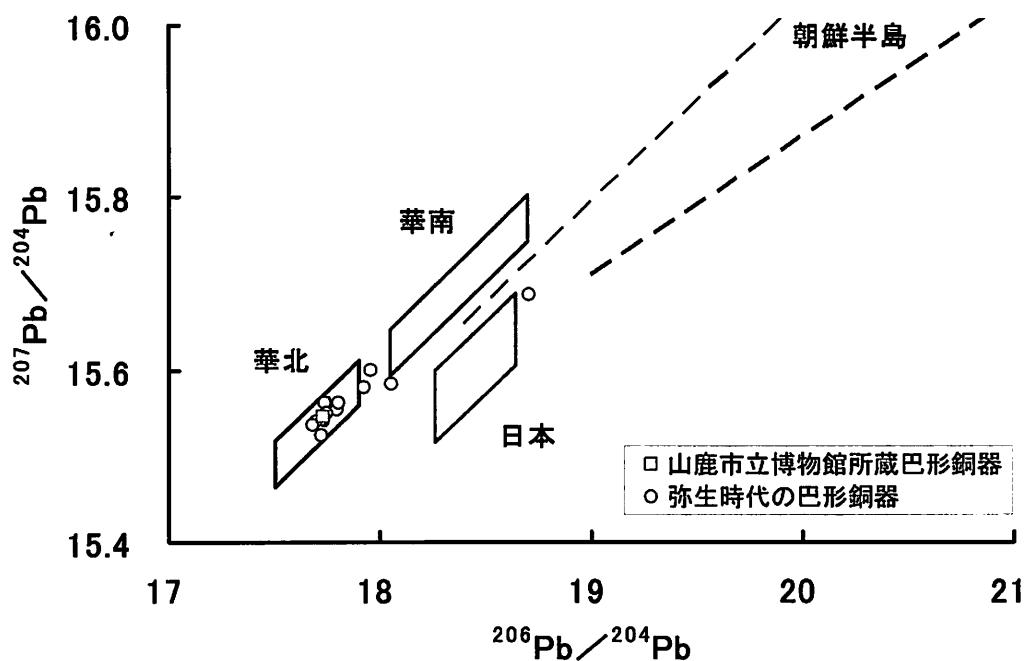


図5 山鹿市立博物館所蔵の巴形銅器と弥生時代の巴形銅器の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

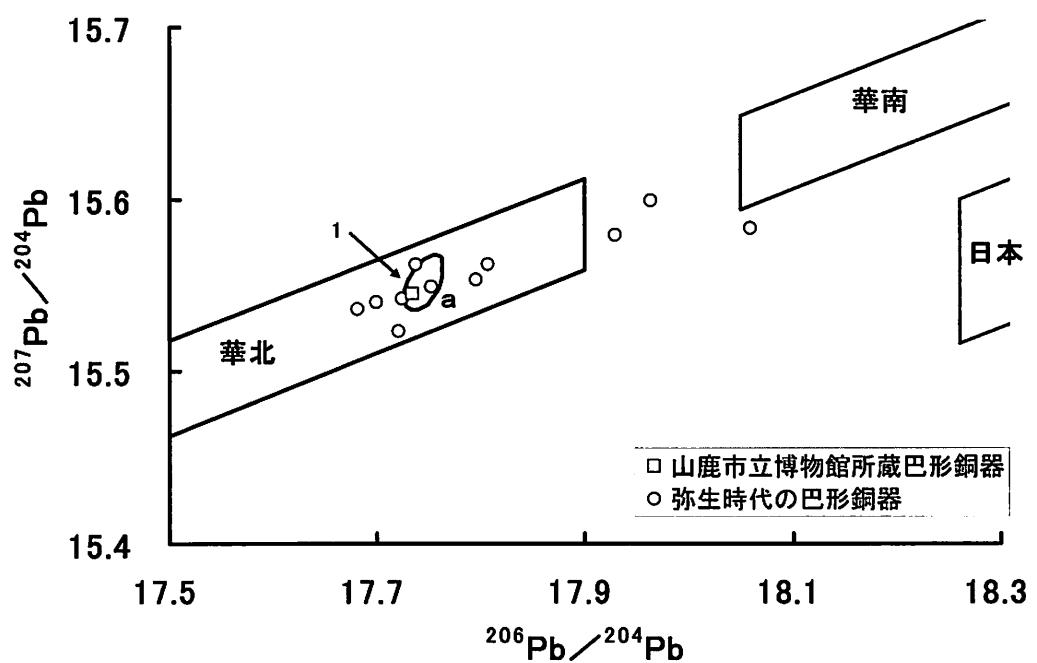


図6 図5の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

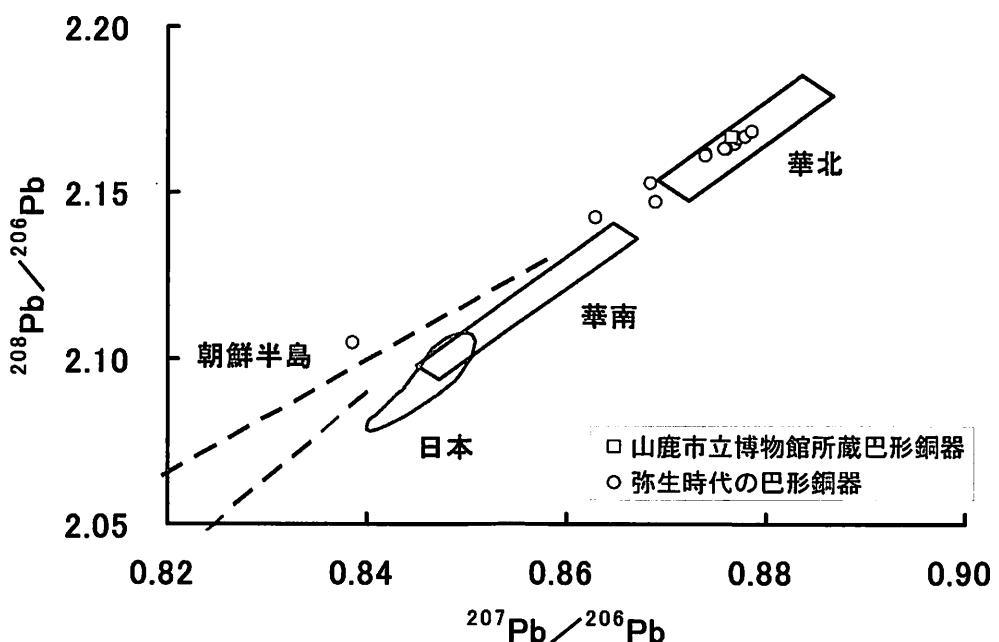


図7 山鹿市立博物館所蔵の巴形銅器と弥生時代の巴形銅器の鉛同位体比
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

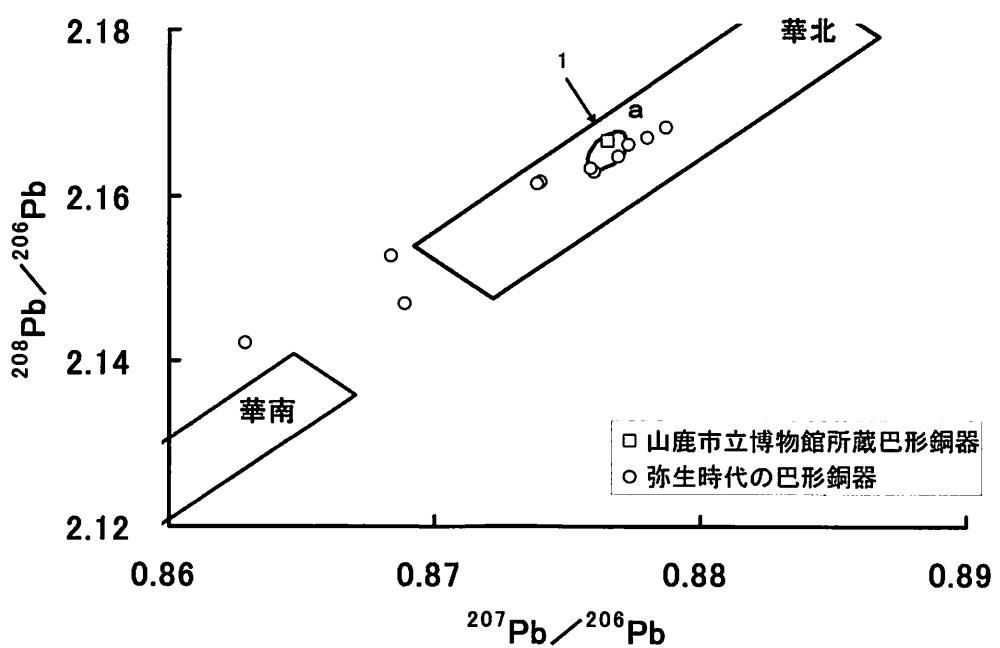


図8 図7の拡大図
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

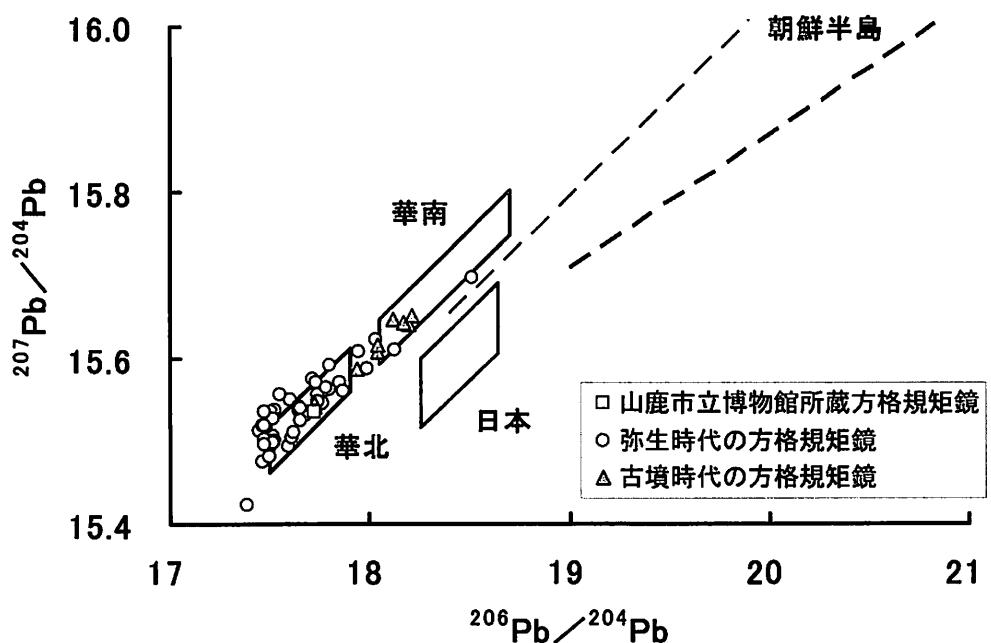


図9 山鹿市立博物館所蔵の方格規矩鏡と弥生・古墳時代の方格規矩鏡の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

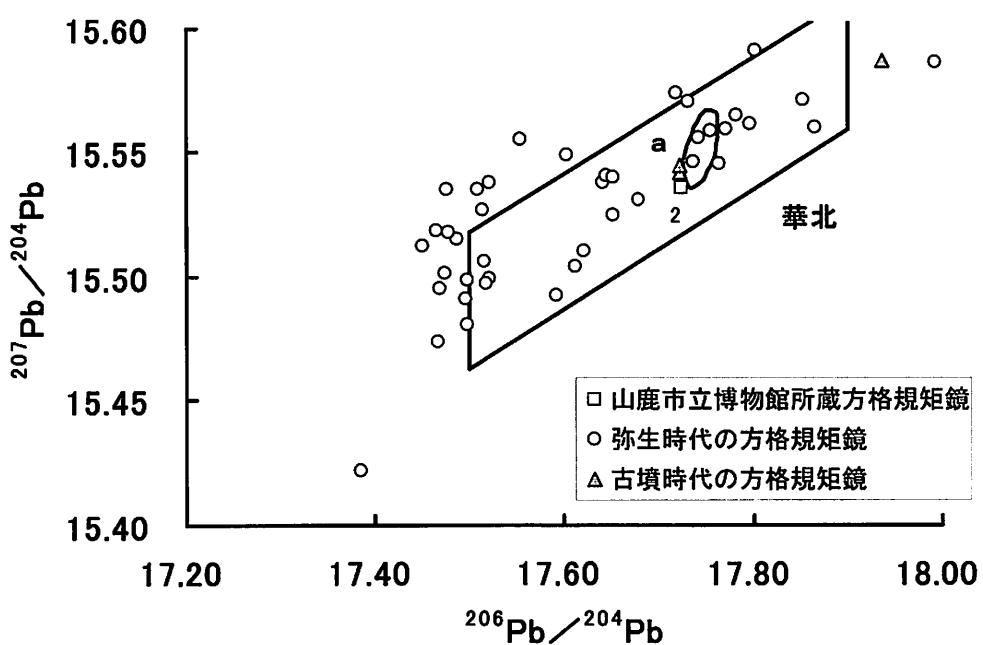


図10 図9の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

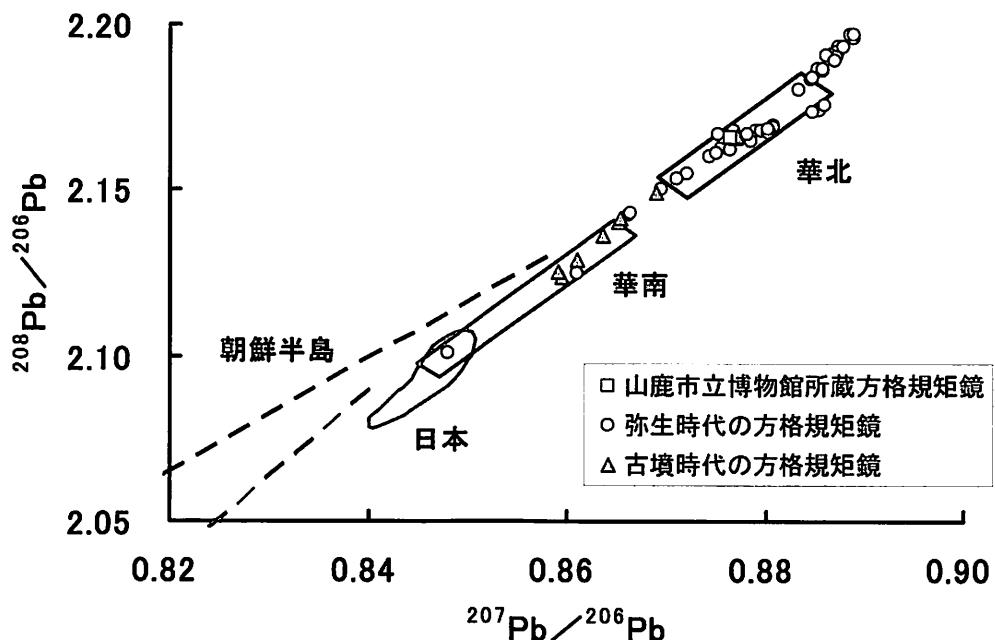


図11 山鹿市立博物館所蔵の方格規矩鏡と弥生・古墳時代の方格規矩鏡の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

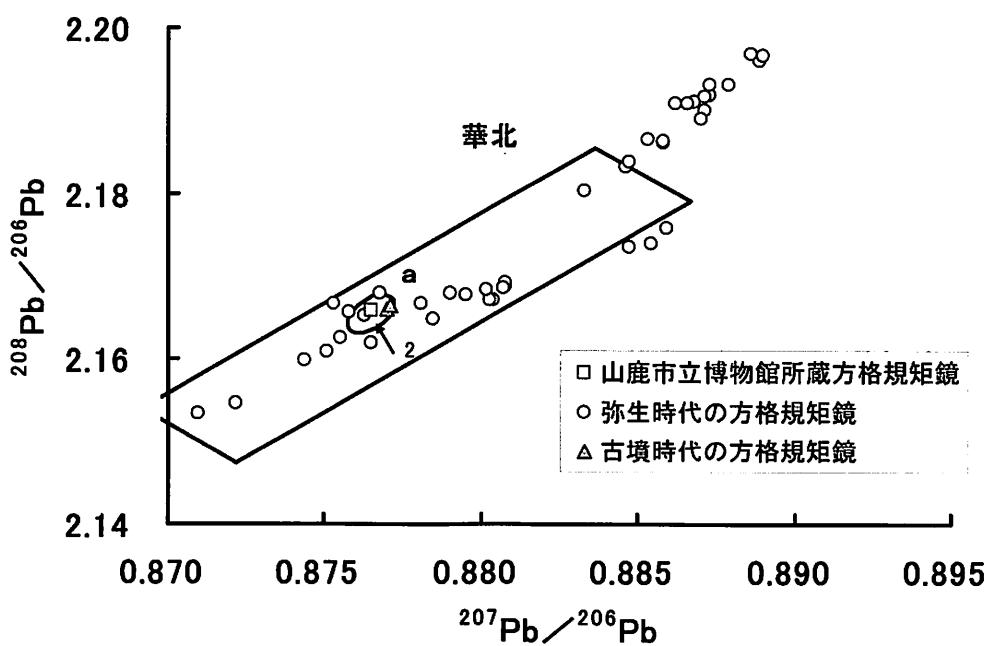


図12 図11の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

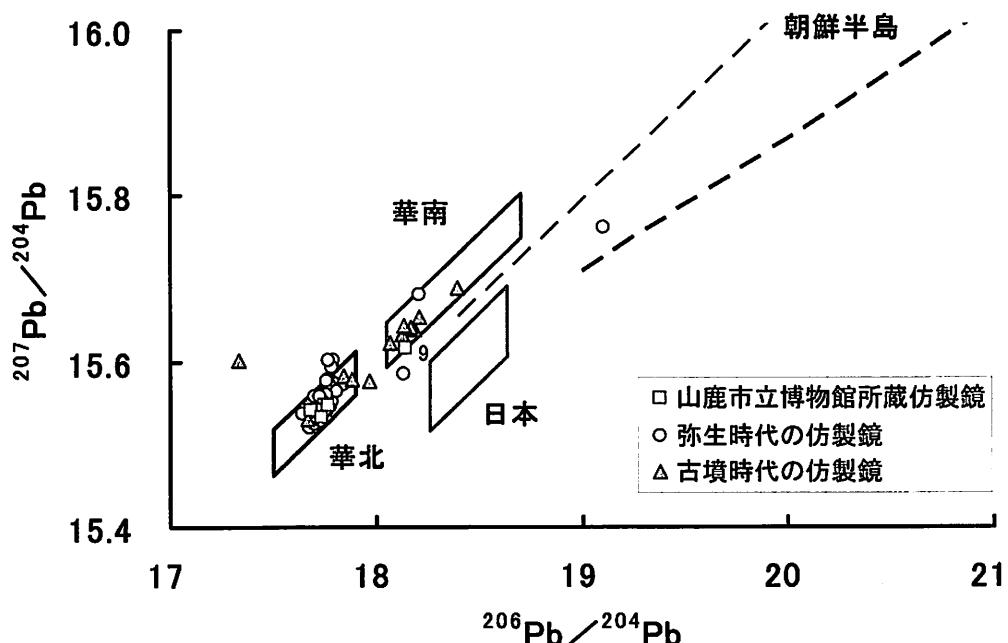


図13 山鹿市立博物館所蔵の仿製鏡と弥生・古墳時代の仿製鏡の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

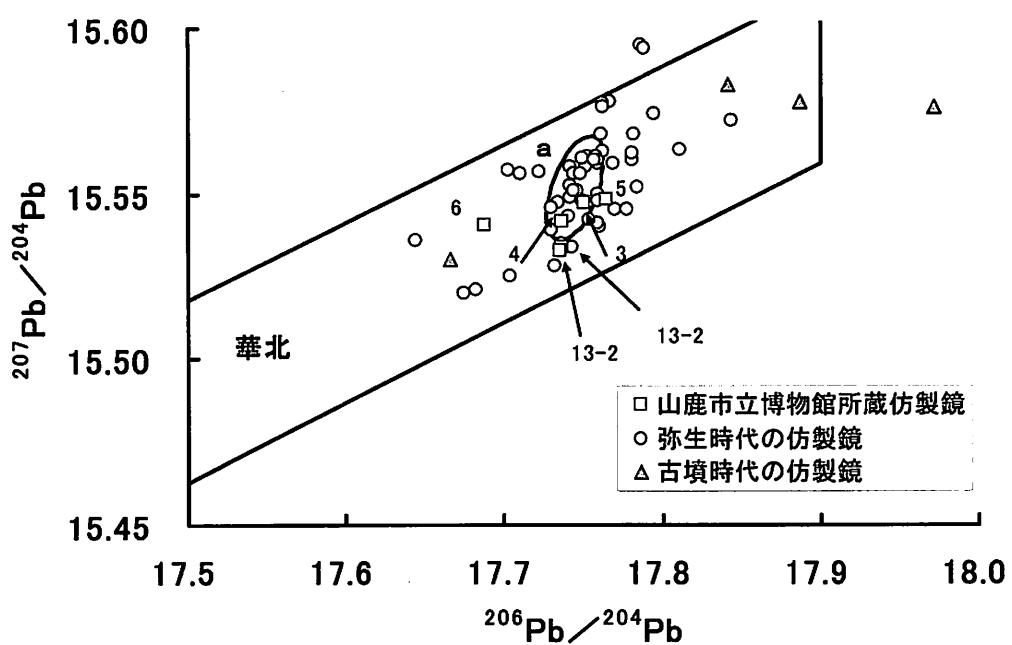


図14 図13の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

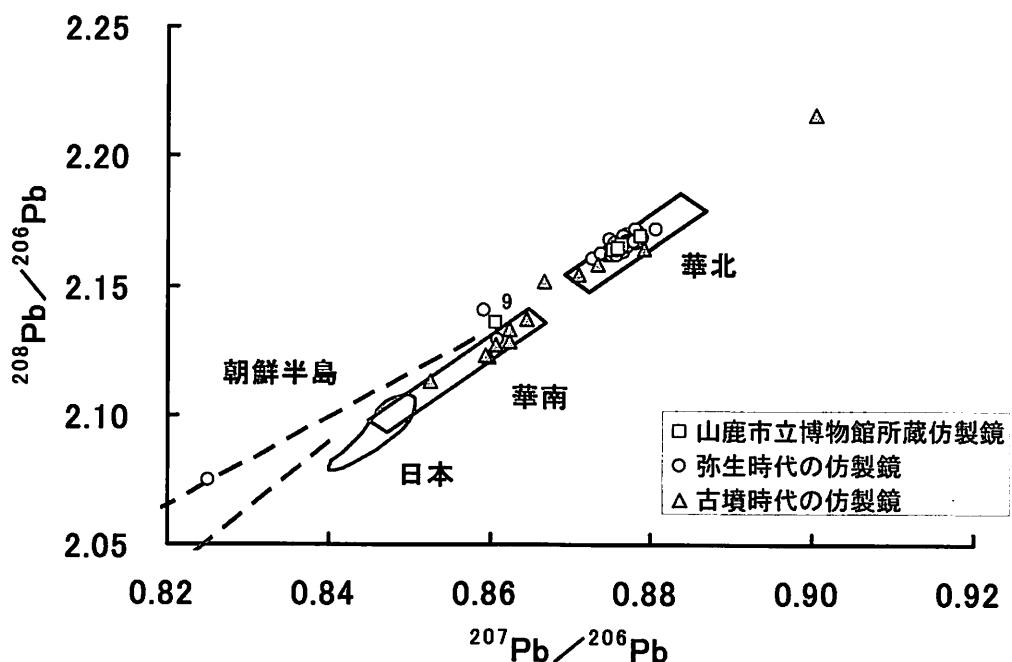


図15 山鹿市立博物館所蔵の仿製鏡と弥生・古墳時代の仿製鏡の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

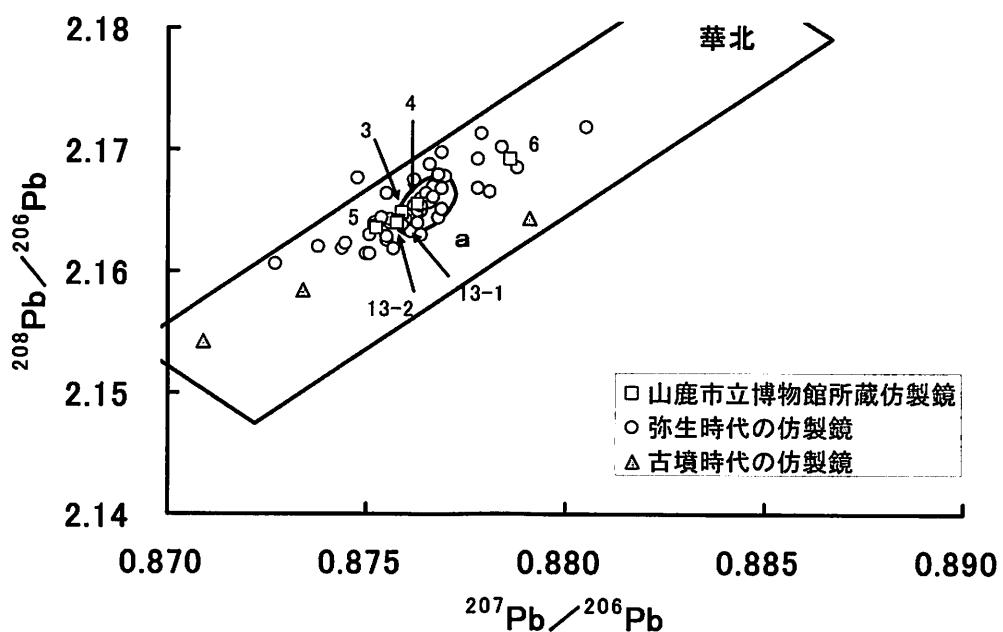


図16 図15の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

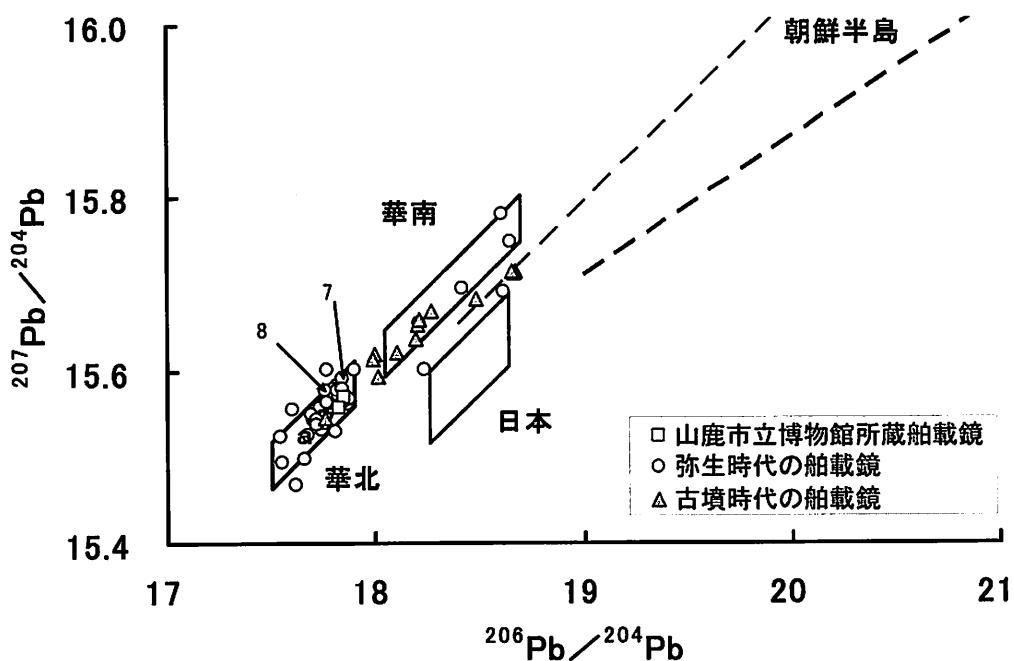


図17 山鹿市立博物館所蔵の船載鏡と弥生・古墳時代の船載鏡の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

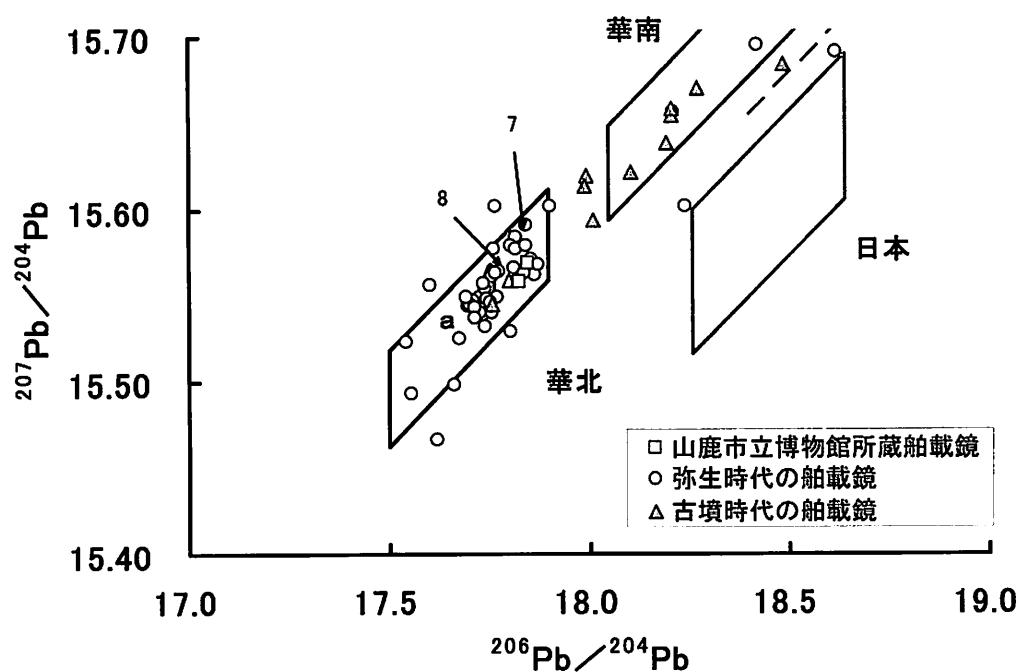


図18 図17の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

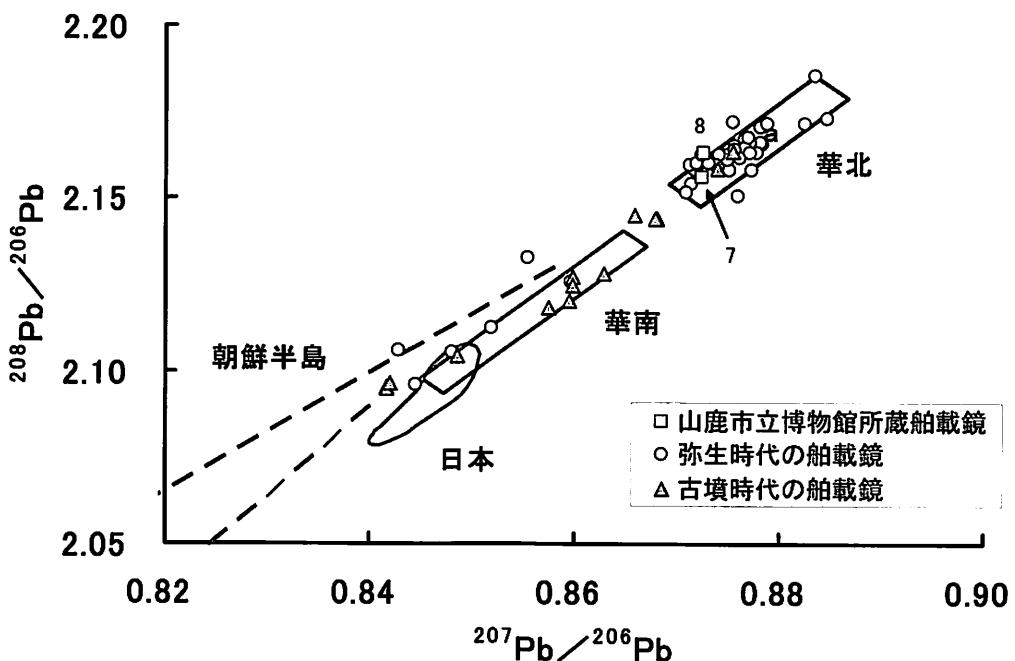


図19 山鹿市立博物館所蔵の舶載鏡と弥生・古墳時代の舶載鏡の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

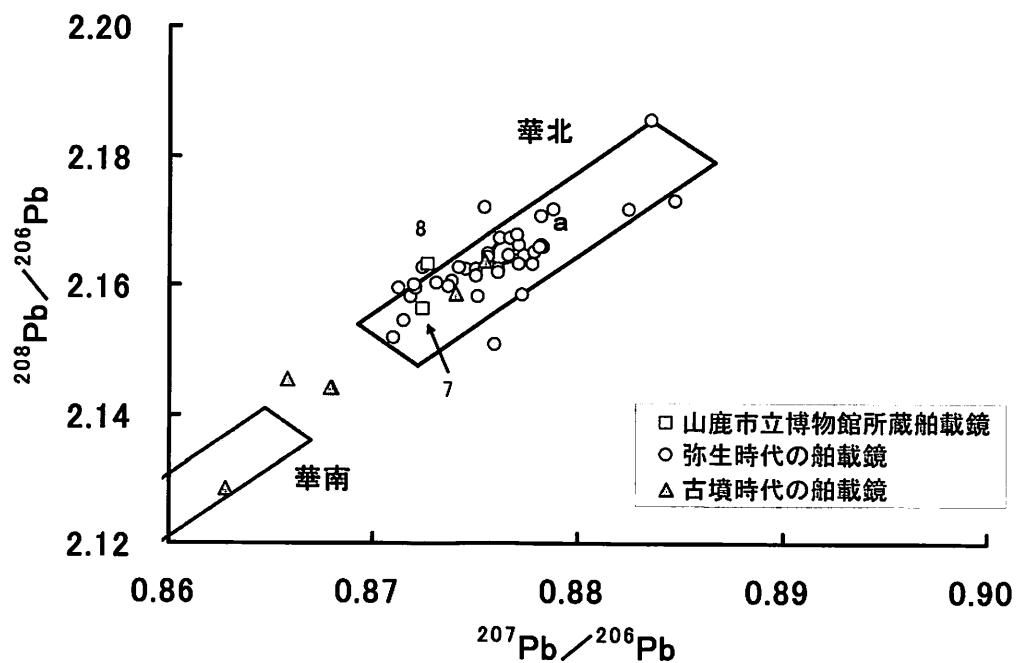


図20 図19の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

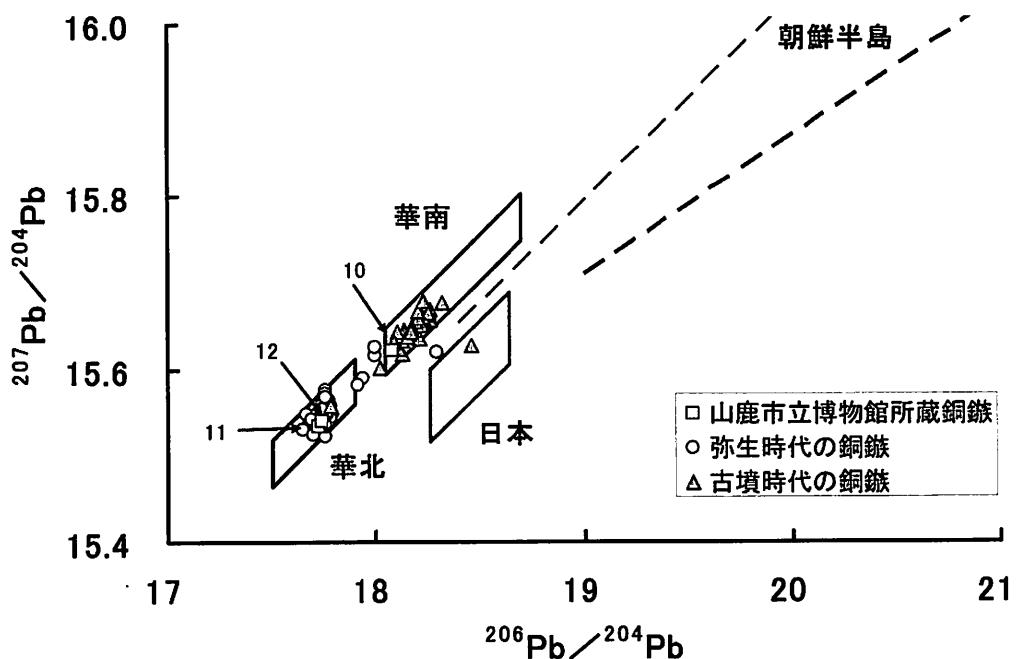


図21 山鹿市立博物館所蔵の銅鏡と弥生・古墳時代の銅鏡の鉛同位体比
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

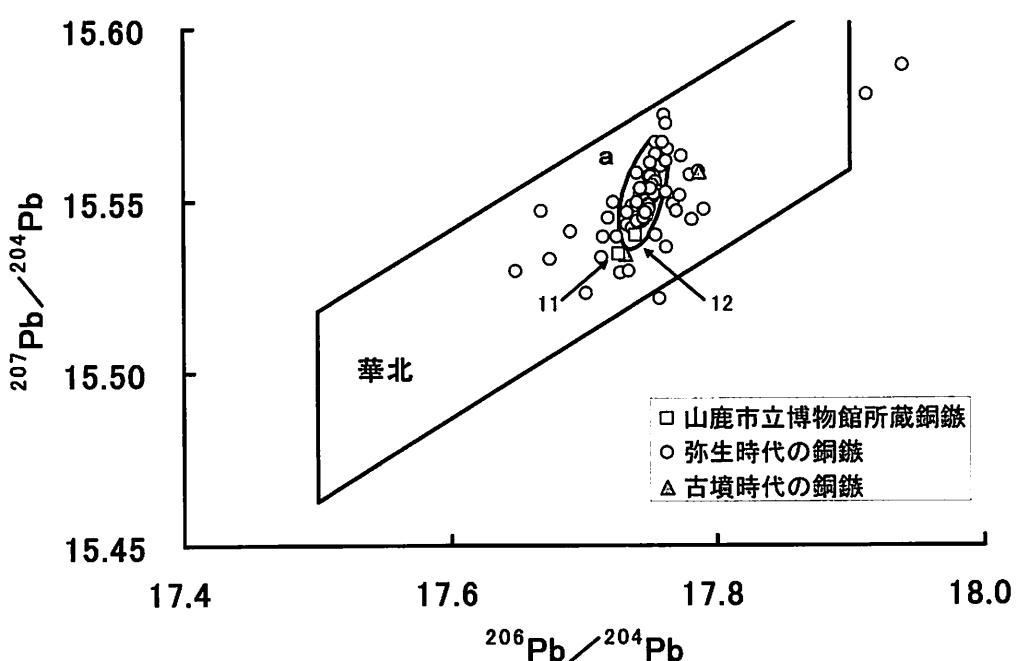


図22 図21の拡大図
 $(^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb})$

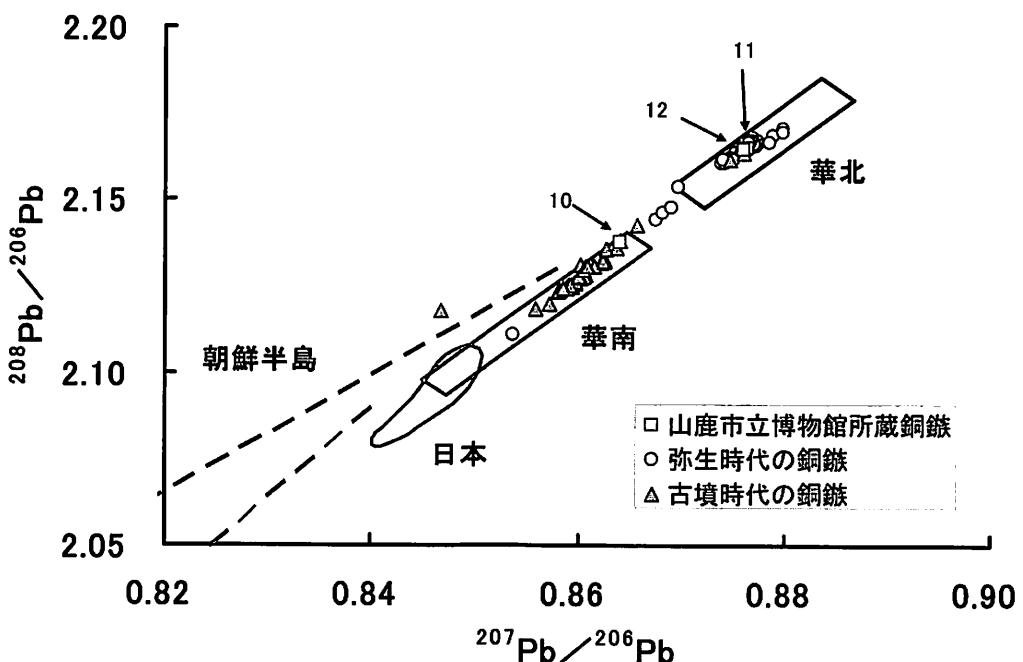


図23 山鹿市立博物館所蔵の銅鏡と弥生・古墳時代の銅鏡の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

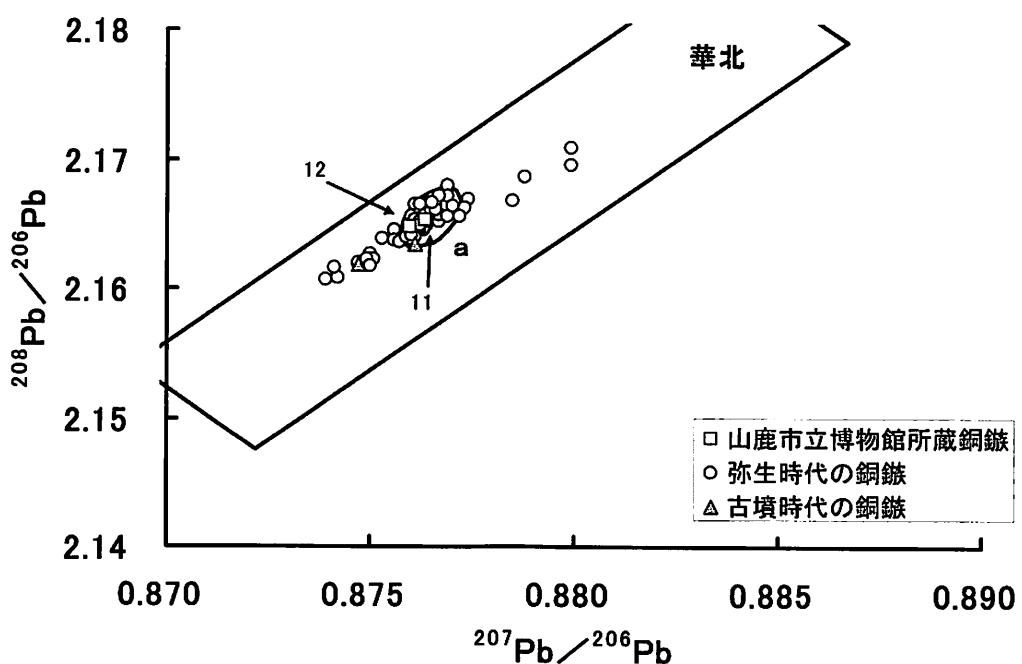


図24 図23の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

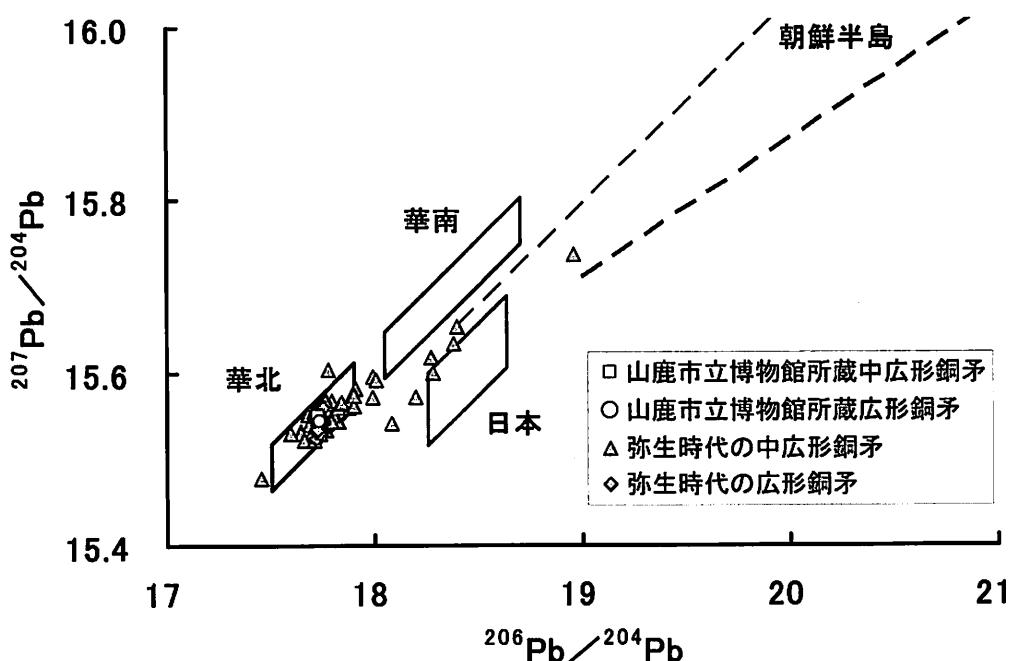


図25 山鹿市立博物館所蔵の中広形銅矛・広形銅矛と弥生時代の中広形銅矛・広形銅矛の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

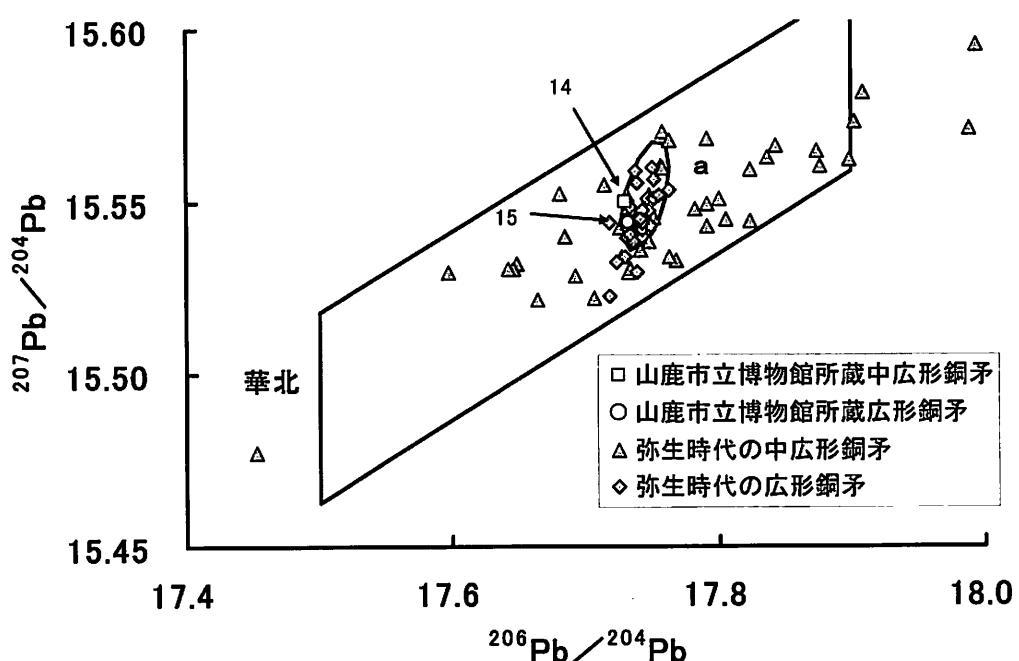


図26 図25の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

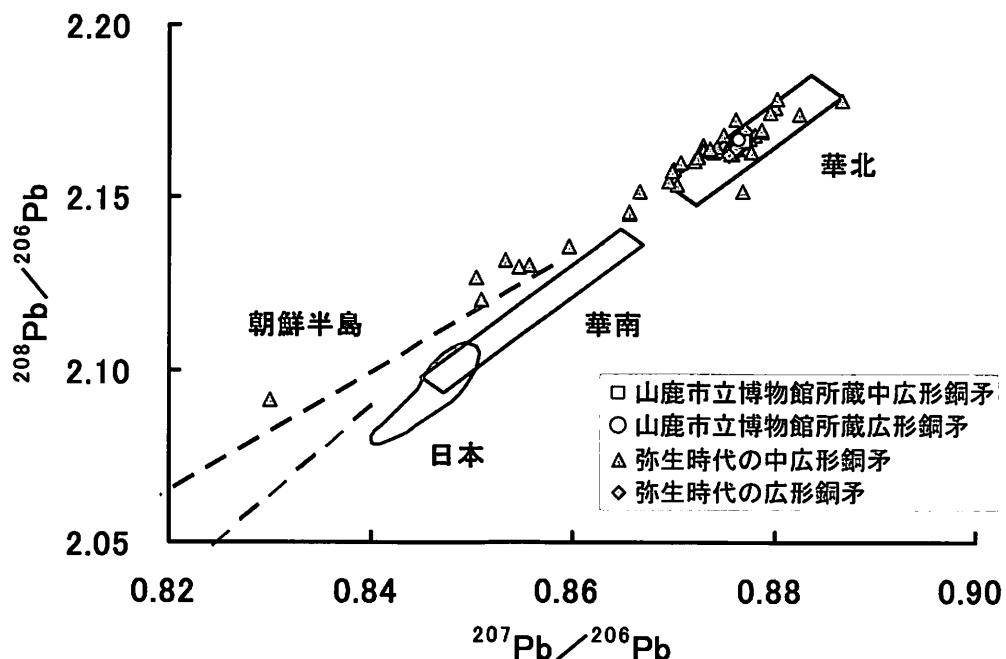


図27 山鹿市立博物館所蔵の中広形銅矛・広形銅矛と弥生時代の中広形銅矛・広形銅矛の鉛同位体比
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

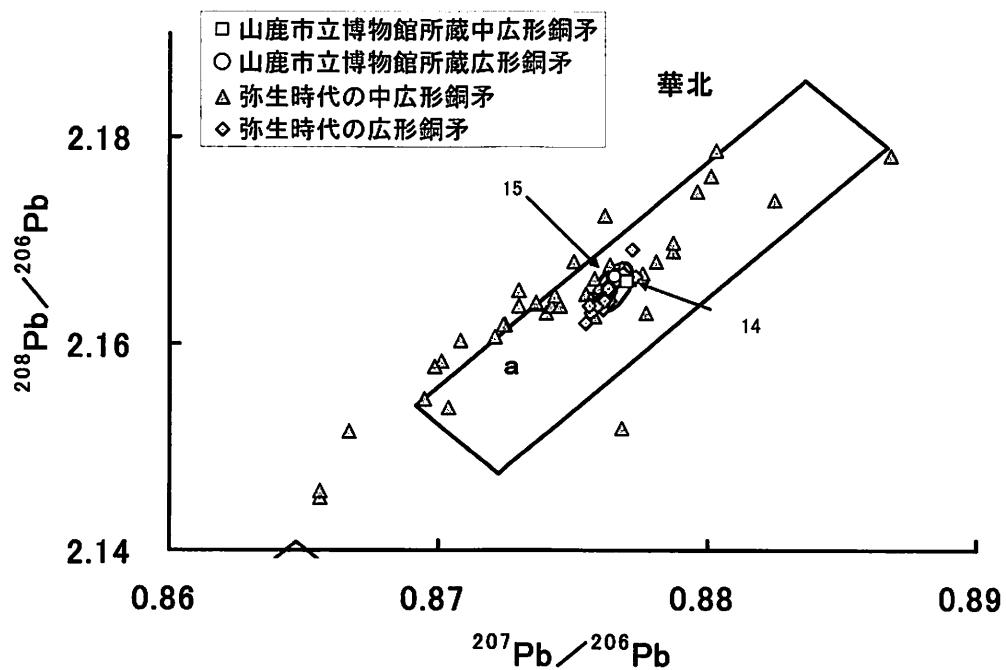


図28 図27の拡大図
 $(^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb})$

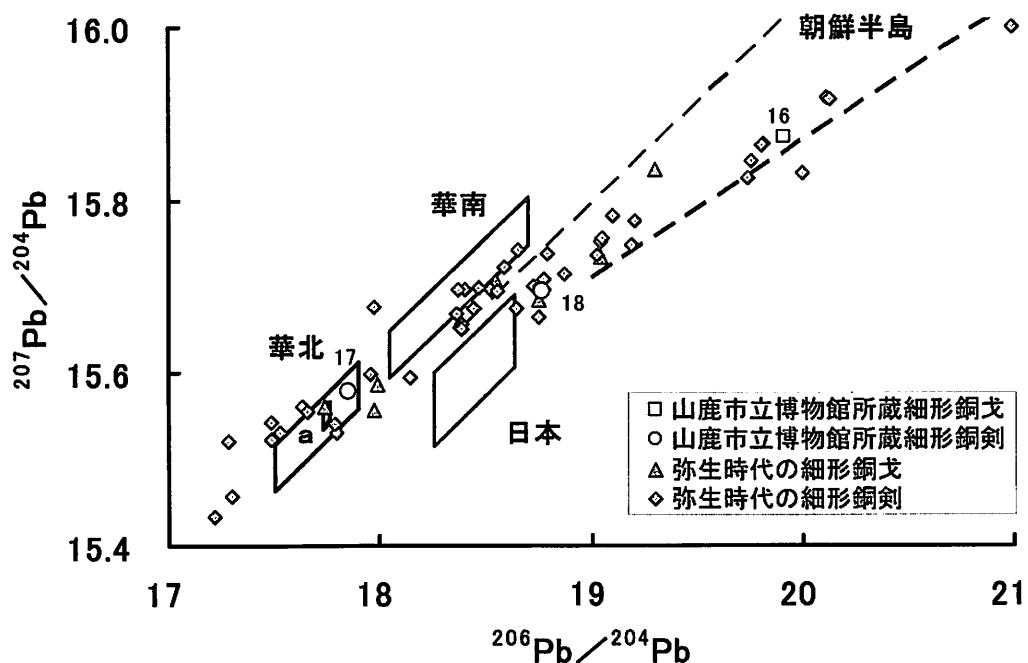


図29 山鹿市立博物館所蔵の細形銅戈・細形銅剣と弥生時代の細形銅戈・細形銅剣の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

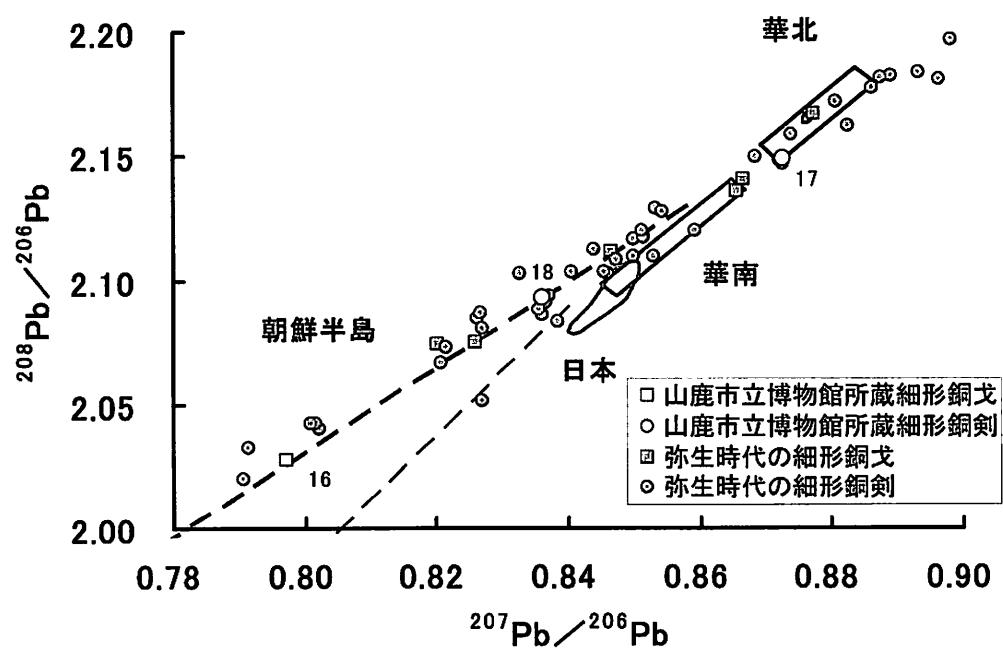


図30 山鹿市立博物館所蔵の細形銅戈・細形銅剣と弥生時代の細形銅戈・細形銅剣の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

写 真 図 版



1 調査区周辺（上空より）



2 調査区周辺（東側より）



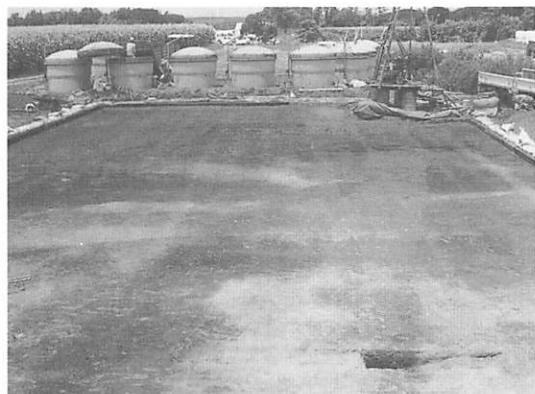
1 調査区全景（南側より）



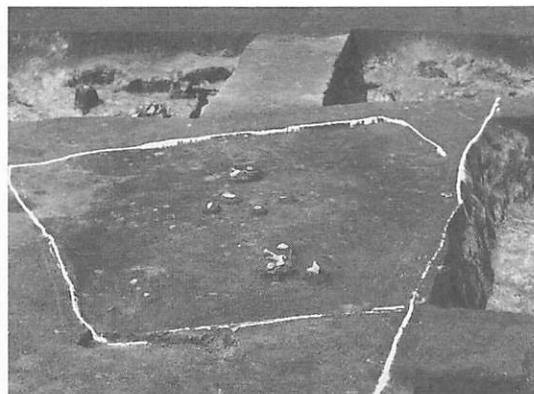
2 調査区全景（上空より）



1 調査区全景（上空より）



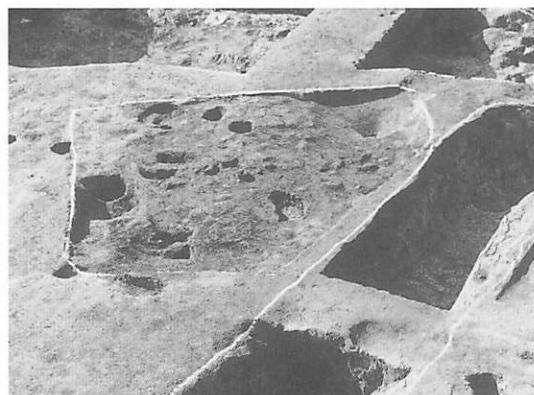
1 調査区表土除去状況（東側より）



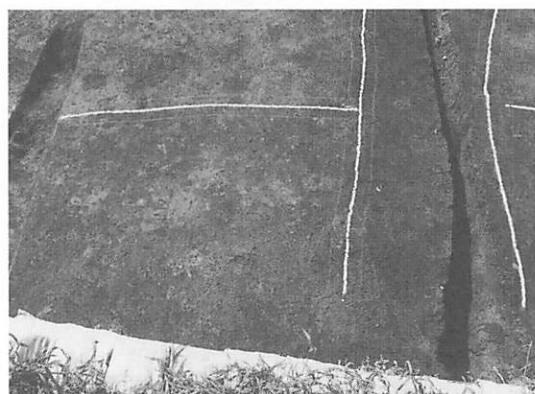
5 2号住居跡検出状況



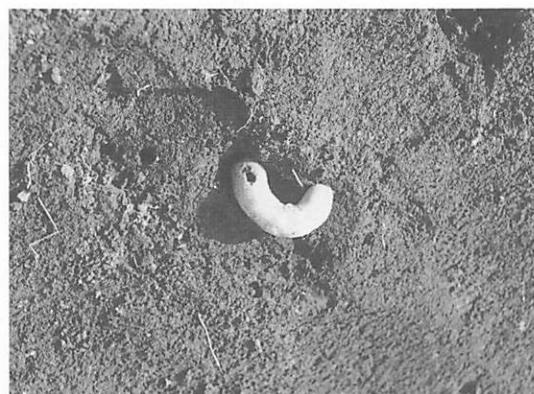
2 調査区内搅乱層検出



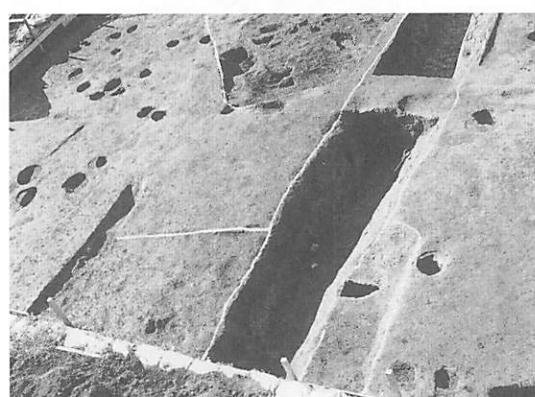
6 2号住居跡完掘状況



3 1号住居跡検出状況



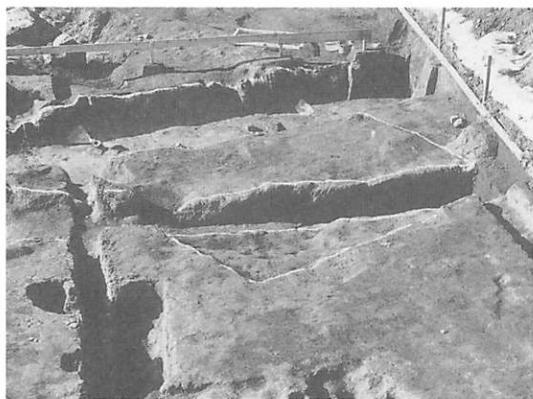
7 土製勾玉出土状況



4 1号住居跡完掘状況



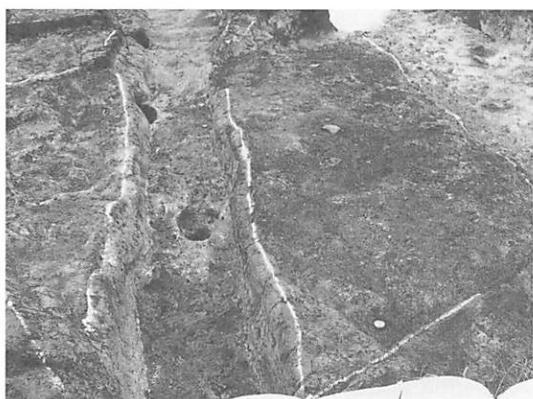
8 磨製石斧出土状況



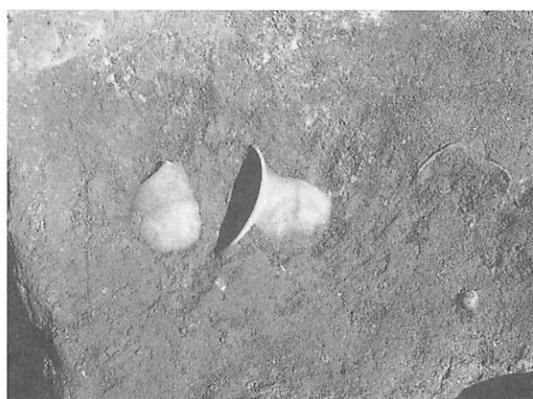
1 3号住居跡検出状況



5 方形周濠墓溝内遺物出土状況



2 3号住居跡完掘状況



6 方形周濠墓溝内遺物出土状況



3 3号住居跡内遺物出土状況



7 不整形土坑内堆積状況

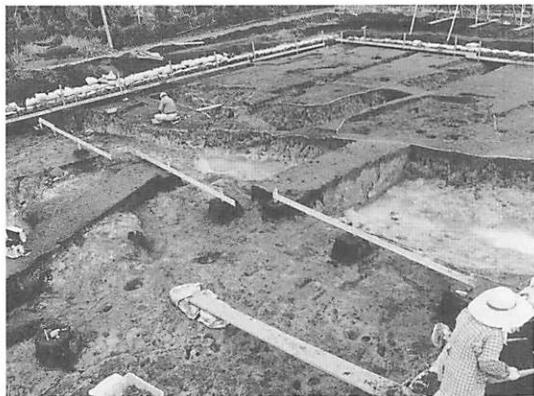


4 方形周濠墓完掘状況

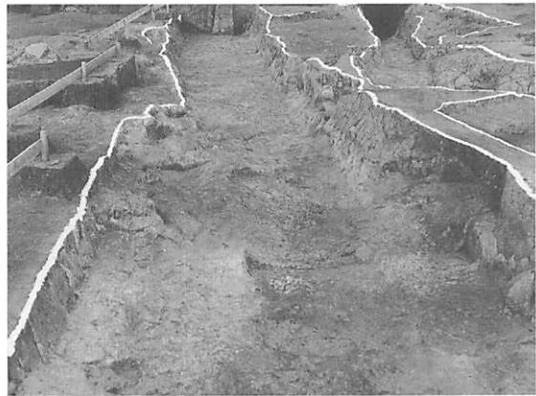


8 不整形土坑内堆積状況

PL 6



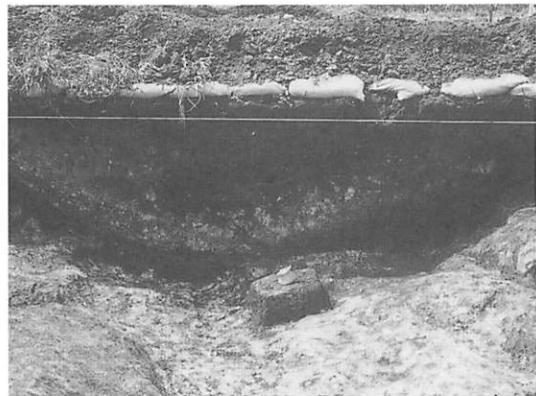
1 7号溝調査風景



4 7号溝完掘状況（北側）



2 7号溝土層断面



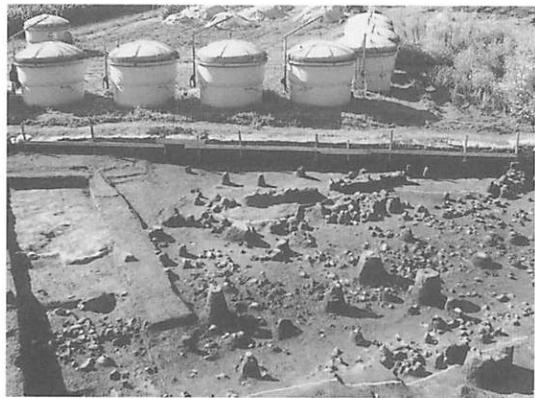
5 7号溝南端土層断面



3 7号溝遺物出土状況



6 7号溝完掘状況（南側）



1 10号溝全景（東側より）



5 10号溝北端部土層断面



2 10号溝遺物出土状況（南側より）



6 10号溝最下部遺物出土状況



3 10号溝内堆積状況



7 10号溝完掘状況（南側より）



4 10号溝完掘状況（東側より）



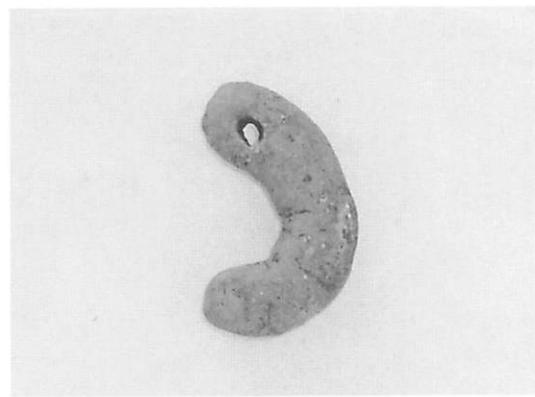
8 10号溝埋め戻し状況



1 2号住居跡出土遺物（1）



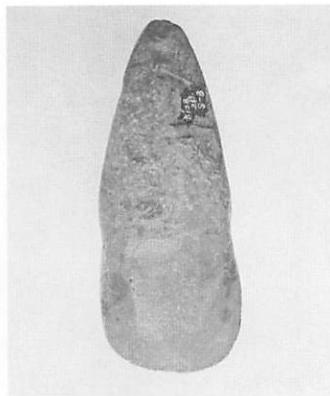
5 3号住居跡出土遺物（6）



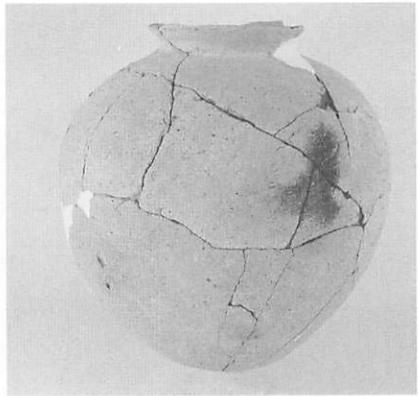
2 2号住居跡出土遺物（3）



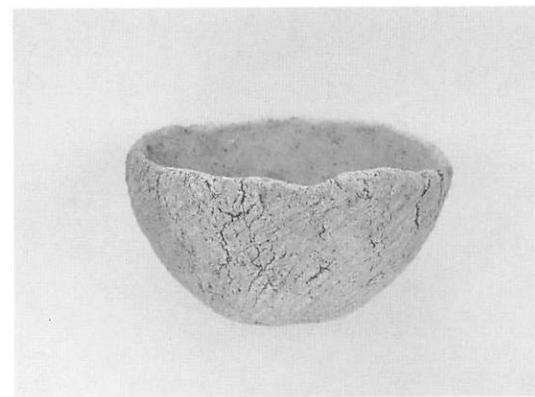
6 方形周濠墓出土遺物（7）



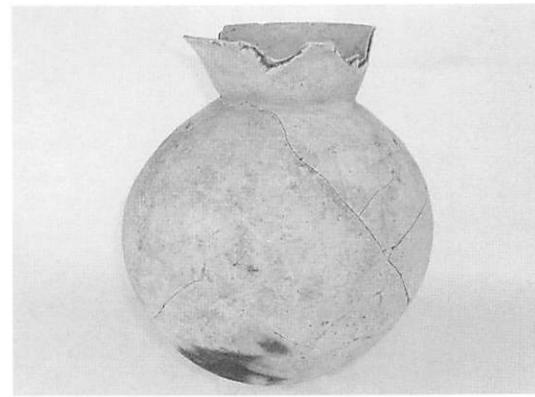
3 2号住居跡出土遺物（4）



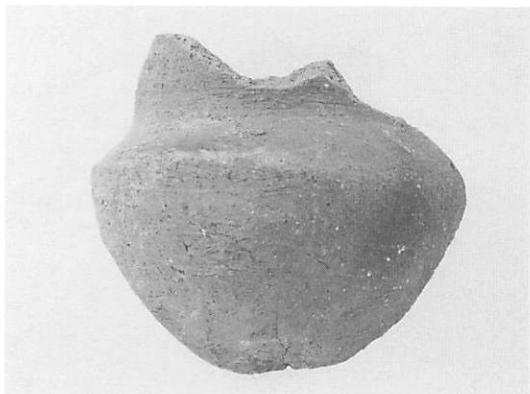
7 方形周濠墓出土遺物（9）



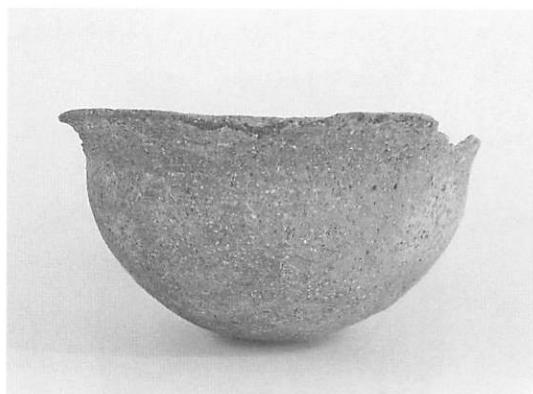
4 3号住居跡出土遺物（5）



8 方形周濠墓出土遺物（10）



1 10号溝表層出土遺物 (14)



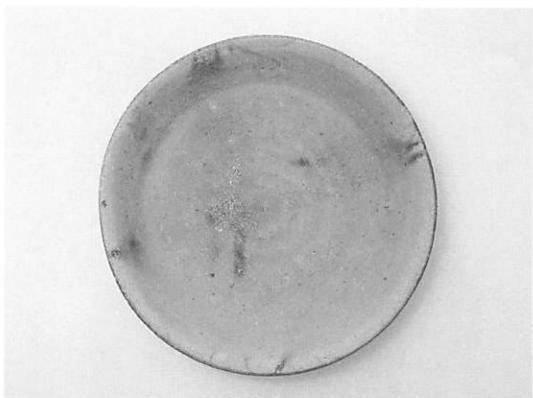
4 10号溝表層出土遺物 (21)



2 10号溝表層出土遺物 (19)



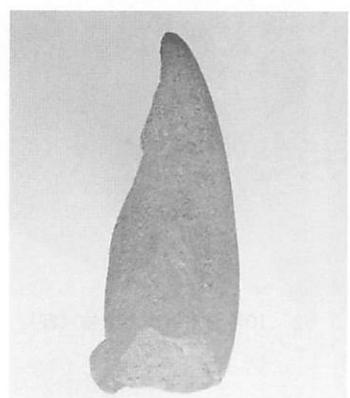
5 10号溝表層出土遺物 (24)



6 10号溝表層出土遺物 (24)



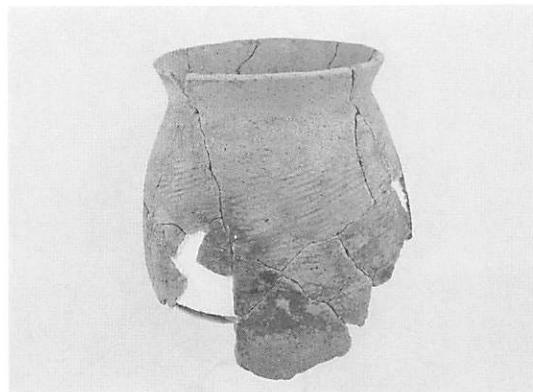
3 10号溝表層出土遺物 (20)



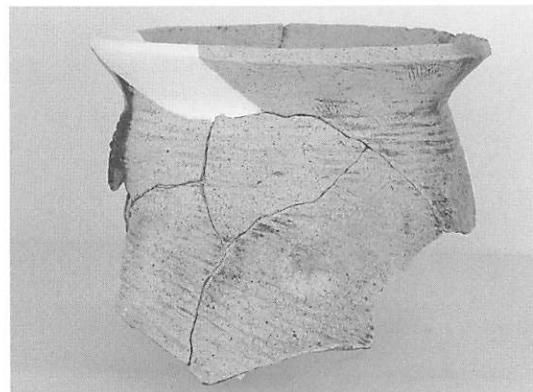
7 10号溝表層出土遺物 (25)



1 10号溝上層出土遺物（26）



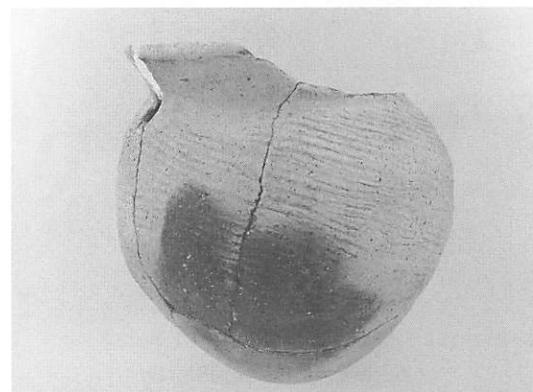
3 10号溝上層出土遺物（28）



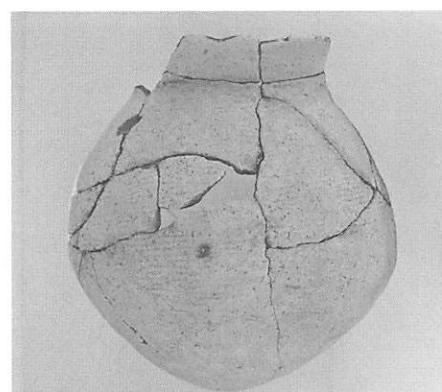
4 10号溝上層出土遺物（30）



2 10号溝上層出土遺物（27）



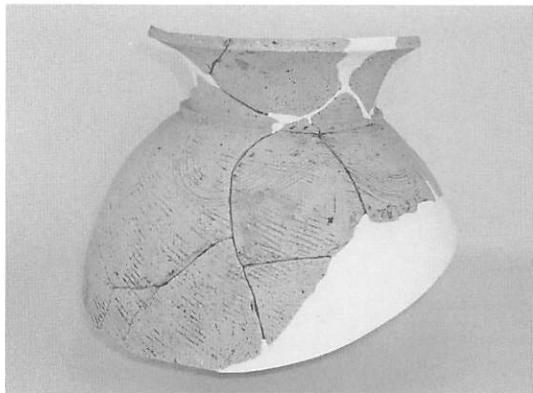
5 10号溝上層出土遺物（34）



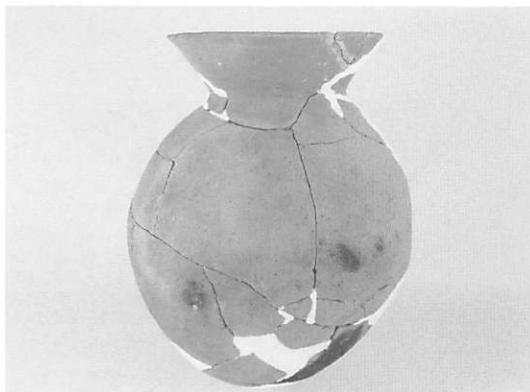
6 10号溝上層出土遺物（37）



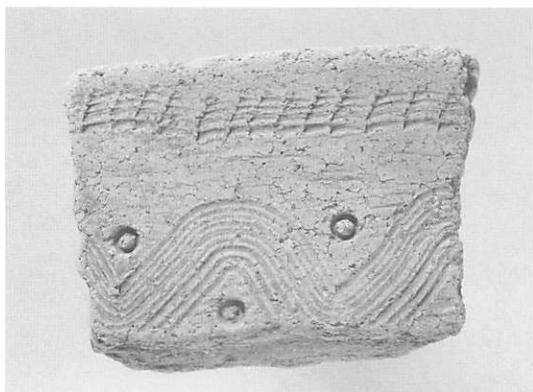
1 10号溝上層出土遺物 (39)



4 10号溝上層出土遺物 (47)



2 10号溝上層出土遺物 (41)



5 10号溝上層出土遺物 (48)



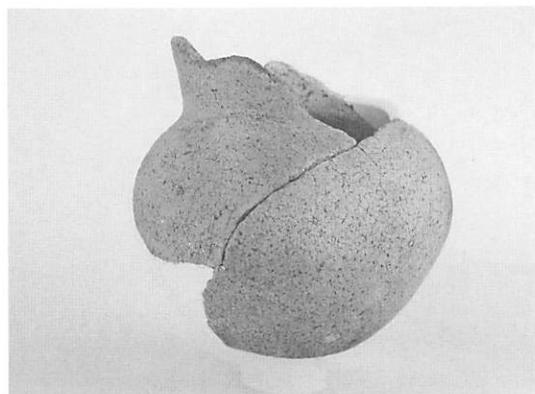
3 10号溝上層出土遺物 (44)



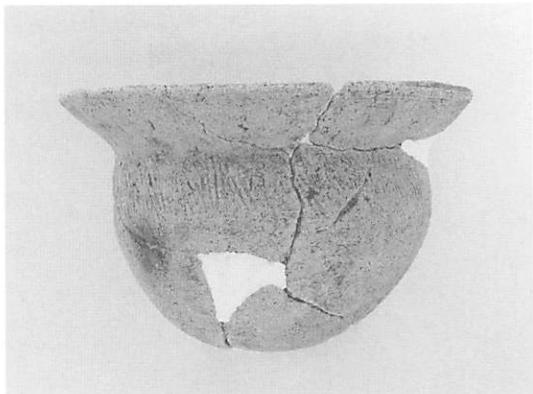
6 10号溝上層出土遺物 (50)



7 10号溝上層出土遺物 (55)



1 10号溝上層出土遺物 (56)



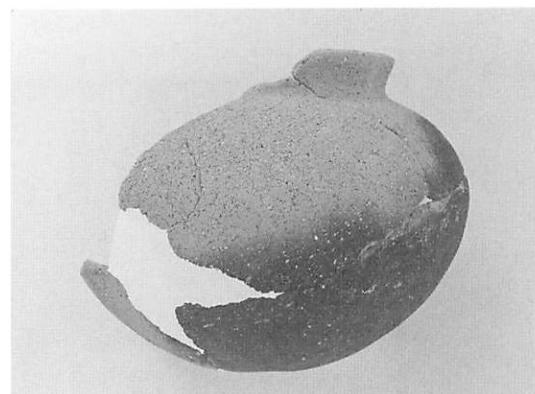
5 10号溝上層出土遺物 (66)



2 10号溝上層出土遺物 (57)



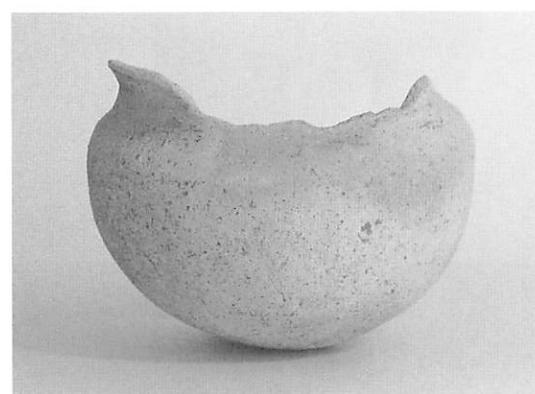
6 10号溝上層出土遺物 (81)



3 10号溝上層出土遺物 (59)



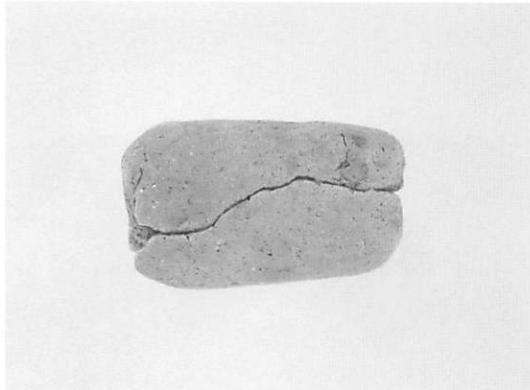
7 10号溝上層出土遺物 (84)



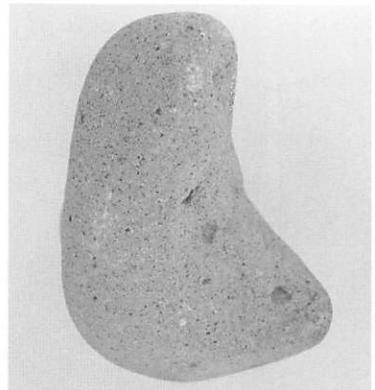
4 10号溝上層出土遺物 (61)



8 10号溝上層出土遺物 (86)



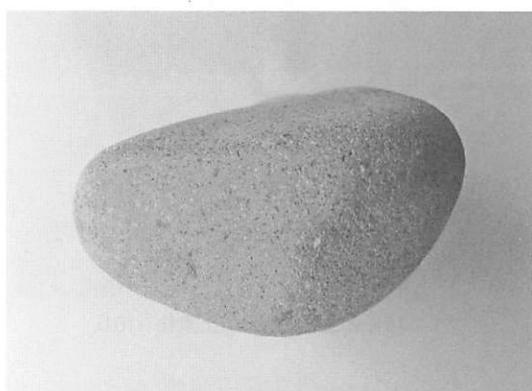
1 10号溝上層出土遺物 (93)



5 10号溝上層出土遺物 (98)



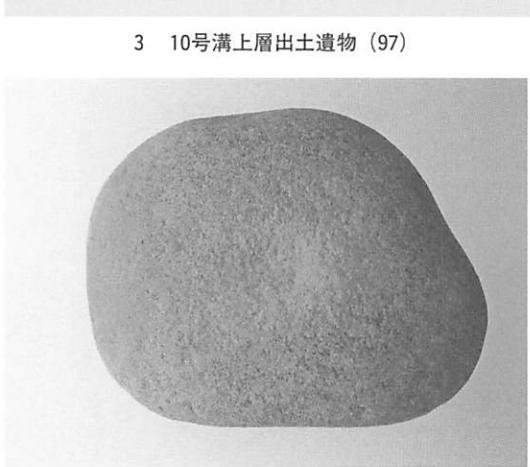
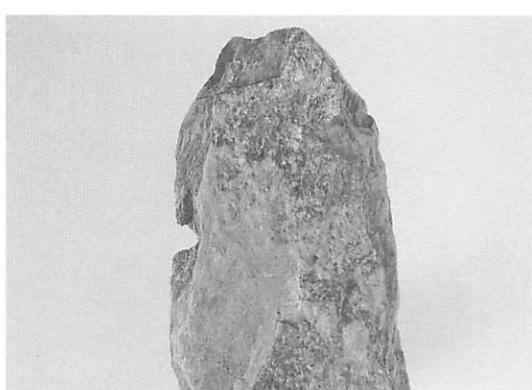
2 10号溝上層出土遺物 (94)



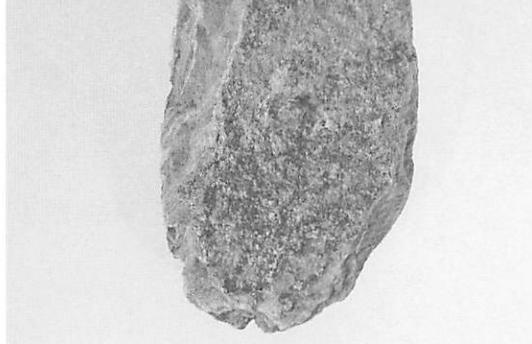
6 10号溝上層出土遺物 (98)



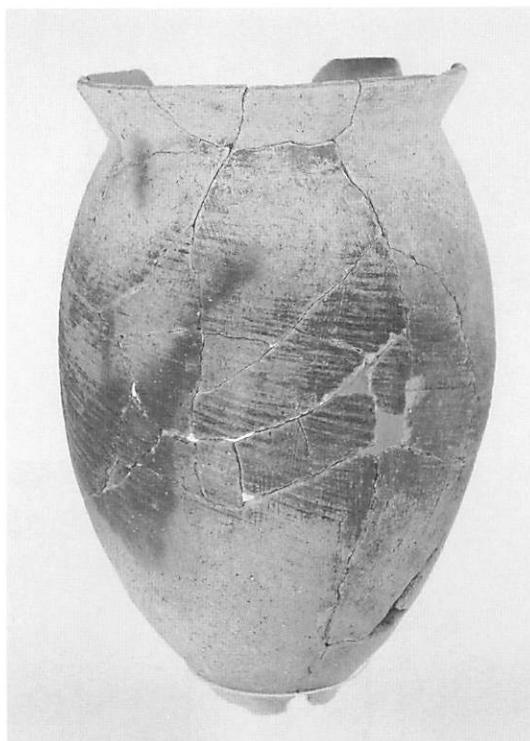
3 10号溝上層出土遺物 (97)



4 10号溝上層出土遺物 (99)



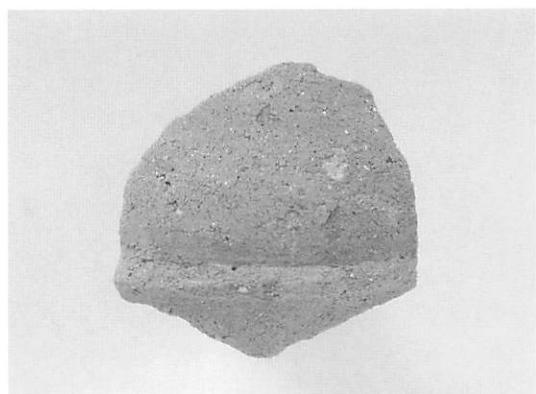
7 10号溝上層出土遺物 (100)



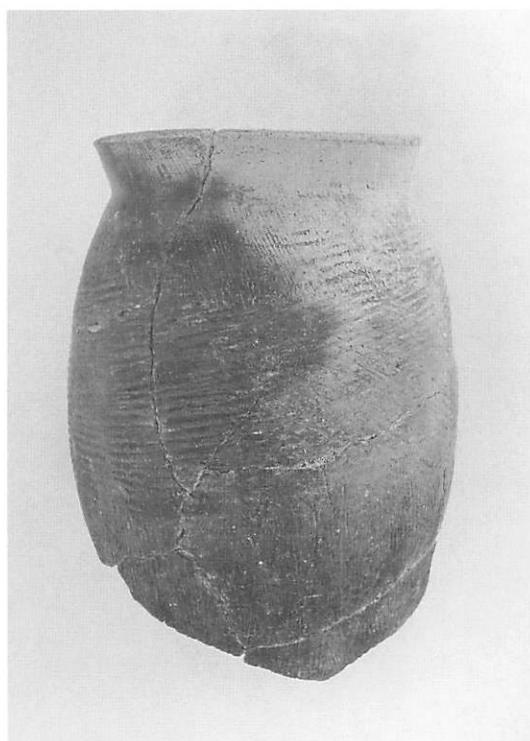
1 10号溝上層両端部出土遺物 (103)



3 10号溝上層両端部出土遺物 (105)



4 10号溝上層両端部出土遺物 (106)



2 10号溝上層両端部出土遺物 (104)



5 10号溝上層両端部出土遺物 (108)



6 10号溝上層両端部出土遺物 (111)



1 10号溝中層出土遺物 (114)



3 10号溝中層出土遺物 (116)



2 10号溝中層出土遺物 (115)



4 10号溝中層出土遺物 (121)



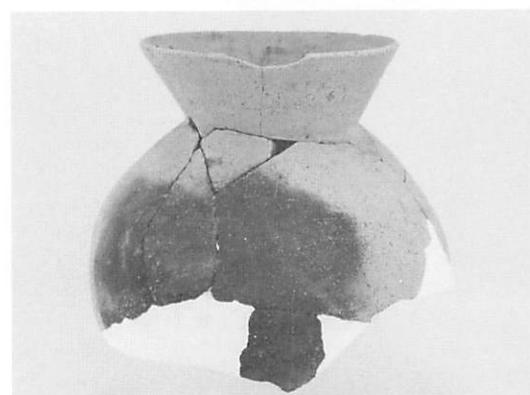
5 10号溝中層出土遺物 (126)



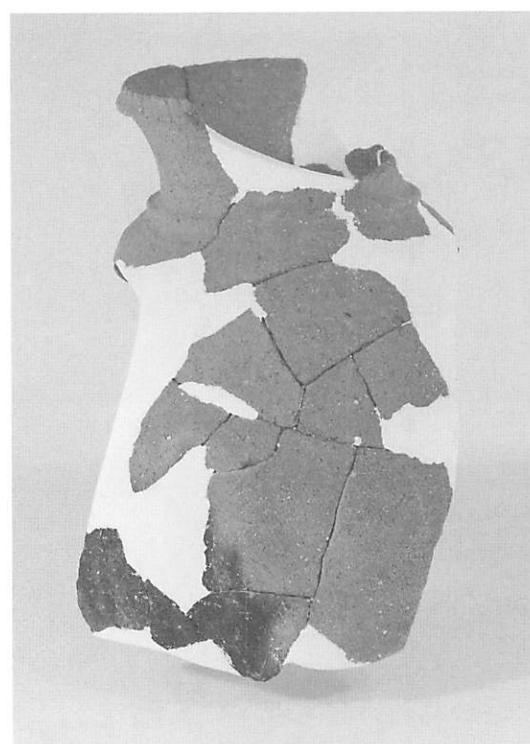
1 10号溝中層出土遺物 (127)



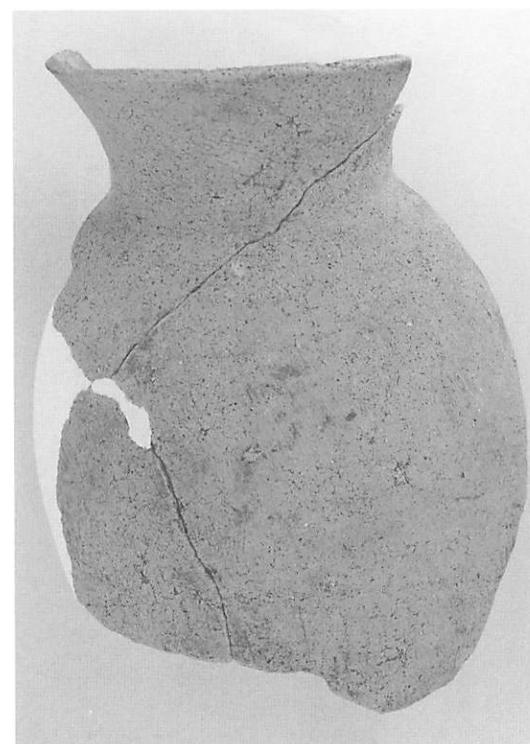
3 10号溝中層出土遺物 (129)



4 10号溝中層出土遺物 (130)



2 10号溝中層出土遺物 (128)



5 10号溝中層出土遺物 (131)



1 10号溝中層出土遺物 (137)



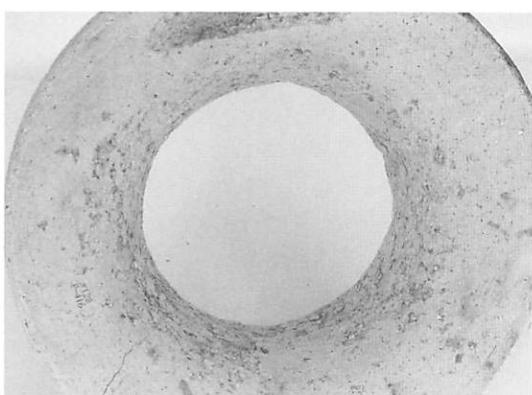
5 10号溝中層出土遺物 (142)



2 10号溝中層出土遺物 (138)



6 10号溝中層出土遺物 (143)



3 10号溝中層出土遺物 (138)



7 10号溝中層出土遺物 (148)



4 10号溝中層出土遺物 (142)



8 10号溝中層出土遺物 (151)

PL18



1 10号溝中層出土遺物 (152)



5 10号溝中層出土遺物 (165)



2 10号溝中層出土遺物 (153)



6 10号溝中層出土遺物 (166)



3 10号溝中層出土遺物 (154)



7 10号溝中層出土遺物 (168)



4 10号溝中層出土遺物 (161)



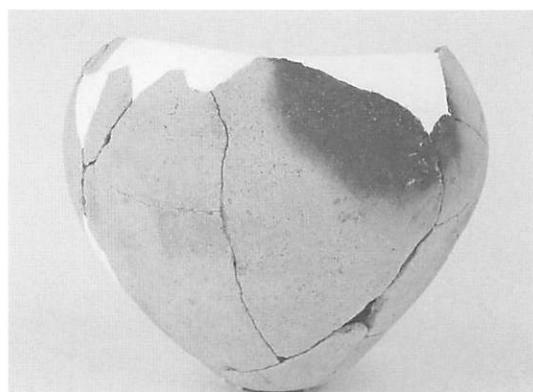
8 10号溝中層出土遺物 (176)



1 10号溝下層出土遺物 (182)



4 10号溝下層出土遺物 (192)



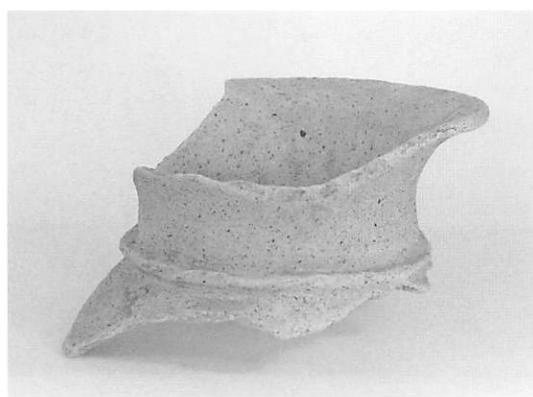
5 10号溝下層出土遺物 (193)



2 10号溝下層出土遺物 (185)



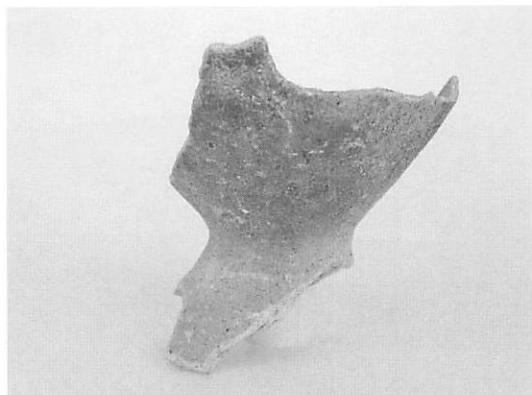
6 10号溝下層出土遺物 (199)



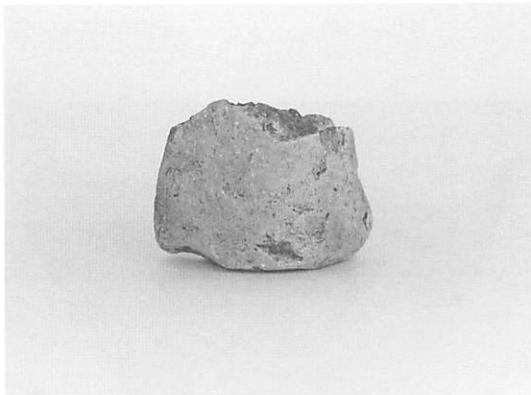
3 10号溝下層出土遺物 (191)



7 10号溝下層出土遺物 (203)



1 10号溝1層出土遺物 (208)



5 10号溝1層出土遺物 (214)



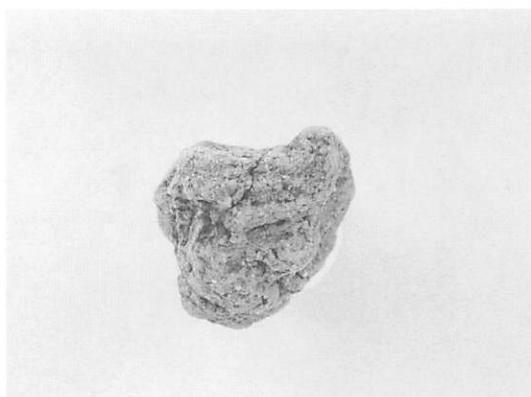
2 10号溝1層出土遺物 (209)



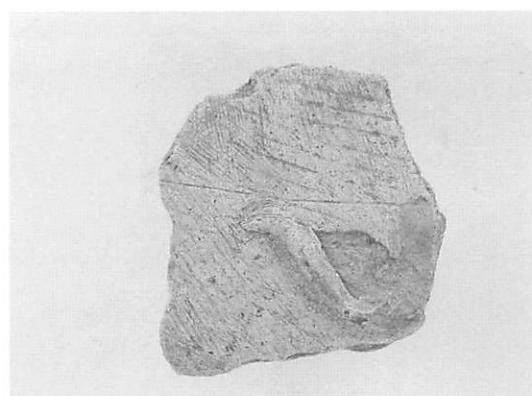
6 10号溝1層出土遺物 (215)



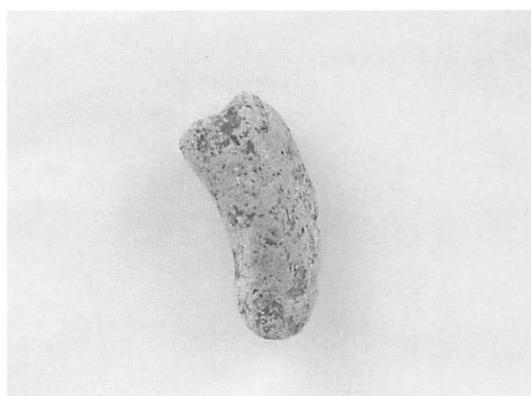
3 10号溝1層出土遺物 (211)



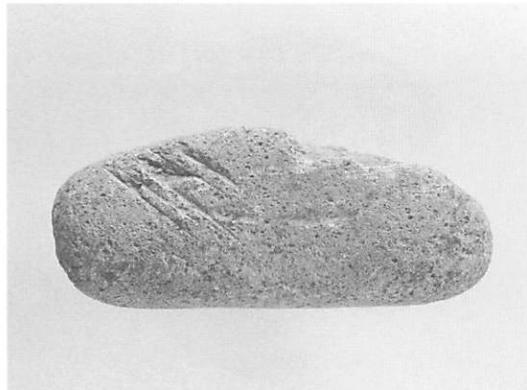
7 10号溝1層出土遺物 (216)



4 10号溝1層出土遺物 (213)



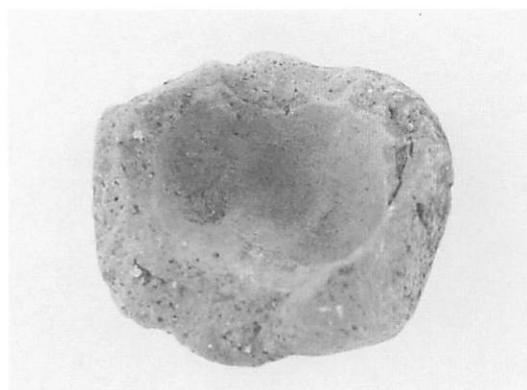
8 10号溝1層出土遺物 (217)



1 10号溝 2層出土遺物 (218)



5 10号溝 2層出土遺物 (233)



2 10号溝 2層出土遺物 (222)



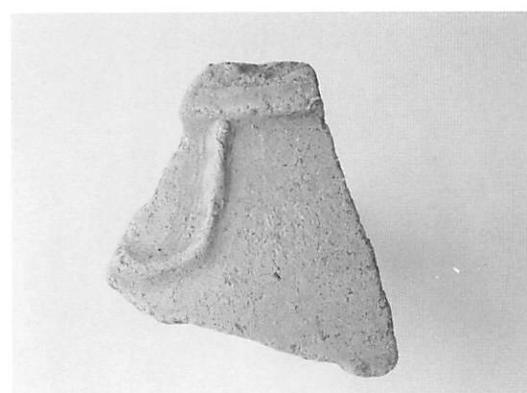
6 10号溝 2層出土遺物 (234~236)



3 10号溝 2層出土遺物 (225)



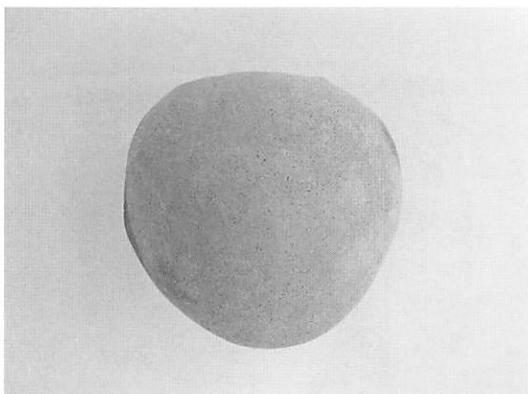
7 10号溝 3層出土遺物 (238)



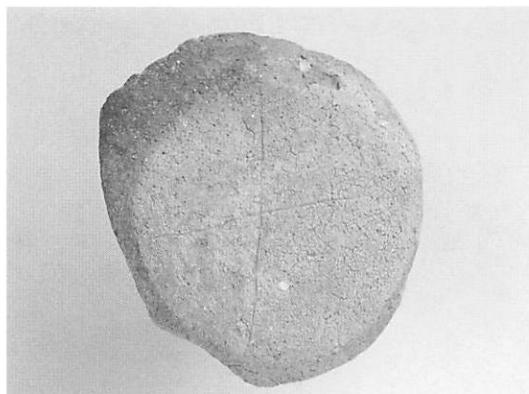
4 10号溝 2層出土遺物 (227)



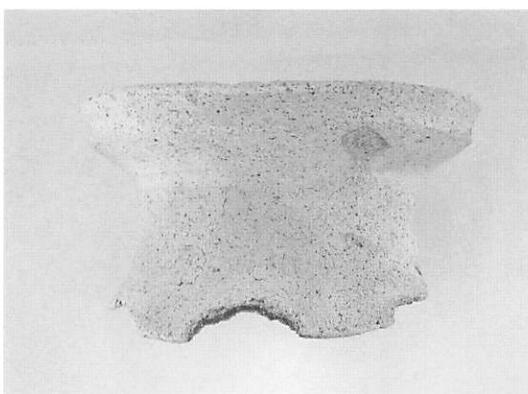
8 10号溝 3層出土遺物 (240)



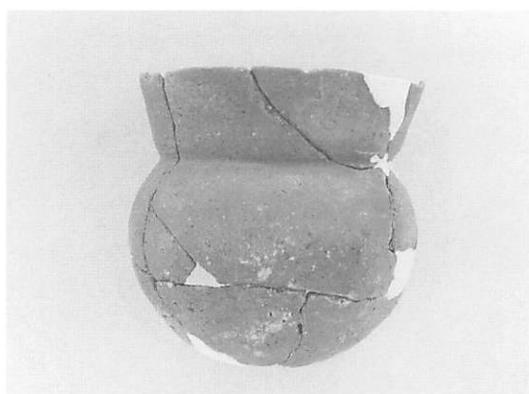
1 10号溝3層出土遺物 (243)



5 10号溝3層出土遺物 (263)



2 10号溝3層出土遺物 (250)



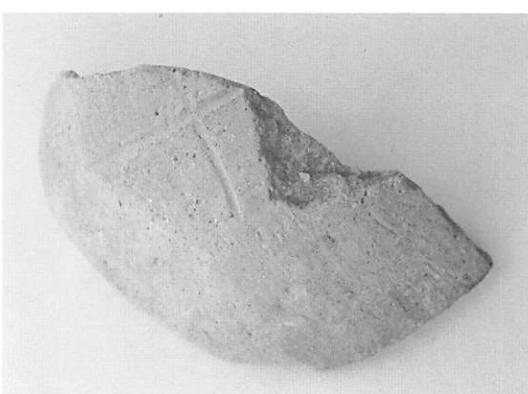
6 10号溝3層出土遺物 (265)



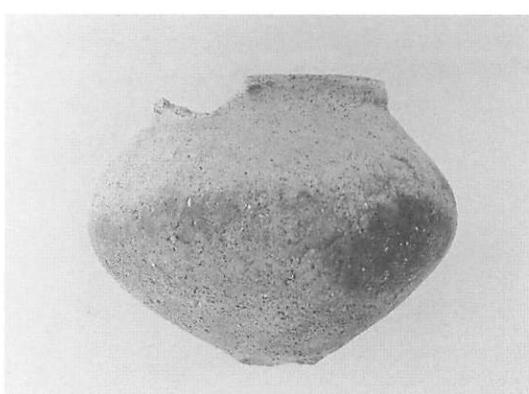
3 10号溝3層出土遺物 (256)



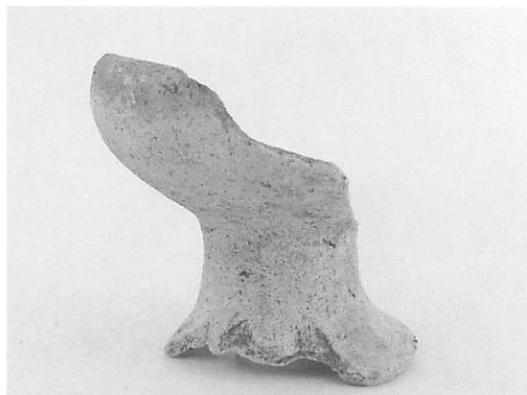
7 10号溝3層出土遺物 (271)



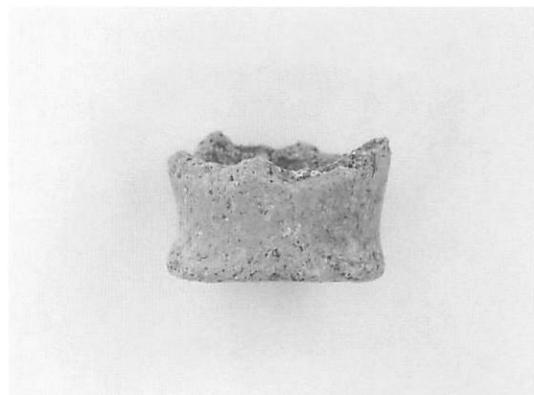
4 10号溝3層出土遺物 (262)



8 10号溝3層出土遺物 (274)



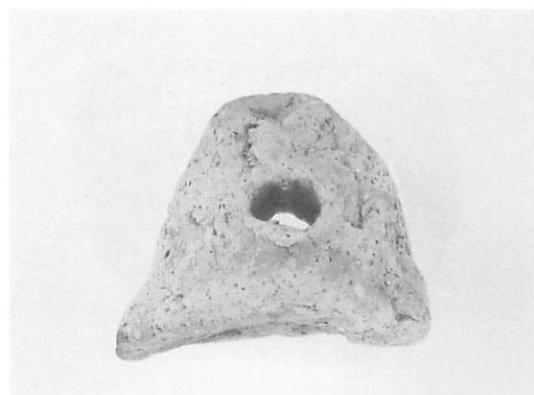
1 10号溝3層出土遺物 (275)



5 10号溝3層出土遺物 (314)



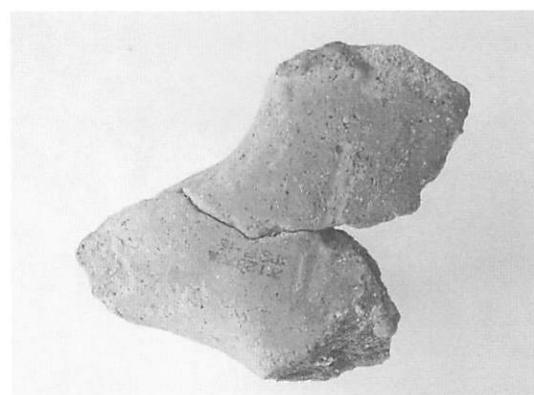
2 10号溝3層出土遺物 (276)



6 10号溝3層出土遺物 (315)



3 10号溝3層出土遺物 (291)



7 10号溝3層出土遺物 (316)



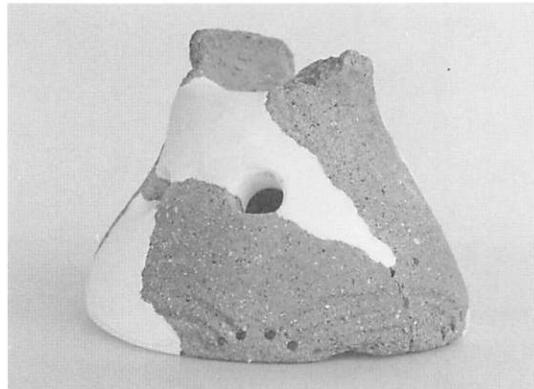
4 10号溝3層出土遺物 (301)



8 10号溝3層出土遺物 (326)



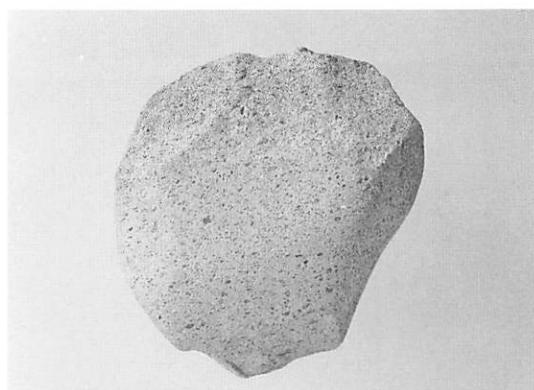
1 10号溝4層出土遺物 (339)



5 10号溝出土一括遺物 (347)



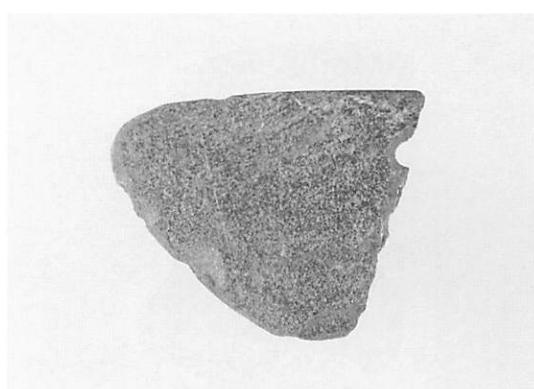
2 10号溝5層出土遺物 (340)



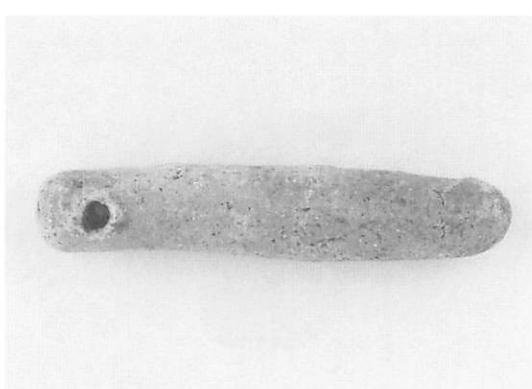
6 遺構に伴わない遺物 (353)



3 10号溝8層出土遺物 (342)



7 遺構に伴わない遺物 (356)



4 10号溝出土一括遺物 (346)



8 遺構に伴わない遺物 (357)

報告書抄録

ふりがな	かとうだひがしばるいせき							
書名	方保田東原遺跡9							
副書名	山鹿市文化財調査報告書							
巻数	第6集							
シリーズ名								
編著者名	中村幸史郎							
編集機関	山鹿市教育委員会							
所在地	〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿1026-2							
発行年月日	平成20年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かとうだひがしばるいせき 方保田東原遺跡	くまもとけん 熊本県 やまがた 山鹿市 かとうだ 方保田 128-2	43208	179	32° 59' 51"	130° 43' 9"	平成7年 7月17日 ~ 12月12日	450m ²	出土文化財 管理センター 建設工事
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	包蔵地	弥生時代		溝状遺構、 住居跡、 方形周濠墓		L字状石杵		

山鹿市文化財調査報告書第6集

方保田東原遺跡9

平成20年3月31日

編集 山鹿市教育委員会・文化課

発行 山鹿市教育委員会

印刷 シモダ印刷株式会社

熊本市上水前寺2丁目16-16

正誤表

『方保田東原遺跡(9)』山鹿市教育委員会、2008

下記部分に誤りがありましたので、訂正をお願いします。

頁	左右	行	誤	正
18	左列	13	41古式土師の	41は古式土師器の
18	右列	5	廉状文	廉状文
18	右列	8	川流域に遺跡で	川流域の遺跡で
18	右列	42	で40gである。	で重さは40gである。
23	右列	1	する際の使用	する際に使用
31	左列	19	円形貼文	円形貼付文
40	右列	23	264～267には	264～267は
51	最上部の土器		(番号抜け)	350
51	土器番号350横のスケール		5cm	10cm
51	土器番号351横のスケール		10cm	5cm
52	左列	16	上面での幅の長さ	上面での幅
抄録	遺跡種別		包蔵地	集落

◎問合せ先

山鹿市教育委員会文化課
 (出土文化財管理センター)
 〒861-0382山鹿市方保田128
 T/F. 0968-46-5512

正誤表

『方保田東原遺跡(9)』 山鹿市文化財調査報告書 第6集 熊本県山鹿市教育委員会2008年

文中

頁	左右	行 図番	誤	正
18	左	13	41古式土師の	41は古式土師器の
18	右	5	櫛描きによる廉状文	櫛描きによる簾状文
18	右	8	流域に遺跡で	流域の遺跡で
18	右	39	紡錘車で40gである。	紡錘車で重さは40gである。
23	右	1	する際の使用したものである。	する際に使用したものである。
31	左	19	円形貼文	円形貼付文
40	左	20	断面図(第34図)のA-A'	断面図(第36図)のA-A'
40	右	23	264~267には口縁部が広がって	264~267は口縁部が広がって
51			(最上段の図番号記載漏れ)	350
51			(図350のスケール数値)5cm	10cm
51			(図351、352のスケール数値)10cm	5cm
52	左	16	上面での幅の長さは、	上面での幅は、
抄録			(種別の欄) 包蔵地	集落

土器観察表

頁	図No.	誤	正
53	2	高坏	器台
54	78(下)	78	73
55	87	器種以降記載漏れ	下表と差し替え
55	107	記載漏れ	下表と差し替え
61	354	図No. 354	355
61	355	図No. 355	354

54・55ページ観察表が抜けている分

遺物番号	図No.	枝番	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	煤	備考
87	99	4	10号溝	P-117	器台	口縁 -胴部	-	-	10 YR7/4 にぶい黄 橙	長石・雲母 ・赤褐色粒	良好	ヨコナデ -タテハケ -ヘラ調整	ヨコナデ-ナ ナメハケ-指 調整-ヨコハ ケ	無	無	
107	83	4	10号溝	P-100	鉢	胴部	14	6.9	2.5 Y淡黄	赤褐色粒 ・長石	良好	ヨコナデ -タテハケ -ヘラケズ リ	ヨコナデ (他は摩滅 の為不明)	無	有	

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第6集 方保田東原遺跡9』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第6集 方保田東原遺跡9

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025年6月19日